県道高松王越坂出線道路改良事業に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告

雄山古墳群

2000.10

香 川 県 教 育 委 員 会 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 香川県教育委員会では、四国横断自動車道や高松東道路の建設、高松空港跡地の整備など、 大規模開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査と出土文化財の整理研究・報告書刊行の業務を、財団 法人香川県埋蔵文化財調査センターに委託して実施いたしております。

このたび、「県道高松王越坂出線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」として刊行いたしますのは、平成8年度に調査を実施しました坂出市高屋町に所在する雄山古墳群についてであります。

この遺跡の調査で7基の古墳の所在が判明しました。そのうち4基の古墳を調査することによって、4号墳では古墳墳丘の築造と横穴式石室の構築の関係が解明でき、また5・6・7号墳では石室内に副葬された土器や鉄製品、玉類などが埋葬時の状態で出土するなど、古墳の築造方法や埋葬方法を究明するうえで貴重な資料となりました。

本報告書が本県の歴史研究の資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書の刊行に至るまでの間、香川県土木部坂出土木事 務所及び関係諸機関並びに地元関係者各位に多大なご協力と御指導をいただきました。ここに 深く感謝の意を表しますとともに、今後ともよろしくご支援賜りますようお願い申し上げます。

平成12年10月

香川県教育委員会

教育長 折 原 守

- 1. 本報告書は、県道高松王越坂出線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査で、香川県坂出市高屋町 に所在する雄山古墳群(おんやまこふんぐん)の報告を収録した。
- 2. 発掘調査は、香川県教育委員会から委託され、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。
- 3. 発掘調査(予備調査・本調査)の期間及び担当は以下の通りである。

期間 平成8年4月1日~同年9月30日

担当 中西 昇、宮崎哲治、多田 慎、松本和彦、門脇範子、貞廣智代美

- 4. 調査に際しては、下記の関係諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい(順不同、敬称略) 香川県土木部坂出土木事務所、坂出市教育委員会、地元各自治会、香川県工業技術センター、東山光 徳、福家 勇
- 5. 本報告書の作成は、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。

本報告書の執筆は第3章第3節1・4及び第4節1・3を松本和彦が、それ以外を宮崎哲治が分担して行い、編集は宮崎が担当した。基本的な部分では極力統一を図るよう努めたが、解釈・表現の違いなどの詳細についてはあえて統一を図っていない。

6. 本報告書の作成にあたっては、下記の方々に御教示を得た。期して謝意を表したい。(順不同、敬 称略)

石野博信,川畑 迪,松本敏三,今井和彦,大久保徹也,佐藤竜馬,森下英治,山下平重,本田光子,笹川龍一,鐘方正樹,久保田昇三,廣田佳久,栗田茂敏,野崎貴博,山下雅弘

7. 本報告書で用いる方位の北は、国土座標系第Ⅳ系の北であり、標高はT.P.を基準としている。 また、遺構は下記の略号により表示している。

SB 掘立柱建物跡

SD 溝状遺構

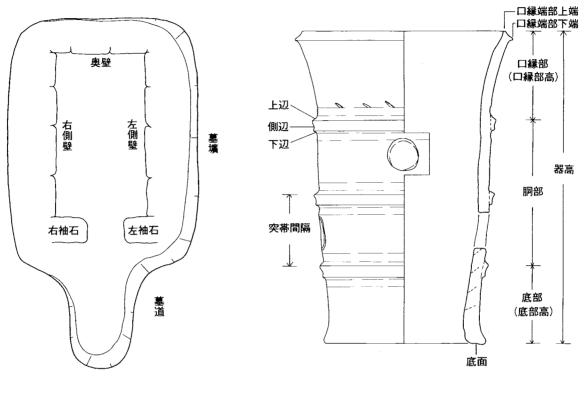
SK 土坑

SP 柱穴

SX 不明遺構

- 8. 挿図の一部に国土地理院地形図 白峰山と五色台(1/25,000)を使用した。
- 9. 遺構断面図の水平線上の数値は、水平線の標高値(単位:m)を示している。
- 10. 石器実測図中の網目は磨滅痕を、輪郭線の周りの点線は潰れ痕、実線は磨滅痕及び研磨痕、多数の点による表現は自然面を、黒塗りは現代の破損をそれぞれ表す。

- 11. 土器観察表の中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票 監修『新版標準土色帖1994年度版』を使用して表す。また、残存率は遺物の図化部分に占める実物の 割合であり、完形品に対する割合ではない。
- 12. 古墳の石室及び円筒埴輪の各部位の呼称については、下図に示した呼称を使用する。



図A 石室各部名称

図B 円筒埴輪各部名称

本 文 目 次

序文

例言

第1章 調査の経過	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	
1 調査・整理の経過	1
2 発掘調査および整理作業の体制	2
第2章 遺跡の立地と環境	
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の成果	
第1節 調査の方法	8
第 2 節 土層序	8
第3節 遺構・遺物	
1 雄山 4 号墳	10
(1) 墳丘と外部施設	10
(2) 埋葬施設	17
(3) 遺物の出土状況	22
(4) 出土遺物	23
(5) その他・遺構	63
(6) 小結	67
2 雄山 5 号墳	68
(1) 墳丘と外部施設	68
(2) 埋葬施設	70
(3) 遺物の出土状況	76
(4) 以十事物	70

(5) その他の遺構・遺物	97
(6) 小結	98
3 雄山 6 号墳	99
(1) 墳丘と外部施設	100
(2) 埋葬施設	103
(3) 遺物の出土状況	105
(4) 出土遺物	109
(5) その他の遺構・遺物	122
(6) 小結	124
4 雄山 7 号墳	125
(1) 墳丘と外部施設	125
(2) 埋葬施設	128
(3) 遺物の出土状況	129
(4) 出土遺物	133
(5) 小結	137
5 その他の調査区	139
(1) 予備調査31トレンチ他	139
(2) IV 🗵 ·····	141
(3) 予備調査等出土の旧石器	143
第4節 調査のまとめ	
1 雄山4号墳の築造過程	150
2 各古墳出土の須恵器について	154
3 雄山古墳群石室の位置付け	156
雄山古墳群土器観察表	165
雄山古墳群石器観察表	174
雄山古墳群鉄・銅製品観察表	177
雄山古墳群玉類観察表	182
雄山古墳群埴輪観察表	192
写真図版	

報告書抄録

挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図	第37図	雄山 4 号墳出土円筒埴輪実測図15(S = 1 / 4
第2図	雄山古墳群と周辺の遺跡(1/25,000)	第38図	雄山 4 号墳出土朝顔形埴輪実測図(S=1/4
第3図	調査対象地全体と古墳群分布図(1/2,500)	第39図	雄山 4 号墳出土人物埴輪実測図 1 (S = 1 / 4
第4図	予備調査トレンチ配置図(1/2,500)	第40図	雄山 4 号墳出土人物埴輪実測図 2 (S = 1 / 4
第5図	雄山 4 · 7 号墳地形測量図(S = 1 / 200)	第41図	雄山 4 号墳出土人物埴輪実測図 3(S = 1 / 4
第6図	雄山 4 号墳地形測量図 1 (S = 1 /100)	第42図	雄山 4 号墳出土馬形埴輪実測図(S = 1 / 4)
第7図	雄山 4 号墳墳丘断面図(S = 1 / 40)	第43図	雄山 4 号墳出土器財形埴輪実測図(S=1/4
第8図	雄山 4 · 7 号墳墳丘測量図 2 (S = 1 / 200)	第44図	雄山 4 号墳出土不明形象埴輪実測図(S=1/
第9図	雄山 4 号墳 A 区断面図(S = 1 / 60)	第45図	雄山 4 号墳出土須恵器実測図 1(S = 1 / 4)
第10図	雄山 4 号墳周溝断面図(S = 1 / 40)	第46図	雄山 4 号墳出土須恵器実測図 2(S = 1 / 4)
第11図	雄山 4 号墳玄室内断面図(S = 1 /40)	第47図	雄山 4 号墳出土須惠器実測図 3(S = 1 / 4)
第12図	雄山 4 号墳石室実側図(S = 1 / 40)	第48図	雄山 4 号墳出土須恵器実測図 4(S = 1 / 4)
第13図	雄山 4 号墳天井石平面図(S = 1/40)	第49図	雄山 4 号墳出土須恵器実測図 5(S = 1 / 3)
第14図	雄山 4 号墳墓道断面図(S = 1 /40)	第50図	雄山 4 号墳弥生包含層
第15図	雄山 4 号墳閉塞石実測図(S = 1/40)		出土遺物実測図(S = 1 / 4, 1/2
第16図	雄山 4 号墳玄室出土遺物実測図 1 (S = 1 / 2)	第51図	雄山 4 号墳 C 区 S B 01平・断面図(S = 1 /80
第17図	雄山 4 号墳玄室出土遺物実測図 2 (S = 1 / 1)	第52図	雄山 4 号墳遺構配置図(S = 1 / 200)
第18図	雄山 4 号墳玄室出土遺物実測図 3 (S = 1 / 3)	第53図	雄山 4 号墳 C 区 S K 02出土遺物実測図(S = 1
第19図	雄山 4 号墳周溝出土遺物実測図(S = 1 / 2)	第54図	雄山 4 号墳 C 区 S K 02平・断面図(S = 1 / 4)
第20図	断続ナデ技法模式図(註(9)より抜粋再トレース)	第55図	雄山 4 号墳 A 区 S X 01平・断面図(S = 1 / 80)
第21図	雄山 4 号墳出土円筒埴輪突帯分類図	第56図	雄山 4 号墳 A 区 S X 01出土遺物実測図(S = 1
第22図	雄山 4 号墳出土円筒埴輪口縁部分類図	第57図	雄山 4 号墳 C 区 S X 01平・断面図(S = 1 / 40)
第23図	雄山 4 号墳出土円筒埴輪実測図 1 (S = 1 / 4)	第58図	雄山 4 号墳 C 区 S X 01出土遺物実測図(S = 1
第24図	雄山 4 号墳出土円筒埴輪実測図 2 (S = 1 / 4)	第59図	雄山 4 号墳Ⅳ層出土遺物実測図(S = 1 / 4)
第25図	雄山 4 号墳出土円筒埴輪実測図 3 (S = 1 / 4)	第60図	雄山 5 号墳調査前地形測量図(1/200)
第26図	雄山 4 号墳出土円筒埴輪実測図 4 (S = 1 / 4)	第61図	雄山 5 号墳調査後地形測量図(1/100)
第27図	雄山 4 号墳出土円筒埴輪実測図 5 (S = 1 / 4)	第62図	雄山 5 号墳周溝断面図(1/20)
第28図	雄山 4 号墳出土円筒埴輪実測図 6 (S = 1 / 4)	第63図	雄山 5 号墳墳丘土層断面図(1/40)
第29図	雄山 4 号墳出土円筒埴輪実測図 7 (S = 1 / 4)	第64図	雄山 5 号墳石室上面実測図(1/40)
第30図	雄山 4 号墳出土円筒埴輪実測図 8 (S = 1 / 4)	第65図	雄山 5 号墳石室実測図(1/40)
第31図	雄山 4 号墳出土円筒埴輪実測図 9 (S = 1 / 4)	第66図	雄山 5 号墳玄門及び墓道平・断面図(1/40)
第32図	雄山 4 号墳出土円筒埴輪実測図10(S = 1 / 4)	第67図	雄山 5 号墳遺物出土状況全体図(1/20)
第33図	雄山 4 号墳出土円筒埴輪実測図11(S = 1 / 4)	第68図	雄山 5 号墳遺物出土状況詳細図①(1/10)
第34図	雄山 4 号墳出土円筒埴輪実測図12(S = 1 / 4)	第69図	雄山 5 号墳遺物出土状況詳細図②(1/10)
第35図	雄山 4 号墳出土円筒埴輪実測図13(S = 1 / 4)	第70図	雄山 5 号墳石室内出土遺物実測図①(1/3)
第36図	雄山 4 号墳出土円筒埴輪実測図14(S = 1 / 4)	第71図	雄山 5 号墳石室内出土遺物実測図②(1/3)

第37図	雄山 4 号墳出土円筒埴輪実測図15(S = 1 / 4)
第38図	雄山 4 号墳出土朝顔形埴輪実測図(S = 1 / 4)
第39図	雄山 4 号墳出土人物埴輪実測図 1 (S = 1 / 4)
第40図	雄山 4 号墳出土人物埴輪実測図 2 (S = 1 / 4)
第41図	雄山 4 号墳出土人物埴輪実測図 3(S = 1 / 4)
第42図	雄山 4 号墳出土馬形埴輪実測図(S = 1 / 4)
第43図	雄山 4 号墳出土器財形埴輪実測図(S=1/4)
第44図	雄山 4 号墳出土不明形象埴輪実測図(S=1/4)
第45図	雄山 4 号墳出土須恵器実測図 1 (S = 1 / 4)
第46図	雄山 4 号墳出土須恵器実測図 2 (S = 1 / 4)
第47図	雄山 4 号墳出土須恵器実測図 3(S = 1 / 4)
第48図	雄山 4 号墳出土須恵器実測図 4(S = 1 / 4)
第49図	雄山 4 号墳出土須恵器実測図 5 (S = 1 / 3)
第50図	雄山 4 号墳弥生包含層
	出土遺物実測図(S = 1 /4, 1/2)
第51図	雄山 4 号墳 C 区 S B 01平・断面図(S = 1 / 80)
第52図	雄山 4 号墳遺構配置図(S = 1 /200)
第53図	雄山 4 号墳 C 区 S K 02出土遺物実測図(S = 1 / 4)
第54図	雄山 4 号墳 C 区 S K 02平・断面図(S = 1 / 4)
第55図	雄山 4 号墳 A 区 S X 01平・断面図(S = 1 /80)
第56図	雄山 4 号墳 A 区 S X 01出土遺物実測図(S = 1 / 4)
第57図	雄山 4 号墳 C 区 S X 01平・断面図(S = 1 / 40)
第58図	雄山 4 号墳 C 区 S X 01出土遺物実測図(S = 1 / 4)
第59図	雄山 4 号墳 IV 層出土遺物実測図(S=1/4)
第60図	雄山 5 号墳調査前地形測量図(1/200)
第61図	雄山 5 号墳調査後地形測量図(1/100)
第62図	雄山 5 号墳周溝断面図(1/20)
第63図	雄山 5 号墳墳丘土層断面図(1/40)
第64図	雄山 5 号墳石室上面実測図(1/40)
第65図	雄山 5 号墳石室実測図(1/40)
第66図	雄山 5 号墳玄門及び墓道平・断面図(1/40)
第67図	雄山 5 号墳遺物出土状況全体図(1/20)
第68図	雄山 5 号墳遺物出土状況詳細図①(1/10)
第69図	雄山 5 号墳遺物出土状況詳細図②(1/10)
第70図	雄山 5 号墳石室内出土遺物実測図①(1/3)

第72図	雄山 5 号墳石室内出土遺物実測図③(1/3)	第107図	雄山 6 号墳墳丘盛土内出土遺物実測図(1/4)
第73図	雄山 5 号墳石室内出土遺物実測図④(1/3)	第108図	雄山 6 号墳包含層及び古墳築造前
第74図	雄山 5 号墳石室内出土遺物実測図⑤(1/4)		出土遺物実測図①(1/4)
第75図	雄山 5 号墳石室内出土遺物実測図⑥(1/2)	第109図	雄山 6 号墳包含層及び古墳築造前
第76図	雄山 5 号墳石室内出土遺物実測図⑦(1/2)		出土遺物実測図②(1/2)
第77図	雄山 5 号墳石室内出土遺物実測図⑧(1/2)	第110図	雄山 6 号墳 S K 01出土遺物実測図(1/4)
第78図	雄山 5 号墳石室内出土遺物実測図⑨(1/2)	第111図	雄山 7 号墳墳丘測量図(S = 1 / 100)
第79図	雄山 5 号墳石室内出土遺物実測図⑩(1/2)	第112図	雄山7号墳墳丘土層断面図(S=1/40)
第80図	雄山 5 号墳石室内出土遺物実測図⑪(1/1)	第113図	雄山 7 号墳周溝断面図(S = 1 /40)
第81図	雄山 5 号墳石室内出土遺物実測図⑫(1/1)	第114図	雄山 7 号墳及び 4 ・ 7 号墳間
第82図	雄山 5 号墳石室内出土遺物実測図⑬(1/1)		土層断面図(S = 1 /40)
第83図	雄山 5 号墳石室内出土遺物実測図⑭(1/1)	第115図	雄山 7 号墳石室実測図(S = 1 /40)
第84図	雄山 5 号墳石室内出土遺物実測図⑮(1/1)	第116図	雄山 7 号墳墓道断面図(S = 1 /40)
第85図	雄山 5 号墳石室内出土遺物実測図⑮(1/1)	第117図	雄山 7 号墳玄室遺物出土状況図 1 (S = 1 / 20)
第86図	雄山 5 号墳周溝出土遺物実測図(1/4)	第118図	雄山 7 号墳玄室遺物出土状況図 2 (S = 1 /10)
第87図	雄山 5 号墳 S X 02出土遺物実測図(1/4)	第119図	雄山 7 号墳玄室遺物出土状況図 3 (石室 1 / 20)
第88図	雄山 5 号墳包含層出土遺物実測図(1/4)	第120図	雄山 7 号墳玄室床面出土遺物実測図 1 (S = 1 / 2)
第89図	雄山 5 号墳築造前の遺物実測図(1/4)	第121図	雄山 7 号墳玄室床面出土遺物実測図 2 (S = 1 / 3)
第90図	雄山 6 号墳調査前地形測量図(1/200)	第122図	雄山7号墳周溝出土遺物実測図1
第91図	雄山 6 号墳調査後地形測量図(1/100)	•	(S = 1/4, 1/8)
第92図	雄山 6 号墳墳丘土層断面図(1/40)	第123図	雄山 7 号墳周溝出土遺物実測図 2 (S = 1 / 4)
第93図	雄山 6 号墳石室上面実測図(1/40)	第124図	予備調査31トレンチ平・断面図
第94図	雄山 6 号墳石室実測図(1/40)	第125図	予備調査出土遺物実測図①(1/4)
第95図	雄山 6 号墳遺物出土状況全体図(1/20)	第126図	予備調査出土遺物実測図②(1/2)
第96図	雄山 6 号墳遺物出土状況詳細図①(1/10)	第127図	IV区遺構配置図(1/80)
第97図	雄山 6 号墳遺物出土状況詳細図②(1/10)	第128図	Ⅳ区SK04平·断面図(1/40)
第98図	雄山 6 号墳石室内出土遺物実測図①(1/3)	第129図	Ⅳ区S X 01平・断面図(1 / 40)
第99図	雄山 6 号墳石室内出土遺物実測図②(1/3)	第130図	Ⅳ区SD01・02断面図(1 / 40)
第100図	】 雄山 6 号墳石室内出土遺物実測図③(1 / 3)	第131図	Ⅳ区SD01出土遺物実測図(1/2)
第101図	】 雄山 6 号墳石室内出土遺物実測図④(1 / 4)	第132図	旧石器実測図①(1/2)
第102図	』 雄山 6 号墳石室内出土遺物実測図⑤(1 ∕ 2)	第133図	旧石器実測図②(1/2)
第103図	】 雄山 6 号墳石室内出土遺物実測図⑥(1/2)	第134図	旧石器実測図③(1/2)
第104図	『 雄山 6 号墳石室内及び墳丘盛土内	第135図	旧石器実測図④(1/2)
	出土遺物実測図⑦(1/1)	第136図	雄山 4 号墳築造過程 1 (S = 1 /80)
第105図	』 雄山 6 号墳石室内及び	第137図	雄山 4 号墳築造過程 2 (S = 1 /80)
	周溝出土遺物実測図①(1/4)	第138図	5 · 6 号墳玄室比較(S = 1 / 40)
第106図	』 雄山 6 号墳周溝出土遺物実測図②(1 ∕ 6)	. 44100 EVI	玄室比と玄室幅(註47)より抜粋, 一部加筆)

表 目 次

第1表 発掘調査及び整理作業の体制

第2表 周辺の遺跡一覧表

第3表 突带分類表

第4表 口縁部分類表

第5表 無調整突帯分類表

第6表 底部分類表

第7表 円筒埴輪群設定

第8表 円筒埴輪群設定及び相関関係

第9表 雄山古墳群出土旧石器集計表

第10表 各石室規模の比較

図版目次

図版1 (1)古墳群遠景 南から

(2)古墳群遠景 東から

図版 2 (1)4・7号墳調査前近景 東から

(2)4号墳石室調査前 東から

図版3 (1)4号墳墳丘全景1 北東から

(2)4号墳墳丘全景2 北東から

図版 4 (1) 4 号墳墳丘全景及び墓道 北西から

(2)4号墳周溝全景 北東から

図版 5 (1)4号墳A-〇間墳丘断割1 南西から

(2)4号墳A一〇間墳丘断割2 南西から

(3)4号墳A一〇間墓壙断面 西から

(4)4号墳B-0間墳丘断割1 東から

(5)4号墳B一〇間墳丘断割2 東から

(6)4号墳B一〇間墓壙断面 北東から

(7)4号墳A'-〇間墳丘断割1 東から

(8)4号墳A'-O間墳丘断割2 東から

図版 6 (1)4号墳玄室内面(玄門部寄り) 南東から

(2)4号墳玄室床面(奥壁寄り) 北西から

図版7 (1)4号墳石室1(玄門部全景) 南東から

(2)4号墳石室2(奥壁全景) 北西から

図版8 (1)4号墳石室3(袖石) 南東から

(2)4号墳石室4(前壁) 南東から

図版 9 (1)4号墳石室 5 (右袖部と右側壁基底石) 南から

(2)4号墳石室6(右側壁) 南東から

図版10 (1)4号墳石室7(左袖部と左側壁基底石) 東から

(2)4号墳石室8(左側壁基底石と奥壁) 北西から

図版11 (1)4号墳石室9(奥壁と左側壁の隅角) 北から

(2)4号墳石室10(奥壁と左側壁の隅角上部) 北から

図版12 (1)4号墳石室11(奥壁と右側壁) 北西から

(2)4号墳石室12(奥壁と右側壁の隅角下部) 西から

図版13 (1)4号墳石室13(玄門部寄り天井石見上げ) 南東から

(2)4号墳石室14(奥壁寄り天井石見上げ) 北西から

図版14 (1)4号墳墓道断面図(E—E'間) 北東から

(2)4号墳墓道縦断面(B'--O間) 北から

図版15 (1)4号墳閉塞石・墓道全景 北西から

(2)4号墳閉塞石 北西から

(3)4号墳開口部・墓道全景 北西から

(4)4号墳天井石俯瞰 西から

(5)4号墳石室下部・墓壙全景1 北東から

(6)4号墳石室下部・墓壙全景2 北西から

(7)4号墳墓壙完掘全景1 北東から

(8) 4 号墳墓壙完掘全景 2 北西から

図版16 (1)4号墳周溝遺物出土状況1 北東から

(2)4号墳周溝遺物出土状況2 北東から(3)4号墳周溝遺物出土状況3 西から

(4)4号墳周溝遺物出土状況4 北から

(5)4号墳周溝遺物出土状況5 南から

(6)4号墳周溝遺物出土状況6 南東から

(7)4号墳人物埴輪(245)出土状況 南西から

(8)4号墳周溝(D-D'間)断面 南西から

図版17 (1)5号墳全景 西から

(2)5号墳全景 西から

図版18 (1)5号墳石室内遺物出土状況 東から

(2)5号墳石室内遺物出土状況 北から

図版19 (1)5号墳石室内遺物出土状況 東から : 図版30 (1)7号墳全景 北から (2)5号墳石室内遺物出土状況 南東から 図版20 (1)5号增石室内遺物出土状況 東から (2)5号墳石室内遺物出土状況 北西から 図版21 (1)5号墳石室完掘状況 西から (2)5号墳石室完掘状況 東から 図版22 (1)5号墳石室入口 東から (2)5号墳石室奥壁 西から (3)5号墳石室袖部 北東から (4)5号墳石室奥壁コーナー 北西から (5)5号墳石室閉塞石と墓道 西から (6)5号墳墓道堆積状況 西から (7)5号墳石室基底石 東から (8)5号墳墓壙全景 西から 図版23 (1)6号墳全景 南東から (2)6号墳調査前全景 南東から 図版24 (1)6号墳全景 南東から (2)6号墳石室内遺物出土状況 北西から 図版25 (1)6号墳石室内遺物出土状況 北西から (2)6号墳石室完掘状況 北西から 図版26 (1)6号墳石室完掘状況 北西から (2)6号墳石室左側壁 北東から 図版27 (1)6号墳石室内遺物出土状況 南西から (2)6号墳石室内遺物出土状況 南東から (3)6号墳石室内遺物出土状況 南東から (4)6号墳石室内堆積状況 北西から (5)6号墳墳丘盛土断面 北東から (6)6号墳墓壙断面 北西から (7)6号墳墓壙断面 南東から (8)6号墳墳丘盛土断面 南東から 図版28 (1)6号墳石室基底石 北西から (2)6号墳石室右側壁先端基底石 北西から (3)6号墳石室基底石 南東から

(4)6号墳墓壙 北西から

(2)7号墳全景 南東から

図版29 (1)7号墳全景 北西から

(5)6号墳周溝内遺物出土状況 北東から

(6)6号墳SK01土鍋出土状況 南東から

(2)7号墳右袖部 南から (3)7号墳左側壁 東から (4)7号墳奥壁 北西から (5)7号墳墓道断面 北西から (6)7号墳墓壙 北西から (7)7号墳周溝断面(1-1') 南から (8)7号墳周溝断面(I-I') 南東から 図版32 (1)7号墳玄室床面遺物出土状況1 南東から (2)7号墳玄室床面遺物出土状況2 南東から 図版33 (1)7号墳玄室床面遺物出土状況3 南東から (2)7号墳玄室床面遺物出土状況4 南東から 図版34 (1)7号墳玄室床面遺物出土状況5 東から (2)7号墳玄室床面遺物出土状況6 北西から 図版35 (1)IV区完掘状況 南西から (2)Ⅳ区SK04完掘状況 西から 図版36 (1)N区(19トレンチ)SD01遺物出土状況 東から (2)N区(19トレンチ)SD01遺物出土状況 東から 図版37 4号墳出土遺物 図版38 4号墳出土遺物 図版39 4号墳出土遺物 図版40 4号墳出土遺物 図版41 4号墳出土遺物 図版42 4号墳出土遺物 図版43 4号墳出土遺物 図版44 4号墳出土遺物 図版45 4号墳出土遺物 図版46 4号墳出土遺物 図版47 4号墳出土遺物 図版48 5号墳出土遺物 図版49 5号墳出土遺物 図版50 5号墳出土遺物 図版51 5号墳出土遺物 図版52 5号墳出土遺物 図版53 5号墳出土遺物 図版54 5号墳出土遺物

(2)7号墳石室全景 北西から

図版31 (1)7号墳女門部 南東から

図版55 5-	号增出	土遺物
---------	-----	-----

図版56 5号墳出土遺物

図版57 5号墳出土遺物

図版58 5号墳出土遺物

図版59 6号墳出土遺物

図版60 6号墳出土遺物

図版61 6号墳出土遺物

図版62 6号墳出土遺物

図版63 6号墳出土遺物

図版64 6号墳出土遺物

図版65 6号墳出土遺物

図版66 6号墳出土遺物

図版67 6号墳出土遺物

図版68 6号墳出土遺物

図版69 7号墳出土遺物

図版70 7号墳出土遺物

図版71 7号墳出土遺物

図版72 7号墳出土遺物

図版73 7号墳出土遺物

図版74 7号墳出土遺物

図版75 予備調査他出土遺物

図版76 予備調査他出土遺物

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

県道高松王越坂出線改良事業における埋蔵文化財保護については、平成5年度に香川県教育委員会が 予定地内北半部分において試掘調査を実施し、その結果、遺構・遺物は検出されなかったため保護措置 の必要がないと判断された。一方、南半部分の丘陵上には周知の埋蔵文化財包蔵地として遍照院裏山古 墳をはじめ雄山古墳群、旧石器の散布地、中世の高屋城跡、経塚が存在しており、埋蔵文化財の保護措 置が必要となった。当初は丘陵部分をトンネル工法に計画変更して包蔵地を現状で保存する方法も協議 されたが、坂出土木事務所の工事計画との調整が着かず、当初予定どおり丘陵をオープンカットするこ ととなり、事前調査が必要となった。

対象地は尾根稜線上・斜面・谷という地形にまたがっており、雑木などが植生していたために本格的な伐開を行わなければ香川県教育委員会による試掘が不可能な状況であった。このため対象地6,328㎡(未買収地を除く)全体の埋蔵文化財の包蔵状況を把握して調査体制を確定する必要が生じたため、香川県教育委員会は対象地全域を対象とした予備調査を含めた発掘調査を、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターに委託した。

すなわち平成8年4月1日付で香川県教育委員会と財団法人香川県埋蔵文化財調査センターとの間で締結した「埋蔵文化財調査契約書」に基づいて調査を実施することとなった。

第2節 調査の経過

1 調査・整理の経過

調査は、事務所用地借地の交渉、対象地内の雑木の伐採・焼却などの準備を経て、平成8年5月7日より発掘作業を開始した。調査の体制は直営方式の2班編成をとり、まず現地形の測量を実施し、次いで対象地全域に予備調査を実施した。予備調査は人力によるトレンチ掘り下げを基本とし、必要があればトレンチを広げるかたちで調査を行った。その結果、雄山4号墳の東方で新たに2基の古墳を検出し、雄山古墳群と一連のものと判断できたため、5・6号墳の名称を付した。また、対象地内に存在するとされていた遍照院裏山古墳は後世の削平によって消滅していたことが判明した。この他、斜面部や谷部分では遺物包含層がみられる箇所もあったが、遺構は希薄であったことから、当初3基の古墳を中心に発掘調査を実施することとした。

調査は一班が4号墳を、もう一班が5・6号墳を担当するかたちで行ったが、調査途中で4号墳の北側に新たに1基の古墳を確認したため、7号墳の名称を与えて4号墳を担当していた班が調査を行った。対象地内に重機・ベルトコンベヤなどの機械類の搬入が不可能であったため、掘り下げから埋め戻しまでをすべて人力で行わなければならず、さらに夏の暑さが加わり作業効率が低下したため、平成8年8月19日から作業員17名の増員を行いこれに対処した。

4号墳は内部が荒らされていたものの石室がほぼ完存しており、また5・6・7号墳は石室上部を破壊されていたが内部に納められた副葬品が原位置を保っていたことから、平成8年9月14日に一般県民を対象に現地説明会を開催し、約260名の参加を得た。

調査は概ね計画通りに進んだが、予想を超える副葬品等の出土遺物の量と9月に入ってからの雨天に

よって、埋め戻し等が調査期間を越える可能性がでてきた。そこで坂出土木事務所と協議を行い、埋め 戻し及び事務所の撤去は10月に入ってから行うことを決定した。その後、各古墳の石室の解体、古墳下 位での遺構の確認を含めた残務及び埋め戻し・事務所の撤去を行い、平成8年10月24日に調査の終了を 坂出土木事務所立会のもと現地で確認して、雄山古墳群の発掘調査を完了した。

整理作業は、平成11年7月1日から松本が担当して開始した。途中同年11月1日からは宮崎が交代して担当し、平成12年3月31日に終了した。整理作業員8名体制で整理作業を行ったが、4号墳周溝出土の埴輪片が大量であることと、予備調査及び各古墳の周辺で出土した旧石器遺物が多かったことから、予想以上に手間取る整理作業となった。

2 発掘調査及び整理作業の体制

発掘調査及び整理作業の体制については第1表のとおりである。

なお、発掘調査に携わった方々は以下のとおりである。

現場整理作業員 山本明美

現場事務員 大嶋美芳子

普通作業員 饗庭澄夫・有岡雄一・泉谷弘・一藁直義・尾崎信明・乙武孝男・杉上広次・竹内保男

・田所宏・津村芳和・中浦一憲・細谷祐義・本田昌男・丸川正則・三村旺・宮武吉栄

・森井和夫・森岡富明・横井等

軽作業員 池田敬子・浦野房子・植野朝子・大林チエ子・小田葉子・小野理恵・香川貞美・香川

芳子・鍬島美智子・佐藤紀江・白井芳美・正嘉代子・高木一江・田中キヨ・平井加寿 美・平田圭子・松本紀子・松山枝美子・三井美智子・三好アイ子・森岡ミチ子・山口

ハルミ・山下初代・山下ヒロ子・山地フジ子・山田美佐江・横田八重子・脇千代枝・

木下祐美

整理作業に携わった方々は以下のとおりである。

整理員 山下登志子

整理補助員 長谷川郁子・矢野ゆかり・山地真理子・青屋真理

整理作業員 久保真由美・西本英里香・松崎千春

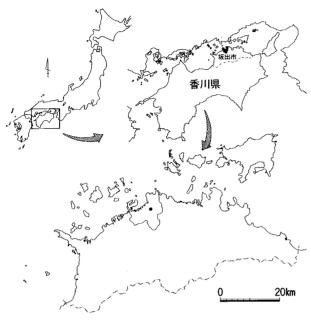
第1表 発掘調査及び整理作業の体制

		発 掘	調査	整 理	作業		
年	度	平 成	8 年 度	平 成 11	年 度		
香川県	香川県教育委員会文化行政課						
総	括	課長	藤原章夫	課長	小原克己		
		課長補佐	高木一義	課長補佐	小国史郎		
		課長補佐	北原和利				
総	務	係長	山崎 隆	係長	中村禎伸		
		主査	星加宏明	主査	三宅陽子		
		主事	國方秀子 (~5.31)	主査	松村崇史		
		主事	打越和美 (6.1~)				
埋蔵	文化財	副主幹	渡部明夫	副主幹	廣瀬常雄		
		文化財専門員	木下晴一	係長	西村尋文		
		技師	塩崎誠司	文化財専門員	森 格也		
***				主任技師	塩崎誠司		
財団法	人香川県	埋蔵文化財調査センタ	ヴー				
総	括	所長	大森忠彦	所長	菅原良弘		
		次長	小野善範	次長	川原裕章		
総	務	参事(土木)	別枝義昭	副主幹兼係長(土木)	六車正憲		
		係長 (事務)	前田和也	副主幹兼係長	田中秀文		
		主任主事	西川 大	係長	新 一郎		
		·		主査	山本和代		
調	査	参事	近藤和史	参事	長尾重盛		
		主任文化財専門員	大山真充	主任文化財専門員	大山真充		
		主任文化財専門員	中西 昇	文化財専門員	木下晴一		
	·	文化財専門員	宮崎哲治	文化財専門員	宮崎哲治		
		主任技師	多田 愼	技師	松本和彦		
		技師	松本和彦				
		調査技術員	門脇範子				
		調査技術員	貞廣智代美				

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

香川県は四国の北東部に位置し、全国でもっとも面積の小さな県である。坂出市はそんな香川県のほ は中央部に位置し、瀬戸内海を挟んで岡山県と対峙している。市域の西部には大東川が流れ、東部には



第1図 遺跡位置図

綾川が貫流している。かつては海岸線沿いに大規模な塩田が広がり、盛んに製塩業が行われていたが、現在は番の州に代表されるように埋め立てがすすみ工業地帯と化してしまっている。岡山県と香川県の間に横たわる備讃瀬戸に瀬戸大橋が架橋されて以来、坂出市は観光・物流の両面において香川県の玄関口となっている。

雄山古墳群はこの坂出市の東部、綾川の下流域に 広がる綾北平野(坂出市の東部)の河口付近に位置 し、雄山(おんやま)・雌山(めんやま)と呼ばれ る2つの独立山塊のうち、南側に位置する雄山の東 南麓の尾根上に立地している。古墳群の名称もこの 山の名に由来している。その名が示すように、雌山 は尾根や谷があまりみられず比較的なだらかな感じ を持つのに対して、雄山は尾根や谷が多数みられ 猛々しい感じを受ける。

古墳群は雄山から派生する幾つかの尾根のうち、南東方向へのびる大きな尾根の北斜面部分、標高12~20m あたりに築造されている。尾根の稜線(標高26m)からはやや下った位置に築かれているため、西・南方向の眺望は全く効かず、現在の高屋の町が位置する北東方向にのみ大きく開けている。現在の海岸線は古墳群の北方約2kmにあるが、古墳群が作られた頃には雄山・雌山、東山、土岳によって取り囲まれた部分に入江状に海が入り込んでいたようである。すなわち、古墳群は北東方向の入江に面して作られていたと言えよう。

第2節 歷史的環境

雄山古墳群の周辺の歴史的環境を時代ごとに概観していく。

旧石器時代

石器の素材として著名な良質なサヌカイトを産出する国分台を東方約2kmに控えていることもあり、 周辺にも旧石器の遺跡が点在している。国分台の鞍谷池東遺跡や独立低丘陵の牛子山遺跡などで旧石器 が見つかっている。古墳群の立地する雄山では派生する尾根上に、周知の遺跡として雄山東麓遺跡が所 在している。雄山ではサヌカイトは産出しないものの石器素材であるハリ質安山岩を産出することが知 られており、今回の調査でも、包含層という二次堆積層ではあるが、サヌカイト製のナイフ形石器やハ リ質安山岩の小塊などを多数確認している。

縄文時代

雄山古墳群周辺では、現在のところ確実な縄文時代の遺跡は知られていないが、高屋遺跡周辺で縄文 時代後期の土器片が出土しているという。

弥牛時代

弥生時代の遺跡も数はあまり多くはない。弥生時代前期末の袋状土坑や弥生時代後期の竪穴住居を持つ本鴨遺跡や,弥生時代中期末から後期にかけての高地性集落と思われる烏帽子山遺跡、烏帽子山遺跡と谷を挟んで対峙し銅鐸を有する明神谷遺跡などがあるが,古墳群からは南方やや距離を置いた位置にあたる。古墳群に近接する弥生遺跡としては,多量の製塩土器を出土した弥生時代後期から古墳時代にかけての高屋遺跡があり,鹹水の貯水槽あるいは泉と思われる土坑や溝状遺構,焼土を有する土器ブロックなどが見つかっている。先述したとおり当時は入江となっており農地も狭かったことが予想され,漁業・製塩業に生活基盤をおいた集団の存在がうかがえる。このほかにも古墳群東方の松井神社の境内でも弥生土器の破片が表採されており,未知の遺跡が眠っている可能性がある。

古墳時代

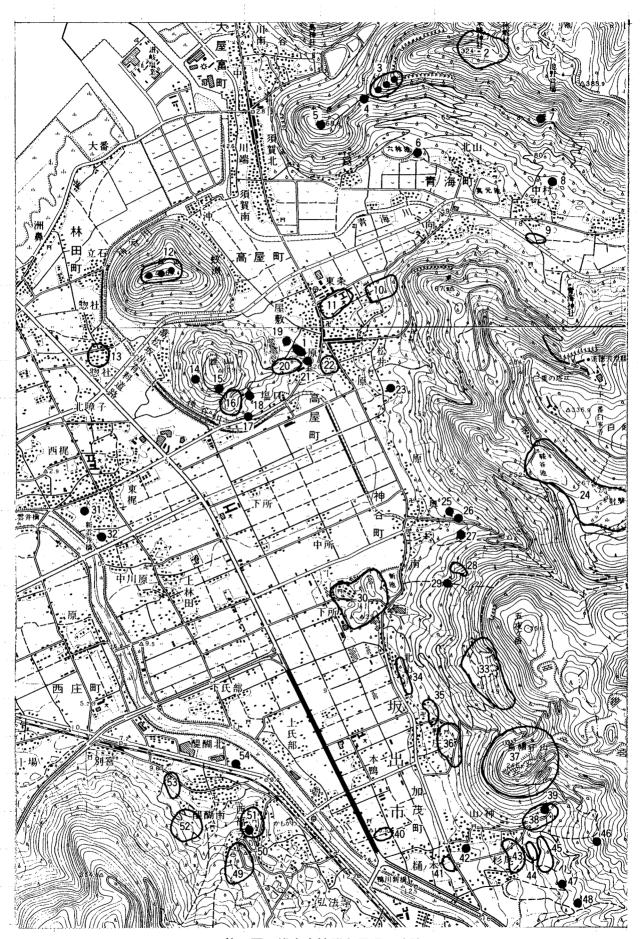
古墳時代前期には入江の入り口に対峙するかのように、前方後円墳・方墳・円墳の3基からなる雌山古墳群と山の鞍部に位置する経ノ田尾古墳などの積石塚が築かれる。これらは高屋遺跡などの弥生時代後期以来継続してきた、周辺の海浜部を拠点とした漁業・製塩業集団の首長を葬ったものであると思われる。古墳時代中期の古墳はあまり確認されていないが、雄山南東麓の遍照院裏山古墳や雄山南麓の雄山南石棺墓・飛石迫石棺墓などがある。遍照院裏山古墳は退化した小さな竪穴式石槨を持つ円墳で、石槨内からは人骨・鉄剣などとともに文様化した擬銘帯をもつ乳文鏡が出土したと言う。古墳時代後期にはいると、これらに次いで初期の横穴式石室を有する雄山古墳群が築造される。入江周辺を基盤とした集団が横穴式石室という新しい墓制を先進的に取り込んだとみるか、新しい墓制を持った集団がこの地に移住したとみるか、いずれにせよその評価の持つ歴史的意義は大きいと言えよう。6世紀後半頃には古墳群の南方の烏帽子山山麓や城山山麓などに横穴式石室を主体とする古墳が群をなして築造されてくる。中には醍醐古墳群や綾織塚古墳(穴薬師古墳)などのように巨大な石材を用いた大型の横穴式石室墳もみられ、このあたりを基盤とした集団の強大さを物語っている。雄山周辺にはこのような巨石墳は認められず古墳の数もわずかであることは、集団の勢力の弱体化を意味するものであろう。これ以降、当該地周辺の遺跡はあまりみられなくなる。

古代以降

奈良時代に入ると古墳群周辺は、阿野(あや)郡松山郷に属することにされている。周辺に当該期の 遺跡はみられないが、南方の鴨部(かも)郷には軒丸瓦や鴟尾が出土している鴨廃寺が、山本郷には塔 の礎石を有する土壇が残る醍醐廃寺が築かれている。両者とも前時代に巨石墳が作られている地域に当 たることは、寺の造営主体を考える上で看過できない。

また、平安時代後期には保元の乱に破れて都を追われ、讃岐へ配流された崇徳上皇に関する伝承地が 残されている。

南北朝の頃には、南朝方に属した細川清氏が白峰合戦の折りに陣を構えた高屋城があったとされており、古墳群を含めた雄山南東麓の一体が城跡に比定されている。



第2図 雄山古墳群と周辺の遺跡

第2表 周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	時 代	番号	遺跡名	時 代
1	雄山古墳群	古墳時代後期	29	神谷経塚	
2	北峰遺跡	古墳時代	30	牛子山遺跡	旧石器
3	スベリ山古墳群	古墳時代前期	31	東梶遺跡	
4	経ノ田尾古墳	古墳時代前期	32	雲井御所跡	中世
5	土嶽古墳	古墳時代後期	33	明神原遺跡	弥生時代後期
6	六林池東古墳	古墳時代	34	北山古墳群	古墳時代後期
7	北峰西古墳	古墳時代	35	鴨庄古墳群	古墳時代後期
8	中村古墳	古墳時代	36	井手東遺跡	弥生時代
9	中村経塚	中世	37	烏帽子山遺跡	弥生時代中期~後期
10	高屋遺跡	弥生時代後期~古墳時代	38	烏帽子山南遺跡	弥生時代
11	上屋敷西遺跡	弥生時代	39	綾織塚(穴薬師)古墳	古墳時代
12	雌山古墳群	古墳時代前期	40	鷺ノ口遺跡	中世
13	惣社神社遺跡	弥生時代	41	樋ノ本遺跡	弥生時代後期
14	飛石迫石棺墓	古墳時代中期	42	鴨廃寺	古代
15	雄山南石棺墓	古墳時代	43	山ノ神古墳群	古墳時代後期
16	雄山南麓遺跡	弥生時代~古墳時代	44	鴻ノ池古墳群	古墳時代後期
17	塩口古墳	古墳時代後期	45	サギノクチ古墳群	古墳時代後期
18	塩口古墓	古代	46	蓮光寺山古墳	古墳時代前期
19	雄山東経塚	中世	47	お宮山古墳	古墳時代
20	雄山東麓遺跡	旧石器	48	松尾神社東組合石棺	古墳時代
21	遍照院裏山古墳	古墳時代中期	49	西福寺古墳群	古墳時代前期~後期
22	高屋城跡	中世	50	王塚古墳	古墳時代中期
23	松井古墳	古墳時代後期	51	西福寺遺跡	弥生時代
24	鞍谷池東遺跡	旧石器	52	醍醐古墳群	古墳時代後期
25	奥古墓	中世	53	別宮古墳群	古墳時代後期
26	神谷神社跡	中世	54	醍醐寺跡	古代
27	神谷壷棺出土地	弥生	55	本鴨遺跡	弥生時代前期~後期
28	神谷遺跡	中世	 	※遺跡の時代は中心と	なる時代である

参考文献

香川県 1988『香川県史』第1巻通史編 原始・古代 香川県 坂出市史編さん委員会 1988『坂出市史』坂出市

香川県教育委員会 1983『新編 香川叢書』考古篇 新編香川叢書刊行企画委員会 丹羽祐一 1983「すべり山1・2・3号墳」「経ノ田尾古墳」『香川の前期古墳』

日本考古学協会昭和58年度大会香川県実行委員会

斉藤賢一他 1980「高屋遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報 昭和54年度』香川県教育委員会

大久保徹也 1988「本鴨遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報 昭和59~62年度』香川県教育委員会

今井和彦他 1999「烏帽子山遺跡」

『坂出市内遺跡発掘調査報告書平成10年度国庫補助事業報告書』坂出市教育委員会 廣瀬常雄他 1986 『醍醐 3 号墳発掘調査報告』香川県教育委員会

第3章 調査の成果

第1節 調査の方法

調査の最初に実施した予備調査の結果に基づいて、周知の雄山 4 号墳、新規に発見した雄山 5 号墳・6 号墳及び鉄製品を検出したIV区(予備調査17~19・21トレンチ 第 3 ・ 4 図参照)について、調査区を設定して発掘調査を実施した。調査中に雄山 4 号墳の北側で発見した雄山 7 号墳についても、雄山 4 号墳の調査区を拡張してこれに対応した。各調査区の調査に際しては予備調査の際と同様に、表土剥ぎをはじめとするすべての作業を人力で行った。

南東から北西方向へ直線的に延びる県道高松王越坂出線の中心線を基準に20m方格を設定し、方格の 交点に杭を設置して測量を行い、国土座標との対応を図っている。

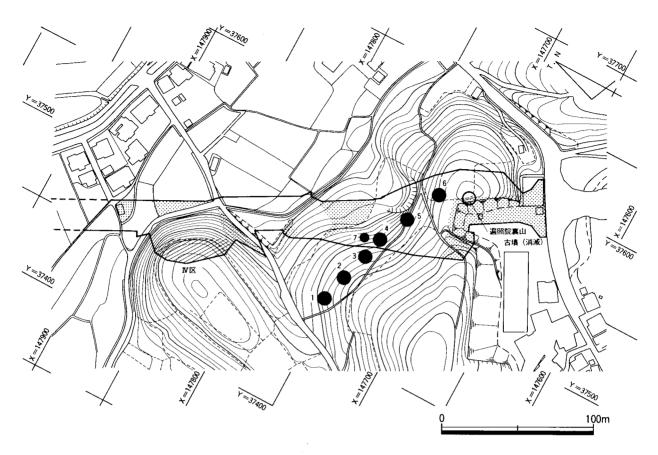
遺構の測量については、平面図と断面図のすべてを手書きで作成している。遺構の写真は写真用足場 2段を使用して撮影したが、各古墳の垂直写真のみラジコンへりによる航空写真撮影を実施した。

また、各古墳は石室の解体を行った後、一部の深掘り・断ち割りを実施して、下層遺構の有無の確認を行った。

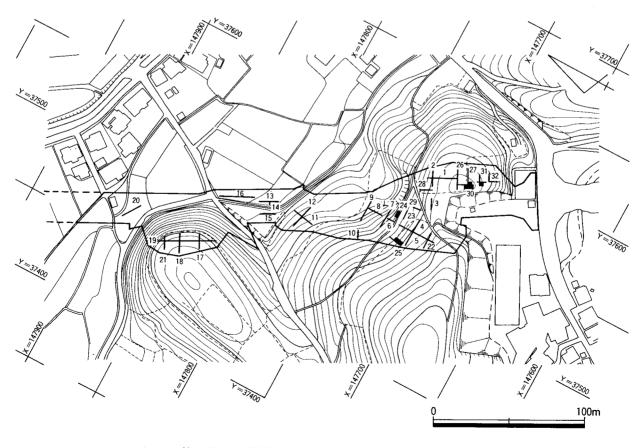
第2節 土層序

調査区内には2つの丘陵が存在している。IV区の位置する北側の丘陵は、頂部付近の平坦面以外は急峻な崖であり基盤層が露出してる。頂部の平坦面には表土層の直下に10~20 cm の褐色系粘質土がみられるが、この層は風化した基盤層が流出した2次堆積層であり、中世~近・現代の遺物が含まれている。その下には基盤層である花崗岩の風化したバイラン土が見られる。この基盤層上面で溝状遺構や土坑などを検出している。

雄山古墳群の所在する南側の丘陵も、稜線付近は表土層の直下に10 cm 程度の褐色系粘質土が見られ、その下が基盤層となっているが、斜面の下半になると、褐色系粘質土は50~60 cm 前後と厚みを増す。南側の丘陵北斜面は、後世(おそらく近世)に大きく開墾の手が入れられており、褐色系粘質土を大きく切り込んで階段状に開墾されている。段のカット部分にはそれぞれに溝状遺構が設けられている。また、4・5号墳はこの層の下の基盤層をベースに築かれている。南側丘陵においては弥生時代後期から近世の遺物を含んでいるこの褐色系粘質土の直上には、中世~近世の遺物を含んだ流出2次堆積層の灰黄色系粘質土が20~30 cm 程度の厚さで堆積している。この上面から掘り込まれている遺構は存在していない。一方、南斜面はミカン畑や、大正時代前後に火葬場・墓地が作られていたこともあり、基盤層まで達する程の著しい攪乱を受けているが、弥生土器などをわずかに含んだ10 cm 程度の包含層が存在しており、この層の直下の基盤層を掘り込んだ溝状遺構を検出している。



第3図 調査対象地全体と古墳群分布図(1/2,500)



第4図 予備調査トレンチ配置図 (1/2,500)

第3節 遺構・遺物

1 雄山 4号墳

今回調査を実施した4基の古墳の中で、墳丘・石室ともに最も遺存状況が良好な古墳である。

調査方法として、まず玄室内の清掃を行い主軸方位・規模を確定し、玄室内を4分割するセクションを設定した。次にそのセクションを墳丘上に投影し、トレンチ調査により基本層序・盛土等の状況を把握し、その上で面的調査を実施した。調査の初期段階では、予想された位置に羨道部が確認できず、かなりの混乱を生じたが、調査の進展につれて、羨道を持たない横穴式石室である事が判明した。

なお、玄室主軸の墳丘断面図において、玄室主軸と玄門部開口方位・墓道主軸のずれにより、墳丘断面図上に齟齬が生じた。そのため、玄門部開口部分には、墓道主軸の断面図を張り込んで補正した。

(1) 墳丘と外部施設

立地 (第5図)

巨視的には、雄山から北東に延びる尾根の北斜面に立地し、墳丘頂部の標高は16.6m前後を測る。さらに微細に観察すると、北東尾根とその中腹から北に瘤状に派生する尾根の付根に4号墳は位置する。この両尾根の斜面部には、後世の土地改良・削平等により3面の平坦地とそれに対応した3段の斜面がみられる(4段目斜面の有無は土取りによる消滅のため不明)。4号墳北側墳丘は、上方から2段目の斜面と合致し、現状での墳頂部と最上段平坦地の高さはおおむね合致する。2段目斜面のあり方をみると、東に隣接する5号墳の墳丘・石室の大部分をその形成段階で削平しているのに対し、4号墳は墳丘の大半を削り残している。さらに、西側に近接する雄山3号墳も削平を被らず、4号墳と同様の遺存状況を留めている。なお、この斜面・平坦地形成時期であるが、面的調査及び予備調査結果から18世紀の所産と想定できる。

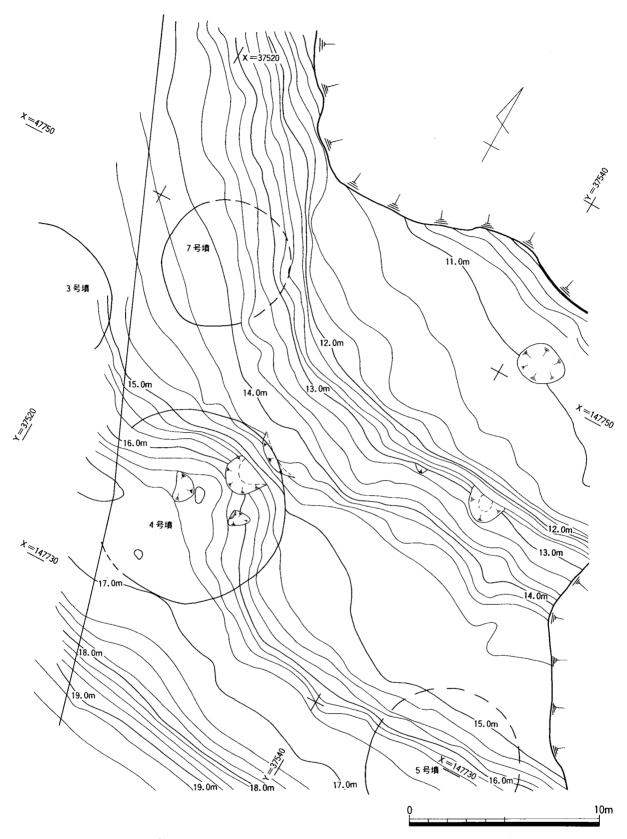
また、調査対象地外ではあるが、周知の古墳である雄山1~3号墳が4号墳西側に分布する。その立地を見ると、4・5号墳の延長線上において、ほぼ直線上に位置すると言える。加えて、前述した北方へ瘤状に派生する尾根の東斜面部に3号墳、尾根稜線上付近に2号墳、西斜面部に1号墳がそれぞれ位置しており、古墳群形成における特異なあり方を示す例と言える。

墳丘(第7・8図,この章で用いる数字は第7図の土層番号に対応)

現状での直径は約10.1mを測る円墳である。しかし、前述したように周辺は大規模な土地改変を受けており、墳丘北半を中心に削平ないし盛土流出が想定される。墳丘南側の2段築成状を呈した部分は、第7図の59層による削平の結果であり、元来は半円球に近い墳丘であったと推される。現状規模の径10.1mで墳丘を復元すると、石室は墳丘中心部に位置しない。周溝を検出した墳丘南側(A区)に限り、築造時の墳裾を留めていることが断面観察で確認できる。ここから規模を復元すると直径11.8mとなり、石室も墳丘中心部に位置する。仮にこの石室が墳丘中心部に構築されたとすれば、築造当時の墳丘規模は径11.8m前後を測ると想定できる。

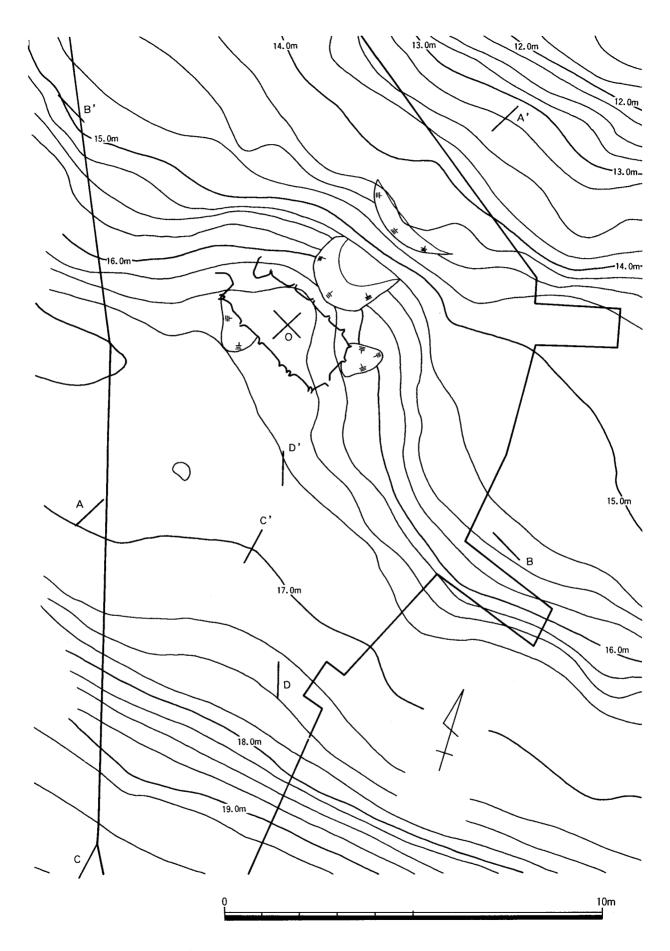
盛土の施行状況は、石室構築過程と密接に関連しており、石室の壁体構造と盛土が相関関係を持つことが窺える。その築造過程は旧地表面の整形・石室構築と平行した盛土(一次盛土)・墳丘整形盛土(二次盛土)の三工程に要約し得る。

第7図47の黒褐色混砂粘質土は旧地表土で、地山である花崗土風化土(51)の傾斜角度―20°に沿っ

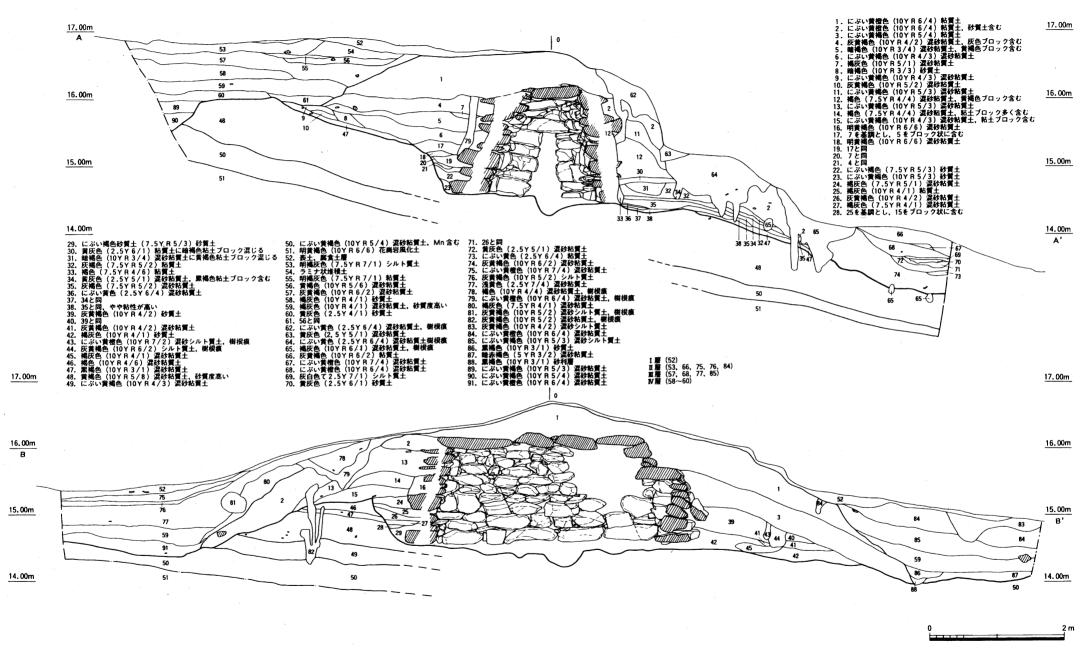


第5図 雄山4·7号墳地形測量図 (S=1/200)

た堆積状況を示す。墓壙掘削の前段階において、旧地表面に盛土を行った箇所を確認することができる (46, 墓道南西部分)。その範囲を明確に捉えることはできなかったが、確認した 2 箇所は墓壙・墓道 主軸線の両端付近である。斜面に掘削する墓壙に深さを持たすための処置と想定でき、次段階の墓壙掘 削と玄室下部構築に備えた旧地表面の整形と言える。この盛土を基部盛土と称する。



第6図 雄山4号墳地形測量図1 (S=1/100)



第7図 雄山4号墳墳丘断面図(S=1/40)

次に墓壙が掘削され、石室下部の構築が行われる。その後石室構築と平行した盛土がなされるが、玄室主軸直交断面図(周辺地形に対しても直交)が示すように、石室を挟んだ左右の盛土施行状況に差異がみられる。斜面下側では、墓壙底面と旧地表面から約20~40 cm の厚さで、石室下部 2 段分の壁体構築と平行した盛土を行っている(30~38)。32を除く1回の盛土の厚さは5~10 cm である。埋土は黄灰色粘質土と褐色系粘質土の2種が確認できるが、それぞれを交互に用いることはない。4 号墳墳丘埋土のなかでは、最も堅緻であるが、版築工法と言えるものではない。堆積状況をみると、墓壙底面上では水平となり、それを外れた旧地表面上ではその傾斜に合わせて積まれている。

3段目~前壁最下段までの石室構築と平行した盛土が11・12である。先に見た盛土と一見して異なり、 粗雑・軟弱である。

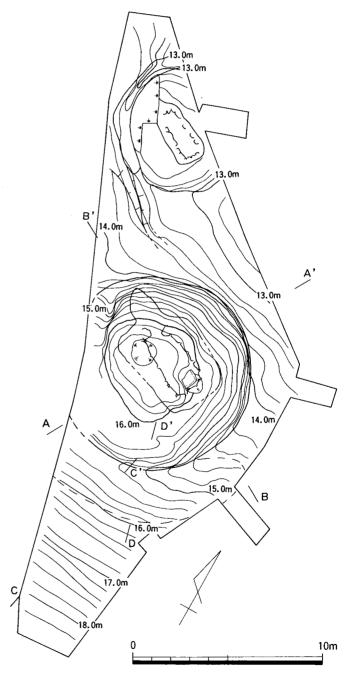
一方斜面上方の盛土は、墓壙が深さを有するため、墓壙内に裏込めを施しながら石室下部3段分が構築された後、4段目~最上段の石室構築と平行した盛土が積まれている(4~10)。盛土は大きく3層に分けられ、各層の厚さは20~30 cm を測る。埋土は基調とする土が各層とも異なるが、黒褐色混砂粘質土を中心とした多種の土がブロック状に混在する。堆積状況は石室付近(墓壙内上方)ではほぼ水平に堆積するが、墓壙を外れると旧地形面の傾斜に合わせて積まれている。以上、石室構築と平行した盛土を一次盛土と称する。

次に天井石が構架され、墳丘整形盛土の段階である。おおむね天井石以高、斜面下側では上から3段目以高を含めた墳丘全面に化粧土としてにぶい黄橙色粘質土(1)を施している。その堆積状況は軟弱で、各所に流出の痕跡がみられる。現状での天井石からの盛土の厚さは50cmを測る。この天井石の被覆と墳形の整形を主眼とした盛土を二次盛土と称する。

また、完掘測量図(第8図)をみると、墳丘 南側において2m前後の平坦地がみられるが、 これは古墳に伴わない地形改変による削平面で ある。

周溝(第7~10図)

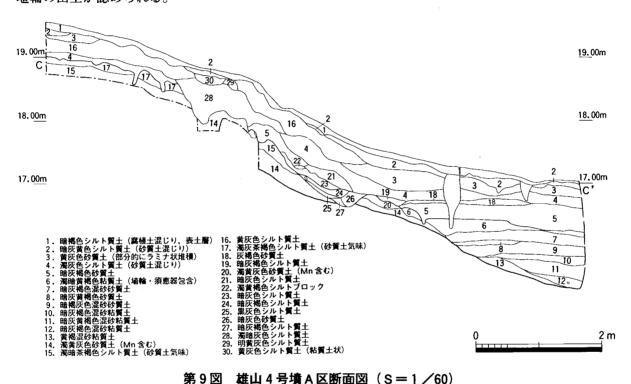
周溝は墳丘尾根頂部側(墳丘南側)を中心に確認し、18世紀前後の遺物を含む黒褐色系混砂粘質土を除去した段階で検出した。第9図によると、土層番号5~10・18が黒褐色系混砂粘質



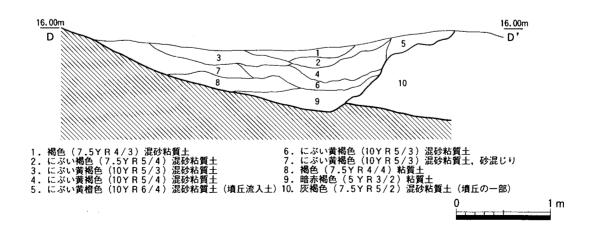
ると、土層番号 5 ~10·18が黒褐色系混砂粘質 第8図 雄山 4·7号墳墳丘測量図 2 (S=1/200)

土で、5・18と7~10に大別できる。いずれも水平堆積を呈し、間層として埴輪・須恵器を含む6が介 在している。6は上方からの流入土と想定可能であるが、墳丘付近までその堆積が認められ、4号墳の 削平土とみなしたい。周溝埋土は11~13で、第9図にその堆積状況を示した。明確な規模は削平により 定かではないが、現状では墳丘裾部からの幅約2.5m、深さ0.7mを測る。第8図の完掘測量図では、周 溝によるコンターラインの変化は認められないが、これは古墳築造以前の堆積土(第9図の14)を掘り 抜いたことに起因する。しかし、この点を考慮しても、地形に直交する周溝断面に関しては、旧地形の 傾斜と大差のない明確な掘方を持たない周溝と理解できる。その平面プランは、墳丘東側において周溝 埋土 (第7図92) を確認しているが、墳丘北側ではみられない。前述した削平との絡みもあるが、周溝 は墳丘尾根頂部側に位置し、墳形に沿う馬蹄形を呈していたと想定できる。

また堆積状況は、墳丘と上方(南側)からの流入土が相互に埋積しており、最下層を中心に須恵器・ 埴輪の出土が認められる。



第9回 雄山4号墳A区断面図(S=1/60)



第10図 雄山 4 号墳周溝断面図 (S=1/40)

(2) 埋葬施設

石室(1) (第11~13図)

埋葬施設は主軸をN60°Wにとる横穴式石室で、周辺等高線と平行した主軸方位をとる。一方、開口方位は主軸方位と異なり、N35°Wである。これにより玄門部は歪な平面プランを呈することになる。平面規模は、石室長3.78m、玄室左側壁長3.45m、右側壁長2.75m、玄室奥壁幅1.56m、玄室中央幅1.68m、玄門部幅0.57m(前幅1.4m)を測る。胴張り気味の傾向も窺えるが、顕著なものではなく、おおむね矩形の平面プランを呈している。なお、立面規模は玄室高1.5m前後、玄門部高1.05mを測る。

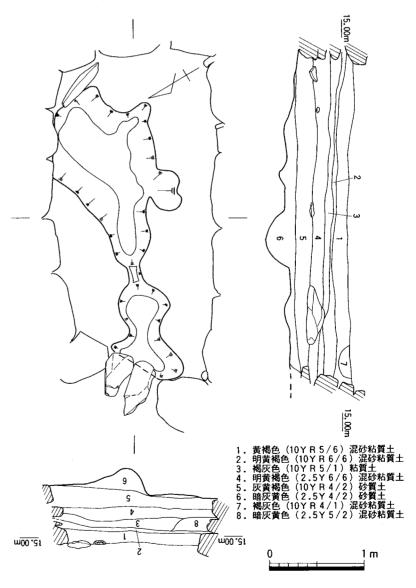
後述するが、4号墳の石室には羨道がなく、形骸化したものすら確認できない点が特徴であり、開口部には素掘りの墓道が取り付いている。墓道は墓壙掘削時に同時に掘り込まれたと考えられ、墓壙北西小口側から舌状に延びるように取り付いている。

墓壙は前述したように、基部盛土施行後に掘削されており、平面形は奥壁側の短軸長に比して、玄門部側が広く、平面形は台形となる。平面規模は、長軸長4.2~5.3m、奥壁側短軸幅3.5m、玄門部側短軸幅4.0mを測る。深度は斜面に掘り込まれているため、尾根頂部側では0.8mを測るのに対し、斜面側

では深度を持たない。その結果,墓 壙横断面はL字形を呈する。第7図 の墳丘断面図が示すように,墓壙底 面は水平とは言えず,斜面側にやや 傾斜している。

玄室平面プランは、左側壁と左袖部、左側壁と奥壁からなる両基底石隅角はおおむね直角を呈しているのに対っての両隅角は鈍角とない。加えて明神は左袖部にしてらいて、大大が変を出ている。基本であり、大が寛えをであり、大が寛えをであり、大が変をであり、大が変をである。本でである。本でである。本でである。本でである。本では、大大がなないである。本では、大大がなないである。本では、大大がない。とは、大大がないである。本では、大大がないである。本では、大大がない。

床面は墓壙掘削時の底面に一切造作を加えないものと想定できるが、 原位置を保った副葬品は確認できない。しかし、奥壁と右側壁の隅角に 持たせ掛けていた板石の存在を検討



第11図 雄山 4 号墳玄室内断面図(S=1/40)

する必要がある。板石は長辺60 cm, 短辺45 cm, 厚さ4 cm 前後を測る。石室開口後, 外部から持ち込まれた可能性も拭いきれないが, 形状・材質が後述する墓道側閉塞石上部に位置する板石と酷似する点から, 何らかの意図を持って玄室内で用いられた可能性が高い。その設置面は第11図土層番号5の中程で, 盗掘時に移動されたと思われる。1石のみの出土に加え, 床面に痕跡を残さないため石棺材・板石敷床面使用石材としての可能性は低く, 別用途を想定する必要がある。推測の域を出ないが, 閉塞石の一部であった可能性を指摘するに留める。

玄門部は歪な両袖式で、厚さ20 cm 前後の厚みのある板材(一部30 cm の石材を含む)を5~6段横積みしている⁽²⁾。玄門部幅は、第12図では主軸方位と開口方位の関係により極めて狭く見えるが、開口方位での幅は基底石部分で約0.55mを測る。いずれにしても通常の横穴式石室に比して幅狭であるといえる。袖石上には前壁最下段石材が設置され、さらにその上に2段分の石材が積まれ、高さ0.5mを測る前壁を構成している。なお、前壁裏側には控え積みが認められず、玄室内に顔を見せる石材のみである。また、前壁上には玄室から連続する天井石が構架されており、石室構築の計画性が窺える。

両側壁は、使用石材の大きさ・積方等に相違がみられ、目地の通り方等を考慮に入れると、石室構築 過程を読み取ることが可能である。左側壁は、基底石を含め3~4段分は30~80 cm の石材を横積み し、4~5段目以高は40 cm 前後の石材を内傾させながら横積みないし小口積みで構築している。奥壁 との隅角には両壁に跨る力石の存在も認められる。仔細に観察すると、前壁最下段石材下端レベルで横 目地が通る点から、この段階で石室構築の一工程を想定することが可能である。

一方、右側壁は構造的には左側壁と大差はないが、石材の形状・大きさに顕著なばらつきがみられる。厚さ5~10 cm 前後の板状石材使用の上限レベルに不明確ではあるが、目地の通りを見い出すことができ、前壁最下段石材下端レベルにも同様に想定し得る(それぞれを下部、中部、上部と仮称する)。下部は基底石に扁平かつ大形~中形の石材を選択し、玄室平面プランを確定しているが、それ以高は左側壁に比して、やや小ぶりの石材を用いている。中部は、横積みされた40 cm 前後の石材を中心に用いているが、小口積みされた小形の石材も多数混じっている。一石のみではあるが、60 cm に達する石材もみられる。上部は中部とは対照的に、小口積みされた小形石材が中心となり、中形の石材が一部混じる。上部の奥壁との隅角は既に失われており不明であるが、中部には力石が存在する。

左右側壁の石材選択・積方の差異は、玄室横断面の形態として顕れる。左側壁は3~4段目まではほぼ垂直に、5段目以高は内側に内傾させながら構築しているのに対し、右側壁は石材を2段目から面を内側に傾けることによって壁面を構築し、直線的に内傾する横断面となる。両側壁構築法の相違は、断面上字形墓壙に伴う石室構築とそれに平行した一次盛土の関係に起因する。つまり、左側壁は、基底石から3・4段分は墓壙掘方内に構築されるため、ほぼ垂直となり、それ以高は一次盛土と平行した構築となるため、壁面に変化が生じた。一方、右側壁側の墳丘一次盛土は細別が可能であり、右側壁下部とした部分は、他の盛土に比して入念な盛土がなされているのに対し、側壁中部・上部の盛土は極めて粗く、これが側壁構造に反映していると考えられる。また、墓壙に深度を有さず、基底石から一次盛土と平行した構築となる点が内傾する断面形態に影響していると想定できる。

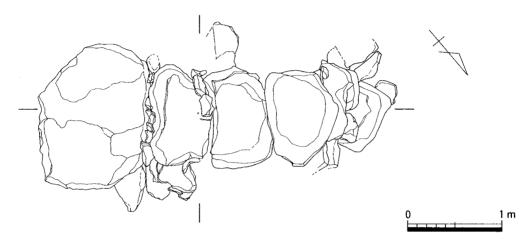
奥壁は、基底石を含め4~5段分が墓壙掘方内に収まり、それ以高は一次盛土と同時に壁体構築が行われている。そのため、左側壁の壁体構造と近似した様相を呈する(墓壙内に構築された部分を下部、前壁最下段石材レベルまでを中部、天井石までを上部と仮称する)。下部は大形の石材を中心にして横積みしている。仔細に観察すると、右側壁寄りで板状石材の使用が認められる。右側壁下部とそれに対

16.00m

m00.81

応する一次盛土の状況を考慮すると、奥壁下部は板状石材使用レベルで構築の一工程を想定することが可能である。玄室平面プランを確定すると同時に、左側壁側の基底石上端レベルへとの水平化を意図し、墓壙深度のない右側壁・奥壁右側壁寄りを中心とした玄室の安定化を図ったと考えられる。断面形態は、下部はほぼ垂直、中・上部は内側に傾けながら構築されているが、その変換点は微妙なものである。

天井石は4石の大形板状石材を構架した平天井である(第13図)。石材の間隙には小形の塊石を用いて二次盛土の進入を防いでいるが、粘土による目張りの有無は確認できない。一方、前壁最下段の石材は玄室主軸に対して斜行しており、袖石における基底石の在り方に対応し、構築当初から意図したものであった可能性が高い。その要因は不明であるが、広義の墓道との絡みを考慮する必要があろう。



第13図 雄山 4号墳天井石平面図 (S=1/40)

墓道・閉塞施設(第14~15図)

4号墳石室には、袖石に取り付く羨道がなく、短い前庭側壁もみられない。羨道に代替する施設として、墓壙掘削時に同時に掘り込まれた素掘りの墓道が存在する。墓壙小口部から舌状に延び、竪穴系横式石室⁽³⁾でみられる墓道と異なり、検出した限りでは斜め下方に下がるものである。墓道長1.7m、最大幅1.5mを測る。墓道主軸は玄室主軸に対し斜行気味であるが、墓壙と同様に周辺地形にほぼ平行した方位で掘削されているため、尾根頂部側では0.6m、斜面側では0.2m程度の深度となる。底面は墓壙底面と連続しており、段差や框構造は確認できない。埋土は3層に細別したが、掘り直しを想定したものではなく(初葬のみ)、土質の微妙な相違である。

閉塞施設は埋葬当時の状況が完全に遺存し、玄門部において、塊石を用いたものであった。第15図は 玄室主軸に直交した見通し図であり、開口部が斜行しているため、閉塞石の一部を図化しているに過ぎ

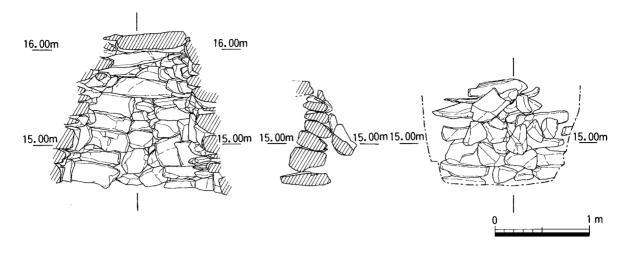
ないが、その構造は、2列、6~7段積みで、下部には50 cm 前後の石材を用い、上部に上がるにつれ石材を小形にして袖石間を塞いでいる。明確な控え積みはないが、第15図が示すように中程で持たせ掛けるように設置されている石材が認められる。検出レベルにおける墓道埋土に土質の変化は生じていないが、同一レベルで他にも石材を設置している点から、閉塞石の控え積みと判断できる。また、同じく墓道側の閉塞石上部において、前壁最下段の石材に板状石材が持たせ掛けるように置かれているが、その性格は不明である。



- 1. 灰真物色 (101 R 4 / 2 / 砂頁工 2. 褐灰色 (107 R 4 / 1) 砂質土 3. 褐灰色 (107 R 4 / 1) 混砂粘質土 明黄褐色粘質土ブロックを含む
- 明寅報色柗賀土フロックを含む | 1. 暗褐色(7 .5 Y R 3 / 4)混砂粘質土,基部盛土 | 5. 黒褐色(10 Y R 3 / 1)混砂粘質土,旧地表土 | 6. にぶい黄褐色(10 Y R 5 / 3)混砂粘質土,Mn 含む



第14図 雄山 4号墳墓道断面図(S=1/40)



第15図 雄山 4 号墳閉塞石実測図 (S=1/40)

(3) 遺物の出土状況

玄室

石室は左側壁玄門部側と奥壁の一部が失われており、比較的新しい時期における石室内への進入を示す痕跡が多数検出できる。第11図の玄室内土層堆積状況をみると、土層番号1~4・7・8は、玩具をはじめ断熱材・ガラス瓶・瓦片等を多数包含しており、近隣住民による「ごく最近まで、中に入って遊んでいた」という話と符合するものである。一方、推定床面の直上である5の灰黄褐色砂質土には近現代遺物を含まず、細片ではあるが須恵器・鉄製品をはじめ、玉類が出土している。須恵器は坏身、蓋坏、高坏、鉄製品では、馬具(f字形鏡板、銜)、三角形鏃、長頸鏃、刀子、鉄製飾り金具、鉇状鉄製品が出土している。また、玉類では碧玉製管玉、ガラス玉、材質不明小玉が出土している。いずれも原位置を留めるものではなく、土層番号5は盗掘時の攪乱層と判断できる。なお、土層番号6は床面の大半を占める攪乱坑埋土で、副葬品の大半は持ち去られたと考えられる。

周溝・墳丘上面

墳丘を含めた外部施設における遺物の出土は周溝を中心に確認できる。周溝出土遺物は原位置を留めるものではなく、墳丘上からの転落ないし墳丘外から流れ込む状況で出土している。周溝の底面直上で検出した遺物は稀薄で、大半は底面から5~10 cm "浮いた"状態での出土である。出土遺物は、円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪(人物埴輪・馬形埴輪・器財形埴輪)、須恵器(坏身・蓋坏・高坏・甕・短頸壷)、鉄製品の他、古墳築造以前の堆積層に包含する弥生土器が出土している。出土遺物は各々の地点・高さを落とした取り上げは実施していないが、周溝内で各まとまりごとに取り上げた。そのまとまりの単位間での接合や、墳丘上出土遺物と周溝出土のものが接合する例が少なくない。例をあげると、同一個体である実測番号1~3は、墳丘南側のA区周溝を中心に出土しているが、その出土状況にまとまりはなく、A区周溝内の各所で出土している。大半の埴輪は原位置を想定することが困難な出土状況であるが、人物埴輪の出土状況に埴輪配置状況を考える上で示唆的なものがある(実測番号245、写真16)。南側裾部やや上方の墳丘斜面において、頭部側を下に向け転倒した状態で、二次盛土の流入土中から出土しており、元来墳丘上に樹立していたものが、転落した可能性が極めて高いと考えられる。墳丘上出土と周溝出土埴輪の接合例や人物埴輪の出土状況を重視すると、円筒埴輪・形象埴輪は元来墳丘上に樹立されており、盛土の流出や後世の削平等によって周溝内に転落したと考えられる。なお、現状

での墳頂部には埴輪の据え方は一切確認できない。また、墓道前面のいわゆる"前庭部"での埴輪・須恵器のまとまった出土はみられないが、隣接する7号墳との間の堆積層より、比較的多量の埴輪・須恵器の出土が認められ、二次盛土施行後、開口部前方部分に埴輪・須恵器が樹立されていた可能性は捨てきれない。

一方、須恵器は甕を主とし、周溝内・墳丘上からの出土が確認できる。その出土状況は埴輪と近似し、接合関係から墳丘上に樹立された可能性が高い。例をあげると、実測番号310の甕口縁部はA区周溝の各所で出土している他、C区の墳丘上で出土した破片と接合関係を有する。坏類をみると、周溝内の各所での接合例や墳丘上と周溝内出土遺物の接合が確認でき、甕と同様に墳丘上での使用・設置を想定することが可能である。坏類の接合状況をみると、各取り上げ単位ごとに全体の3/5近くまで接合、復元できる例があることから、すべての須恵器が墳丘上で使用・設置されたとするには早急である。甕・壺・坏類等に加え、後述する鉄製品を含めて、何らかの意図を持って周溝内に設置された可能性も考えなければならない。

また、周溝内より曲刃鎌と平鑿の出土が認められる。出土状況・形態から混入を想定することは困難であり、4号墳に伴う遺物と考えられる。いずれも、周溝底面付近からの出土ではあるが、底面直上からの出土ではなく、やや"浮いた"状況で出土している。周溝埋没過程における早い段階で墳丘から転落した可能性が高い。

(4) 出土遺物

玄室出土遺物

鉄製品

馬具(1・2)

1は銜で、元来は2連式であったと想定される。先環間の長さは5.5 cm、先環径は2.5 cm 前後を測り、断面はほぼ円形を呈する。両端先環の方向は直交せず、平行した位置関係で取り付けられている。 銜先環の処理形態は錆化が著しく不明である。2 はF字形鏡板の一部である可能性が考えられるが、縁金を持たず、鋲留もみられない。宮代氏によると、「縁金を持たない系列」は早くに途絶えてしまうが、「縁金を持つ系列」は5世紀末から6世紀前半にかけて馬具の中心を占めるようになるとされている40。4 号墳の築造年代と齟齬が生じるため、再検討の余地が残る。

鉄製工具(3・4)

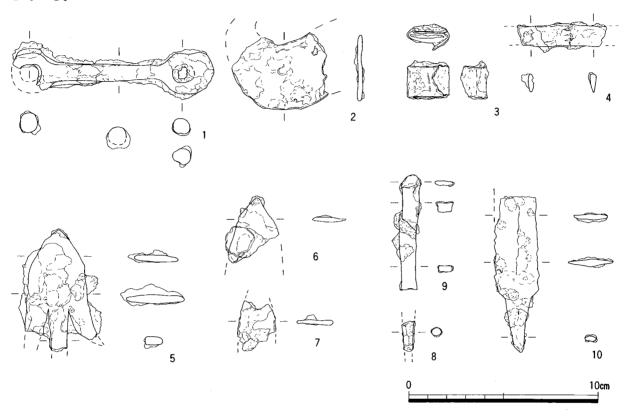
3は刀子の飾金具である。鉄製の幅1.7 cm, 長さ8.5 cm, 厚み0.1 cm 弱の鉄板をほぼ2重に巻き付け製作している。X線撮影による限り,象嵌・線刻等は確認できない。4は刀子刃部である。残存長4.7 cm, 刃部幅1.0 cm, 背の厚み0.3 cm を測る。刃部断面形は三角形を呈する。

鉄製武器 (5~7)

いずれも鉄鏃である。5 は腸抉三角形鏃で、頸部下半以下と逆刺部先端を欠く。残存長6.6 cm、鏃身部残存長5.7 cm を測る。鏃身は平造りと考えられ、頸部断面は方形をなす。鏃身形状は先端が三角形をなし、緩やかに開き逆刺部に至る。6 は三角形鏃の鏃身部先端である。平造りである。7 は長頸鏃の鏃身部の可能性が高いが、平造りをなしており、詳細は不明である。8 は鉄鏃茎部で、断面は隅丸方形をなす。

不明鉄器 (9・10)

9は3個体の破片が折れ、それぞれが錆化により付着した状態で出土したものである。上端部の断面は扁平であるが、中半・下端部の断面は方形である。上端部は不明であるが、それ以外は鉄鏃頸部の可能性が高い。10は形態的には削り小刀状鉇と近似するが、年代的に齟齬をきたす。玄室内他の鉄器が第11図土層番号5の盗掘時の攪乱層から出土しているのに対し、10は現代遺物を包含する土層番号2から出土で、4号墳に伴う遺物でない可能性もある。それに呼応するように、錆化の状況も異なるものになっている。



第16図 雄山 4 号墳玄室出土遺物実測図1 (S=1/2)

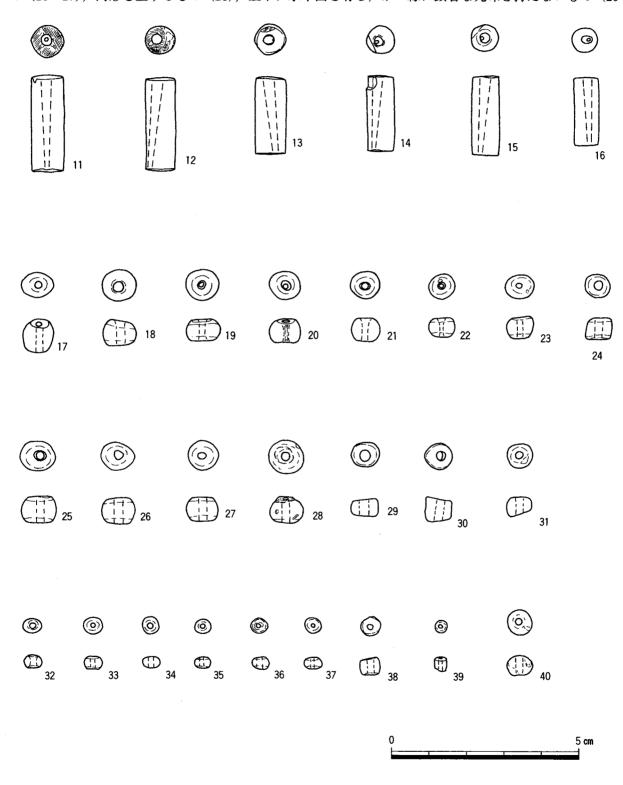
玉類

管玉 (11~16)

いずれも碧玉製である。色調は濃緑色($11\sim13$)と淡灰色($14\sim16$)を呈するものに分けられ、前者は後者に比して、硬質で重量が重い。長さは2.5~cm 前後と2~cm 前後のものに大別でき、径は $7\sim9~mm$ の大きさにおさまる。形態は、体部がやや中膨らみ気味のものもみられるが(13)、他は直線をなしている。小口面は体部に対してほぼ垂直に切られるものが大部分で、 $11\sim13$ の小口面には不定方向の研磨痕がみられる。穿孔はいずれも片側穿孔で、穿孔位置が中心を外れるものも含まれる。色調により2~t別できるが、両者の特徴に明確な差異を見出すことはできない。しかし、大きさの点で後者($14\sim16$)にはある程度の規格性が認められる。

ガラス小玉 (17~38)

色調は紺色(17~24・29・30・32~35), 濃紺色(25~27・31), 淡青色(28・36・37), 明緑灰色(38) の4種がある。側面形状は多様であるが、細別すると直径5 mm 以上とそれ以下に大別できる。側面形状により5 mm 以上のものは、棗状を呈するもの(17), 上下に水平面を有し、かつ縁に丸味があるもの(18~27), 円形を呈するもの(28), 上下に水平面を有し、かつ縁に顕著な丸味を持たないもの(29



第17図 雄山 4 号墳玄室出土遺物実測図 2 (S=1/1)

 \sim 31)に細別できる。 5~mm 以下のものは,上下に水平面を有し,かつ縁に丸味を持つもの($32\sim$ 37)と縁に丸味を持たないもの(38)に分けられる。先に触れた色調と側面形状には整然とした相関関係はみられないが, 5~mm 以上で円形を呈する唯一の個体である28は,淡青色を呈している。また,気泡の方向を観察すると,大半が縦方向に走るのに対し,この個体は縦方向ではなく,上から見ると右方向に走っている。さらに側面形状が上端部分において幅 4~mm,厚み 1~mm で突出している点を考慮すると,28~cm は巻きつけ技法による可能性が高いと思われる。また, 5~mm 以下の38は,出土ガラス小玉で唯一明緑灰色の色調を呈しており,小型で縁に丸味を持たない 1~cm 点のみの出土個体と呼応したものである。

材質不明小玉 (39)

ガラス製ではないようである。側面形状は径3mm,長さ4mmを測り,幅に対して長さがやや長いものである。

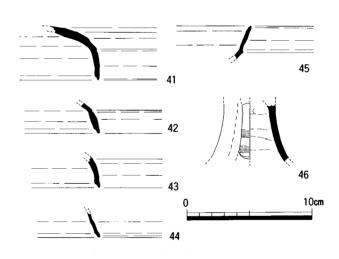
練玉 (40)

径 7 mm の大きさで、外面観察による限りでは精良な胎土を選択している。

須恵器 (41~46)

いずれも細片であり、復元することはできなかった。41~44は蓋坏、45・46は高坏である。41は稜か

ら口縁部までの高さが2.5 cm を測り,天井部と口縁部の境にある稜の突出は弱い。口縁端部は内傾する面を持ち,浅い沈線がめぐる。42・43は稜から口縁部までの高さがそれぞれ1.9 cm, 1.2 cm を測り,稜は退化し,凹線がめぐる。42は口縁部中程でやや肥厚している。口縁端部は内傾し,浅い沈線をもつ。44は内傾する端部に浅い凹線をもつ。45は無蓋高坏の口縁部である口縁部と底部の境ににぶい稜をもつ。端部は内傾する面に,不明瞭な凹線がめぐる。46は高坏脚部である。3方透かしであるが,一段か二段かは不明である。



第18図 雄山 4 号墳玄室内出土遺物実測図 3(S=1/3)

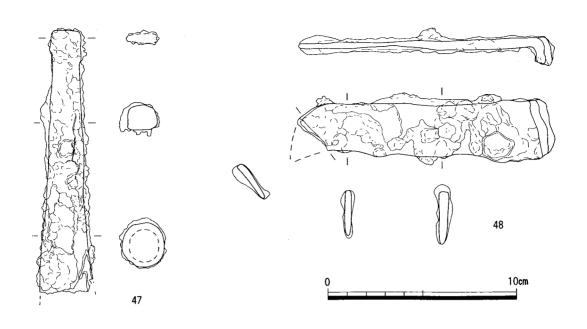
墳丘上・周溝出土遺物

鉄製品

農工具 (47・48)

47は袋鑿で,長方形刃部を有する平鑿である。残存長14.1 cm,残存刃部最大幅1.8 cm を測る。着柄部は有袋式で,厚さ3 mm の鉄坂を折り曲げたものである。目釘穴はみられないが,内部には木質痕と思われるものが僅かに遺存しており,木柄を装着していたものと考えられる。

48は曲刃鎌である。刃部先端を欠くが,ほぼ完存する。残存長13.7 cm,刃部中央幅3.0 cm,厚さ 4 mm 前後を測る。刃部は長方形を呈するが,先端は下方に曲がり尖るであろう。基部は折り返しにより,装着部を準備している。着柄角度は105°前後と鈍角気味で,古瀬氏による分類の「中型Ⅱ B」類」に該当する⁽⁶⁾。なお,刃部に凹凸がみられるが,研ぎ減りか否かは判然としない。



第19図 雄山 4 号墳周溝出土遺物実測図 (S=1/2)

円筒埴輪 (49~238)

出土した埴輪は原位置を留めることなく、周溝への転落・墳丘上での採集・近世遺構埋土中からの検 出といった多様な出土状況を呈している。3号墳が埴輪を有する可能性は捨てきれないが、ここでは4 号墳から出土した埴輪を一括して取り扱う。なお、円筒埴輪とした胴部・底部には、朝顔形埴輪・形象 埴輪が含まれると想定できるが、識別することは困難である。

最初に形態と法量,成形,調整,底部調整,突帯,焼成と色調,胎土,透かし孔,ヘラ記号の9項目を設け,4号墳出土円筒埴輪の特徴を提示する。いずれも細片で出土しており,全容を知り得る個体が極めて少ない。そこで,調整・技法・形態・色調・焼成等を考慮して細分し,出土埴輪の分類を行うと同時に,その具体像を抽出したい(*)。

A), 各部の特徴

a. 形態と法量

形態は少なくとも、3 形態が存在する。底部付近からほぼ直立気味に立ち上がり、胴部中位よりやや外反し、口縁部で大きく外反する個体が同一個体である49~51から復元できる。後述するが、これらは底部調整を伴わない個体と類推され、胴部中位以高はこの形態であるが、底部調整を有する個体の存在を想定することができる。この場合、底部は緩やかに外反し、胴部中位部が直立気味となり、口縁部は外反する形態となる。最後は126にみる形態で、底部より緩やかに外反してそのまま口縁部につながるものである。

法量は、全容の判明する個体は皆無であることに加え、焼き歪み等の影響により、各径の復元は正確性を欠くものとなっている。口縁部径は、 $14.2\sim30.8$ cm を測り、26 cm 前後に集中する傾向がある。底径は $13\sim23$ cm を測り、21 cm 前後に集中する。

器高は、全体を知り得る個体はない。

最後に、最も接合できた49~51と126でその全体像を推測する。49~51は現高で37 cm を測り、口縁部から3条の突帯が確認できる。突帯総数は、透かし孔の穿孔位置が口縁部から2・3段目において、

各段 2 孔ずつ対面し、それぞれ直交して穿孔され、4 段目にはみられない点から、3 条突帯の可能性が高いと推定できる。口径は26.6~27.4 cm で、最下段突帯径は24.5 cm を測る。突帯間隔は上から1・2 段目間が11.4 cm、2・3 段目間が11 cm と等間隔に近く、かつ突帯を水平に巡らす意図が認められ、突帯貼付に関する規格性が窺える。126は現高で40.5 cm を測り、2 条の突帯が確認できる。現存最上部には突帯貼付時の下端部ヨコナデ調整が認められ、少なくとも3 条の突帯が存在するといえる。底部高16~17 cm、底部径は22 cm、最下段突帯径24.5 cm を測る。突帯間隔は底部から1・2 段目間が12.5 cm を測り、2 段目ヨコナデ下端部と3 段目ヨコナデ下端部間は14 cm(同1・2 段目間は11.2 cm)を測る。また、突帯を水平に巡らす意図は読み取れず、突帯貼付に関する規格性は認められない。

まず、幅 $4\sim6$ cm の粘土帯を輪積みして底部を作る。輪積みの証左になる粘土帯端部の合わせ目がナデ消され残った個体が数点確認できる(124、133、140、149)。126において内面に顕著に残る粘土紐つなぎ目痕跡から、その上に幅 2 cm 前後の粘土紐を上から見て右回りに積み上げて製作した状況が読み取れる。粘土紐積み上げの休止面(乾燥単位面)は仔細に観察したが、確認できなかった。乾燥工程が行われていなかったとすることはできないが、 $10\sim15$ cm 程度の積み上げ小工程を経るものの、その作業は一連の流れのなかで、比較的短時間に行われていたと考えられ、底部調整を伴わない底部の断面が、その自重により肥厚する結果を生んでいる。

また、底面には禾本科植物類と考えられる圧痕が認められる例があり、作業台から埴輪を遊離し易くするため、その上面に敷いたものと想定できる(115、 $121\sim123$ 、126、 $129\sim131$)。

c. 調整

b. 成形

調整は主に外面をタテ・ナナメハケ、内面をタテ・ナナメナデ、一部タテハケで行っている。

外面調整は、胴部ではタテハケ、口縁部ではナナメハケである。すべて一次調整のみで、二次調整は一切みられない。その重複関係は、下から上へ、左から右へ施しているが、起点の高さは不規則で、段ごとに起点の高さを水平に揃え、横にずらしながら連続的に施すものではない。高橋氏によると、ハケメの起点が揃うものは、乾燥単位ごとに外面を調整していたのに対し、揃わないものは乾燥時間の省略化により、粘土を一気に上まで積み上げ、その後外面調整を行うことに起因するとされている®。この点に関しては、先に触れた粘土紐の積み上げ方法と外面調整が呼応したものと言える。

内面は底部ではタテナデ、胴部・口縁部では左上がりのナナメナデで、指ないし布によるものである。 口縁端部には、ヨコナデが1回ないし2回施されており、不連続なハケメがみられるものもある。タテ ハケは後述する断続ナデ技法を有するものの一部に施されるのみである(104~107)。

d. 底部調整

確認できた個体はすべて須恵質に焼成されたもので、土師質埴輪には一切みられない。一方須恵質系 埴輪の一部には底部調整が施されない個体もみられる(121~125)。底部調整は、板状工具による押圧 ないし強い板ナデによるもので、その重複関係は正立状態で右から左方向に施される例が多い。外面調 整が左から右方向に施される個体の割合が高い点と逆方向になり、底部調整は倒立させて行われたと考 えられる。これを裏付けるように、口縁端部に底面にみられた圧痕と同様の植物圧痕がみられる個体 (53,59~63,65,67) も存在する。

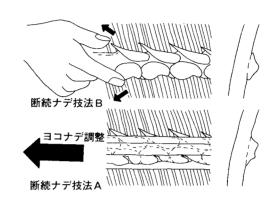
また,底部調整を伴わない個体がその自重により,底部断面が肥厚するのに対し,これを有する個体は先細りないし胴部器壁と同じ厚さとなっている。

e. 突带

突帯は断面形状,ヨコナデ調整順序を中心に,第1表に示したように須恵質系埴輪を5形態,土師質 埴輪を4形態に分類した。この分類に断続ナデ技法は含まず,後述する底部分類で取り扱う。

なお,49,174~179では突帯上部において,突帯整形時のヨコナデにナデ残されるように左上がりの

圧痕ないし擦痕が確認できる。これは、奈良県菅原東遺跡 (埴輪窯跡) で確認された「断続ナデ技法A」と称される技法の痕跡である(⑤)。報告者の鐘方・安井・中島氏によると、従来から知られる断続ナデ技法により突帯の母体となる粘土紐を器壁に貼付し、その上にヨコナデ調整を加え、突帯を仕上げる技法を「断続ナデ技法A」と呼称し、左上がりの圧痕はヨコナデ調整にナデ残された痕跡とされている。また、従来の断続ナデ技法は「断続ナデ技法B」として区別している(第20図)。この研究成果を踏まえ、突帯分類には断続ナデ技法Aの有無を加えた。

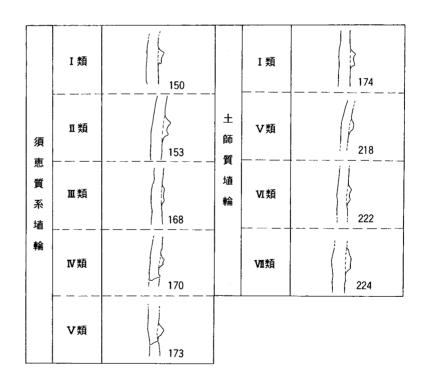


第20図 断続ナデ技法模式図(註(9)より抜粋再トレース)

突带分類

須恵質系埴輪

[I 類] 断面形状は突帯下辺の 低いM字形である。下辺と側辺 を同時にヨコナデし、最後に上 辺と側辺にヨコナデ調整を加え 仕上げる。側辺の2度にわたる ヨコナデ調整により, 下辺には 窪みが生じ、側辺下端は巻き込 み気味に垂下する。49の口縁部 下の突帯上部には左上がりの圧 痕が確認できるが、同一個体で ある49~51の口縁部下の突帯以 外にはこの圧痕ないし擦痕は確 認できない。しかし、断続ナデ 技法Aによる突帯貼付・整形が 行われたことが確実な最上段の 突帯は, 同一位置で突帯の上辺 と下辺がへこみ、その両脇には



第21図 雄山 4 号墳出土円筒埴輪突帯分類図

団子状の膨らみがあり、これを1単位として、一定間隔でこの凹凸が認められる。これらの形状は、断続ナデ技法による突帯貼付の結果と判断でき、圧痕・擦痕はその後に施されるヨコナデ調整により、ナデ消されたと考えられる。よって、 $49\sim51$ には圧痕・擦痕は確認できないが、断続ナデ技法Aが伴うものと言える。同様に、I 類とした突帯は断続ナデ技法Aを伴うものである。

[Ⅱ類] 断面形状は突帯下辺の低いM字形を呈する。ヨコナデ調整は、突帯上・側・下辺同時にヨコナデ調整がなされるため、I類のような突帯下辺形状をとらない。突帯上部に圧痕・擦痕はないが、その平面形状により断続ナデ技法Aが伴うと考えられる。突帯側辺幅は1 cm 前後を測り、I類と同様である。

なお、Ⅱ類は須恵質系埴輪のなかで数多く確認できるが、ヨコナデ調整順序に不明瞭な個体があり、 Ⅰ類に属する可能性があるものも含まれる。

[■類] 断面形状は、突出度の低い変形M字形を呈する。ヨコナデ調整は下辺・側辺同時にヨコナデ調整が施され、その後上辺のみヨコナデされる。それにより、側辺上端は丸味を帯び、断面形状は潰れたM字形となる。断続ナデ技法Aは確認できない。側辺幅は1.3 cm 前後と幅広である。168・169の2点のみの確認であり、異質な存在といえる。

[N類] 断面形状はM字形を呈し、側辺幅が0.7 cm 前後を測る幅狭の突帯である。ヨコナデ調整は下辺・側辺が同時に行われ、最後に上辺のみヨコナデ調整を施した可能性が高い。119,170~172はいずれも色調・焼成に類似性が認められ、同一個体である可能性が極めて高い。

[V類] 断面形状は台形を呈する。ヨコナデ調整は下辺・側辺が同時に行われ、その後上辺・側辺がヨコナデされる。突帯側辺幅は0.5 cm と極狭であるが、突出度は高い。色調がⅣ類の一群と近似しており、部位による形状の差異とも理解できるが、ヨコナデ調整順序の差異により別枠を設定した。他の埴輪と比べると、極めて異質な存在であると言える。なお、断続ナデ技法Aによる突帯貼付は確認できない。

土師質埴輪

[I類] 断面形状・ヨコナデ調整順序は須恵質系埴輪I類と同様である。土師質埴輪の中心的な突帯形態であると言える。

 $174\sim179$ の突帯上部には、断続ナデ技法Aによる圧痕・擦痕がみられる。 $174\sim176$ では、幅 $2\,\mathrm{mm}$ 、長さ $1\sim2\,\mathrm{cm}$ 程度の明確な圧痕が、 $178\cdot179$ では擦痕がヨコナデ調整にナデ残されて遺存している。その間隔は、 $175\sim177$ では $2\,\mathrm{cm}$ 間隔でみられる。確認できた圧痕・擦痕は $6\,\mathrm{点}$ のみであるが、突帯平面形状に凹凸が一定間隔でみられ、断続ナデ技法Aが伴う突帯と判断できる。

[V類] 断面形状が上端の高い台形を呈する。ヨコナデ調整は下辺・側辺が行われた後、上辺・側辺がヨコナデされる。側辺幅は0.5 cm を測り、形状・ヨコナデ調整順序・側辺幅は須恵質系埴輪 V 類に共通している。 8 点のみの確認であり、220を除き、胎土・焼成から同一個体に限りなく近い一群である。なお、断続ナデ技法 A は確認できない。 V 類の突帯は 4 号墳出土円筒埴輪全体から見ると、イレギュラーな存在である。

[Ⅵ類] 断面形状は突出度の低い扁平なM字形を呈するが、突帯Ⅲ類と異なり、突帯上・下端共に整っている。ヨコナデ調整順序は不明であるが、断続ナデ技法Aによる突帯貼付が認められる。221, 222の2個体のみの出土と数が少なく、ⅠないしⅡ類突帯のヴァリエーションと思われる。

[¶類] 断面形状は突出度の低い扁平な台形を呈する。側辺幅は223が1.3 cm, 224が1.2 cm を測り, 突帯幅の広いものである。224は風化により詳細は不明であるが,底部である可能性が高く,底部から 3 cm 前後の位置に¶類の突帯が巡ぐる「低位置突帯」の可能性がある。共に出土位置が不明瞭であり,出土数も 2 点と稀少であるため, 4 号墳に伴うと断定することはできない。

		断面形状	ヨコナデ調整順序	側 辺 幅	断続ナデA	掲 載 番 号
須	I類	M字形	①下辺・側辺 ②上辺・側辺	1 cm 前後	0	49~51, 150, 151
恵	Ⅱ類	M字形	①上・側・下辺	1 cm 前後	0	152~167,
質系	Ⅲ類	扁平M字形	①下辺・側辺②上辺・側辺上辺	1.3 cm 前後	×	168, 169
埴	Ⅳ類	M字形	①下辺・側辺 ②上辺のみ	0.7 cm 前後	0	119, 170~172
輪	V類	台形	①上辺・下辺 ②上辺・側辺	0.5 cm 前後	×	173
土	I類	M字形	①下辺・側辺 ②上辺・側辺	1 cm 前後	0	86, 126, 174 ~ 212, 231, 232
一師質	V類	台形	①下辺・側辺 ②上辺・側辺	0.5 cm 前後	×	213~220
垣址輪	VI類	扁平M字形	不明	1 cm 前後	0	221, 222
栗棚	VI類	扁平台形	不明	1.3 cm 前後	×	223, 224

※Ⅱ類中にはⅠ類に属する個体が含まれる可能性が高いが、抽出し難い。

第3表 突带分類表

f. 焼成と色調

焼成は、還元焔焼成はされていないが堅緻に焼成されたものと土師質に焼成された2種が確認できる。 前者を須恵質系埴輪、後者を土師質埴輪と便宜上呼称する。また、黒斑を有するものはなく、窯により 焼成されたものと理解できる。

色調は須恵質系埴輪は灰オリーブ色、灰褐色、明褐色、明赤褐色、橙色等がみられ、多様な状況を呈する。49~51では同一個体内で、褐灰色・にぶい赤褐色、橙色・暗灰黄色といった色調の変化が認められ、窯内での焼成に際し、火回りの加減により生じた色調の変化と理解できる。

一方、土師質埴輪はにぶい褐色、にぶい黄橙色から橙色を呈する個体が大半を占める。 $49\sim51$ の色調が示したように、須恵質系埴輪でも、橙色を呈する箇所があり厳密に分類することはできないが、須恵質系埴輪は $49\sim73$ 、 $95\sim125$ 、 $150\sim173$ 、土師質埴輪は $74\sim94$ 、 $126\sim149$ 、 $174\sim224$ と想定する。

g. 胎土

素地は緻密といえるものではなく、粗から中が一般的である。胎土中の含有鉱物は、石英・長石、赤色粒(黒赤粒)をいずれも一定量含み、少数ではあるが、雲母を含有する個体もある。特徴的な含有鉱物として、2~4 mm の黒色石粒が挙げられる。これを含有する個体は96~98、111、112、114、157、164、166で、すべて須恵質系埴輪である。

なお後述するが、形象埴輪は円筒埴輪に比して、赤色粒を比較的多く含有する傾向がある。

h. 透かし孔

透かし孔は歪な隅丸方形気味のものもあるが、円形を指向したものである。49~51では、口縁部から $2\cdot3$ 段目に、それぞれ直交して、各段 2 孔対面する位置に穿孔されている。透かし孔の円筒埴輪全体 での穿孔位置には上記のような規則性が存在するが、その絶対的位置に関しては、突帯のヨコナデ調整 部分に透かし孔の一部が切り合うように、各段の中心には位置せず、上ないし下に偏った個体が多くみられる(49~51、86、126、155、156、170、173、181、184、207、214)。その穿孔は製作の最終段階であったと想定できるが、底部調整との前後関係は明らかでない。

また,透かし孔内側には含有鉱物の移動が顕著に認められ,鋭利な工具(鉄製ヘラ状工具か)による 穿孔が考えられる。

i. ヘラ記号

59,237の2点にのみの確認である。共に須恵質系埴輪で,59は口縁部,237は胴部である。全容は不明であるが,ともに右上がりで直線的に印されている。

B), 口縁部・底部の分類と相関関係

a. 口縁部の分類

焼成の差異により、須恵質系埴輪(い・ろ・は類)と土師質埴輪(に・ほ・へ類)に大別し、色調、口縁端部内外面に施されるヨコナデ調整の回数、口縁端部内面にみられるハケ調整の有無等により、それぞれ細分した。

[い類] 口縁部は外反し、端部上端は上方に突出し、下端は下方に垂れ下がる。ヨコナデ調整は、内面上端部と端部を同時にヨコナデし、口縁端部上端をつまみ上げている。外面にはヨコナデ調整を加えないため、端部下端は巻き込むか巻き込み気味に垂下する。内面のハケ調整は、連続的に施されるものではなく、5 cm 前後の長さをもつ左上がりのハケメで、重複関係からヨコナデ調整後に施された最終工程の調整技法であることが窺える。

[ろ類] 口縁部・端部、内面ヨコナデ調整は「い類」に共通するが、内面にハケ調整を有さない。しかし、ハケ調整は連続的に施されるものではなく、57に限った確認でもあり、「い類」に属する可能性は残る。

[は1類] 口縁部は外反するもの(58・60),直立ないし直立気味のもの(59・61)がある。端部は、上端が突出し、下端は丸味を帯びている。ヨコナデ調整は、内面上方と端部を同時にヨコナデし、外面にもヨコナデを加えている。それにより、端部下端は丸味を帯びる結果となる。また、「は1類」を特徴付けるものとして、口縁端部にみられる圧痕の存在が挙げられる。圧痕は幅3mm前後のものと、1mm前後の擦痕状のものがあり、前者は底部底面にみられる圧痕と同じないし酷似したものである。

[は2類] 口縁部は直立気味で、端部は「は1類」と同様である。口縁端部の圧痕の欠如と色調の差異により別枠を設けた。

[は3類] 口縁部・端部は「は2類」と同様である。67のみの確認であるが、焼成・色調に著しい差異がみられ、あえて別枠を設定した。焼成・色調・胎土から157~159、161と同一個体であるといえる。

[に1類] 口縁部は外反気味に立ち上がり、端部付近で短く屈曲する。端部は上端が上方に突出し、下端は巻き込み気味に垂下する。端部形状は「い類」で示したように、ヨコナデ調整とリンクし、外面のヨコナデ調整を欠くことに起因する。また、口縁端部内面には左上がりのハケ調整がみられ、連続せ

ず一定の間隔をあけて施されている。

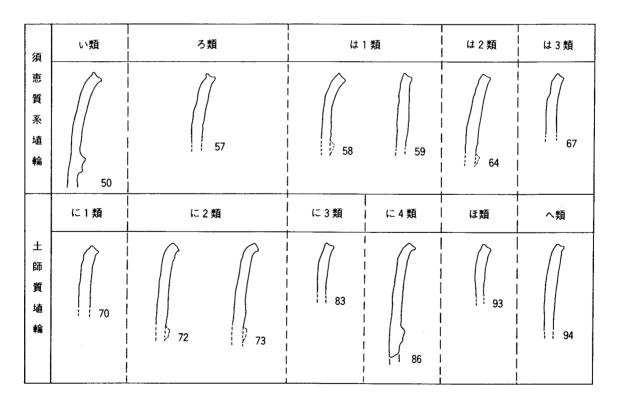
[に2類] 口縁部は外反気味に立ち上がり、端部直前で短く屈曲する。口縁部外面に弱いヨコナデ調整が施されるため、端部下端は垂下せず、横に僅かに拡張されている。一方上端は内面と端部を同時にヨコナデ調整することにより、上方につまみ出している。

「に3類」口縁部・端部は「に1類」に共通するが、内面にハケ調整がみられない。

[に4類] 口縁部は直立気味に立ち上がり、端部付近で短く屈曲する。端部は上端は上方につまみ出し、下端は外面ヨコナデ調整により、丸味を帯びている。86は土師質埴輪中唯一口縁部下に突帯が確認できる個体である。口縁部高は9.2 cm 前後を測り、断続ナデ技法Aによる突帯貼付を示す左上がりの圧痕が突帯上部に確認できる。

[ほ類] 口縁部はやや外反し、端部は上・下端ともに丸味を帯びる。93のみの確認であるが、焼成は須 恵質系埴輪と呼称可能な程良好なものである。端部上端が突出しない口縁部は、4号墳出土円筒埴輪全 体から見れば異質な存在である。

[へ類] 94のみの確認。口縁部は直立し、端部付近で極めて短く屈曲する。端部上端は上方に軽くつまみ出すが、下端は横方向に拡張している。口縁端部外面に口縁端部形状と係わるヨコナデ調整はみられないが、端部下 5 mm の位置に幅 2 mm のミガキ状のヨコナデが施されている。内面には連続しない左上がりのハケ調整が施されている。



第22図 雄山 4 号墳出土円筒埴輪口縁部分類図

	色調		焼成	口縁部内面ヨ	口縁部 内面ハ	口縁部 外面ヨ	口縁端部	口縁部及び端部形状	掲載
	内 面	外面		コナデ 調整	ケ調整	コナデ 調整	圧痕		番号
い類	暗灰黄~ にぶい黄 橙	灰黄褐〜 にぶい黄 橙	硬〜 やや硬	2 回	0	×	×	(大きく)外反 上端:突出,下端:垂れ下がる	49~56
ろ類	にぶい黄 橙	にぶい黄 橙	やや硬	2回	×	弱 い ヨ コナデ	×	外反 上端:突出,下端:垂れ下がる	57
は1類	にぶい褐〜 にぶい赤褐	灰黄褐	硬	2回	×	0	0	(大きく)外反・直口気味 上端:突出,下端:丸味がある	58~63
は2類	明赤褐	にぶい黄 橙	硬	2回	×	0	×	直立気味 上端:突出,下端:丸味がある	64~66
は3類	灰	灰	極めて硬	2回	×	0	×	直立気味 上端:突出,下端:丸味がある	67
に1類	橙	橙	良~ やや軟	2 回	0	×	×	外反気味,端部付近で短く屈曲 上端:突出,下端:垂れ下がる	68~71
に2類	橙	橙	良~ やや軟	2回	×	弱 い ヨ	×	外反気味,端部付近で短く屈曲 上端:突出,下端:丸味がある	72~81
に3類	橙	橙	良~ やや軟	1回	×	×	×	外反,端部付近で短く屈曲 上端:突出,下端:僅かに拡張	82~85
に4類	橙	橙	良〜 やや軟	1回	×	弱 い ヨ コナデ	×	直立気味,端部付近で短く屈曲 上端:突出,下端:丸味がある	86~92
ほ類	橙	灰褐	良	2 回	×	0	×	やや外反,端部付近で短く屈曲 上・下端ともに丸味がある	93
へ 類	橙	橙	良	1回	0	ミガキ 状のヨ コナデ	×	直立,端部付近で極めて短く屈 曲 上端:軽く突出,下端:横に拡張	94

い・ろ・は;須恵質系埴輪、に・ほ・へ;土師質埴輪

第4表 口縁部分類表

b. 無調整突帯の分類

鐘方・安井・中島氏により、従来から確認されている断続ナデ技法は「断続ナデ技法B」と呼称されている (10)(11)。しかし高橋氏は、断続ナデ技法Aの存在から底部最下段の断続ナデ技法は、「特殊な技法というよりも、当該時期において他の突帯にも行われる製作上の工程を最下段に限って途中で打ち切ったにすぎないもの」として「無調整突帯」と呼称している (12)。川西氏 (13)、坂氏 (14) らの学史は否定することはできないが、ここでは高橋氏の指摘通り、無調整突帯として取り扱う。

4号墳出土円筒埴輪のなかで無調整突帯が確認できる個体は総数16点出土しており、須恵質系埴輪に限り確認できる。無調整突帯の貼付法は、下部を一週ナデつけた後、上部をナデつけたものと、下部と上部を交互にナデつけて一週させる場合が想定されているが、4号墳出土のものは、後者である可能性が高く、上下のナデつけ痕跡が対応している。ここでは、内面の調整方法と色調を軸に細分する。

[a類] 内外面ともに灰オリーブ色を呈し、内面調整はタテナデ後、突帯貼付時の指押さえが施されている。胎土に径 2~4 mm 前後の黒色石粒を含み、特徴的な胎土として注目できる。95には不明瞭ながら、底部調整が共伴しており、a類には底部調整が伴う可能性が高い。

[b類]外面が橙色,内面が明褐色を呈し,内面調整はa類と同様である。

[c類] 内外面ともに明赤褐色を呈する。内面調整はタテハケ後, 突帯貼付時の指押さえが施されている。

[d類] 内外面ともに明赤褐色を呈するが、内面調整はタテナデ後、突帯貼付時の指押さえが施されており、c類とは一線を画する。

	色	調	焼 成	内 面 調 整	胎 土	掲載番号	
	外 面	内 面	发 以	四 朗 卷	(特徴的なもののみ)	16 秋田 7	
а	灰オリーブ	灰オリーブ	硬	タテナデ,指押さえ	径 5 mm 前後の黒色石粒	95~100	
b	橙	明褐	硬	タテナデ,指押さえ		101~103	
С	明赤褐	明赤褐	やや硬	タテハケ		104~107	
d	明赤褐	明赤褐	やや硬	タテナデ,指押さえ		108~110	

第5表 無調整突帯分類表

c. 底部分類

須恵質系埴輪(111~125),土師質埴輪(126~149)により大別し、色調・内面調整・胎土・底部調整の有無を分類基準として細分した。なお、この分類には朝顔形埴輪・形象埴輪の底部も含まれる可能性があるが、抽出できなかった。

[A1類] 内外面ともに灰オリーブ色を呈する。内面調整はタテナデ後、ナデないし指押さえが施される。底部調整を伴い、正立状態で上から下、右から左の重複関係があり、外面タテハケ調整と左右重複関係が逆になる点から、倒立させて底部調整を行った可能性が高い。

また、無調整突帯a類の胎土と同じく、径2~4mmの黒色石粒を含む。

[A2類] 外面は橙色、内面は明褐色を呈する。内面調整はタテナデ、横方向のナデ、指押さえが施され、底部調整を伴う。底部調整の重複関係はA1類と同様であるが、115は幅3 cm 前後、長さ5 cm 前後で1段のみの板状工具による押圧ないし強い板ナデ調整である。

[A3類] 内外面ともに明赤褐色を呈する。内面調整はナナメからヨコ方向のナデ,指押さえが施され, 底部調整を伴う。焼成がやや硬であり、ともに遺存状況が悪く、調整の観察に正確性を欠く。

[A 4 類] 119のみの確認。外面は橙色,内面は灰黄褐色を呈する。内面調整には強いタテナデ,指押さえが施され,底部調整を伴う。119は底部調整を有する個体のなかで,唯一最下段の突帯が遺存する。突帯は断続ナデ技法Aによるものと考えられ,突帯分類Ⅳ類に該当する幅狭のM字形突帯である。底部高は13 cm 前後を測り,ほぼ直線的に貼付されている。底部調整は幅 2 ~ 3 cm,長さ 9 cm 前後を 1 単位として右から左に施される。なお,底部径は焼き歪みにより,楕円形を呈するため詳細な数値は不明であるが,20 cm 前後を測る。

[A5類] 120のみの確認であるが、色調の特異性から別枠を設定した。外面は橙色、内面は灰褐色を呈する。内面調整はタテナデ、指押さえが施され、底部調整を有する。また、底面において絞り目状の 亀裂が2箇所みられる。 [B類] 須恵質系埴輪であるが、底部調整を伴わない底部である。外面は灰オリーブ、内面は橙色からにぶい黄色を呈する。内面調整はタテナデ、指押さえ、外面調整はタテハケ後、底部付近のみ指押さえないしヨコ方向のナデが施される。外面にみられるハケメは1 cm あたり9~10条を数え、外面調整の工具と同様のものである。断面形状は、底部調整を有さないため、肥厚している。121と122では断面形状に違いがみられるが、部位による差異と理解し、敢えて細分は行わなかった。

[C 1 類] 土師質埴輪底部の大多数はこの分類に属する。外面はにぶい黄橙色から橙色、内面はにぶい褐色から橙色を呈する。外面調整はタテハケ、底部のみ指押さえ、内面調整はタテナデ、指押さえが施される。B類と同様に底部外面のハケメは1 cm あたり9~10条を数え、胴部のそれと同様である。それに伴い底部は肉厚で、歪みのあるものになっている。126は土師質埴輪のうち最下段の突帯が遺存する唯一の個体で、底部高は16~17 cm を測る。突帯上部に左上がりの擦痕がみられ、断続ナデ技法Aによる突帯貼付が想定できる。

[C2類] 色調はC1類の範疇であるが、内面調整法の相違により別枠を設定した。外面調整はタテハケ、底部のみ指押さえ、内面調整はタテナデ、指押さえを基調とするが、底部付近のみ 3 cm 前後のタテナデが再度施される。重複関係からタテナデ、指押さえ後に施されていることが分かり、これにより底部はC1類の底部に比して肥厚せず、比較的整った断面形を呈している。C1類に分類した個体にも、145に類似した断面形状を呈する個体がみられ(127, 136等)、C2類に属する個体が含まれる。

145、146ともに底部径は21 cm 前後を測る。

[D類] 外面は黄橙色、内面は浅黄橙色を呈する。外面調整はタテハケ、指押さえ、内面調整はタテナデ、横方向のナデ、指押さえが施され、底部調整は確認できない。187の底部径が13.8 cm と著しく小型であり、胎土に含有される赤色粒の割合が高い点から形象埴輪の底部である可能性が高い。

	色 外 面	調 内 面	焼成	底部調 整有無	内 面 調 整	胎 土 (特徴的なもののみ)	掲載番号
A 1 類	灰オリーブ	灰オリーブ	硬	0	タテナデ,ナデ,指押さえ	径 5 mm 前後の 黒色石粒	111~114
A 2 類	橙	明褐	硬	0	タテナデ,横方向のナデ,指押さえ		115, 116
A 3 類	明赤褐	明赤褐	やや硬	0	ナナメ〜ヨコ方向のナデ、指押さえ		117, 118
A 4 類	橙	灰黄褐	硬	0	タテナデ、指押さえ	_	119
A 5 類	橙	灰褐	硬	0	タテナデ、ナデ、指押さえ		120
B類	灰オリーブ	橙~にぶい黄	硬	×	タテナデ、指押さえ	_	121~125
C 1類	にぶい黄橙 ~橙	にぶい褐 ~橙	良~ やや軟	×	タテナデ,指押さえ	_	126~144
C 2 類	にぶい黄橙	にぶい褐	良	×	タテナデ、ナデ、指押さえ	_	145, 146
D類	黄橙	浅黄橙	軟	×	タテナデ,ナデ,指押さえ	赤色粒の含有率 がやや高い	147~149

A·B類;須恵質系埴輪, C·D類;土師質埴輪

第6表 底部分類表

d. 各部分類の相関関係

4号墳出土円筒埴輪は接合関係を持たないため、口縁部から底部までの全容を知り得るものは皆無であった。前項までに突帯、無調整突帯、口縁部、底部を色調・焼成・胎土・特徴的な技法を考慮して、

分類を行った。次にそれぞれの相関関係を検討し、群を設定する。さらに各群を細分し、各属性の相関 関係を検討し、その具体像を検討したい。

焼成・断続ナデ技法A・無調整突帯・底部調整により、出土円筒埴輪の大枠としての群設定を行う。まず、焼成により、須恵質系埴輪(①~③群)と土師質埴輪(④群)に分類した。断続ナデ技法Aは突帯皿・V・VI類を除く、大多数の突帯で確認できるため分類基準にはなり得ないが、その存在の意義から敢えて設定している。無調整突帯は確認した限りでは須恵質系埴輪に限られ、川西氏(15)、坂氏(16)の研究成果が示すように、ある程度限定された地域・時期に出現する技法であり、雄山 4 号墳出土円筒埴輪を考える上で注目できる技法である。底部調整は須恵質系埴輪にのみ確認できるが、須恵質系埴輪のなかでも、これを伴わない個体も存在する。これらの技法の共伴関係を残存率の高い個体等から検討し、群設定を行ったものが第 5 表である。須恵質系埴輪は 3 群、土師質埴輪は 1 群の存在を想定することができた。

以下, ①~④群内における各属性の相関関係 を検討し, 各群の細分を行い, 具体像を抽出し たい。

	焼 成	断続ナデ技法A	無調整突帯	底部調整
①群	須恵質系埴輪	0	0	0
②群	須恵質系埴輪	, 0	×	0
3群	須恵質系埴輪	0	×	×
4群	土師質埴輪	0	×	×

第7表 円筒埴輪群設定

f. 各群の細分と相関関係

第6表に①~④群の細分とその相関関係を要約した。これによると、①群は少なくとも4類型に細分できる。しかし、この細分は色調の差異に重きを置いたため、それぞれが同一個体である可能性が高く、技法等に明瞭な相違がみられることはない。換言すれば、①群の細分は焼成段階の火回りの加減による色調の差異が想定できる。②群は119のみの確認であるが、底部調整と突帯IV類の共伴例の意義を考慮し、設定したものである。①・②群は、底部調整を伴い、板押さえないし強い板ナデの重複関係から、埴輪を倒立させた可能性が高い。それに呼応して口縁端部に作業台上に敷いた禾本科系植物と考えられる圧痕ないし擦痕が確認でき、底部調整と口縁部の圧痕は対応する可能性が高いと想定した。しかし、口縁部分類が示すように圧痕のある口縁部は少数であり、底部調整を施す底部数と合わず、色調・胎土も検討したが、不明であった。そのため、表中には圧痕の確認できる口縁部=「は1類」を底部調整を有する個体のすべてに対応させる結果となった。③群は底部調整を伴わない須恵質系埴輪で、残存率の高い49~51の口縁部・胴部に121・122の底部がつく。内外面調整、断続ナデ技法A、底部調整を行わないといった点で、④群と共通性が認められるが、前述したように突帯貼付の規則性に差異がみられる。④群は底部により、2つに細分したが、口縁部類型との相関関係は不明である。土師質埴輪の突帯のなかで、無調整突帯を有するものは一切確認できず、④群には無調整突帯は伴わないと考えられる。

以上,各群を細分した結果,分類した突帯・口縁部・底部のすべてを取り入れることは不可能であったが,4号墳出土円筒埴輪の主なものは抽出し得たと考える。

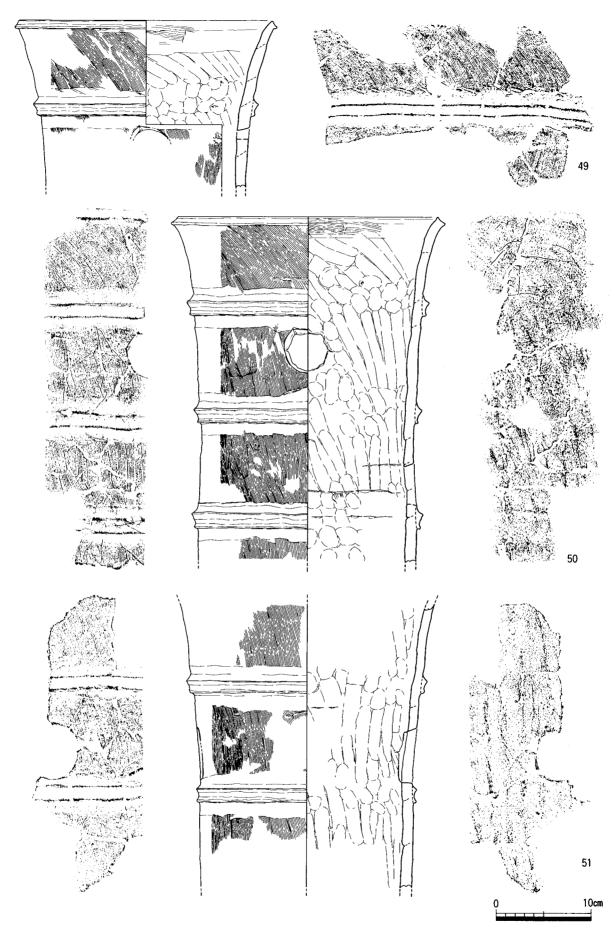
	口縁部	底 部	突 带	無調整突帯	掲 載 番 号
1-1	は1類	A 1類	須・I or II類	a 類	95~100, 111~114
1 2	は1類	A 2 類	須・I or Ⅱ類	b類	101~103, 115, 116
①—3	は1類	A 3 類	須・I or II類	c 類	104~107, 117, 118
1-4	は1類	A 3 類	須・I or Ⅱ類	d 類	108~110, 117, 118
2	は1類	A 4 類	須・IV類	×	119, 170~172
3	い類	B類	須・Ⅰ類(Ⅱ類)	×	49~56, 121~125, 150~167
4 —1		C 1 類	土・Ⅰ類	×	174~212
4 —2	_	C 2 類	土·I類	×	145, 146, 174~212

第8表 円筒埴輪群設定及び相関関係

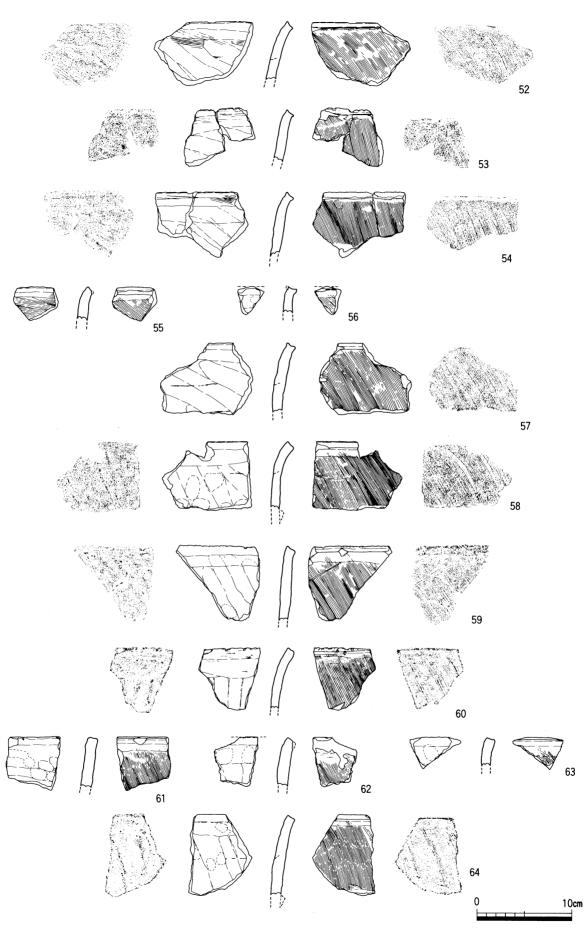
e. 小結

4号墳出土円筒埴輪は外面の2次調整が欠落し、1次調整だけの確認、突出度の低い突帯、底部調整の存在から川西編年V期の所産であることは疑う余地はない⁽¹⁷⁾。さらに、無調整突帯(断続ナデ技法)の存在、外面ハケメの起点が揃わないことなどから、V期後半の年代観を与えることができ、周溝等から出土した須恵器の年代とも齟齬をきたすものではない。

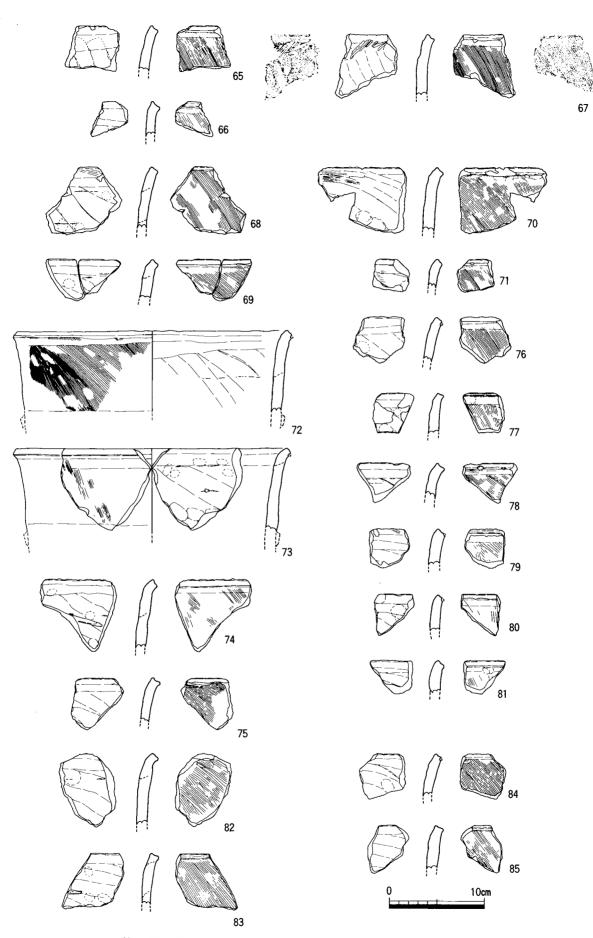
また、出土円筒埴輪を焼成から須恵質系埴輪と土師質埴輪に大別し、技法の有無から須恵質系埴輪を3群に分けた。分類した4群はともに断続ナデ技法Aを伴い、関連性が認められるが、焼成、底部調整・無調整突帯の有無等に差異がみられ、必ずしも同一系譜上にのるものではなく、複数の供給先を想定する必要があろう。



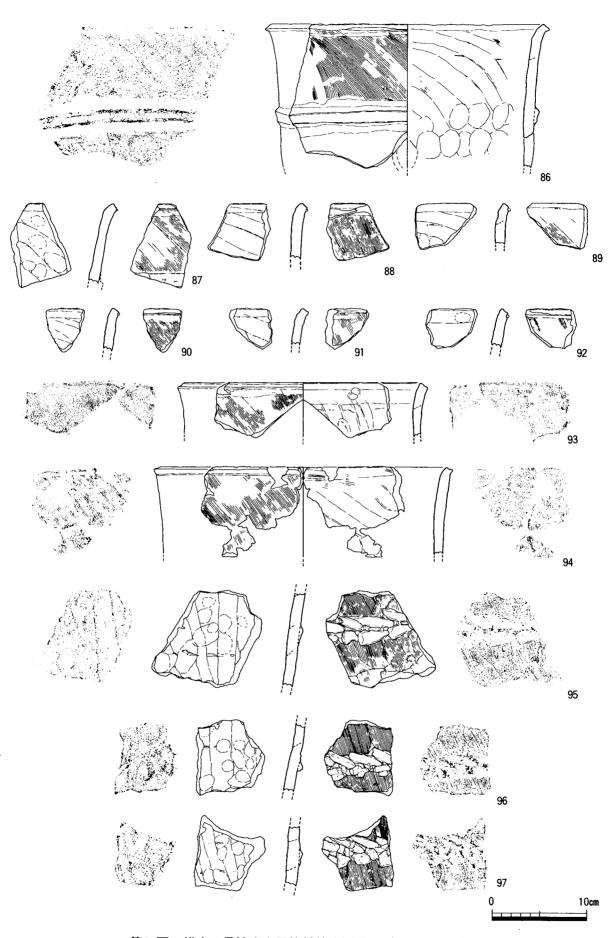
第23図 雄山 4 号墳出土円筒埴輪実測図 1 (S=1/4)



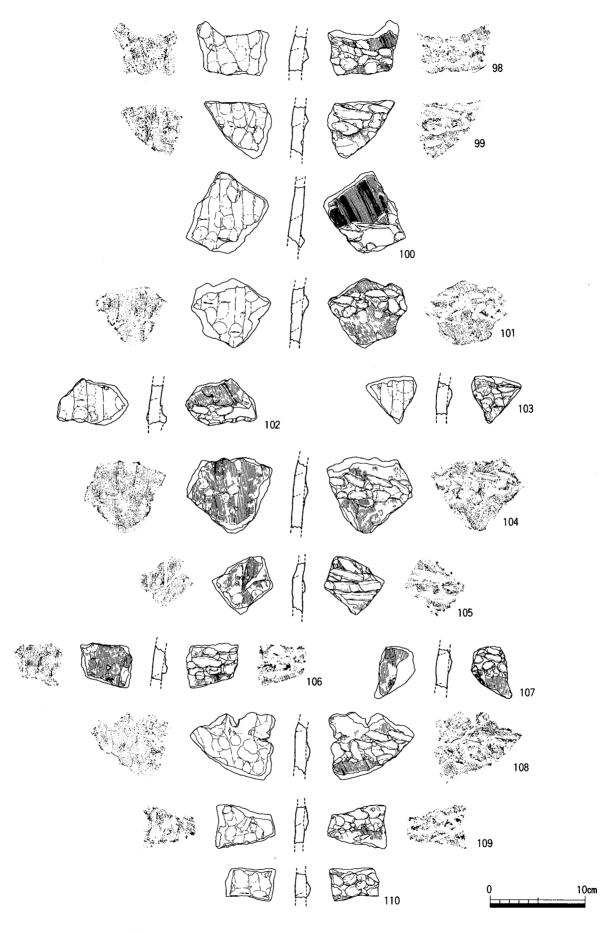
第24図 雄山 4号墳出土円筒埴輪実測図 2 (S=1/4)



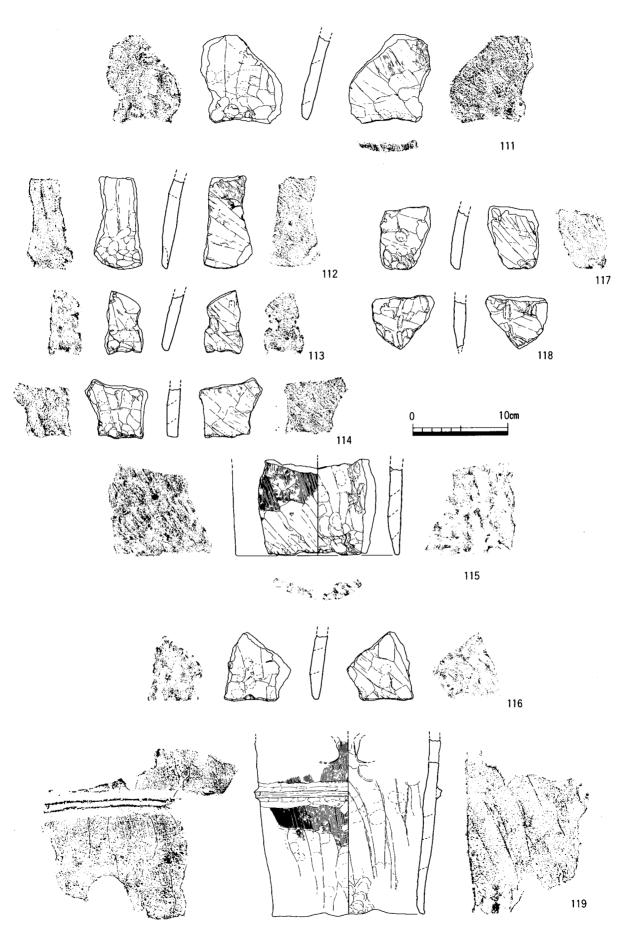
第25図 雄山 4号墳出土円筒埴輪実測図 3 (S=1/4)



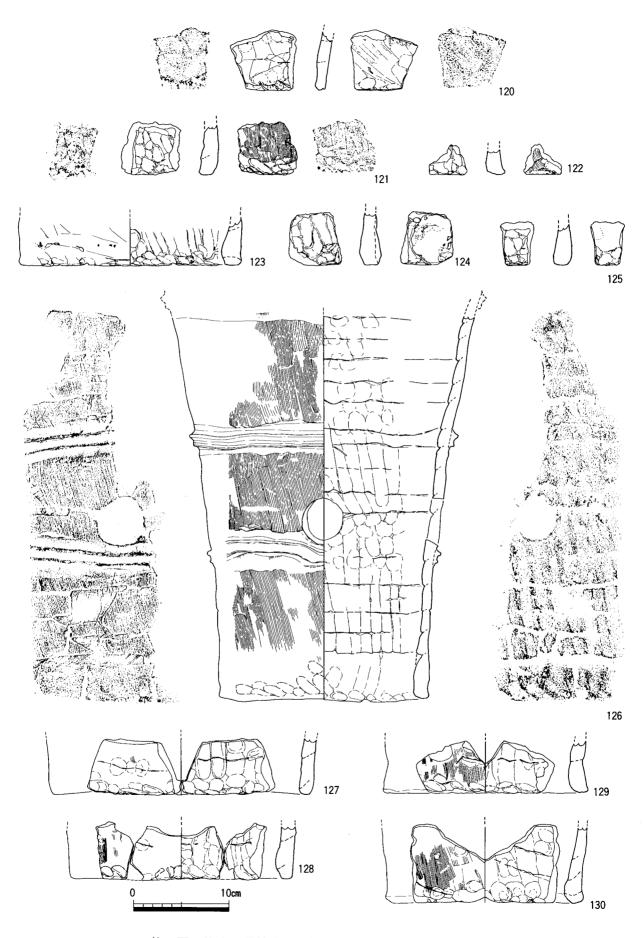
第26図 雄山 4 号墳出土円筒埴輪実測図 4 (S=1/4)



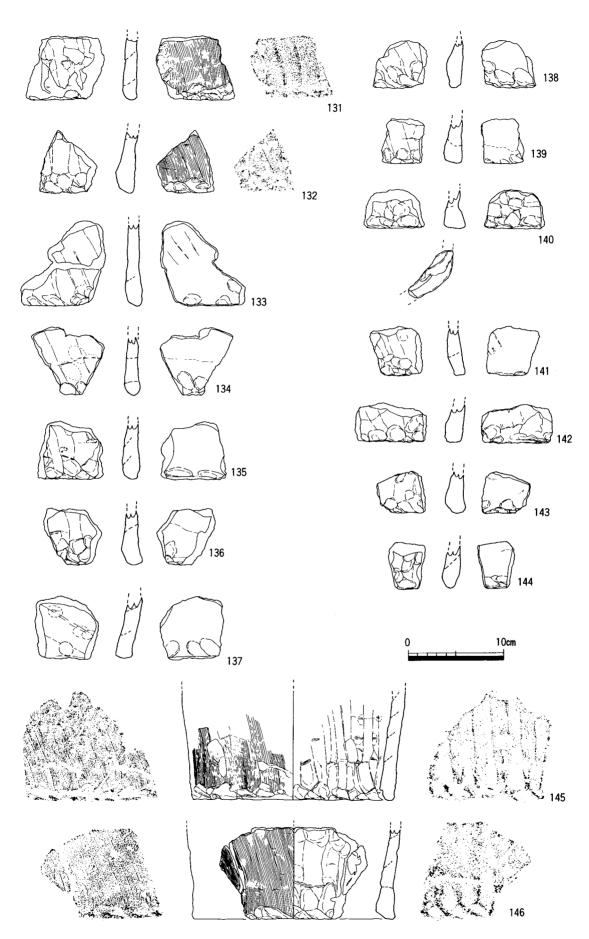
第27図 雄山 4 号墳出土円筒埴輪実測図 5 (S=1/4)



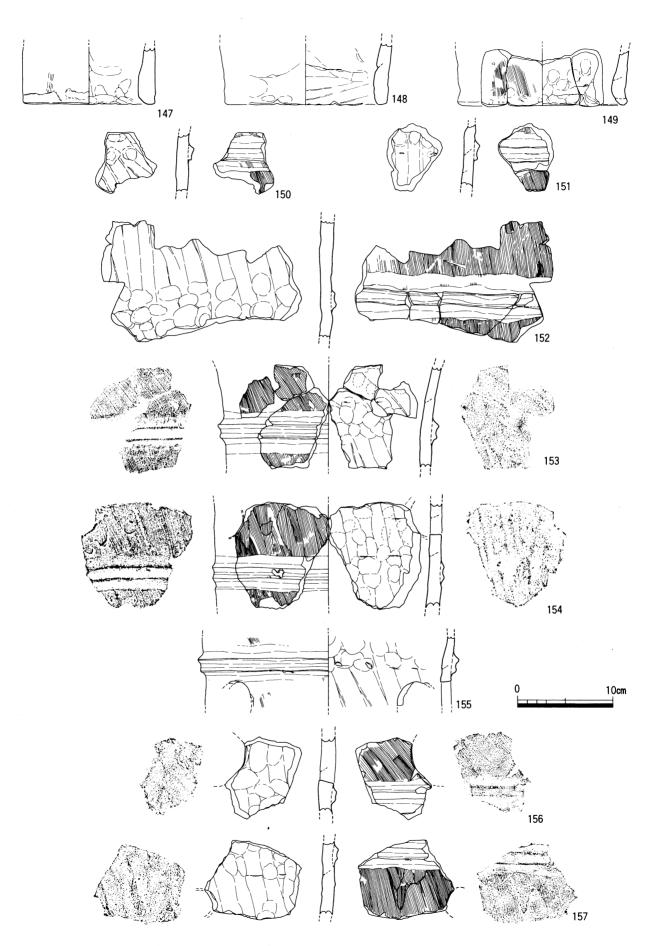
第28図 雄山 4 号墳出土円筒埴輪実測図 6 (S=1/4)



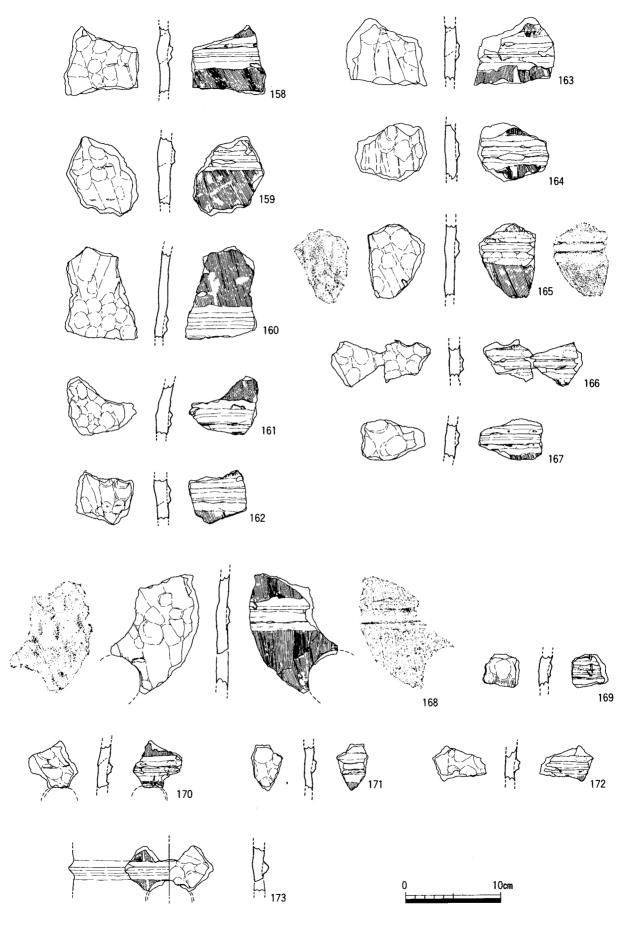
第29図 雄山 4 号墳出土円筒埴輪実測図 7 (S=1/4)



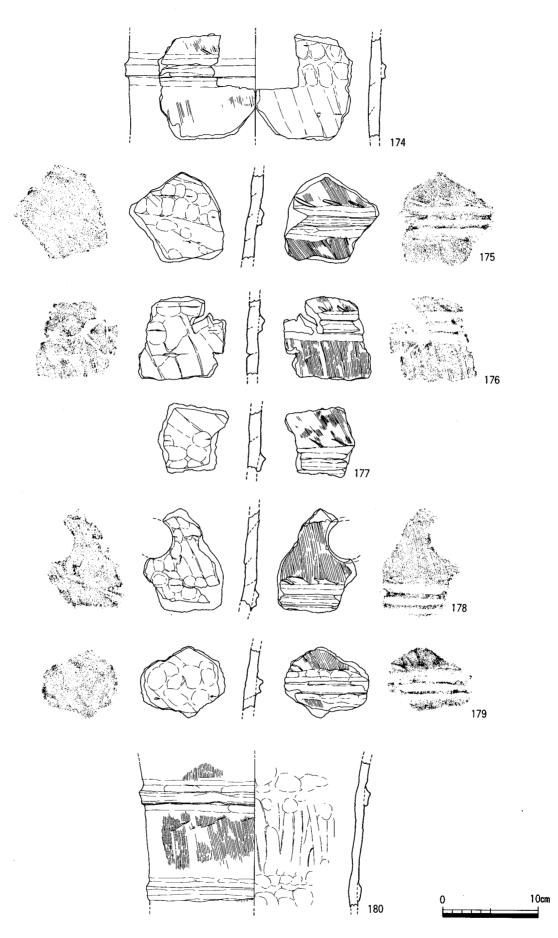
第30図 雄山 4 号墳出土円筒埴輪実測図 8 (S=1/4)



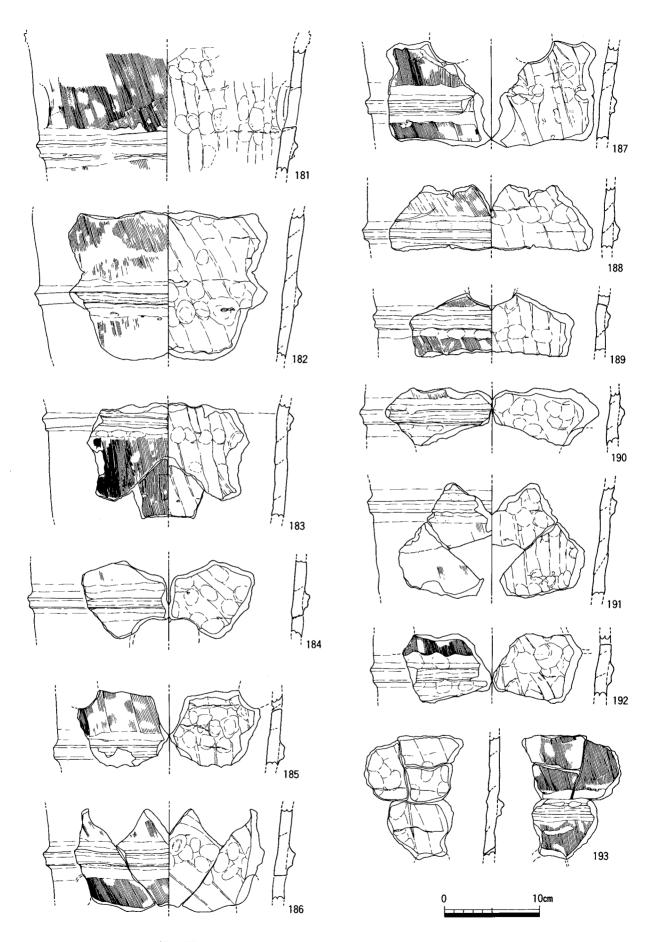
第31図 雄山 4号墳出土円筒埴輪実測図 9 (S=1/4)



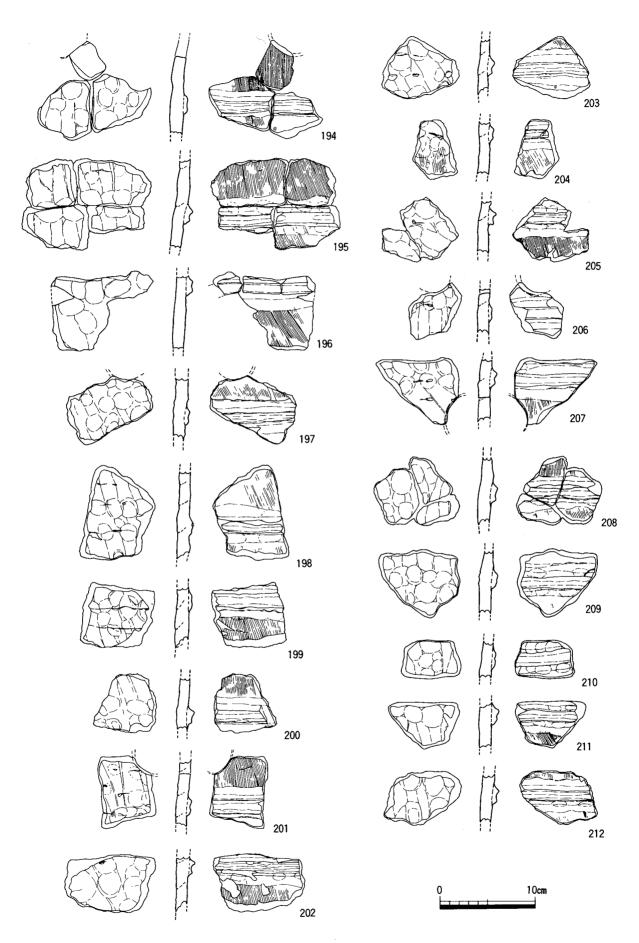
第32図 雄山 4号墳出土円筒埴輪実測図10(S=1/4)



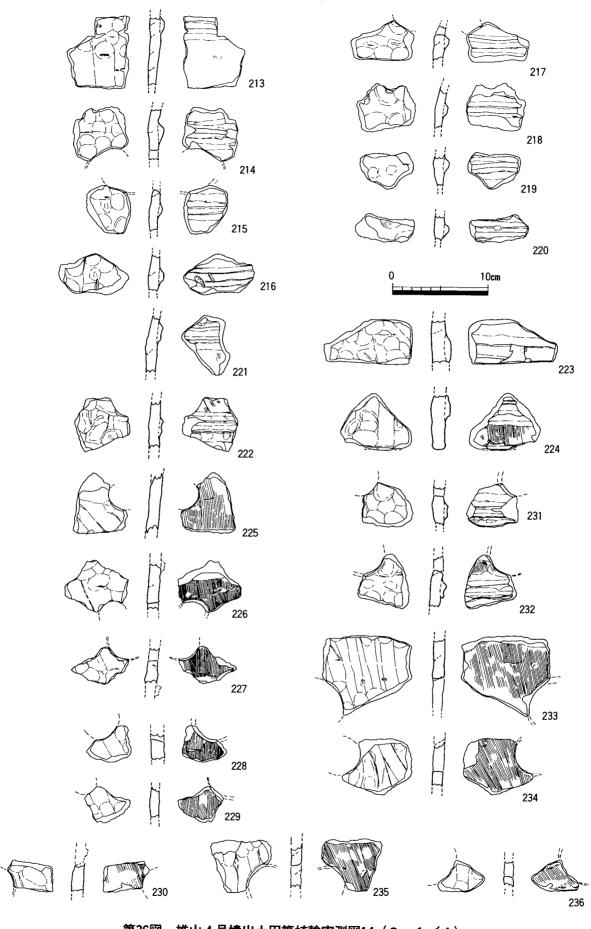
第33図 雄山 4号墳出土円筒埴輪実測図11(S=1/4)



第34図 雄山 4号墳出土円筒埴輪実測図12(S=1/4)



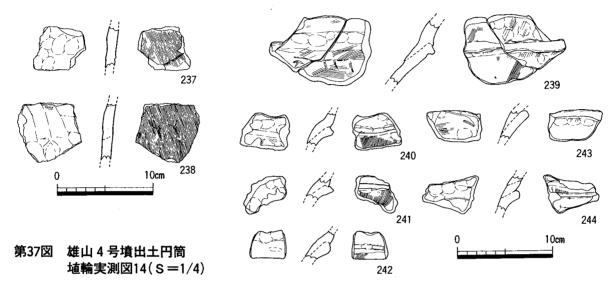
第35図 雄山 4 号墳出土円筒埴輪実測図13(S=1/4)



第36図 雄山 4 号墳出土円筒埴輪実測図14(S=1/4)

朝顔形埴輪(239~244)

朝顔形埴輪と判断できる可能性があるものは、計6個体確認できる。いずれも花弁部で、大きく2段に外反する。外面調整は屈曲点より下半にはタテハケ、上半は指押さえ後、タテハケが施され、内面は屈曲点より下半はヨコハケ、上半は指押さえないし不明瞭ではあるが、ヨコハケが施されている。239、240、242、244は花弁部外面屈曲部分に突帯は貼付されず、別作りである下半の端部を利用して、突帯を創出している可能性が高いが、器壁表面の風化が著しく、突帯が貼付されていた可能性は否定できない。



第38図 雄山 4 号墳出土朝顔形埴輪実測図(S=1/4)

形象埴輪

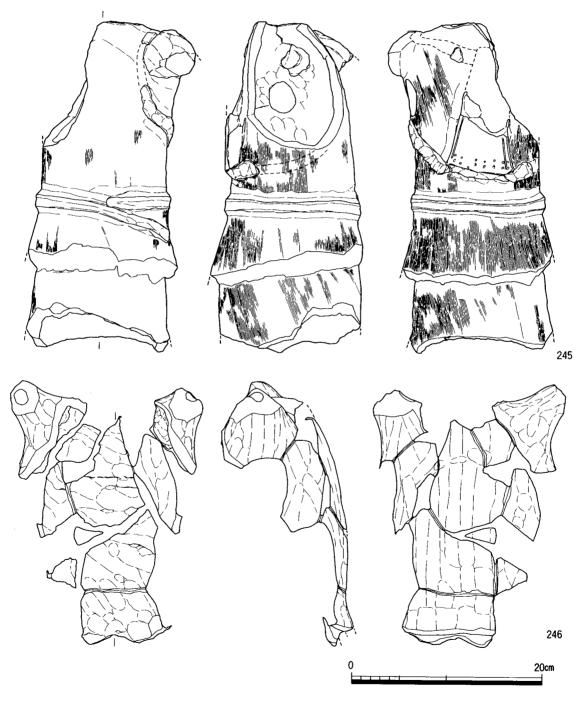
人物埴輪(245~249)

245は頭部、右肩から腕、左腕、台部下半を欠く上半身像で、下半身は両足の表現をせずに円筒形の基部となる。現存高は35 cm を測る。器壁表面の剥落が激しく衣服の表現は不明であるが、調整残存部分にはタテハケが施されている。腰紐はM字形の突帯で表現され、結び目は確認できないが、正面やや左寄りで左側から延びる腰紐を上にし、右側のものは下方に下がる状態で合わさっている。衣服は腰紐を境に緩やかに開く形態である。背面には靫と思われるものがみられ、欅状の紐材により、背中に背負われている。遺存状況の良好な左側ではランドセルを背負うように、粘土紐ないしその剥離痕跡が確認できる。右側は不明であるが、同様のものであったと想定できる。靫は矢筒下半のみ遺存し、上半は剥落しているが、剥離痕跡を考慮すると、右肩に矢筒上端が位置し、右利きであったと想定される。平面形は長台形を呈し、矢筒部下半は裾が広がる。下端部には上下2列の列点が施され、側辺に沿って沈線が1条みられる。列点は底板責金具の鉄鋲を表現したものと推定でき、上下列点間隔は0.6 cm、列点間0.5~1 cm を測る。「奴凧形」の形態をとると想定できるが、剥離痕跡を図示しているように、ほぼ直線的に延び、翼部(飾板)は表現されていない(18)。

製作技法は、基部は幅2.5 cm 前後の粘土紐を上から見て右回りに積み上げ、上半身は幅 4 cm 前後の粘土帯を組み合わせ、丁寧なタテナデないし指押さえを施している。両者は別作りされ、最終的に接合している。仔細に観察すると、胴部は粘土帯を輪積みしているのに対し、肩部において鎖骨に沿ってつなぎ目が残るため、粘土帯を前後から挟み込むように接合したと考えられる。腕は粘土帯接合段階に同時に接合され、補強するために粘土を貼り付けている。また、左脇下に径 3×3.5 cm の透かし孔があ

り、右側は欠損しているが、対照的な位置に穿孔されていたと想定できる。

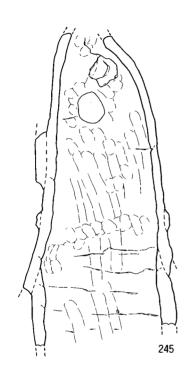
246は両腕を掲げた上半身像で、残存長27.8 cm を測る。残存状況が悪く、全容は不明であるが、裾の拡がる衣服を纏っている。製作技法は245に共通し、上・下半を別作りしている。下半は不明であるが、上半は粘土帯を輪積みないし積み上げており、中空の上腕を粘土帯で挟み込むように接合している。腕の端部が上半身内面より突出し、その形状に歪みがみられない点から腕の乾燥が進んだ段階で接合したものと理解できる。247は人物埴輪顔面側部である。目の穿孔が一部みられ、側部には美豆良髪が逆し字形の突帯で表現されている。側頭部断面が外反気味である点から、頭髪を上で束ねていた可能性もある。248は人物埴輪の腕部である。245・246の腕と異なり、粘土塊を厚さ0.5 cm 程度の粘土板でくる



第39図 雄山 4 号墳出土人物埴輪実測図 1 (S=1/4)

んでおり、製作技術の差異がみられる。外面は強いナデ調整により、多面形を呈する。249は上半身像の基部から衣服裾部である。基部と衣服は別作りで、基部を内側にして接合する。衣服裾部は緩やかに広がり、幅0.6 cm 前後の突帯をV字形に貼付しており、衣服の飾りないし文様表現と考えられる。 馬形埴輪(250~252)

250は下顎部分である。前面は内側に内傾させ、緩やかな面を持つ。幅1.5 cm 前後の粘土紐により製作しているが、内面には顕著な指押さえ、ナデ調整がみられる。上顎と下顎を区切る切り込みや鏡板が確認できない点から馬形埴輪とするには検討の余地がある。251はたて髪である。緩やかな弧を描く板





第40図 雄山 4 号墳出土埴輪実測図 2 (S=1/4)

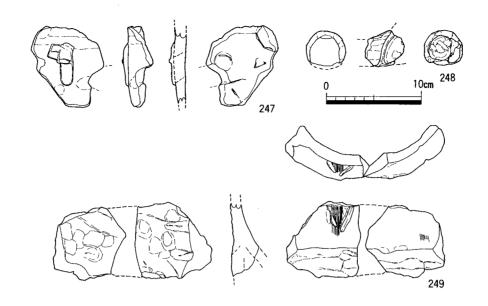
状のものである。たて髪の両側面には幅1.5 cm 前後の丸味を有する突帯により、手綱が表現されている。252は障泥と輪鐙である。尻部と杏葉の可能性も想定したが、直線的な断面形状を示すため、障泥と輪鐙と判断した。輪鐙は幅1.5 cm 前後の丸味のある突帯で表現されている。251と252は胎土・色調・焼成が酷似し、同一個体と考えられ、手綱・障泥・輪鐙の存在から飾り馬であると思われる。

器財形埴輪(253~258)

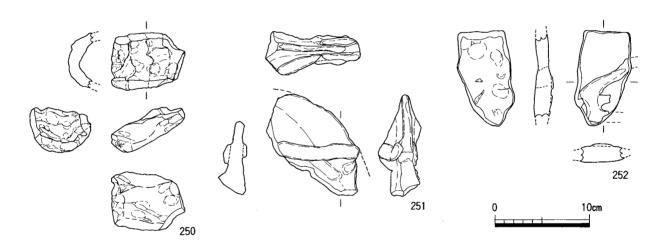
253~256は線刻を有するもので、254のみ1.6 cm の器壁厚は測るが、他は1.2 cm 前後である。細片によりその意匠は不明であるが、253~255は平行沈線、253、254では鋸歯文が線刻されている。盾形埴輪ないし蓋形埴輪立ち飾り部と思われるが、当該時期の蓋形埴輪は立ち飾り部の形状が不明瞭であり、即断することはできない。いずれも胎土・色調・焼成が酷似しており、同一個体と考えられる。

257・258は蓋形埴輪の笠部から台部である。人物埴輪衣服 裾部の可能性も想定したが、笠部が直線的に大きく開くため、 蓋形埴輪と判断した。笠部下半は風化により、沈線は確認で きない。笠縁部と台部の角度は70°前後を測る。笠縁の接合 方法は、下半が欠損し全容は不明だが、台部と笠部の接合箇 所のやや上からかぶせるように貼付したものと想定できる(19)。 不明形象埴輪(259~270)

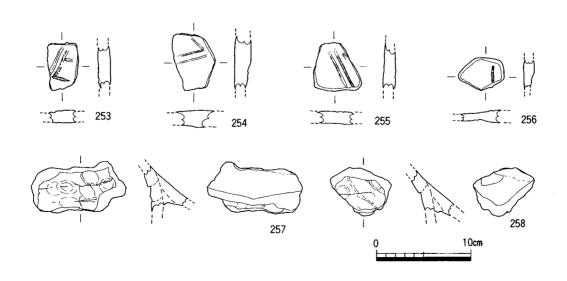
259は2孔の穿孔を有する。傾きが不明であったので、中央の孔に合わせ設定した。孔はともに完存しないが、推定径は2 cm 前後を測る。外面はタテハケ調整、内面はナデないし指押さえが施されている。焼成は他の形象埴輪に比して良好である。260・261は、厚さ1.2 cm を測り、残存部外面下半には幅1 cm 前後の平行沈線が、上半には沈線による斜格子文が施されている。内面は粘土紐(帯)つなぎ目の指押さえが顕著に残る。傾き等はその痕跡から上下を決定し、外面平行沈線を平行にして設定した。262は厚さ1 cm 前後の器



第41図 雄山 4 号墳出土人物埴輪実測図 3 (S=1/4)

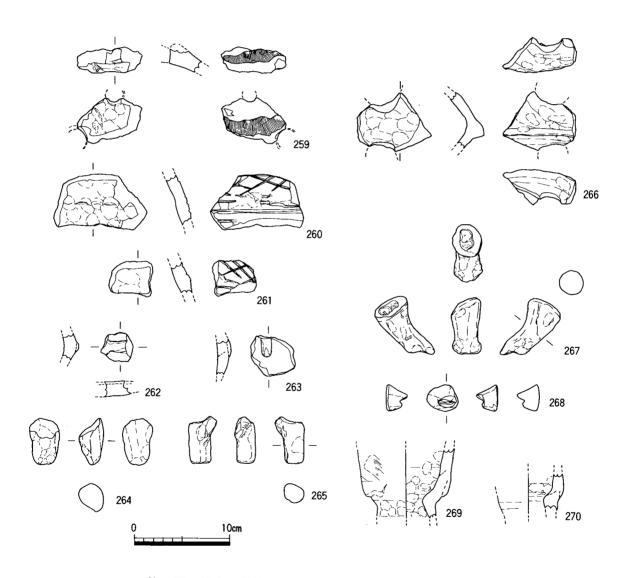


第42図 雄山 4号墳出土馬形埴輪実測図(S=1/4)



第43図 雄山 4号墳出土器財形埴輪実測図(S=1/4)

壁で、幅1 cmの丸味のある突帯を有する。小破片であるため不明であるが、突帯は図面上左側で広がっている。263は厚さ1 cm 前後の器壁に1 cmの丸味のある突帯が貼付されている。他の形象埴輪に比して、胎土中の石英・長石の含有率が高い。264・265は人物埴輪の腕の一部であると思われるが、詳細は不明である。266は突帯状に突出した箇所で屈曲し、双方に推定径4 cmの円孔がみられる。頂部とも想定できるが、突出部を境に傾きが異なるため、横向きに設定した。267は動物形埴輪の脚部の可能性が高い。先端は指ないし蹄の表現がなされ、底面は浅く窪む。基部は粘土塊を厚さ1 cm 前後の粘土帯でくるんでいる。現存基部が剥離したままの状態であれば、その角度から左脚部であると想定できる。268は先端部に切り込みをもち、動物形埴輪の口の可能性が高いが、残存状況が悪く詳細は不明である。269・270は馬形埴輪の脚部と思われる。ともに現存底面から2 cm 前後の位置で径を絞り込んでおり、269では上部から下方へ粘土をナデ付ける様子が窺える。底面まで残存していないが、出土遺物による限りでは蹄の表現はなされず、抽象的な脚部といえる。



第44回 雄山 4号墳出土不明形象埴輪実測図 (S=1/4)

須恵器 (271~334)

蓋坏 (271~279, 286~290)

坏身(280~285, 291~293)

周溝からの出土が大半である。全体的には器形・法量・端部形態にまとまりはみられない。ロクロの 回転方向は左回りが右回転を凌駕する。

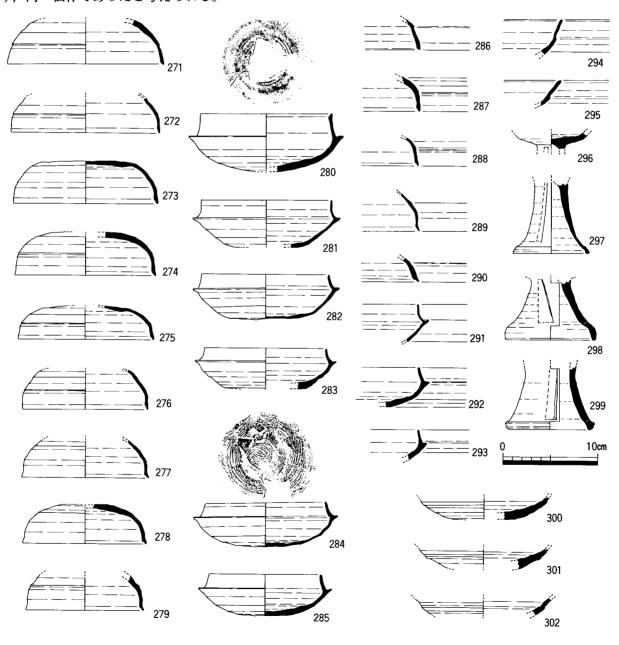
271は口径16.3 cm を測る。器高は不明であるが、器高の高い形態を呈すると考えられる。天井部と口縁部の境には下方に押し潰された感のあるにぶい稜がみられ、口縁部は内湾気味に外方に開く。端部は内傾し、段を有する。272は口径15.4 cm を測り、口縁部と天井部の境に凹線を有する。口縁部は垂直に下り、端部は内傾し、浅い段を有する。器高の高い形態で、凹線やや上部に強い回転ナデ調整が施されることにより、器形に変化が生じている。273・274は口径15 cm 弱、器高4.5 cm 前後を測り、広い天井部をもつ点で共通する。273は口縁部と天井部の境に凹線とかすかに突出した稜を有し、274は浅い凹線がめぐる。口縁部はやや外方向に開き、端部は内傾する。275は口径14.7 cm 前後、器高3.6 cm 前後を測る。天井部に広い平坦面を有し、器高は著しく低い。口縁部と天井部の境には凹線を有し、口縁部は短くやや外方向に垂下する。端部は内傾し、段を有する。内面中央周縁には"シッタ"に転用された当て具の同心円文スタンプ文が顕著に施される(型)。276・279は口径13 cm 前後を測り、器高の高い形態を呈する。口縁部と天井部の境にはごくかすかに突出した稜と凹線がめぐる。口縁部は内湾気味に垂下し、端部は外方向に広がる。277は口径12.9 cm、器高4.1 cm を測る。口縁部と天井部の境は不明瞭で、丸味を帯びている。端部は内傾し、浅い段を有する。278は高い器高を有し、端部が外反するため、279と近似するが、口径が11.3 cm と小型で、明瞭突出する稜を有する。276~278は器形から短頸壷の蓋になる可能性が高い。279は高坏の可能性が残る。

286~290は図上での復元は不可能であったが、端部・稜の判然としたものを図化した。286は口縁部と天井部の境に明瞭な稜を有しており、やや異質な存在である。高坏になる可能性も残る。287は全体的に器厚が厚い。口縁部はわずかに外反し、端部に段を有する。天井部との境いは顕著な凹線がみられる。288は直線的に外反する口縁部を有し、天井部との境に稜を有する。焼成が堅緻で混入の可能性が高い。289は天井の高い一群に属する。290は肉厚の口縁部で、天井部との境に凹線を有する。

蓋坏と同じく、器形・法量・端部形態にばらつきがみられる。ロクロ回転方向は左回りが多い。280は口径13.7 cm,器高6.1 cm前後を測る。口縁部は内傾して立ちあがり、端部に沈線をもつ。底部は丸味を有し、内面中央に同心円文スタンプ文が施される。281・282は口径13.5 cm前後、器高5 cm前後を測り、底部に平坦面を有する。口縁端部はともに丸く収めるが、口縁部長は281がやや長く、内傾した後、垂直に立ちあがる。282は短く内傾する口縁部を有し、内面中央周縁に同心円文スタンプ文が施される。底部の厚みが1.5mm前後と極めて薄いものである。283は平坦な底部、短く内傾し丸く収める口縁部を有するが、口径がやや小さい。284は底部に平坦面を持たないが、282と共通点が多い。口縁部は短く内傾して立ちあがり、端部は丸く収める。内面には径7 cm前後の広範囲で同心円文スタンプ文が施される。285は口径11.7 cm、器高4.3 cmを測り、丸味のある底部を有する。口縁部は内傾し、端部は丸く収める。291~293は小破片であるが、参考のために図化した。291は281に酷似する。口縁部長が長く、内傾した後直線状に立ち上がる。端部は丸く収める。292は直線状に内傾する口縁部を有し、端部は丸味を帯びている。293は短い口縁部を有し、端部は丸く仕上げられる。受け部は短く突出し、口縁部との境に顕著な沈線がみられる。

高坏 (294~302)

294・295は口縁部で外方向に開き、端部は丸く収める。底部との境に明瞭な段がめぐる。胎土・焼成も酷似しており、同一個体と考えられる。296は底部である。脚部の残存率は悪いが、三方透かしに復元できる。底部内面は6 cm 前後の平坦面を有する。内面には自然釉が降灰している。297は高坏脚部である。裾端部上方には鋭い稜がめぐり、底面は幅4 mm の水平面をもつ。脚部高は7 cm 強を測り、長脚1段の方形三方透かしに復元することができる。298・299は高坏脚部である。ともに短い脚部で1段方形透かしに復元できる。298は脚端部が緩やかな段状を呈し、丸く収められる。299は図面上で復元すると、四方透かしになるが、詳細は不明である。脚端部には1条の凹線がめぐる。300~302は高坏底部付近と考えられるが、詳細は不明である。2条の凹線が施され、その間は0.8 cm の帯状に突出する。外面には自然釉が薄く施されている。接合関係は持たないが、器形・胎土・焼成がそれぞれ酷似しており、同一個体であったと考えられる。



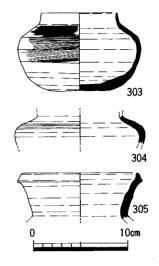
第45図 雄山 4号墳出土須恵器実測図1 (S=1/4)

壷 (303~305)

303・304は短頸壷である。肩部がやや張る形態で、303は肩部から胴部上 半、304は肩部に限りカキ目が施される。303は口径7.9 cm、器高8.2 cm を 測り、口縁部は内傾し、端部は鋭いが丸く収める。底部には広い平坦面を有 し安定した側面形となる。305は小型直口壷の口頸部である。緩やかに外湾 し端部は内側に折り返し、端面を有する。端面上端は上方につまみ上げ、側 面には浅い回転ナデが加えられる。

甕 (306~332)

周溝、墳丘上及びその周辺から出土したもので、混入の恐れはあるが、4 号墳に伴う遺物と考えられる。口径により大きく21 cm 以下と25 cm 前後に 分けられる。口縁部細片であるため厳密な口径復元であるとは言えないが、



前者を小甕,後者を中甕とみなす。胴部破片も数多く出土しているが,接合 第46図 雄山 4 号墳出土須恵器 できず、容量は不明である。306~325はいずれも口頸部で、端部形状は多様 である。以下、口縁部形態に応じて、それぞれ説明する。

実測図 2(S=1/4)

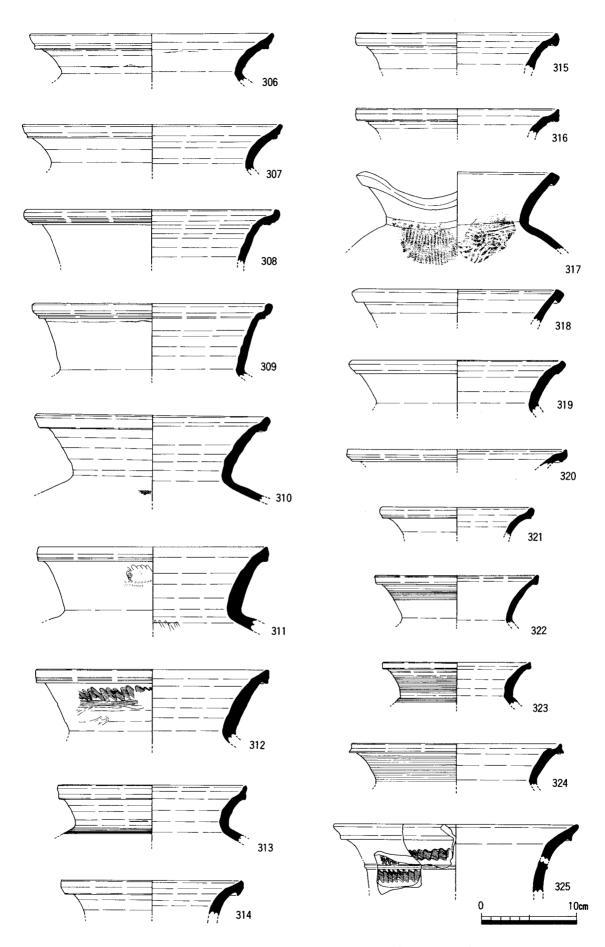
306・307は口頸部は短く外反し、端部手前で大きく開く。口縁端部は上方につまみ上げ、外面下端に 比較的鋭い凸帯を1条施す。共に焼成、胎土等が酷似しており、同一個体であると考えられる。325は 接合関係はないが、器形、胎土、焼成、文様から同一個体と考えられるため、図上で復元した。口頸部 は緩やかに開き気味に立ち上がり,端部手前で大きく外反する。端部は丸みを持ち,外面下端に1条の 凸帯がみられる。頸部外面は1条の凸帯により文様帯が上下に区切られ、それぞれに波状文を施してい る。306に比して、口頸部長が長い。

308・309は口頸部が直口気味に開き、端部付近で強く折れ、さらに上方につまみ上げている。308は 端部外面に2条の凹線を施す。309は口頸部長が7.5 cm を測り、端部外面下端に凸帯が1条みられる。

310・321・322は外反する口頸部の端部を上方につまみ上げ、丸味を持つ。端部は外端面を有し、強 い回転ナデ調整により、凹面を形成している。端部内面にも強い回転ナデ調整が施される。310は口頸 部長が 7 cm を測り,胴部は平行叩き調整の後,カキ目が施される。321・322は小甕で,322は頸部外面 にカキ目を施す。

311~316・320は口頸部の立ち上がり、長さに差異はみられるが、端部を上下に拡張し、端面にそれ ぞれ面を有する点で共通する。311・312は同一個体と考えられ、緩やかに外反する口頸部に上下に拡張 され,面をもつ端部を有する。端面下端には凹線を施す。頸部外面中央に粗い凹線を配し,文様帯を上 下に分け、上部のみ粗い波状文が描かれる。311は口頸部内外面とも、自然釉が全面に降灰しており、 波状文がかすかに分かる程度であるが、312には降灰は認められず、明瞭に波状文が識別できる。313は 短く外反する口頸部に上下に拡張された端部をもつ。端部は中央に凹線がみられ,上方に強く,鋭く拡 張しており、下方への拡張も稜をなす程度に鋭い。314は短く外反する口頸部に上下にシャープに拡張 された端部がつく。315・316は同一個体の可能性があり、短く外反し、端部付近で強く開く口頸部に、 上下に拡張された端部を有する。端部下端は丸味をもつが、上端は比較的シャープである。端部外面下 方には深い凹線を施す。320は上下に鋭く拡張された端部外面に明瞭な稜を有する。

同一個体と考えられる317・318は上端部に水平面をもち、内方へごくわずかに拡張し、外端面は折り 込むように垂下させる。317は斜め外方に開く口頸部に水平面を有し、内方へわずかに拡張し、下端に



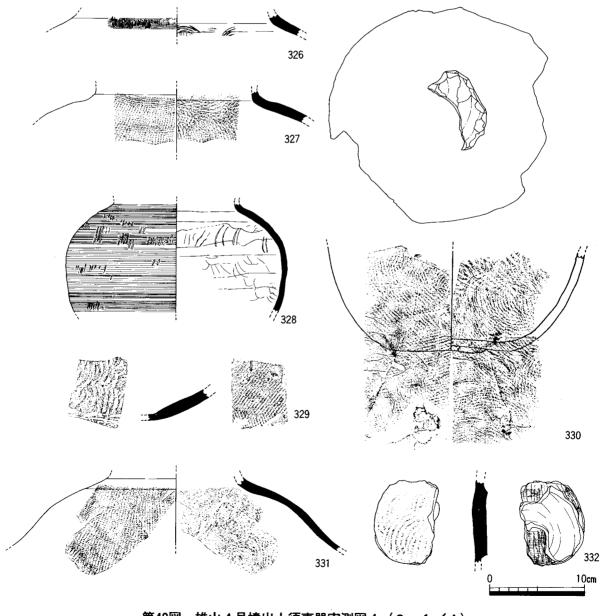
第47図 雄山 4 号墳出土須惠器実測図 3 (S=1/4)

折り込むように垂下する端部がつく。焼き歪みが激しく、口縁部は波打っている。

319は短く外反する口頸部に、水平面をもつ端部がつく。端部は折り込むというよりは削り出しによって、方形にし、端部は内方へわずかに拡張する。

322・323は短く外反する口頸部に、上下に拡張し、端面に凹面を有する端部がつく。頸部外面にはカキ目を施す。

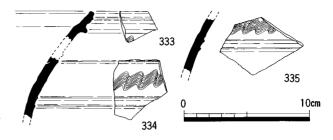
326~332は甕胴部,底部である。326は甕肩部で,外面は平行叩き調整後,ヨコハケないしカキ目を施す。胎土・焼成より,319と同一個体である可能性が高い。327は甕肩部で,外面は平行叩き調整後,カキ目を施し,内面には当て具痕が密にみられる。238は甕胴部で,外面は平行叩き調整後,入念なカキ目が全面に施され,叩きは痕跡を留めない。内面は当て具痕を丁寧にナデ消している。329は甕底部と思われ,顕著な粘土紐つなぎ目が残る。外面の叩き調整がこのつなぎ目で変化する。330は甕底部である。底面は窪み,焼台に転用された坏が付着している。331は甕肩部である。焼き歪みにより,胴部が球体とならない。332は甕底部と考えられ,330と同じく焼台に転用された坏が付着している。



第48図 雄山 4 号墳出土須恵器実測図 4 (S=1/4)

その他 (333~335)

333~335は直口壷の口縁部で、接合関係はないが、同一個体であると考えられる。口縁部は緩やかに外反して立ち上がり、端部は丸く仕上げる。端部下には2条の凸帯を施す。頸部は鋭い2条1組の凸帯により、文様帯を創出し、それぞれに波状文が描かれる。器形に加え、焼成



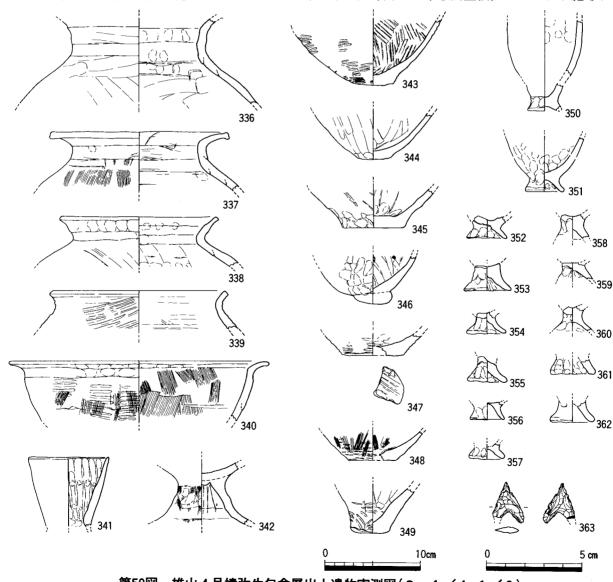
第49図 雄山 4号墳出土須恵器実測図 5(S=1/3)

が極めて堅緻で、波状文も流麗である点等から、やや異質な存在である。周辺から転落した混入遺物と思われ、陶邑古窯址群田辺編年のON46型式期⁽²¹⁾に属すると考えられる。

(5) その他・遺構

古墳築造以前の包含層

いずれも第7図48層から出土した遺物で、弥生土器である。336・337は壷である。338・339は甕で、339は1日縁部外面まで叩き調整が施されている。340は鉢である。外面には叩き調整後、タテハケが施され



第50図 雄山 4号墳弥生包含層出土遺物実測図(S=1/4,1/2)

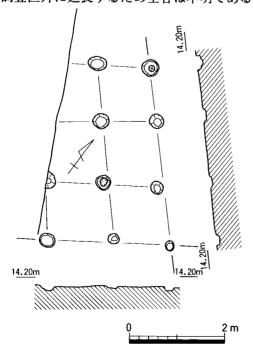
ている。341は長頸壷で,下川津B類土器である。342は高坏脚柱部である。343~349は甕ないし鉢の底部である。343は外面には顕著な叩き調整,内面には粗いハケメが螺旋状に施されている。347に底面には外面と同じ原体を用いたと考えられる叩きがみられる。349は底部が強く突出しているが,平底で穿孔はない。350~362は台付鉢形製塩土器である。図下可能なものは細々片まで抽出した。外面調整は摩滅により不明であるが,内面指押さえが認められる。351が示すように,脚上部から大きく開いて立ち上がる形態から大久保編年IV a 式⁽²²⁾に相当する。雄山北東の東山裾部に所在する高屋遺跡⁽²³⁾は,標高は2.5mを測り,製塩遺跡に関連する鹹水の貯水槽の可能性がある土坑を検出している。製塩土器の形態も近似しており,その関連が指摘できる。363は凹基式石鏃である。抉りの深いものである。336~361はいずれも弥生時代後期に属する。

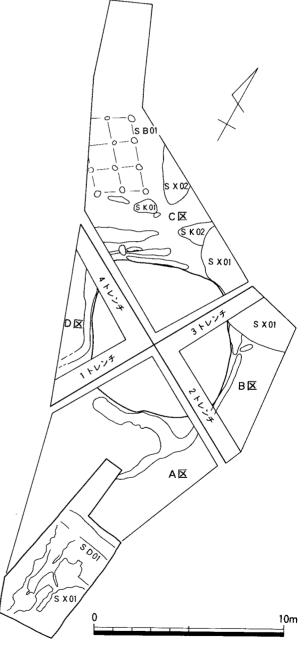
近世遺構群

第7図土層番号59を除去した段階で検出した遺構群である。旧地形の大規模な削平を実施し、さらに窪地には土を寄せ集めて整地を行って遺構面を形成しており、これが現地形の母胎といえる。前述したように、この地形改変により5・7号墳上部は失われているが4号墳は墳丘の一部に削平を受けたのみに留まっている。遺構は4号墳北側を中心に総柱建物跡、柱穴、土坑、溝状遺構を検出し、一部南側斜面地にも確認できる。

C区SB01 (第51図)

調査区外に延長するため全容は不明であるが、



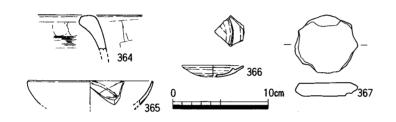


第51図 雄山4号墳C区SB01平・断面図(S=1/80) 第52図 雄山4号墳遺構配置図 (S=1/200)

南北主軸と仮定すれば、桁行 3 間 (3.8m)、梁間 2 間 (2.6m) 以上の総柱建物跡である。主軸方位は、N43°Wであるが、平面形に歪みがみられる。柱穴掘方は径0.2~0.4mの楕円形を呈し、残存深は総じて0.1m前後と極めて浅く、上面は顕著な削平を受けているようである。遺物は土師質土器細片が少量出土したのみであるが、柱穴埋土が暗灰色ないし灰色系混砂粘質土であり、周辺遺構の上層埋土と近似し、18世紀を大きく下らない時期の所産と考えられる。

C区SK02(第53·54図)

C区西で検出した土坑で、SX01と重複関係を持つ。平面形は 長楕円形を呈し、深さは0.3m前後を測る。埋土は2層に細別でき、 下層に粗い砂を含む暗褐色混砂粘質土、上層に灰色粘質土が堆積 していた。遺物は底面を中心に土師質土器・磁器等が出土してい る。364は風炉ないし火鉢である。内湾気味に立ち上がる縁部を 端部で内方に折り返している。365は磁器染付碗である。366は灯 明受皿である。ごく少量の煤が表面に付着している。367は平瓦 を転用した円盤形土製品である。ほぼ円形になるように縁辺部を 打ち欠いている。出土遺物から18世紀以降のものと想定できる。



13.70m 3 1. 灰色 (Hue5 Y 5/1) 粘質土 2. 暗褐色 (Hue10 Y R 3/3) 混砂粘質土 粗い砂粒を多く含む 3. 暗灰黄色 (Hue2.5Y 5/2) 混砂粘質土 黄橙色粘土ブロックを含む

第54図 雄山 4 号墳 C 区 S K 02出土遺物実測図 (S=1/4) A 区 S D 01, S X 01 (第55図・56図)

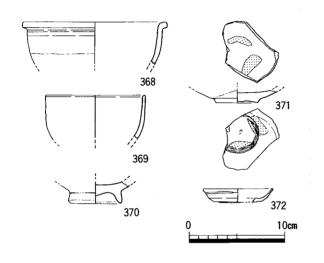
第53図 雄山 4 号墳 C 区 S K 02 平・断面図(S=1/40)

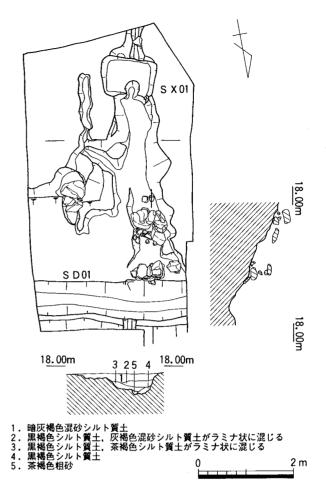
A区で検出した溝状遺構とそれに伴う不明遺構である。SD01は斜面部と平坦地の傾斜変換点に沿って、開削された溝である。幅0.8m前後、深さ0.3m前後を測り、断面形は皿状ないし逆台形状を呈する。埋土は暗灰色系シルト質土を中心として、4層に細別できる。第7図の26・27が堆積した後、溝幅を広げるように再掘削され、最終埋没段階で24層が堆積したと考えられる。

S X 01は斜面部に開削された遺構で、その北端は S D 01に接する。平面形は南端では溝状の掘方を保つが、斜面下方に下るにつれ、不整形な掘方に変わる。しかし、溝状掘方は S D 01上方まで認められ、北端付近の掘方内には石組みが構築されている。断面形は西側では逆台形状であるが、東側は浅い皿状を呈する。埋土は黒褐色系シルト質土と茶褐色粗砂からなり、5 層に細別できる。2・3 層ではラミナ状堆積、5 層には粗砂がそれぞれ認められ、ともに流水の痕跡を示している。石組みは、溝を堰き止めるように上方・下方の2 列で積まれており、拳大から30 cm 前後の安山岩塊石を現状では3~4 段積み重ねている。下方石組みは S D 01 の南肩に接している。

S D01は予備調査結果を踏まえると、周辺の傾斜変換点に同様の溝が確認でき、地形改変後の排水用水路と考えられる。S X01はその検出状況から S D01に伴う施設と判断でき、流水の想定される埋土やその位置関係から、落ち水を集水し、S D01に流下させる施設である可能性が高い。また、石組みの性格は不詳であるが、S D01に流下する水を 2 重に渡り濾過する施設の可能性が想定できる。

368は陶器鉢である。口縁端部は外方に強く折り曲げる。端部口縁部内外面には鉄釉が塗布されている。369・370は磁器碗である。370は内傾する高めの高台を有する。371は陶器高台付碗である。見込みに砂目積痕をみる。高台部には目砂が付着している。高台底面縁辺部には糸切り痕跡が認められ、中央付近は上げ底状に削り取られている。372は土師質土器小皿細片である。底部はヘラ切りである。混入の可能性が高い。出土遺物から18世紀のものと想定できる。





第56図 雄山 4 号墳 A 区 S X 01 出土遺物実測図(S=1/4) 第55図 雄山 4 号墳 A 区 S X 01平・断面図(S=1/80)

C区SX01 (第57図・58図)

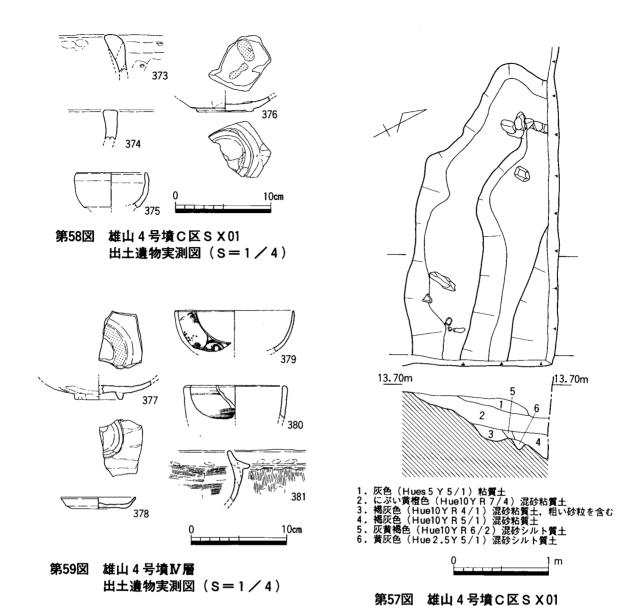
C区東端で検出した不明遺構である。隣接するB区でも連続する埋土を確認しており、平坦地から斜面に移行する位置で検出されている。断面形は周辺地形に沿って、南西から北東に緩やかに傾斜している。底面は3層に細別できる埋土とおおむね呼応し、緩やかな階段状となっている。位置関係・埋土から、平坦地縁辺部から斜面部に堆積した包含層の可能性が高い。

遺物は墳丘上から混入した埴輪・須恵器を除くと、土師質土器・陶器・磁器が出土している。373・374は風炉ないし火鉢である。口縁部形態に差異がみられ、373は内傾させて端部を丸く仕上げるが、374は平坦に仕上げている。ごく少量の煤の付着が認められる。375は陶器小型碗である。376は高台付陶器碗である。高台は低平である。見込み部には砂目積痕がみられ、高台内面には微量ながら目砂が付着している。出土遺物より、18世紀以降のものと想定できる。

Ⅳ層出土遺物(第59図)

377は高台付磁器碗である。見込みに蛇の目釉剝ぎが施される。378土師質土器小皿である。口径7.8 cm,器高1.4 cmを測る。底部はヘラ切りである。379は肥前磁器染付碗である。外面に鳥・ほおずき等が描かれている。380陶胎染付碗である。381は土師質土器足釜である。体部外面にはタテハケ,内面にはヨコハケが施される。13世紀以降に位置付けられる。

出土遺物より、IV層は19世紀代に形成されたと想定できる。



(6) 小結

4号墳は,直径10.1ないし11.8mを測り,尾根頂部側に馬蹄形周溝が掘削されている。埋葬施設は横 穴式石室であるが,羨道部を持たず,墓壙掘削時に同時に掘り込まれた墓道が連結している。石室・墳 丘の遺存状況が極めて良好であったため,古墳築造が墳丘・周溝・石室・断面L字形の墓壙が互いに関 連し合うことにより行われ,斜面における古墳築造の過程が復元できる。これに関しては,石室構造を 含め,後述する。

平·断面図(S=1/40)

一方、玄室内遺物は稀薄であり、攪乱層より馬具、刀子(飾金具)、鉄鏃、玉類等が出土しているが、須恵器は細片のみであった。それに比して、周溝、墳丘上より多量の埴輪・須恵器が出土している。埴輪は円筒埴輪と形象埴輪がみられ、その特徴により川西編年V期に位置付けらる。最下段突帯に断続ナデ技法が確認できる点から、V期のなかでも新しい一群であり、大阪府陶邑古窯址群田辺編年(24)のMT 15型式期~T K10型式期に相当することになる(6世紀前半から中葉)。玄室出土須恵器の特徴とも齟齬を起たすものではない。周溝出土須恵器にはやや新しい様相もみられるが、MT15型式とT K10型式の共伴時期に築造されたと想定でき、追葬はなかったと考えたい。

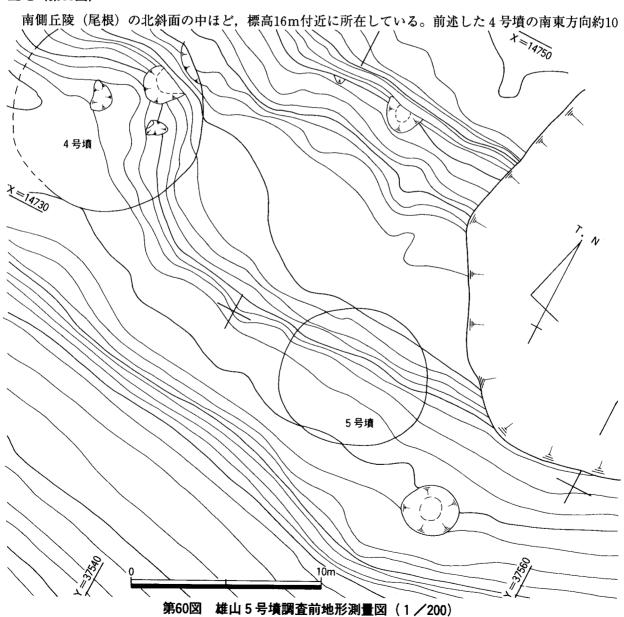
2 雄山5号墳

今回の調査にあたって新たに検出した古墳である。南側の丘陵(尾根)北斜面の中ほどで一抱え程度 の石材が露出していたため、予備調査のトレンチを設定したところ、上部を破壊された横穴式石室を確 認した。4号墳の東南に隣接していることから、雄山5号墳と名付けて調査を行った。

調査の方法としては、北半分を後世の削平で失っていることから、南側の丘陵斜面側のテラス部分を取り込んだ調査区を設定し、石室上面の検出を行うことで主軸方向を確認したのち、主軸に直行する土層観察用の畦を残しながら掘り下げを行った。墳丘及び石室の大半を失っており石室内は土砂で完全に埋まっていたが、それが幸いして石室床面上には豊富な副葬品が遺存していた。また、石室南側では周溝の痕跡を確認することができた。すべての測量・写真撮影を終えたのち、石室を解体して石室掘方の検出・調査を行い、さらにトレンチ調査で古墳下位の遺構の有無を確認した。

(1) 墳丘と外部施設

立地 (第60図)

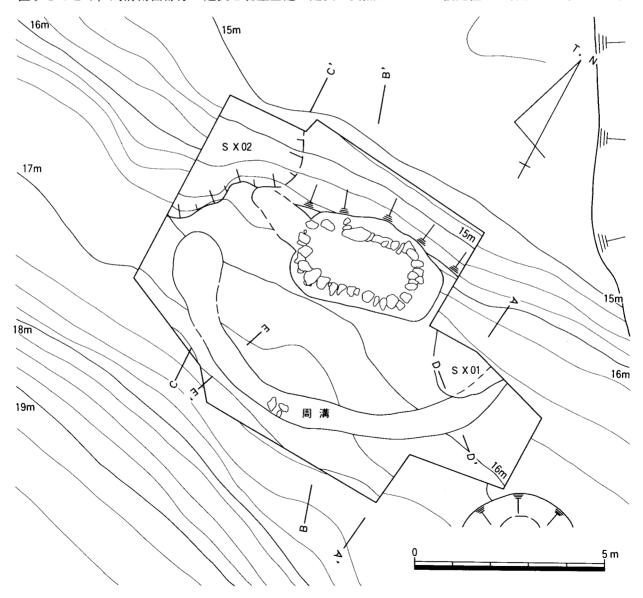


mのところにあたり、現況では後世の開墾による斜面とテラスになっていた。上方から2段目斜面に石室石材が露出している以外は、全く古墳の存在を伺わせない状況であった。また、古墳の北東には土取りによる高さ約5mの崖が迫っている。

後世の開墾によって旧地形が改変されているため定かではないが、等高線は平行しており特に瘤状の 張り出しなどがあったとは想定し難い場所であるため、墳丘が流出する可能性は高いと思われる。この 位置に5号墳を築いたのは、5号墳の北西側に直線的に並ぶ1~4号墳の延長線上に位置させることを 意識したと理解することもできよう。

墳丘 (第61図)

著しい削平を被ったために、墳丘盛土はほとんど残されておらず、特に石室北側については削平が完全に基盤層まで及んでおり、墳丘盛土は完全に消失させられている。石室南側で検出した周溝の痕跡から推定すると、直径約8mの円墳に復元することができる。この復元径では石室が墳丘のほぼ中央に位置することや、周溝南西部分の延長と石室墓道の延長の交点がほぼこの復元径上に合致してくることな



第61図 雄山 5 号墳調査後地形測量図 (1/100)

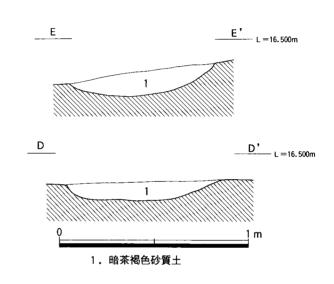
どからみても、この復元径はおおむね妥当な数字と思われる。

土層断面の観察によると、石室南側と周溝の間に墳丘盛土の残欠と想定できる土層(第63図の6層)が厚さ12 cm 程度見られる以外、墳丘盛土層は認められない。この土層は、直下の基盤層(同図の8層 = 古墳築造前の旧地表面)に墓壙を掘り込み、石室石材を積み上げた際の3段目の石材の裏込め土として盛土された土と見ることができる。基盤層(同図の8層)の傾斜から、旧地表が約15度の傾斜を持った斜面であったことがわかる。また、墳丘盛土層の上に堆積する層(同図の4・5層)は、石室内に堆積している土層とは明らかに異なっており、古墳破壊後に堆積したことがうかがえる。土層中からは中世の遺物がわずかに出土しているが、斜面上方からの流出土であり、古墳破壊の直接的な時期を示すものではないと思われる。なお、墳丘の高さについては全く測り知ることができない。

周溝 (第62図)

石室の南側(尾根の頂部側)には緩やかな円弧をなす周溝の痕跡が認められた。周溝は基盤層を掘り窪めて作られており、検出幅で0.8m、深さ0.1mを測るもので、断面形態は浅いU字形を呈する。本来はかなり幅の広い周溝であったと考えられ、斜面と墳丘を明瞭に区切る堀割りであると同時に、墳丘の盛土となる土を得るという2つの目的を果たしたものと思われる。

周溝の西端は、やや幅が広がり平面形が丸くなり終わっているが、この位置では中途半端であり、本来はここで途切れずに石室墓道の先端付近まで延びていたものであろう。



第62図 雄山 5号墳周溝断面図(1/20)

5号墳の周溝は斜面側の地形の高い南側を中心に、墳丘に沿って馬蹄形に巡らされていたものと考えられる。

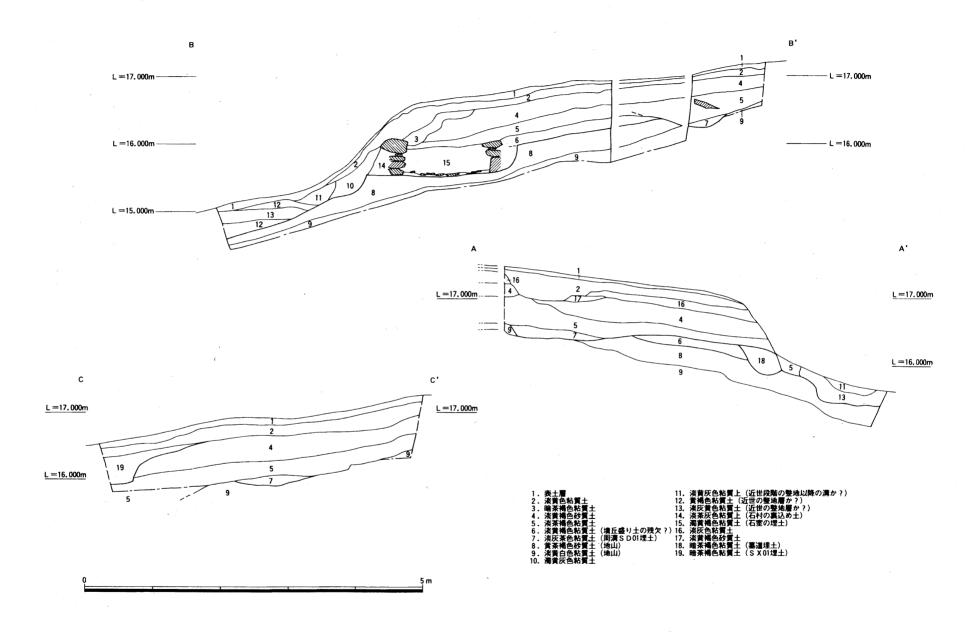
(2) 埋葬施設

石室(第65図)

雄山5号墳の埋葬施設は、北西方向に開口部を有する左片袖の横穴式石室である。石室の主軸方向は N110°Wで、周囲の等高線とおおむね平行した方向をとっている。何度も繰り返し述べてきたように、 著しい削平を受けたために半壊状態であり、天井石は1枚も残存しておらず壁面の石材もかなり失われている。壁面ごとに損壊の状況に程度差が認められ、斜面の傾斜方向に直行する左側壁と右側壁は3段ほどしか残っていないのに対して、傾斜方向に平行する奥壁と前壁は4~5段が遺存していた。

石室の計測値は,石室長2.56m,石室奥壁幅1.16m,石室中央幅1.24m,玄門幅0.64m,左袖部幅0.52m, 現存高は奥壁で0.72m,前壁で0.68mを測る。平面形態は縦横の比が1:2.2の長方形プランを呈しており,玄門部と左袖部の幅はほぼ1:1の比率となっている。

壁面は、基底列として直方体ブロック状の石材を配列している。石の積み方は、基本的に壁面方向に 石材の長い辺をそろえて積みあげている(平積み)が、右側壁の基底石列はそれと直交する方向に積ま

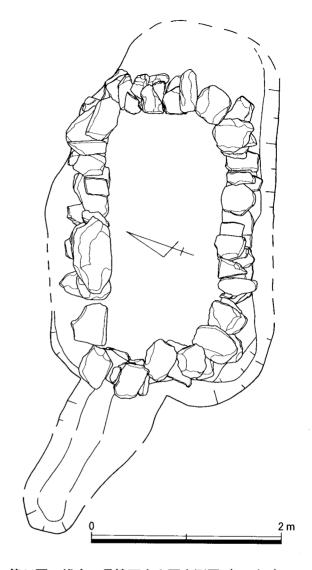


第63図 雄山 5号墳墳丘土層断面図 (1/40)

れている(小口積み)。しかし、奥壁の4段目や 左側壁の3段目に小口積みが見られたり、右側壁 の2・3段目に横積みが見られるなど、段によっ て積み方を使い分けている状況とはみなし難い。 むしろ、石材の大きさを生かしながら積み上げる ために両方の手法を取り入れているのであろう。 また、四壁はそれぞれわずかに内傾しており、奥 壁と左側壁のコーナー及び左側壁と袖部のコーナー のそれぞれ3段目には、両壁にまたがって架構 された石材が見られる。石室壁面の控え積みは全 く行っておらず、裏込めの土で壁面の背後を支え ながら構築していったことがうかがえる。これら の点は4号墳石室と共通しており、おそらく5号 墳の石室は4号墳石室と同様の壁面・天井を有し ていたものと思われる。

使用された石材は30~80cm 前後の安山岩の塊石・板石であるが、奥壁及び右側壁基底石の各1石のみ花崗岩を使用している。安山岩のうち直方体に近いものは比較的角や稜がしっかり残っているが、大きめの石材は磨滅が進んだものが多い傾向がある。花崗岩はかなり風化が進み、脆くなっている(25)。

石室床面には、長さ20~60cm、幅20~30cm、厚さ2~3cm 程度の安山岩の板石がびっちりと敷き詰められていた。板石はほとんど重なる部分



第64図 雄山 5号墳石室上面実測図(1/40)

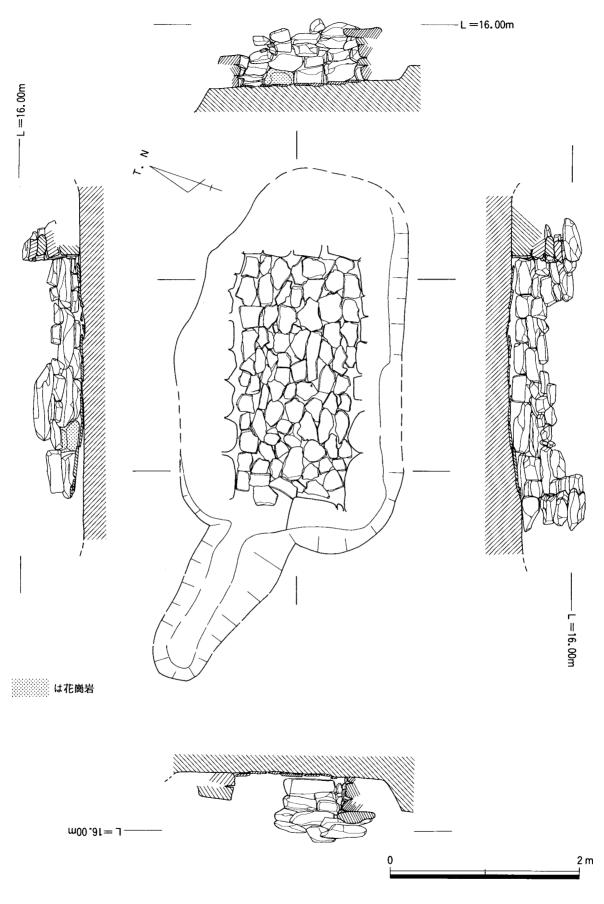
が認められず、1 枚ごとの形状を上手く組合せてモザイク状に敷いているが、奥壁前の1 石は意識的に 重ねられており、棺台などの代用として使われた可能性がある。この他床面には、棺台などになるよう な石材などは認められない。

断面観察(第63図)によれば、斜面上側を大きく掘り込んだ断面L字形の墓壙を穿ち、その中に石積みを行い石室を構築しているようである。しかし、玄門部北側には墓壙の立ち上がりがわずかに認められることから、斜面下側も多少なりとも掘り込んでいることがわかる。墓壙は隅丸長方形の平面形を呈しており、その規模は検出長3.9m、検出幅2.4mを測る。

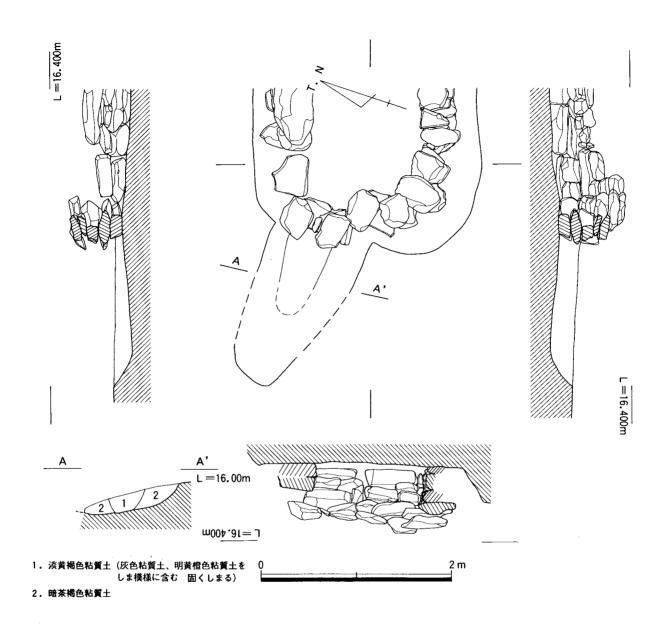
なお、石室の壁面のうち、奥壁左半部・右側壁中央部付近・左側壁東半部などの一部に赤色を呈する部分が見られるが、石室全体に赤彩を施していたかどうかは不明である⁽²⁵⁾。

墓道・閉塞施設 (第66図)

墓道は、N84°Wの方向を有する溝状を呈しており、石室(墓壙)主軸とは26°のズレが生じている。 検出長で1.7m、幅0.9m、深さ0.2mを測り、断面形態は浅いU字形を呈する。石室墓壙の構築時に同



第65図 雄山 5号墳石室実測図 (1/40)



第66図 雄山5号墳玄門及び墓道平・断面図(1/40)

時に地山層を穿って設けられたものと考えられる。墓道の床面は、玄門の閉塞部分から西(墳丘外)の 方向へ緩やかに傾斜していき、端部付近で急な角度で上がって終わっている。床面の比高差は約12cm、 傾斜角度は約5°を測る。本来の墓道は、周溝の端部付近まで延びていたと思われるが、そうすると墳 丘外と墓道入り口の床面に段差が生じることになる。このような墓道の構造があり得るかどうかについ ては、今後の類例に期待したい。

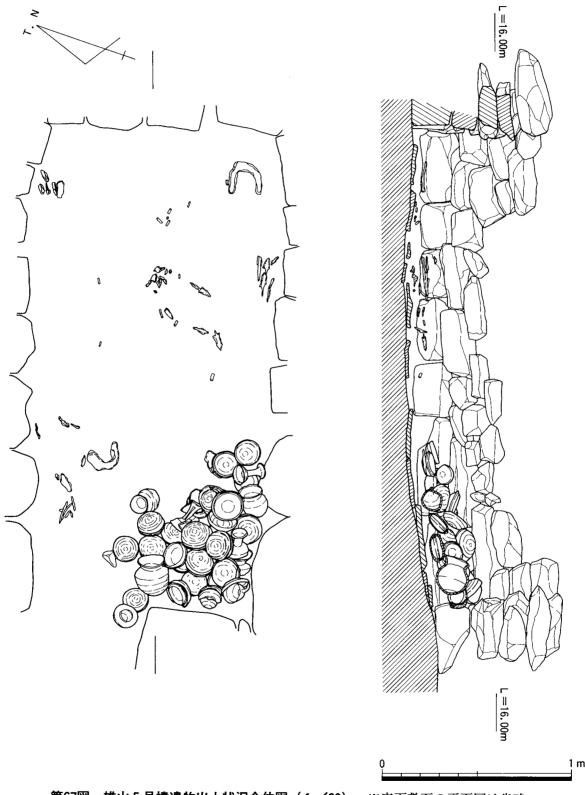
石室の閉塞は、玄門部で行われている。石室と同様に安山岩の塊石を用いており、基底から3段目までは石材を平積みし、4段目には小口積みをした2石が認められた。3段目の石材と袖部の隙間には板石を立てて詰め込み、隙間を塞いでいた。これらの石材の外側(墳丘外)には石材は全く認められないことから、ある程度の長さに石材を小山状に積み上げて閉塞するという方法ではなく、石材1石分という狭い幅の中に石を壁状に積み上げて閉塞を行ったものと考えられる^{②7}。

閉塞石、墓道はともに墳丘完成後には埋め戻されていたことが想定される(28)。

(3) 遺物の出土状況

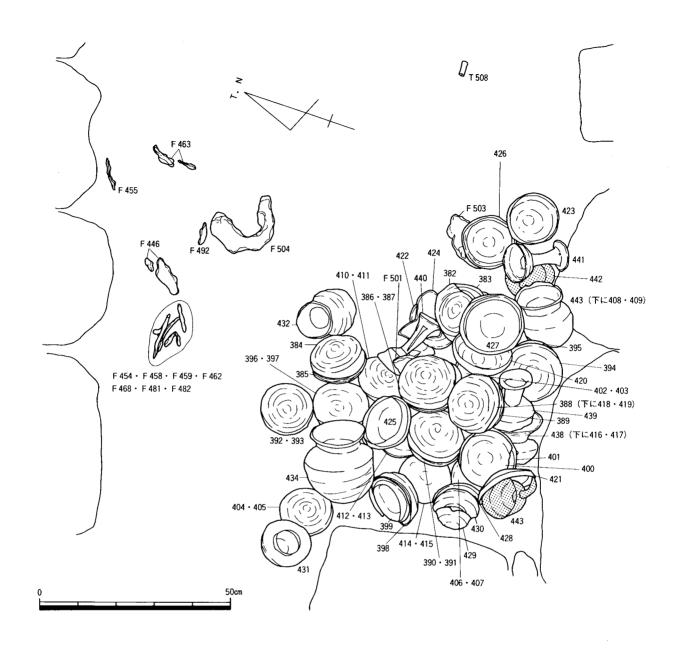
石室 (第67~69図)

石室の中からは、多量の須恵器・鉄製品が最終的な副葬の状況を保った状態で出土した。石室の左袖部には蓋杯を中心とした多量の須恵器と少量の土師器が折り重なるように置かれていた。また、石室の四隅付近にはU字形鋤先や鉄鏃などが見られる。石室の中央やや奥壁寄りの部分では管玉・切子玉など



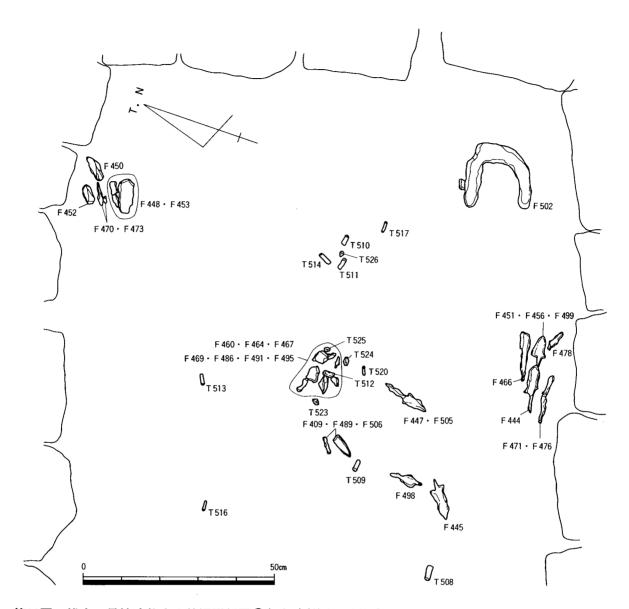
第67図 雄山 5号墳遺物出土状況全体図 (1/20) ※

※床面敷石の平面図は省略



第68図 雄山 5 号墳遺物出土状況詳細図①(1/10)(数字は遺物番号と対応するFは鉄製品Tは玉類を示す) の玉類と鉄鏃などが出土している。玉類は上記以外に、石室中央やや玄門寄りの付近からガラス小玉・練玉が出土している。

左袖部分に集中する土器のうち完形のものには、須恵器の蓋杯が19セット、セットにならない杯蓋 5、杯身 4、蓋とセットの短頸壷 1、セットにならない短頸壷 身 1、壷 3、聴 1、無蓋高杯 3、土師器の椀 1、把手付椀 1 がある。これらの土器群は最大で 5 段に積み上げられており、横倒しになった高杯の上に蓋杯が乗っていたり、ひっくり返した杯蓋の中に杯身を重ねているものや、ひっくり返した杯蓋 2 つを重ねているものなどが見られる。さらに、床面直上の U字形鋤先の上に杯身が乗っている状況や、土器群の中に鉄鎌が突き刺さったような状態で出土していることなどから、追葬を行った際に土器群を左袖部に片付けた可能性が極めて高い。玄門部に近い位置にある短頸壷は、床面の敷石上に堆積した土の上に乗っており、ほぼ閉塞石の 2 段目と同じで高さにある。この土は追葬を行うにあたって閉塞石を外した際に玄門部に流入したものであろう。また、蓋杯は焼成時からのセット関係をなすもの以外に、本



第69図 雄山 5 号墳遺物出土状況詳細図②(1/10)(数字は遺物番号と対応するFは鉄製品Tは玉類を示す)

来のセット関係にないものを組み合わせたものも見られる。セットをなしていた蓋杯19セットと短頸壷 1セットのうち、蓋杯の1セット(報文番号418・419)の内部には植物遺体が入っていた。

鉄製品は、石室の四隅周辺と中央部分にそれぞれまとまった状態で見られる。右側壁玄門部前にはU字形鋤先(同504) 1 個と鉄鏃 8 本以上があり、鉄鏃の方向はおおむね玄門部を向いている。右側壁奥壁前には鉄鏃 5 本があり、1 本が玄門部を向く以外はすべて奥壁を向いている。左側壁袖部前の土器群付近には須恵器杯身(同426)の下にU字形鋤先(同503) 1 個が右側壁玄門部前の鋤先と方向をそろえるように約50cm の間隔で置かれていた。左側壁中央やや奥壁寄りには鉄鏃 5 本以上と鉄鎌(同499) 1 本が奥壁に方向をそろえている。左側壁奥壁前にはU字形鋤先 1 個(同502)が先述した 2 個とは反対の方向で置かれている。石室中央部には鉄鏃 5 本以上・鉇 2 本・刀子 1 本が見られるがその方向は一定していない。この他には土器群の中に突き刺さるように鉄鎌(同501) 1 本があり、鉄釧の可能性がある不明鉄器(同507)は本来の位置が確認できなかった。

玉類は、石室の中央部分に2つのまとまりとして出土している。奥壁よりの一群は管玉4個と水晶製切子玉1個があり、そのやや西側に管玉3個と水晶製切子玉3個の一群が鉄器と一緒にみられる。さらに西側の一群の周囲には4個の管玉が散在してみられる。これら以外には勾玉1個・管玉2個・水晶製小玉1個・ガラス小玉32個・練玉221個以上を検出している。ガラス小玉は奥壁寄りの一群の周辺に多くみられ、練玉は石室各所でみられるが西の一群のさらに西側に集中する傾向が強い。それ以外の玉類については床面敷石検出中に出土したため、本来の位置については確認できていない。

鉄製品の中に釘は全く認められず、また、棺材と思われる木片等も認められなかったため、木棺を使用していたかどうかについては確認できなかった。玄門部寄りのU字形鋤先2個が石室奥壁と平行するように揃えられていることや、中央部の遺物と側壁の遺物の間にみられる空間のあり方などから、木棺を使用したことが類推されるが、木棺は釘を使わない組合式か刳抜式のものであったと思われる。また玉類の出土状況から、被葬者は奥壁側に頭を向けていたと想定でき、さらに2つのまとまりがみられることは、土器群の片付け行為とあわせて追葬を示唆するものであるといえよう。

周溝・墳丘

石室の内部とは全く対照的に、墳丘の背後を取り巻く周溝の中からはほとんど遺物が出土していない。 図化した壷の口縁部破片以外は、若干の弥生土器の小片や須恵器の小破片がみられる程度である。これ らは墳丘上部から周溝へ転落したものというよりは、丘陵上方から流れ込んだものであろう。

また、墳丘内からは古墳築造に伴う遺物は検出されなかった。

(4) 出土遺物

石室出土遺物

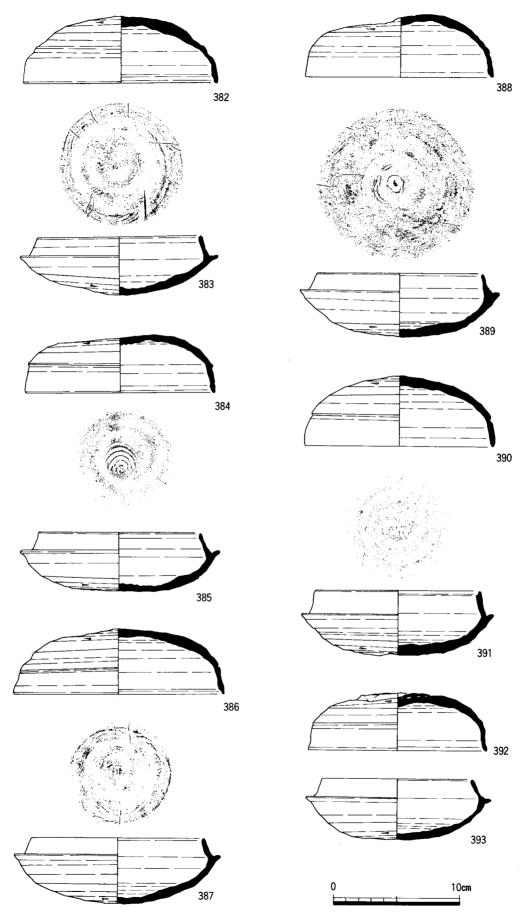
須恵器 (第70~74図)

蓋杯 (382~428)

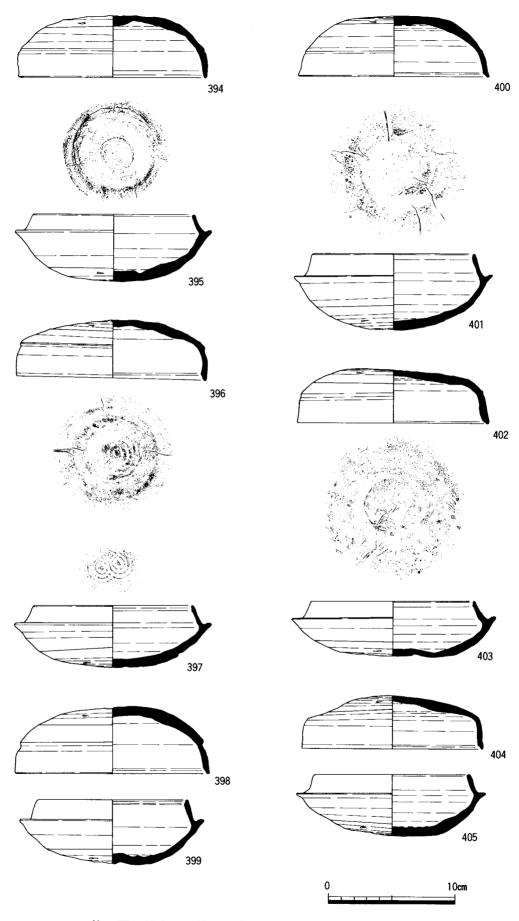
出土時にセットになっていた蓋と身を、図面上では上下に並べてレイアウトした。382~419まではセットをなすもので、420~428まではセットをなさないものである。

杯蓋は口径13.4~16.4cm, 器高3.9~5.6cm と法量にばらつきがあり, 形態についても天井部が丸いものや平らなもの, 器高が高いものや扁平なものなどがみられる。また, 口縁部と天井部の境も稜を持つものや沈線・凹線をめぐらせるものがあり, 口縁端部も内傾する凹面をなすものや段を持つもの, 丸く収めるものなどのバラエティーに富む。ロクロの回転方向は概ね1対2の割合で右回転のものの方が多い。天井部の内面に同心円スタンプの痕跡を残すものが9点にみられ, そのほとんどがナデ消そうとしているのに対して, 384の1例のみは全く消そうともしていない。

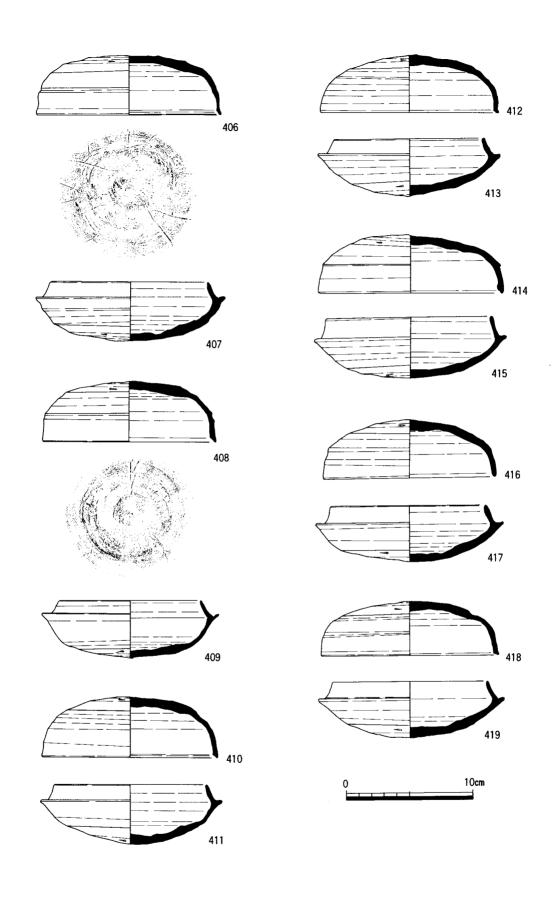
杯身は口径11.1~13.7cm,器高4.4~5.9cm と,蓋と同様に法量にばらつきがある。形態も底部が丸いものや平らなもの,深いものや扁平で浅いものなどがみられる。口縁部の立ち上がりは総じて長く内傾する傾向にあるが,直線的なものや屈曲するものがみられる。口縁端部も内傾する凹面をなすものや段を持つもの,丸く収めるものや鋭く収めるものがありバラエティーに富む。ロクロの回転方向は概ね 1 対 2 の割合で右回転のものが多い。底部の内面に同心円スタンプの痕跡を残すものが11点みられるが,すべてナデ消そうとしている。同心円スタンプが複数残るものもあり,397のように中心部に 2 つが重なって残るものもあれば,406などのように広い範囲に複数のスタンプがみられその中心をナデ消しているものなどがある。



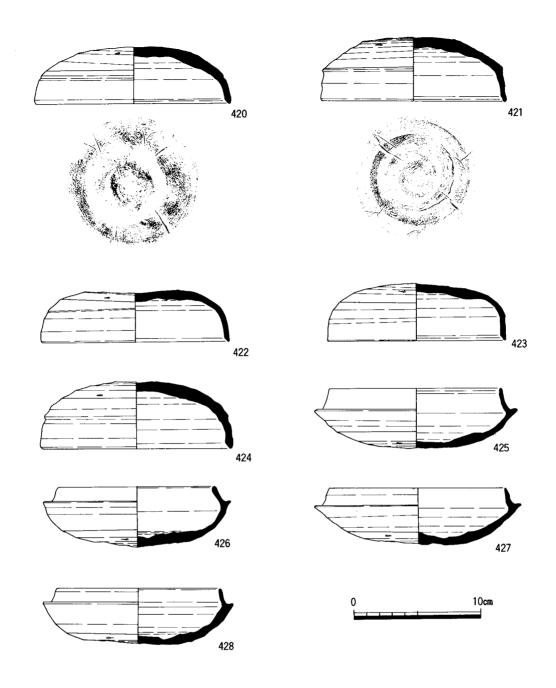
第70図 雄山 5 号墳石室内出土遺物実測図①(1 / 3)



第71図 雄山 5号墳石室内出土遺物実測図②(1/3)



第72図 雄山 5号墳石室内出土遺物実測図③(1/3)



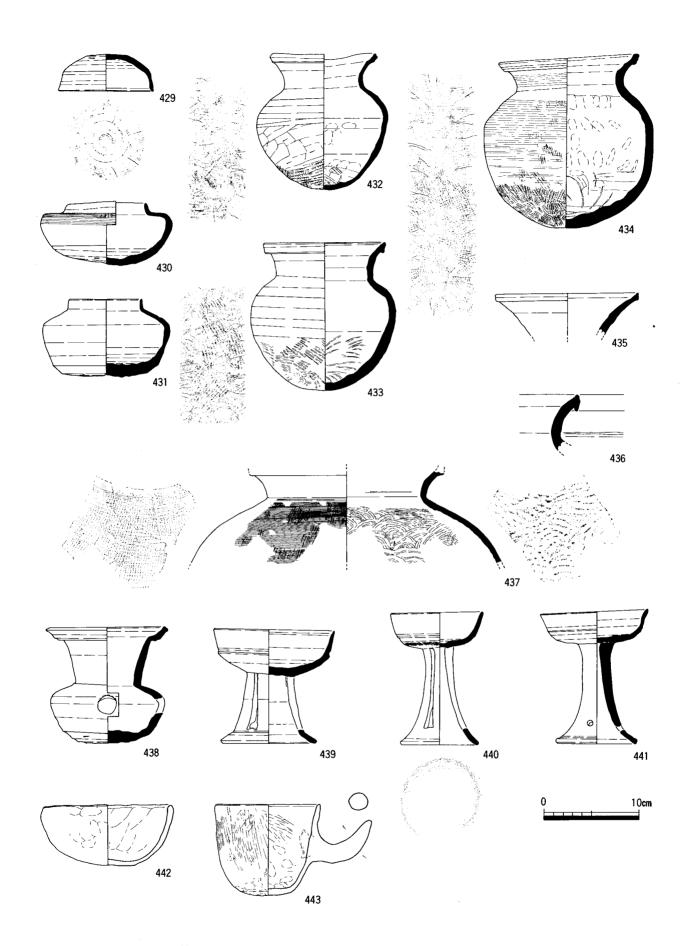
第73図 雄山 5号墳石室内出土遺物実測図④(1/3)

短頸壷 (429~431)

蓋が1個と身が2個出土している。蓋429と身430はセットになった状態で出土した。蓋は比較的器高が高く、天井部に小さな平坦面を持ち、口縁端部は内傾する凹面をなしている。身は肩の強く張る430とややなで肩の431の2種類があり、430は肩部にカキ目を施した施文工具原体による小さな刺突がみられる。

童 (432~435)

432~434は偏球形の体部に大きく短く外反する口縁部が付くもので、口縁端部の収め方などに差がみられるものの、体部外面下半に平行叩きを施し、上半部は回転ナデで仕上げている点で共通している。 さらに434は体部外面上半と口頸部にカキ目を施している。いずれも内面の同心円文の当て具痕を上半部では丁寧にナデ消している。435は壷の口縁部としたが、他の器種の可能性がある。



第74図 雄山 5号墳石室内出土遺物実測図⑤ (1/4)

甕 (436・437)

436は口縁部の破片で、大きく外反して端部を上下に拡張している。437も大きく外反する口縁部を持ち、肩が張らないなだらかな体部である。

璲 (438)

体部の最大径がかなり上位にあるため、強く肩の張った偏球形の体部を呈する。頸部は直立気味に外 反し口縁部は大きく開く。文様などの装飾は全くみられない。

高杯(439~441)

すべて無蓋の高杯である。439は口縁部が直線的に外方へ立ち上がる杯部で、中位には弱い稜がみられる。脚部はやや長脚化の傾向がみられ、脚端部は強く屈曲している。透かし孔は長方形で3方向から施している。440はやや内彎気味に立ち上がる口縁部を持つ杯部で、下位の凹線の下に細かな櫛描き波状文を施す。脚部は長脚化しており、ラッパ状に開く形状をとる。透かし孔は長方形で3方向から施している。441は口縁部がわずかに外反した浅い杯部で、中位に稜の痕跡がみられる。脚部は440と同様の長脚だが、透かし孔が円形である点が異なる。

土師器 (第74図)

椀 (442)

口縁部が内彎するもので、丸みを帯びた底部になだらかに連続している。

把手付椀 (443)

外上方に直線的に立ち上がる口縁部と丸みを帯びた底部を持ち、外面の中位に牛角状の把手を貼り付けている。

鉄製品 (第75~79図)

鉄鏃 (444~497)

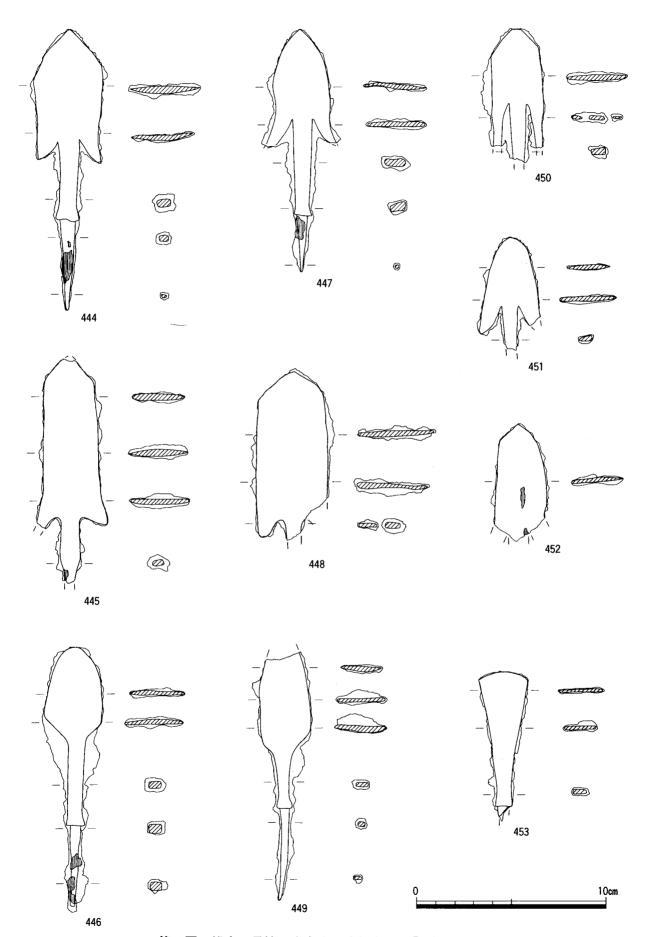
鉄鏃には腸抉三角形鏃(444・445・447・448・450~452),三角形鏃(446・449),方頭鏃(453),長頸鏃(454~472・476・477・481・482・486・487・492)がみられる。腸抉三角形鏃は身の長さや形態にバリエーションがみられ,逆刺も外へ開くものと開かないもの,短いものと長いものがある。頸部関の判明したものは台形関が多いが,445は斜関と思われる。444・445・447は茎に木質が遺存しており,452の身の中央には矢柄の痕跡が一部残る。三角形鏃と方頭鏃はいずれも頸部が台形関である。446は茎に木質が遺存する。長頸鏃は鏃身部の関が撫関のものがほとんどであるが,456・464は角関であると思われる。頸部関は判明したものはすべて台形関であった。471・473・475・476・479・481には茎に木質が遺存しており,471は桜の樹皮と思われる。この他に頸部や茎の破片などが出土している。493・494は鉄鏃としたが刀子の先端の可能性がある。

刀子 (498・500)

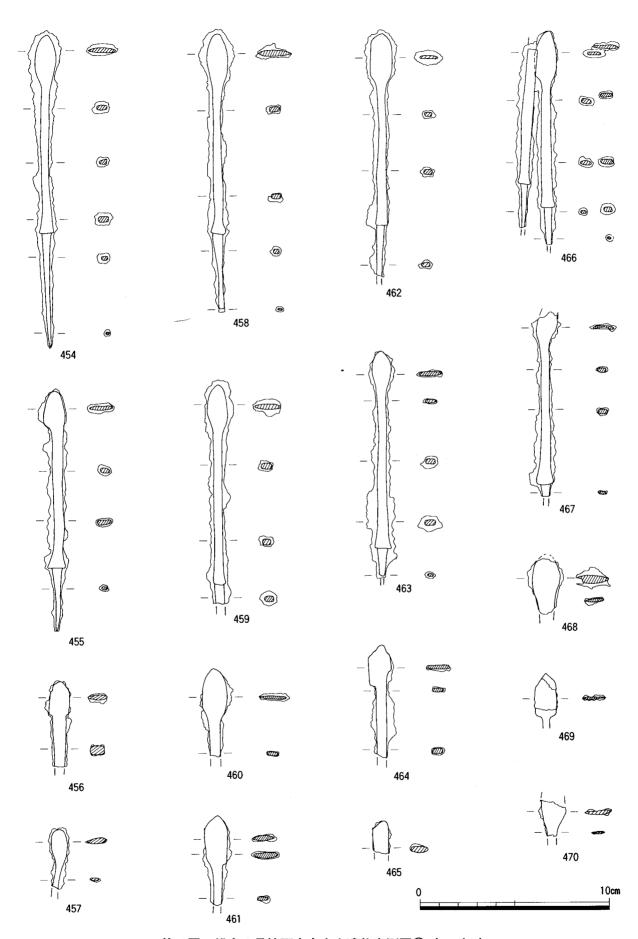
498は片関の刀子で、刃部半分と茎の先端を欠損する。関部での幅1.3cmと細身の刀子である。500は 刀子の刃部の破片である。残存最大幅1.2cmと細身の刀子で、直接接合はしなかったが同一個体の可能 性がある。

鉄鎌 (499・501)

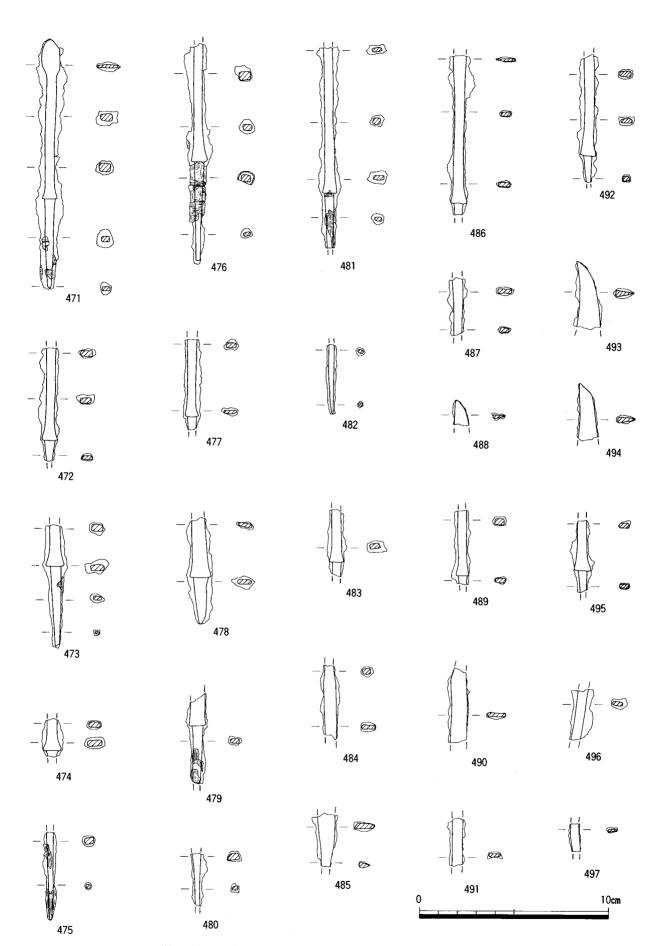
共に曲刃鎌で、499は基部を欠損しているが、501は基部を折り曲げている。501は土器群の中に突き刺さるような状態で出土したもので、着柄角度は96.5度を測り、直角柄の左鎌である。



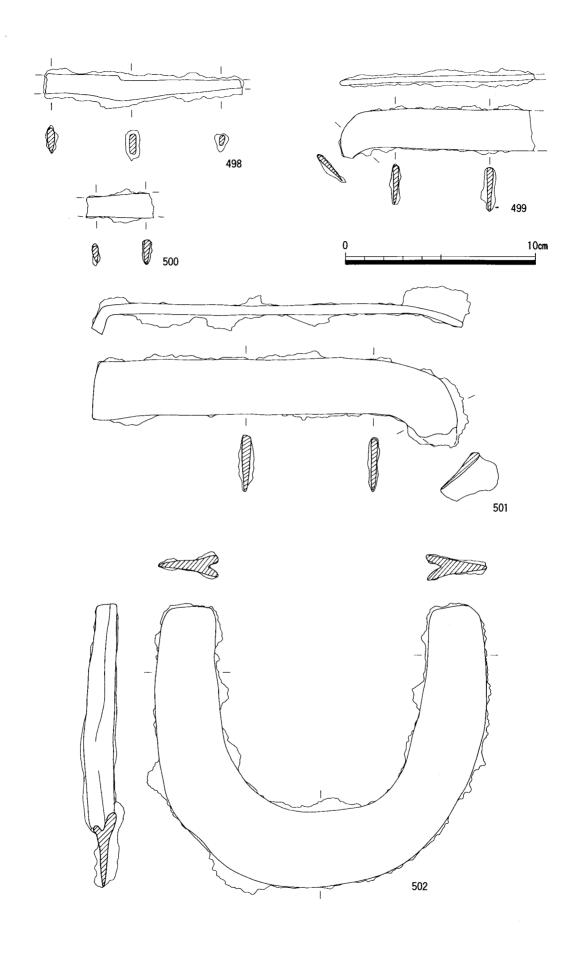
第75図 雄山 5号墳石室内出土遺物実測図⑥ (1/2)



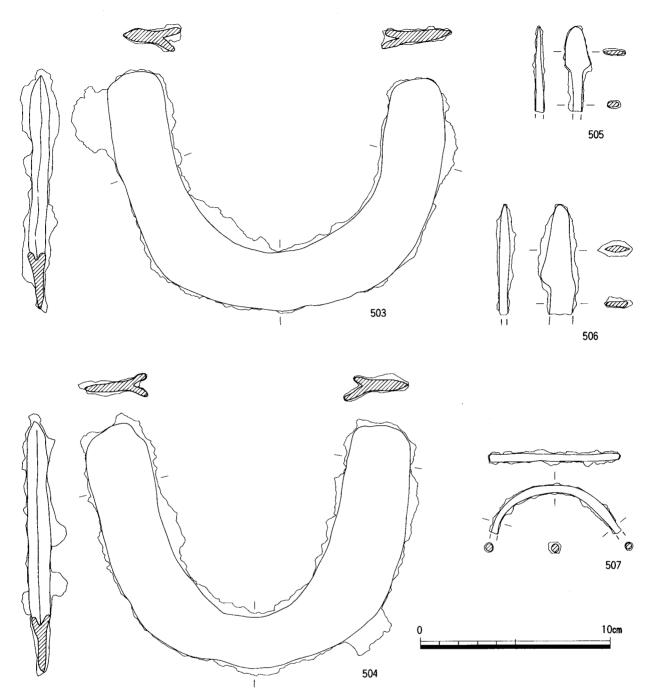
第76図 雄山 5 号墳石室内出土遺物実測図⑦(1 / 2)



第77図 雄山 5号墳石室内出土遺物実測図⑧(1/2)



第78図 雄山 5号墳石室内出土遺物実測図⑨(1/2)



第79図 雄山 5号墳石室内出土遺物実測図⑩ (1/2)

U字形鋤先(502~504)

3点が出土している。いずれも幅が18cm 前後を測り、内側の装着部分にV字形の溝を有する点などが共通しており、規格があったことが想定される。錆が著しく先端の観察が十分できなかったため、使用痕の有無は確認できなかったが、十分実用に耐えうる大きさであり、儀礼用のミニチュア品ではない。

鉇 (505・506)

共に先端部のみが遺存している。鉇と判断したが、長頸鏃の鏃身部の破片の可能性がある。

不明鉄製品 (507)

復元径 7 cm の環状をしたものの約 1/3 程度が出土した。両端は折れており本来の形状を類推することは困難であるが、鉄釧状のものが想定できる。

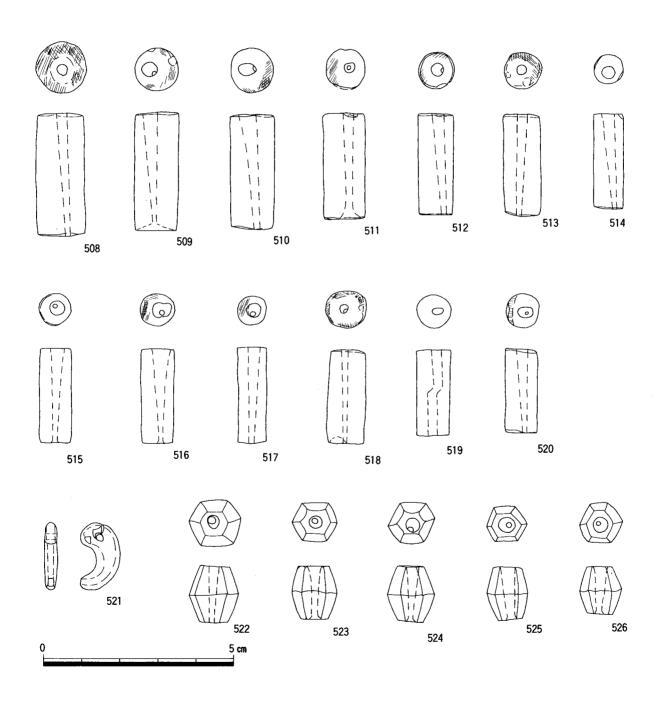
玉類 (第80~85図)

管玉 (508~520)

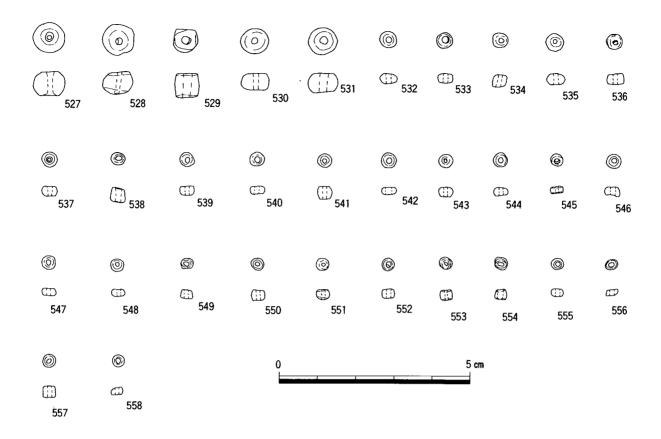
いずれも濃緑色を呈した碧玉製の管玉で、片側から穿孔がなされている。直径は12.5~7.0mm、長さは2.1~3.1mmの範囲内におさまる。全体に丁寧に研磨されているが、小口部分に研磨痕がみられるものもある。緑白色や淡緑色の縞模様が入るものもある。

勾玉 (521)

風化の進んだ白緑色を呈する結晶片岩製の勾玉で、1点のみが出土した。長さ1.8cm の小型品である。 片側穿孔で、穿孔部の一部を欠損している。



第80図 雄山 5号墳石室内出土遺物実測図① (1/1)



第81図 雄山 5号墳石室内出土遺物実測図⑫ (1/1)

切子玉 (522~526)

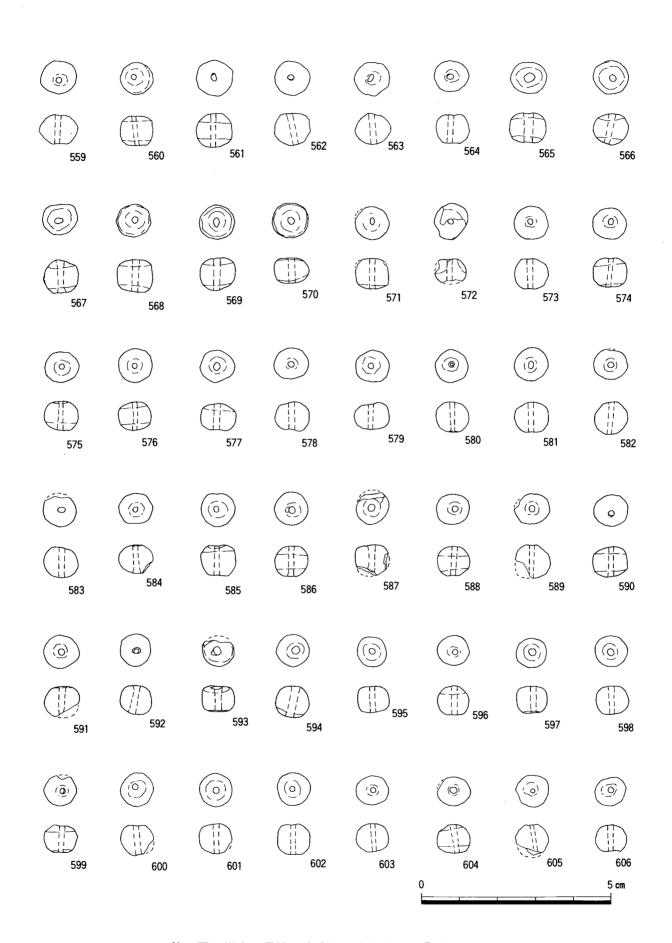
5点が出土しているが、すべて水晶製の切子玉である。面取りを行い六角形に仕上げている。孔は片側から穿孔されており、貫通した側の小口の割れを研磨して仕上げているようである。525は鉄器の錆が一部に付着している。

小玉 (527~558)

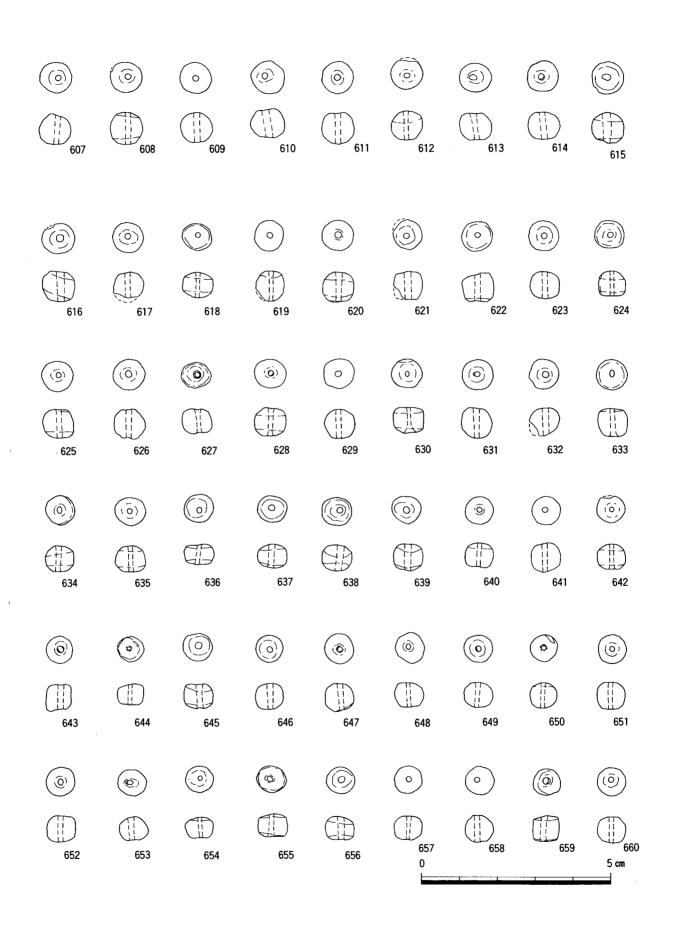
水晶製の小玉 1 点以外はすべてガラス製である。527は直径8.3㎜の水晶製の小玉で扁平な球形をしており、穿孔は片側から行っている。ガラス製の小玉は直径7.3~8.0㎜のものと、2.0~5.0㎜の2種類のサイズがある。基本的には扁平な形態をするものが多いが、529や538、557などは断面が方形の臼玉状を呈している。色調は青色系を基本とするが、サイズの大きなものは紺色を呈し、小さなものは青色や淡緑色を呈するものが多い。いずれも光沢を持っている。

練玉 (559~779)

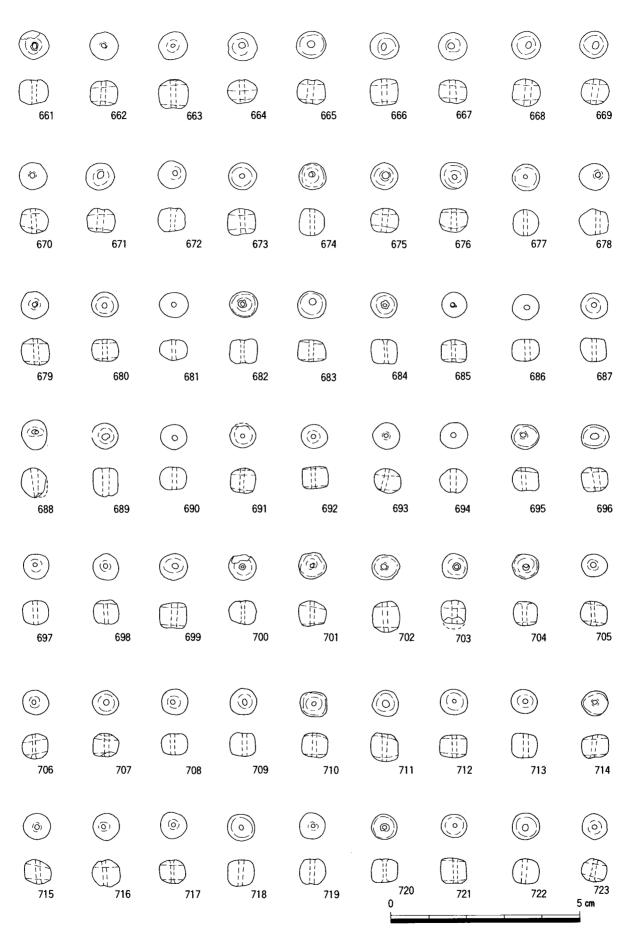
5号墳から出土した練玉は、完形及びそれに近いもので221個体が数えられる。それ以外にも多数の破損したものが出土しており、その総数は250個体以上が副葬されていたものと想定される。直径が6.0~8.0mm大のものが大半を占めるが、中には559のように1.0cm 近いものもみられる。色は黒色を基調としているが、わずかに淡黒色や黒褐色、灰色を呈するものがある。また、断面の形状は円形のものが多いが、なかには622・643・659などのように断面が方形の臼玉状を呈するものもある。これらの臼玉状のものは両小口部分の面取りを行っているものもみられる。穿孔はおそらくすべて片側穿孔であると思われる。



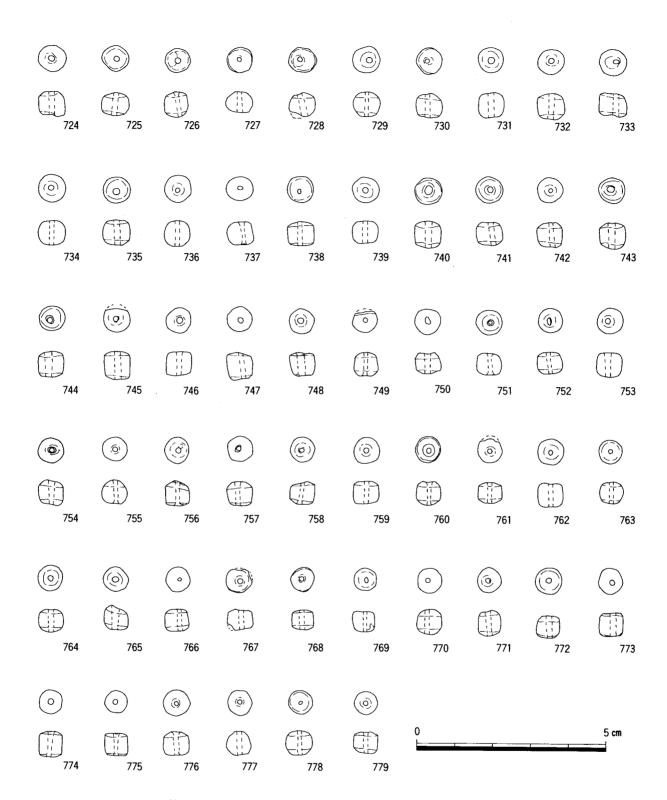
第82図 雄山 5 号墳石室内出土遺物実測図⑬ (1/1)



第83図 雄山 5 号墳石室内出土遺物実測図⑭ (1/1)



第84図 雄山 5号墳石室内出土遺物実測図⑮(1/1)

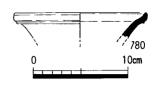


第85図 雄山 5号墳石室内出土遺物実測図⑯(1/1)

周溝出土遺物 (第86図)

須恵器壷 (780)

大きく外反する口縁部の破片である。端部は内彎気味に収められてお り、やや下方に肥厚している。



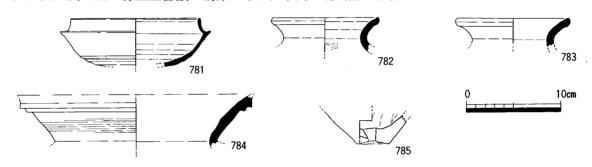
第86図 雄山 5 号墳周溝 出土遺物実測図(1/4)

(5) その他の遺構・遺物

SX02(第61·87図)

雄山5号墳の西方,墓道の先端付近で検出した浅い落ち込みである。墓道の先端を一部壊していることから,古墳築造よりも新しい遺構と判断できるが,古墳に伴うものかどうかはわからない。

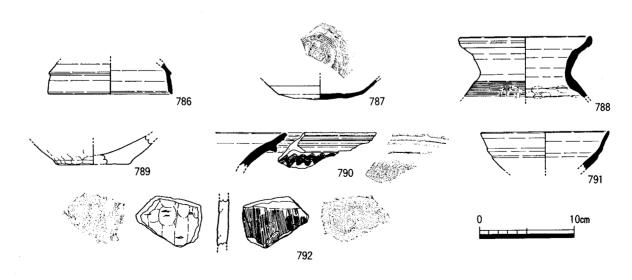
内部からは須恵器・弥生土器片などがわずかに出土したにすぎない。781は須恵器杯身である。口縁部の立ち上がりは外反しながら内傾しており、端部は丸く収めている。782・783は須恵器壷の口縁部である。いずれも強く外反して開く口縁部で、端部は肥厚気味に収めている。784は須恵器甕の口縁部である。大きく外反しており、端部を欠損するが、外面に2条の凸帯をめぐらせている。外面にはカキ目がみられる。785は弥生土器甑の底部である。中央に焼成前の穿孔が1つみられる。



第87図 雄山 5 号墳 S X 02出土遺物実測図(1 / 4)

包含層出土遺物 (第88図)

雄山5号墳の調査区の包含層から出土した土器である。786は須恵器杯蓋で、口縁部と天井部の境は 稜を持ち、端部は内傾する凹面をなしている。787は須恵器杯身の底部、788は肩部にカキ目を施した須

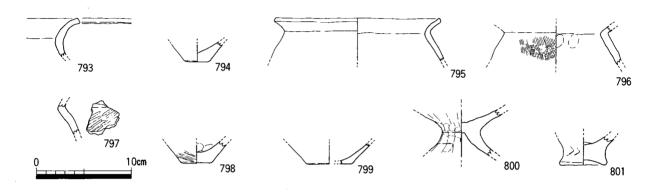


第88図 雄山 5号墳包含層出土遺物実測図 (1/4)

恵器壷である。789は弥生土器壷の底部,790は須恵器甕の口縁で,外面に凸帯1条を施しその下位に櫛描き波状文を施文している。791は須恵器の無蓋高杯で中位に弱い稜を持つ。792は円筒埴輪片で外面は縦ハケ調整が顕著である。

古墳築造以前の遺物 (第89図)

雄山5号墳の石室の掘り方を断ち割った際に出土した遺物であり、古墳築造以前のものである。793 は弥生土器壷の口縁部である。794~799は弥生土器甕である。797は外面に叩き調整を施している。800 は弥生土器高杯の破片である。801は弥生土器の台付鉢の脚台である。いずれも弥生時代後期に属する 遺物である。



第89図 雄山5号墳築造以前の遺物実測図(1/4)

(6) 小結

雄山5号墳は,直径約8mの円墳で,山側には周溝を馬蹄形にめぐらせていた。ほぼ西に開口する左 片袖式の横穴式石室を埋葬施設としており,石室の床面には敷石が施されている。石室には石積みの羨 道が付かず,素掘りの墓道が直接玄門部で石室に取り付く構造をしている。

開墾などによって石室の上半部を失い土砂が流入したために、埋葬時の状態が良好な形で保存されていた。袖部に集中している土器群はほとんどが須恵器であり、特に蓋杯がセットになった状態で多量に出土している。床面には鉄製品が残されていた。武具は鉄鏃以外には鉄剣などはみられず、逆にU字形鋤先や鉄鎌などの農工具がみられることが大きな特徴であろう。玉類では碧玉製管玉や水晶製切子玉以外に、多量の練玉が副葬されていたことが目を引く。練玉は石室中央付近に集中する傾向が強いが、石室全体に散在しているものもあることから、一部は埋葬時に石室内に散布した可能性もあろう。

埋葬には木棺を使用したと思われるが、石室内には鉄釘は1本もみられず、刳抜式か木釘などで組み合わせた木棺が使われたものと思われる。

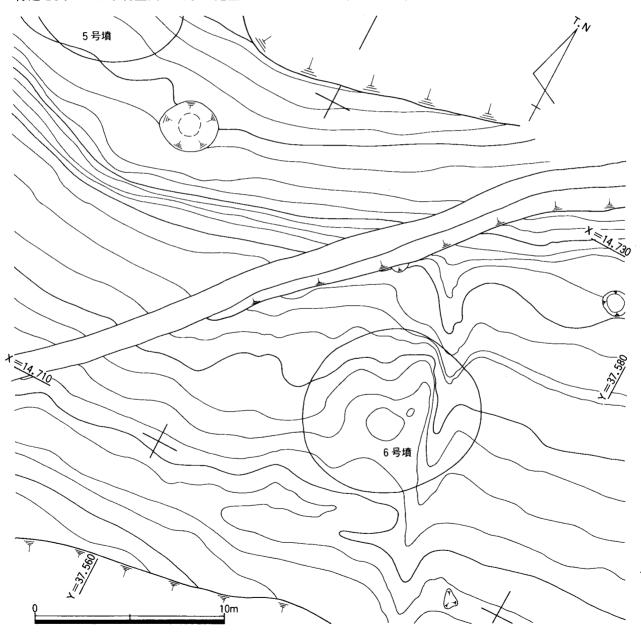
玉類が大きく2つにまとまりを見せる状況や、積み重ねられた土器群のあり方、さらに土器群中に突き刺さるような状態で鉄鎌が出土してることなどから、追葬が行われた可能性が極めて高い。

出土した須恵器の蓋杯は、比較的口径が大きくなった段階のものであるが、杯蓋の口縁部と天井部の境に弱い稜線を持つことや、杯身の口縁部の立ち上がりが比較的長めであることなどから、概ね大阪府陶邑古窯址群田辺編年⁽²⁹⁾のTK10型式の特徴と類似する。このことは、須恵器の蓋杯以外の器種の年代観とも特に矛盾しない。つまり、雄山 5 号墳は 6 世紀中頃に築造された古墳で、築造からあまり時間をおかない段階(須恵器一型式分の範囲)に追募 1 回を行ったと推測される。

3 雄山 6 号墳

今回の調査にあたって5号墳と同様に新たに検出した古墳である。南側の丘陵(尾根)の稜線から少し下ったところで中央部が大きく窪んだ高まりが認められた。高まりの東側は開墾で切り落とされており、枯れ葉などを除去したところ亜角礫が一部積まれたような状況を確認した。そこで中央部分に予備調査のトレンチを設定して掘り下げたところ、上部を破壊された横穴式石室を検出した。5号墳につづいて発見したことから、雄山6号墳と名付けて調査を行った。

調査の方法としては、マウンドの東側は後世の開墾によって土地が改変されており、西と北にはクヌギの大木が根を張っていることから、マウンドを中心とした長方形の調査区を設定した。当初は任意の方向で土層観察用の畦を残しながら掘り下げを行い、石室上面の検出を行い主軸方向を確認した段階で、主軸方向に直行する土層観察用の畦を設定し直してさらに掘り下げを行った。石室の上半部および玄門付近を失っており石室内は土砂で完全に埋まっていたが、それが幸いして石室床面上には豊富な副葬品



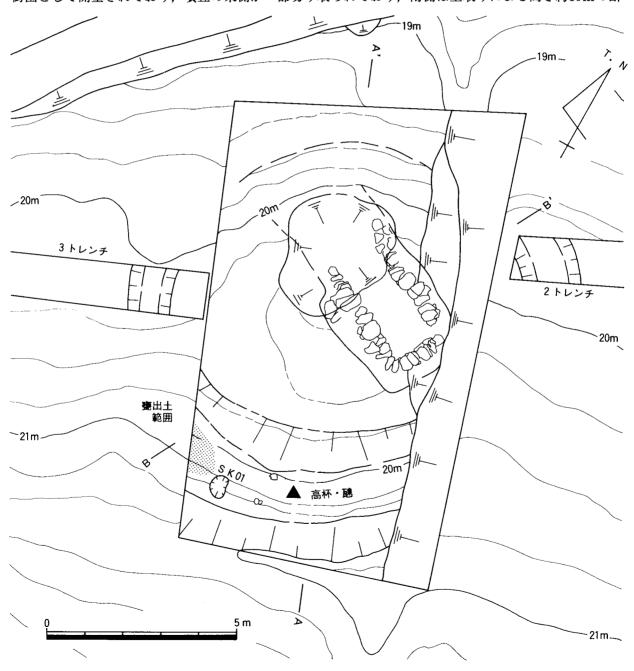
第90図 雄山 6号墳調査前地形測量図(1/200)

が遺存していた。また、石室南側では周溝を確認することができた。すべての測量・写真撮影を終えた のち、墳丘の断ち割り及び石室を解体して石室掘方の検出・調査を行い、さらにトレンチ調査で古墳下 位の遺構の有無を確認した。

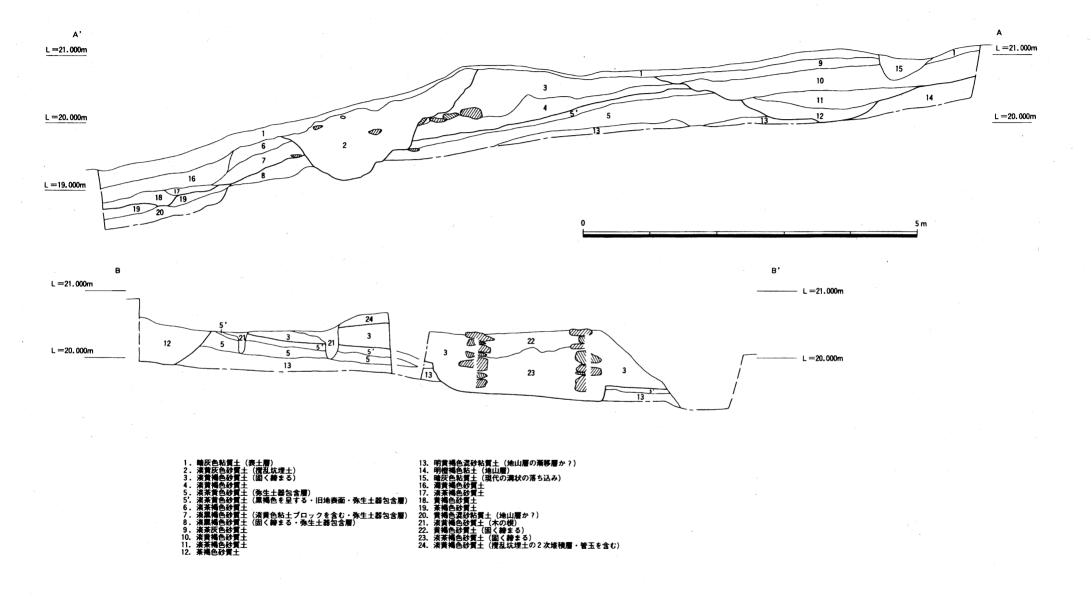
(1) 墳丘と外部施設

立地(第91図)

南側丘陵(尾根)の稜線からおよそ10mほど下がった北斜面部の、比較的傾斜が緩やかな標高20m付近に所在している。先述した雄山5号墳からは東南約18mのところにあたり、現況では中央に大きな窪みのあるわずかな高まりが、散在するクヌギの木の間にみられるにすぎない。古墳の東方はミカンの果樹園として開墾されており、墳丘の東側が一部切り取られており、南側は土取りによる高さ約10mの断



第91図 雄山 6号墳調査後地形測量図(1/100)



第92図 雄山 6号墳墳丘土層断面図 (1/40)

崖が迫っている。他の古墳とは概ね1~5号墳の延長線上にあたる位置関係である。

墳丘 (第92図)

開墾による削平,流出や攪乱などによって墳丘の大半を失っているが,概ね1/3程度が遺存していると思われる。墳丘の西南部分の盛土が比較的遺存しているのに対して,それ以外の部分はほとんど失っている。墳丘南側及び予備調査のトレンチで検出した周溝から推定すると,直径約10mの円墳に復元することができる。周溝を基準にしたこの復元径では石室が墳丘の中央ではなく,やや北に偏った位置にあたることになるため、本来はもう一回り大きな直径12m程度の円墳であったと思われる⁽³⁰⁾。

土層断面の観察からは、上面が黒色を呈する基盤層(第92図の5・5層)が認められ、古墳築造前の旧地表面が約10度の傾斜を持った斜面であったことがわかる。この層を掘り込んで墓壙を構築したのちに、石室石材を積み上げながら裏込め土として盛土(同図の3・4層)を行っている。この盛土層は非常に堅く締まっており、詳細に観察すると3~5 cm 単位の縞模様がみられることから、壁面の石材を1段積んでは背後に版築状の盛土を行う工程を繰

り返して墳丘を構築していったことがわかる。

周溝

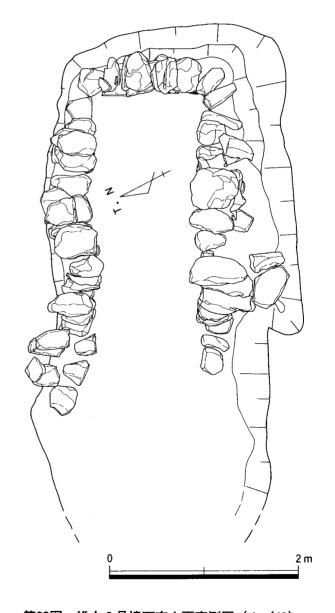
墳丘の南側(尾根の稜線側)で緩やかな円弧をなす周溝を確認している。周溝は基盤層を掘り込んで作られており、検出幅で2.4m,深さ0.8mを測り、断面の形態は緩やかなU字形を呈している。また、調査区の東西にそれぞれ設定した予備調査のトレンチにおいても周溝の痕跡を確認した。墳丘の北側は大木の根による攪乱などで確認することはできなかったが、斜面の下側にあたるため元々めぐらされていなかったものと思われる。

雄山6号墳の周溝は、墳丘背後側が大きく幅 広く、墳丘両横側がすぼまる形もので、墳丘の 裾を馬蹄形にめぐっていたと想定できる。

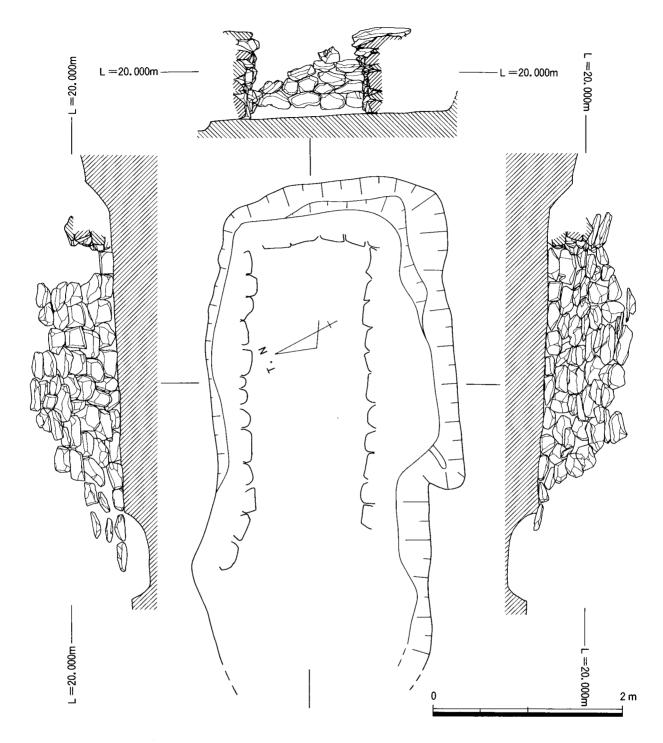
(2) 埋葬施設

石室(第94図)

雄山6号墳の埋葬施設は、北西方向に開口部を有する横穴式石室である。石室の主軸方向はN63°Wで、周囲の等高線とはおおむね斜行する方向をとっている。後世に石室上半部を破壊されているため、天井石は1石も残存しておらず、壁面の石材も失われている。左側壁で6段、



第93図 雄山 6 号墳石室上面実測図(1/40)



第94図 雄山 6号石室実測図(1/40)

右側壁で5~6段、奥壁は特に破壊が進んでおり3~4段が遺存している。

石室の構造は、石室左側壁全面部分に巨大な攪乱坑が掘られているため、この部分の構造が判明できず確定はできないが、袖部を有していれば左片袖式の横穴式石室であり、袖部がなければ無袖式の横穴式石室ということになる。墓壙の形状をみると、左片袖式の雄山5号墳の墓壙は袖部が屈曲するのに対して、雄山6号墳の場合は直線的に延びている。このことから類推すると、左片袖式というよりは無袖式であった可能性の方が高いとみるべきであろう。また、右側壁の開口部側の2石は右側壁と明らかに角度を変えて並べられており、この位置で石室を区別する(もしくは区画する)意識が働いていた結果

といえよう。これに対応する左側壁の石は明確ではないが、同様に屈曲していた可能性が高い。以上の点をまとめると、雄山 6 号墳の石室は無袖式の横穴式石室で、極端に短い羨道を有する構造であったとここでは理解しておきたい⁽³¹⁾。

石室の計測値は、全長3.48m以上で、玄室長2.92m、玄室奥壁幅1.24m、玄室中央幅1.28m、玄門幅1.12m、羨道長0.56m以上、羨道幅1.08m以上、現存高0.92mを測る。玄室平面形態は縦横の比が1:2.3の長方形プランを呈しており、玄室の寸法とあわせて雄山5号墳の石室とほとんど同じ値を示す。

壁面は、30~70cm 前後の安山岩の塊石・板石を使用して構築しており、石の積み方は基本的に壁面と直行する方向に小口を向けて積み上げている(小口積み)。右側壁と奥壁のコーナーは欠損しておりわからないが、左側壁とのコーナーでは両壁にまたがるような石材の使用は認められない。また、壁面はそれぞれ少し内傾しており、基底石から順にわずかづつ持ち送っているようである。石室壁面の控え積みであるが、基本的に行っておらず裏込めの盛土で壁面の背後を支えている。ただし、裏込めの盛土を行う際に、壁面に使用した石材とほぼ同大の石を数石埋め込んでいる箇所が数カ所みられた。

現存していた石材はすべて安山岩であり、雄山5号墳でみられたような花崗岩は全く使用されていない。安山岩は角や稜に丸みがある亜角礫が多く、丘陵下から運びあげられたものと考えられる⁽³²⁾。

石室の構築に先立って、旧地表面を浅めに掘り込んだ断面箱形の墓壙を築いているが、左側壁側(西側)の墓壙は鍵の手状の屈曲部が認められる。この屈曲部は、左片袖式の石室の構築を意図したことを示す可能性があるが、結局は墓壙の右側壁側(東側)寄りのところで屈曲部に関係なく直線的な左側壁を築いている。墓壙は長辺の一部が屈曲した隅丸長方形の平面形を呈しているが、開口部側(北側)の形状は確認できていない。その規模は検出長5.24m、検出最大幅2.56mを測る。

石室床面には、雄山5号墳のような板石や栗石などの敷石は施されていない。また、石室壁面の内側に赤色顔料を塗布した痕跡も認められない点も5号墳とは異なる点である。

墓道・閉塞施設

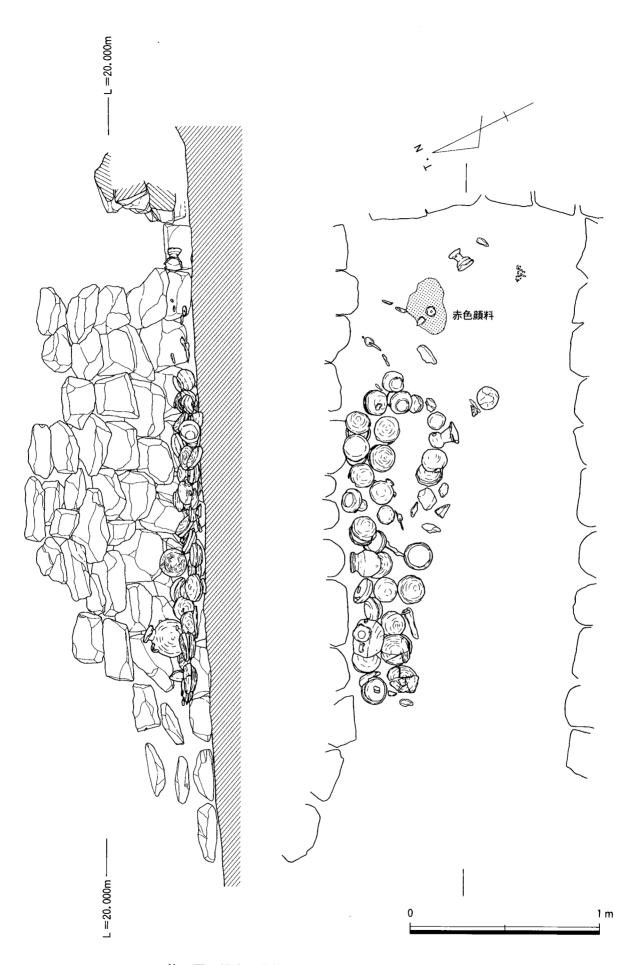
墓道に関しては、石室墓壙の開口部側の形状が確認できていないため、その有無は判断できない。ただし、墓壙の開口部側がすぼまるような形状を呈していることから、存在しているとしても雄山 4 号墳のような幅の広い短いものであったと想定される。

石室の閉塞であるが、玄門部で閉塞を行っているのか、羨道ないし羨門で行っているのか、塊石を積み上げるのか、板石で閉塞するのか、それを判断する資料は全く得ることができず、不明である。墳丘 完成時には羨道及び墓道(存在するとすれば)は埋め戻されていたことが予想されるため、何らかの方 法で閉塞が行われたものであろう。

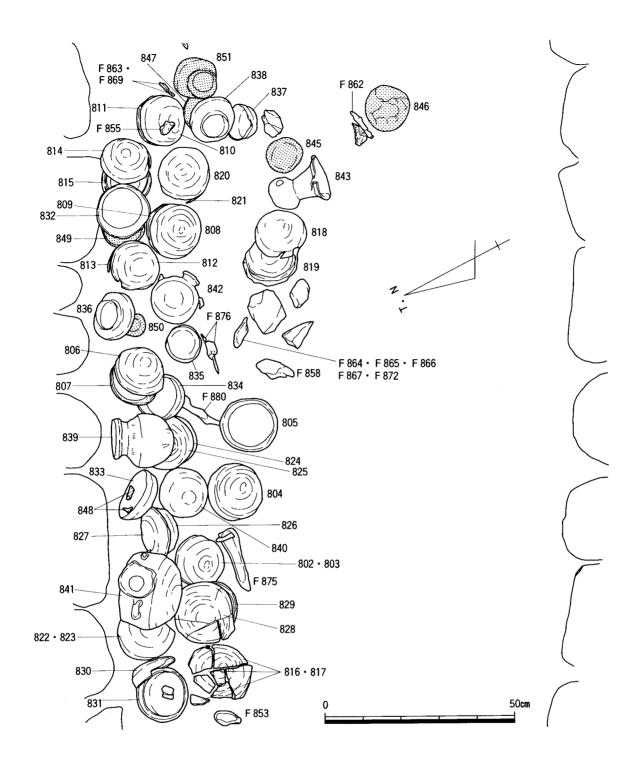
(3) 遺物の出土状況

石室(第95~97図)

石室の中からは、多量の須恵器をはじめとして鉄製品や玉類などの副葬品が最終的な埋納状況を保った状態で出土している。石室の主軸線から右側壁側の半分には多量の須恵器と少量の須恵器が列をなした状態で並べられていた。それらの土器群中には、鉄製品が散在していた。土器群の奥壁寄りの空間には赤色顔料が遺存しており、中央からは鏡が出土している。この周囲にも鉄製品が散在している。石室左側壁側の奥壁の前には管玉・ガラス製小玉などの玉類がまとまって出土している。この他の玉類とし

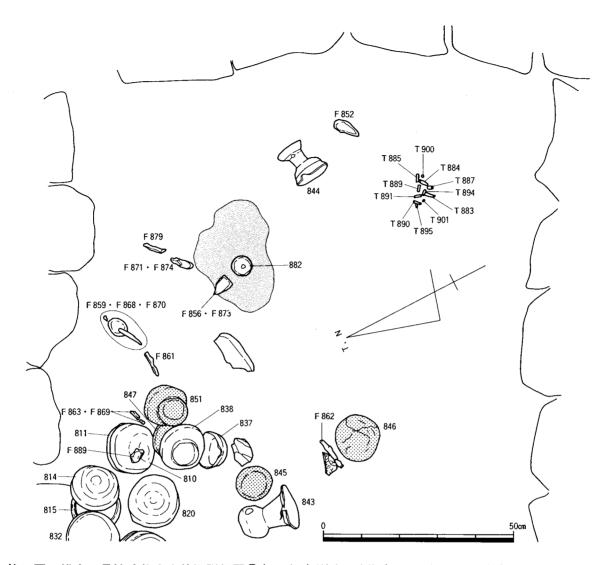


第95図 雄山 6 号墳遺物出土状況全体図 (1/20)



第96図 雄山 6 号墳遺物出土状況詳細図①(1/10)(数字は遺物番号と対応するFは鉄製品Tは玉類を示す) ては練玉がみられる。その横には須恵器の高杯が1点出土している。

右側壁沿いに集中する土器のうち完形のものには、須恵器の蓋杯が15セット、セットにならない杯蓋2、杯身1、蓋とセットの短頸壷2(ただし1セットは高杯の杯部を蓋に転用している)、壷2、提瓶2、 聴1、高杯1、土師器の椀3、把手付椀3、壷1がある。雄山5号墳の出土状況とは異なり、部分的に重なっているものも認められるが、ほとんどが重なっていない。とりわけ、須恵器の蓋杯は身と蓋がセットになって置かれているものが圧倒的に多く、蓋が開いた状態のものは3セットだけである。これらの土器群は右側壁に沿って2列に平行に並べられているが、中央付近はやや方向を異にする短い3列目がみられる。また、開口部側は右側壁が屈曲する直前で土器群が揃えられており、やはりここで



第97図 雄山 6 号墳遺物出土状況詳細図②(1/10)(数字は遺物番号と対応するFは鉄製品Tは玉類を示す)

石室を区画する意図がうかがえるのである。また、蓋杯の中には身の受部径が蓋の口径を上回るものが セットになったものも数点みられることから、本来のセット関係にないものを組み合わせたものも存在 している。セットになったまま身が上に向いている(逆さまに置かれている)ものも認められる。これ らの土器群と離れて奥壁の前で須恵器高杯(遺物番号844)が1点出土している。

鉄製品は、土器群中に散在するものと奥壁の前で土器とは離れて出土したものがある。土器群中で散在するものには鉄鎌・刀子・鉄鏃があるが、鉄鎌(同880)は須恵器身の下敷きになって出土している。 鉄鏃はまとまった状態にはなく、方向も統一されていない。奥壁の前のものも刀子・鉄鏃であり、特にまとめられたような状態ではない。

土器群と奥壁の空間部分には、20×30cmの不整楕円形の範囲で赤色顔料が遺存しており、さらにその中央には小型鏡(同882)が1面出土している。鏡面や周囲に布の痕跡は認められない。

玉類は、石室左側壁側の奥壁前に管玉8個とガラス小玉3個がまとまって出土している。これら以外には管玉9個・ガラス小玉13個・練玉11個以上を検出しているが、床面検出中に出土したため、本来の位置については確認できていない。

雄山5号墳と同様に、6号墳出土の鉄製品の中にも釘は全く認められず、また、棺材と思われるよう

な木片なども認められなかった。このため木棺を使用していたかどうかについては確認できなかった。

石室左側壁寄りの半分には玉類以外の遺物のみられない空間があることから、ここに遺体を埋納したことがわかる。さらに、玉類のまとまりが奥壁よりで出土していることから、被葬者は頭を奥壁側に向けていたことが想定できる。また、鏡と赤色顔料は被葬者の頭位近辺に埋納される例が多いことから、石室右側壁寄りにも頭を奥壁側に向けた被葬者が葬られていた可能性が極めて高い。1回の埋葬としては副葬された土器の数の多いことや逆さまになった土器や蓋の開けられた蓋杯などの出土状況と合わせて、追葬を1回行ったことが想定できる。石室右側壁側に鏡を副葬した最初の埋葬ののち、追葬時には右側壁沿いに土器の片付けを行い(33)左側壁側に埋葬を行ったことが復元できよう。

周溝・墳丘

墳丘の背後を取り巻く周溝の中からは須恵器などが出土している。特に周溝の南側(開口部の反対側) 底面では、須恵器の聴(遺物番号930)と高杯(同932)が一対で直立した状態で出土した。また、その やや西よりの部分では周溝底面に折り重なった状態で須恵器大型甕の破片が集中して出土している。口 縁端部の破片は1点も見あたらず、大型甕よりも破損しやすい聴や高杯が完形で出土していることから 類推すると、口縁端部を打ち欠かれた大型甕はこの場で破砕されて、その破片をまとめて周溝底に投棄 されたものと思われる。この他には周溝の埋土から須恵器横瓶や須恵器壷の口縁部、弥生土器小片が出 土しているが、弥生土器は周辺から流れ込んだものであろう。

また、墳丘南西部分の調査中に完形の蓋杯などの須恵器や玉類が出土している。調査当時は、古墳の 墳丘を構築する途中に祭祀的な意味合いで墳丘中に埋めたものとの判断をしていたが、土層断面と出土 位置の詳細な検討の結果、これらの土器群は、墳丘の中央部に攪乱坑を掘った際に石室に納めてあった ものが掘り出されたものであることが判明した。須恵器蓋杯の年代観も石室内のものと同時期である。

(4) 出土遺物

石室出土遺物

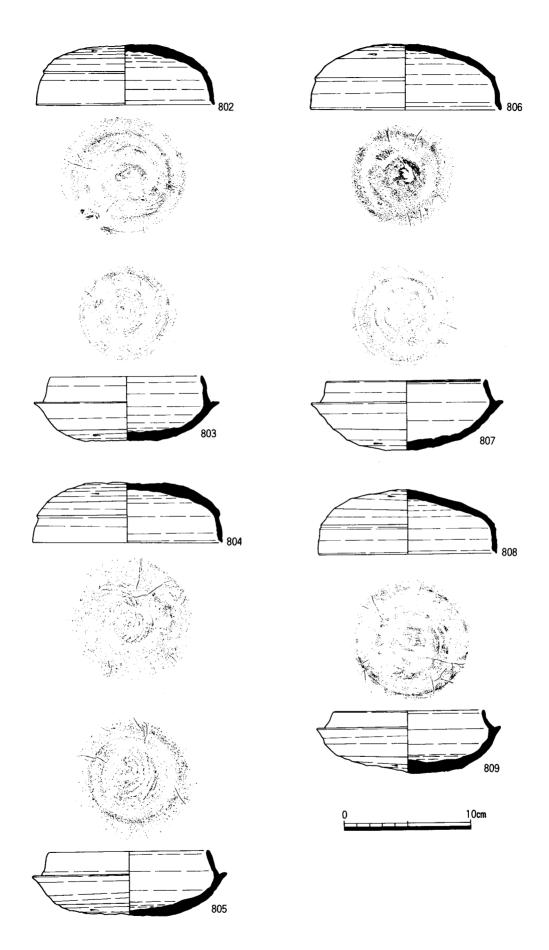
須恵器 (第98~101・105図)

蓋杯 (802~834)

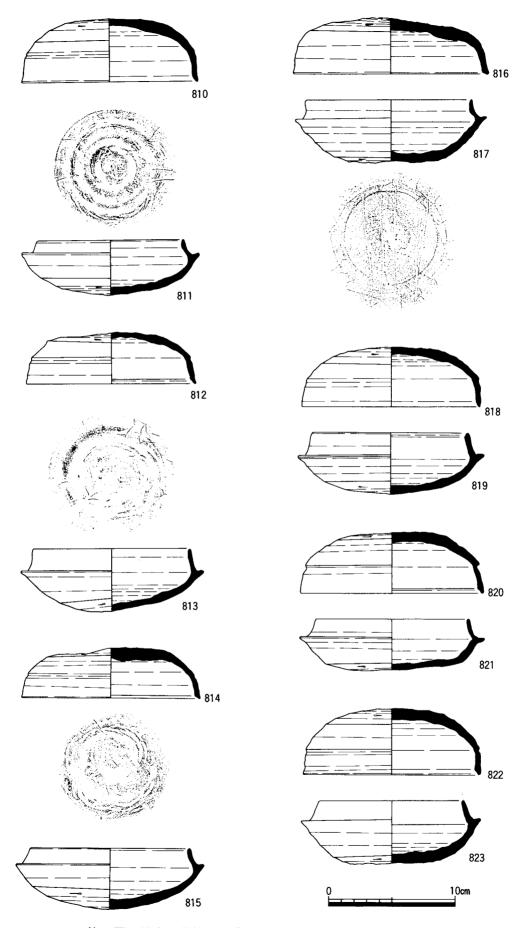
出土時にセットになっていた蓋と身を、図面上では上下に並べてレイアウトした。802~831まではセットをなすもので、832~834まではセットをなさないものである。

杯蓋は口径13.1~15.5cm, 器高3.9~6.0cm と法量にばらつきがあり, 形態についても天井部が丸いものや平らなもの, 器高の高いものや低いものなどがみられる。口縁部と天井部の境も稜を持つものや沈線・凹線を巡らせるものなどがみられ, 口縁端部も内傾する凹面をなすものや段を持つもの, 丸く納めるものなどのバラエティーがある。ロクロの回転方向はわずかに左回転のものが多い傾向がある。天井部の内面に同心円スタンプの痕跡を残すものが17点のうち7点にみられ, そのすべてがナデ消そうとしているが, 完全に消し切れていないものが4点ある。

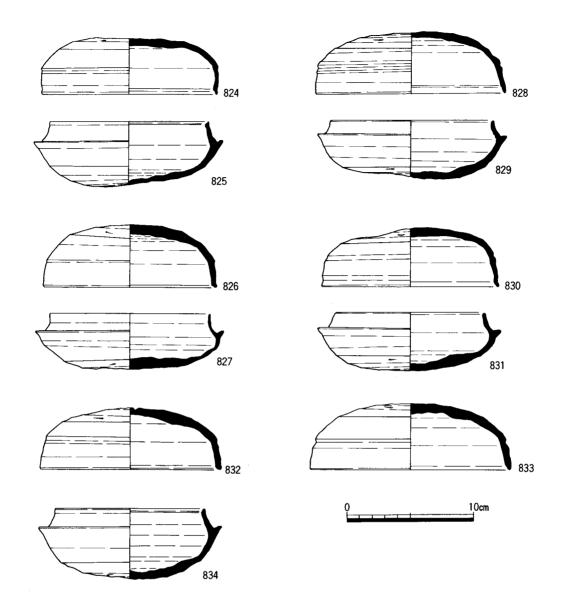
杯身は口径11.2~12.9cm,器高4.1~5.6cmと,蓋と同様に法量にはばらつきがある。形態も底部が 丸いものや平らなもの,器高が深いものや扁平で浅いものなどがみられる。口縁部の立ち上がりはまだ 長めで内傾する傾向があり,直線的に内傾するものや屈曲するものがみられる。口縁端部も内傾する凹 面をなすものや段を持つもの,丸く納めるものや鋭く尖り気味のものなどがありバラエティーに富む。



第98図 雄山 6号墳石室内出土遺物実測図① (1/3)



第99図 雄山 6号墳石室内出土遺物実測図②(1/3)



第100図 雄山 6 号墳石室内出土遺物実測図③(1/3)

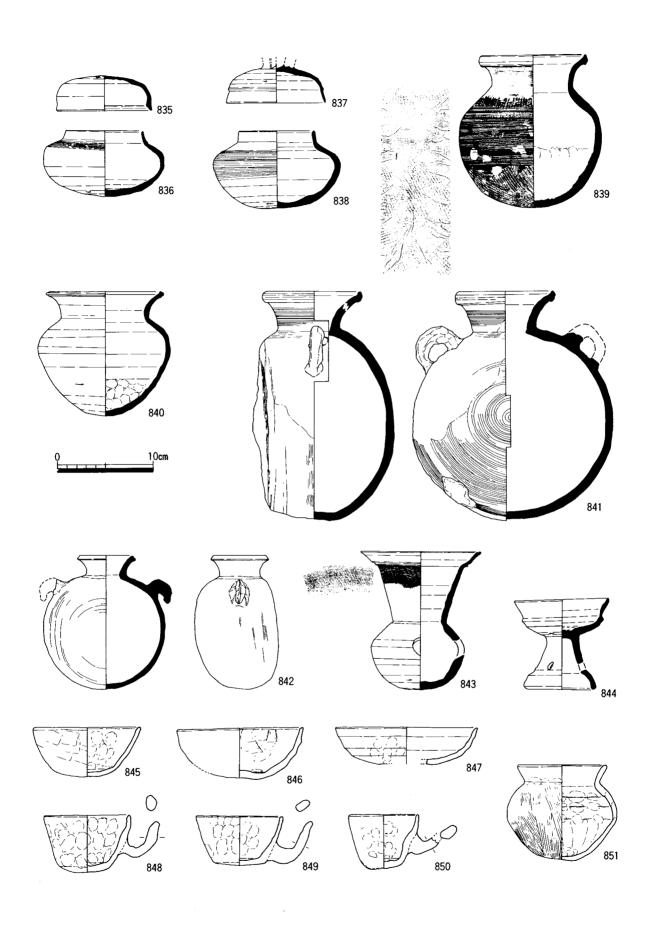
ロクロの回転方向は右回転・左回転が1対1の割合であり、どちらかが優勢というわけではない。底部の内面に同心円スタンプの痕跡を残すものが12点みられるが、すべてナデ消そうとしているが、完全に消し切れていないものが6点ある。同心円スタンプは805のように中心部に1つのみのものもあれば、811のように中心の周囲に複数のスタンプの痕跡がみられるものもある。

短頸壷(835・836・838)

蓋が1個と身が2個出土している。蓋835と身836はセットになった状態で出土した。身838は脚部を 欠損した高杯の身(837)を蓋の代用としてセットになって出土している。蓋は器高が低く扁平な感じ が強いもので、わずかに丸みを持つ天井部で、口縁端部は凹面をなし段を持つ。身はともに短く直立気 味に内傾する口縁部と肩の張った偏球形の胴部という形態をとるが、836の方がやや小振りである。

壷 (839・840)

839はややなで肩気味の偏球形の体部に大きく外反する口縁部が付くもので、口縁端部は上下に肥厚気味に拡張させている。体部外面下半及び肩部に平行叩きを施し、頸部と体部中央にはカキ目を施している。底部は丸く仕上げている。840はやや肩の張った体部に尖り気味の底部と大きく開く口縁部を持



第101図 雄山 6号墳石室内出土遺物実測図④(1/4)

つもので、口縁端部は上方に摘み上げるように収めている。

提瓶 (841・842)

841は円形の体部の前面が丸く膨らみ、肩部には環状の把手を貼り付けている。口縁部はラッパ状に開く形態で、口縁端部はやや上下に拡張して肥厚させている。体部の平坦面には、円盤状の蓋を貼り付けた痕跡が明瞭に残る。肩部を中心に自然釉がベッタリと付着し一部には玉だれがみられる。842は小型品で、やや扁平につぶれたような体部の肩部には鉤形の把手が貼り付けられている。口縁部は外反しており、端部はやや肥厚して平坦面を持つ。

璲 (843)

体部の最大径は体部中位よりやや上方にあり、なで肩で偏球形の体部を呈する。頸部はやや長めで直立気味に外方へ開き、内彎気味に大きく開く口縁部が付く。端部はやや内傾する凹面を持つ。頸部上半に波状文を施している。口径は胴部最大径を凌駕している。

高杯 (837・844)

837は無蓋高杯の杯部のみの出土で、短頸壷の蓋に転用されていた。杯部中位には弱い稜を持ち、口縁部はやや外反気味に開いている。脚部は長脚化したものが付いていたと思われ、わずかに3方向から 穿たれた長方形の透かし孔が残っている。接合できる脚部破片は石室内からも出土をみていない。

844はまだ脚部があまり長脚化していない小型の無蓋高杯である。杯部の中位には稜を持ち、口縁部は外反気味に外へ開いている。脚部は端部が内彎気味に屈曲するもので、円形の透かし孔が3方向からの穿たれている。

甕 (927)

927は石室内に流入した埋土のやや下位で検出した甕の破片である。やや外反気味に立ち上がる頸部に内彎する口縁部を持つ。端部はやや肥厚気味に丸く仕上げている。肩部は直線的に外方へ開いている。外面の調整は平行叩きの後に部分的にカキ目を施している。内面には当て具痕が明瞭に残っている。

土師器 (第101図)

椀(845~847)

3点が出土している。いずれも口縁部が内彎するもので、丸みを帯びた底部になだらかに連続している。845は器壁が薄く仕上げられており、847は浅く杯のような形態を持つ。

把手付椀 (848~850)

3点が出土している。雄山5号墳出土のものに比べると一回り以上小さい。いずれも外上方に内彎気味に立ち上がる口縁部と丸みを帯びた底部を持ち、外面に牛角状の把手を貼り付けている。849は平らな底部を持ち、把手は外面下位に貼り付けている。3点とも指頭痕が残る。

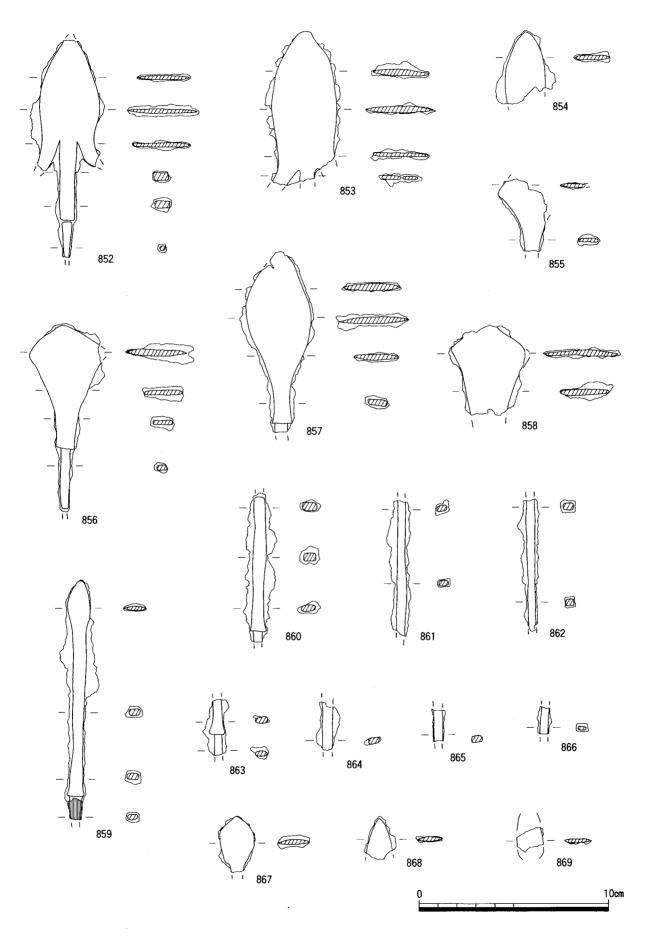
童 (851)

算盤形の胴部に短く外反気味に立ち上がる口縁部が付く壷である。外面はハケ調整で仕上げており、 内面には指頭痕が明瞭に残る。黒斑は認められないが、胴部外側の一部に赤彩の痕跡のようなものがみ られる。

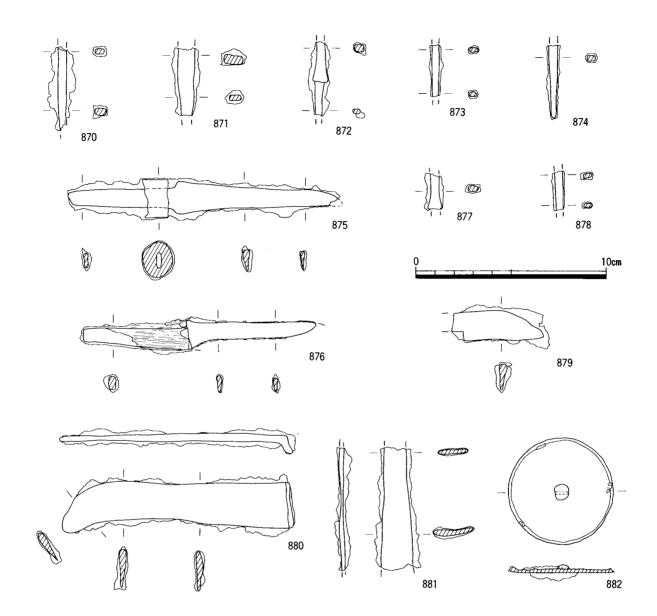
鉄製品 (第102·103図)

鉄鏃 (852~874·877·878)

鉄鏃には腸抉三角形鏃 (852・853), 三角形鏃 (854), 圭頭鏃 (855~858), 長頸鏃 (859~869) がみ



第102図 雄山 6 号墳石室内出土遺物実測図⑤ (1/2)



第103図 雄山 6 号墳石室内出土遺物実測図⑥ (1/2)

られる。腸抉三角形鏃は身の長さや形態が似ており、逆刺も外へ開いている点が共通している。852の 頸部関は角関である。854は三角鏃の身としたが、腸抉三角頸鏃の鏃身である可能性もある。圭頭鏃も 鏃身幅が似ており、関の判明したものは角関である。857は圭頭鏃としたが、三角形鏃の可能性もある。 長頸鏃のなかで全体の形状のわかるものは859しかみあたらない。859の頸部関は撫関であるが、867は 角関になる可能性がある。また、頸部関が判明したものはすべて台形関であった。859の茎には木質が 遺存している。この他に頸部や茎の破片など(870~874・877・878)が出土している。

刀子 (875 · 876 · 879)

875はほぼ全体が残る両関の刀子で、径2.0cm、幅1.6cmの鉄製の飾金具(把口金具)が錆着しながら残っている。876は茎の長さ5.6cm、関での刃幅1.7cmで茎には木質が遺存している。879は関付近の破片で、関部での刃幅1.7cmを測る。

鉄鎌 (880)

長さ12.3cm, 刃幅2.1cm の曲刃鎌で, 基部は折り曲げている。着柄角度は97度を測り, やや鈍角気

味の直角柄である。

鉇 (881)

881は残存長6.2cm, 最大幅1.6cm でややすぼまり気味の板状を呈する。ここでは鉇と判断したが、他の器種の可能性もある。

鏡 (882)

鈍い銀色を呈する銅鏡で、赤色顔料に包まれるような状態で鏡背面を上にして出土した。遺存状態は 良好であり、X線写真でも亀裂や欠損は認められなかった。ただし、鏡背には土砂が硬くこびり付いて おり、肉眼で文様を確認することは不可能な状態であった。本文執筆中の段階ではまだ保存処理中であ るため、後述する文様などはすべてX線写真を資料として記述したものである。

鏡は面径5.6cm, 鈕座径0.8cm, 鈕の高さ0.3cm, 縁の厚さ0.5cm をはかる。周縁端部をわずかに厚くして縁部を意識していると思われる。

鏡背の文様は、鈕座や周圏を持たない鈕の周囲に、4~5重の円形に珠文を巡らせた珠文帯がある。 一部に重複するような部分もあり、同心円状というよりは渦巻き状にもみえるものである。その外側に は櫛波文帯を巡らせ、さらにその外側で周縁端部の際にかけては「の」字のような変形渦巻き文帯を巡 らせている。X線写真の観察によると、この変形渦巻き文帯は周縁に接するように施されている。鏡面 側に文様を施している可能性もあるが、通常は鏡面には文様を施さないため、鏡背の周縁の斜面部分に 変形渦巻き文帯が施されていると考えたい。

鏡面や鏡背には布などの付着した痕跡はみられなかった。

玉類 (第104図)

管玉 (883~885・887・889~891・894・895)

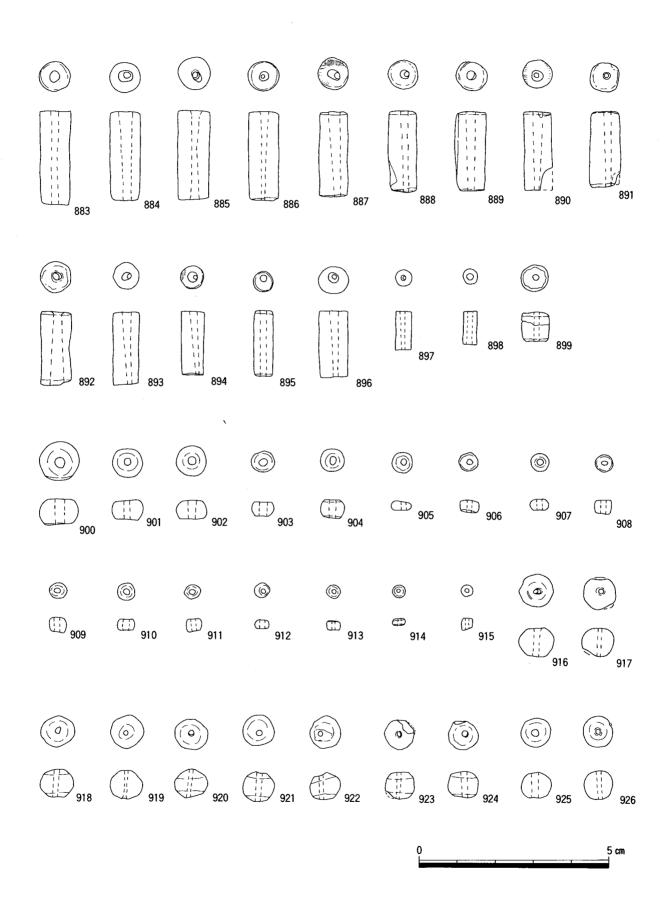
濃緑色を呈した碧玉製のもの(887・889~891・894)と緑白色を呈した緑色凝灰岩製のもの(883~88・895)の2種類の材質がみられる。片側からの穿孔のものが多いが、885・895の2点は両側から穿孔している。直径は7.5~4.5mm,長さは16.5~24.0mmの範囲におさまる。緑色凝灰岩製のものは表面が風化しているが、碧玉製のものは丁寧に研磨されており、小口部分には研磨痕がみられるものも認められる。また、碧玉製のものにはわずかに縞模様が入るものもみられる。

小玉 (900·901·904·906~915)

すべてガラス製の小玉である。直径10.0~3.0mm のもので、直径6.0mm 前後を境として大小に2分することができる。基本的な形態としては、扁平な球形を呈するものが多いが、908や911などは断面が方形の臼玉状を呈している。色調は青色を基本とするが、紺色や淡青色を呈するものもある。大きさによって色が異なるというわけではないようである。いずれも光沢を持つものである。901はガラス内部に細い白色の線が3本入っているのがうかがえる。

練玉 (916~922・924~926)

6号墳から出土した練玉は少なく、墳丘盛土から出土したもの(本来は石室内のものと思われる)や、破片として出土したものを含めても11個体強しか認められず、5号墳における練玉のあり方とは大きく異なっている。直径は7.5~9.0mm、重量は0.4g前後とほぼ同大で、黒褐色を呈するものが多いが、中には灰色を呈するものも認められる。断面の形状も円形を呈するものがほとんどであるが、924は隅丸方形に近い形状を呈している。穿孔はおそらくすべて片側穿孔であると思われる。



第104図 雄山 6 号墳石室内及び墳丘盛土内出土遺物実測図⑦(1 / 1)

周溝出土遺物 (第105図)

須恵器壷 (928・929)

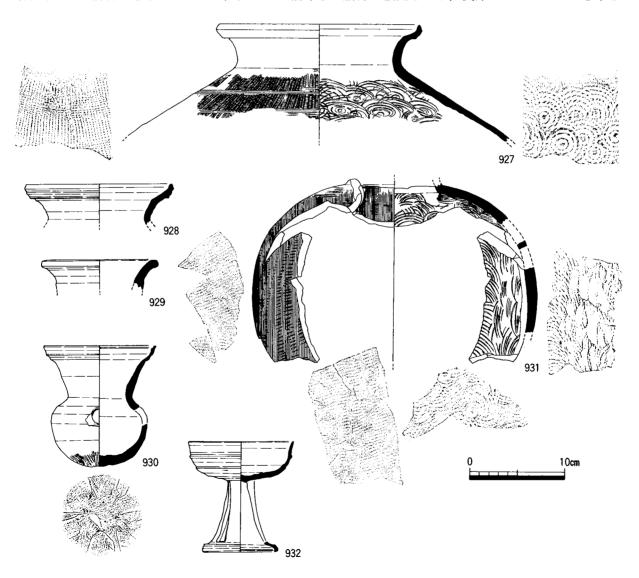
いずれも口縁部の破片が出土している。928は途中で屈曲して外反する口縁部に内彎気味に立ち上がる端部を持つ。端部は丸く収められており、外面には凹線を施す。929は直立気味の口縁部が大きく開いて端部に至るもので、端部は丸みを持って収められておりわずかに面を持つ。

須恵器碗 (930)

後述する須恵器高杯(932)とセットで周溝の底面に直立した状態で出土した。直線的に外上方へ短めにのびる頸部に、内彎気味に開いて立ち上がる口縁部を持つ。端部は内傾する凹面をなしている。口径は胴部最大径をわずかに凌いでいる。胴部はわずかに肩の張る偏球形を呈している。底部は平行叩き調整で仕上げられており、丸みを持つ。

須恵器横瓶 (931)

周溝の埋土中から破片で出土した。外面調整の平行叩きとカキ目の方向から、横瓶の胴部と判断した。 部分的にしか接合できなかったため、図上では偏球形の胴部に復元したが、実際のところははっきりし



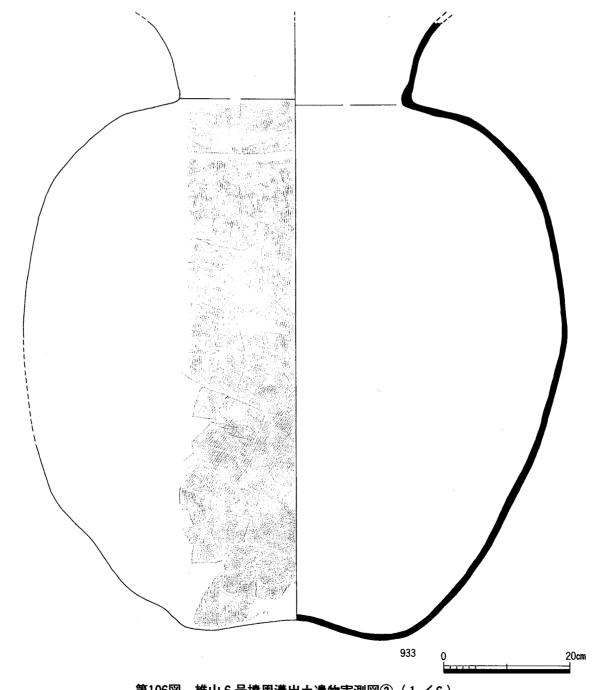
第105図 雄山 6 号墳石室内及び周溝出土遺物実測図①(1/4)

ない。偏球形(俵形)の胴部にやや内傾しながら外反する口頸部が付いていたものと思われる。 須恵器高杯 (932)

先述した須恵器聴とセットで出土した無蓋の高杯である。杯部は中位に稜を持ち、やや外方に開き気 味の口縁部が付く。口縁端部は丸く収められている。脚部はやや長めで端部付近で外へ大きく屈曲し、 湾曲気味に収めている。透かし孔は長方形で3方向から穿孔している。文様は施されていない。

須恵器甕 (933)

周溝の底面にへばりつくような形に折り重なった破片の状態で出土した。接合したところ、底部から 口頸部までを復元することができたが、口縁端部の破片は全く出土していない。最大径をほぼ胴部中位 に持つ球形の胴部に大きく外反しながら開く口頸部が付く形態で、胴部最大径85.8cm、器高は残存で



第106図 雄山 6 号墳周溝出土遺物実測図② (1/6)

98.4cm を測る大型品である。調整は外面が叩き調整で仕上げられており、内面は当て具痕を丁寧にナ デ消している。底部と胴部の下半の一部が大きく焼け歪んでいる。

他の場所で口縁部を意図的に打ち欠いたのちに、周溝内に収めたか、周溝内で破砕したという行為が 出土状況から想定できる。

- 墳丘盛土出土遺物(第104・107図)

石室の南西側の墳丘盛土の最上部で須恵器と玉類が出土した。調査当時は墳丘構築時に墳丘内に埋納した土器・玉類と考えていたが、整理作業の過程で、中央に掘られた攪乱坑の土が堆積したものであり、 土器類は石室の内部から土と共に掘り出されたものであることが判明した。須恵器蓋杯の形態は石室内の蓋杯の形態と類似しており、同時期のものと判断できる。

須恵器杯蓋 (934~936)

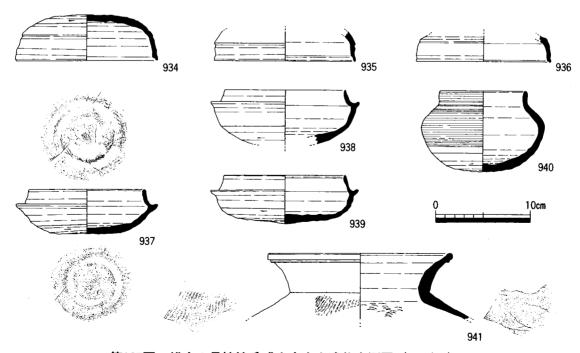
完形品 (934) を 1 点含んだ 3 点が出土している。いずれも口縁部と天井部の境に弱い稜を持ち、端部は内傾する凹面を持つ。936の端部には段がみられる。934の天井はやや平坦である。胎土や焼成、ヘラ削りの感じなどからみて蓋934は身937とセットであった可能性が高い。

須恵器杯身 (937~939)

杯身も完形品 (937) を 1 点含んだ 3 点が出土している。口縁端部の立ち上がりは, 937と938が屈曲 気味に内傾して立ち上がるのに対して, 939は直線的に内傾して立ち上がっている。口縁端部も937と938 が丸く収めているのに対して, 939は内傾する凹面をなしている。938は器高がやや深めに復元したが, もう少し浅い可能性もある。937は平坦な底部外面にシッタのような台座とみられる痕跡が 3 カ所にみられる。

須恵器短頸壷(940)

身が1個出土した。ややなで肩で偏球形の胴部に短く直立する口縁部を持ち、端部は丸く収めている。 口縁部及び胴部上半にカキ目を施している。



第107図 雄山 6号墳墳丘盛土内出土遺物実測図(1/4)

須恵器甕 (941)

口頸部の破片が出土している。短めに大きく外反する口縁部で、端部はやや肥厚させて丸く終わっている。外面に凸帯状を1条巡らせている。

管玉 (886・888・892・893・896~899)

8 個が出土しており、濃緑色を呈する碧玉製のもの(886・893・896~899)と緑白色を呈する緑色凝灰岩製のもの(888・892)がみられる。897・898は他に比べて直径が4.0mm 程度、長さが9.0mm 前後と一回り小さいものである。また、899は長さが6.5mm と他に比べて短く、欠損品を再加工した可能性がある。

小玉 (902·903·905)

3点ともガラス製の小玉である。902・903がやや大きめで紺色を呈しているのに対して、905は小さめで淡青色を呈している。いずれも断面が偏球形をしている。

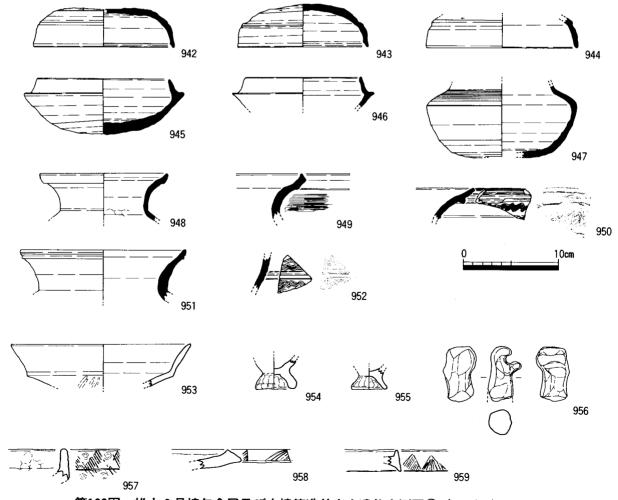
練玉 (923)

1点のみが出土した。黒褐色をした球形をしており、一部を欠損している。

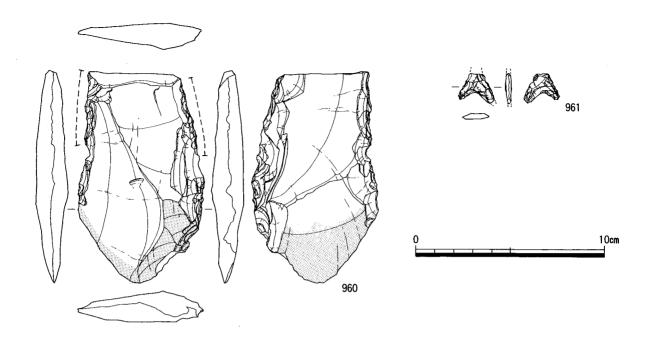
(5) その他の遺構・遺物

包含層出土遺物・古墳築造以前の遺物 (第108図・109図)

雄山6号墳の調査区の包含層及び墳丘築造前の土層から出土した遺物をまとめた。



第108図 雄山 6 号墳包含層及び古墳築造前出土遺物実測図① (1/4)



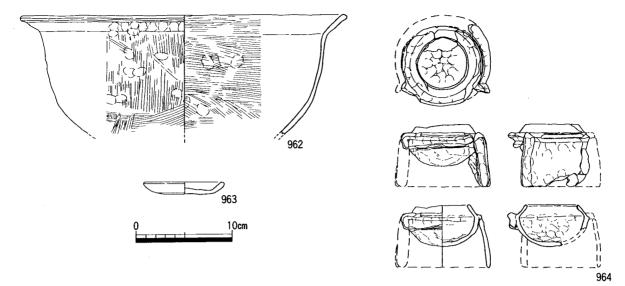
第109図 雄山6号墳包含層及び古墳築造前出土遺物実測図②(1/2)

942~953・960・961は包含層から出土した遺物である。942~944は須恵器杯蓋で、口縁部と天井部の境は942・943が沈線を、944が凹線をめぐらせている。また、口縁端部は942・943が内傾する凹面をなすのに対して、944は丸く収めている。天井部の形態は942が平坦面を持つが943は丸くなっている。946は須恵器杯身である。口縁部の立ち上がりは直線的に内傾しており、端部は丸く収めている。947は須恵器短頸壷である。肩の強く張った胴部に内傾する口縁部が付くもので、肩部外面にカキ目を施している。948・949は須恵器壷である。948は屈曲気味に大きく外へ開く口縁部で、端部は肥厚して丸く収めている。949は外面にカキ目を施している。950~952は須恵器甕である。950は大きく開く口縁部を持ち、外面に1条の凸帯を貼り付けている。凸帯下には櫛描き波状文を施している。951は甕としたが壷の可能性がある。952は外面に櫛描き波状文を施す小破片で、器台の一部と判断したが他の器種の可能性がある。953は土師器高杯の杯部である。屈曲して外反気味に外方へ開く口縁部を持つ。杯部下半にヘラミガキを施している。960はサヌカイト製の打製石斧である。刃部には使用による磨滅痕・擦痕が明瞭に残っており、基部側縁には敲打痕がみられる。961は先端を欠損する凹基式の打製石鏃である。サヌカイトで作られている。

954~959は雄山6号墳の石室の掘方を断ち割った際に、墳丘築造前の旧地表以下から出土した土器である。954・955は製塩土器の脚台部である。956は人物の手のような形をした土製品であり、人物埴輪の可能性もあるが、墳丘築造前の土層から出土しており別の土製品であろう。957~959は弥生土器の小破片で、いずれも弥生時代後期に属するものである。

SK01 (第91·110図)

雄山 6 号墳の周溝内の南西部で検出した土坑である。土坑の埋土が周溝の埋土と近似していたために、 周溝の掘り下げ時には確認できず、周溝の底面において検出した。検出レベルでの規模は南北60cm、 東西40cm の楕円形で、深さは25cm であった。おそらく 6 号墳の周溝が埋没した後で、上から掘り込ま れたものと考えられるが、上半部の形態や規模については確認できていない。土坑の内部からは土師質



第110回 雄山 6号墳 SK01出土遺物実測図(1/4)

土器鍋・土師器小皿・土師質の竈と鍋のミニチュア品が出土している。

962は口径33.2cm の吉備型の土師質土器鍋で、口縁を下にした状態で出土している。器壁が薄く作られており、内・外面共にハケ目調整を基調としている。底部を欠損しているが土坑内からは底部の破片は全くみられず、底部を打ち欠いた後に土坑内に伏せ込んだことがわかる。963は鍋の内部に納められていた土師器小皿である。口径が8.2cm、器高が1.3cmを測り、底部はヘラ切りである。964は鍋が竈に掛けられた状態を表現したミニチュア品である。鍋の口径が15.6cm、全体の器高は6.6cmを測る。鍋の底部外面は煤が付着しており、実際に火を受けた痕跡が残っているが、サイズ的に実用品とは考えにくい。鍋と竈を別々に作り最後に接合したことが判明している。このミニチュア品も鍋の内部から出土している。鍋や小皿の年代観から、12世紀後半~13世紀にかけての鎌倉時代の遺構であることがわかる。

(6) 小結

雄山6号墳は、直径約12mの円墳で、山側には周溝を馬蹄形に巡らせていた。ほぼ北西に開口する無 補式の横穴式石室を埋葬施設としており、石室には極端に短い羨道を有し、その先には素掘りの墓道が 取り付く構造をしていたと想定される。

後世の開墾で石室の上半部を失い土砂が流入したために、埋葬時の遺物が良好な形で保存されていた。 須恵器を中心とした土器群は石室の右側壁沿いに列をなしており、蓋杯がセットになった状態で多量に 出土している。鉄製品は少量であり、武具は鉄鏃だけで、他は鉄鎌や刀子などの農工具である。玉類に は管玉・小玉・練玉がみられる。奥壁前の赤色顔料の中に銅鏡が1面副葬されていた点は特筆される。 埋葬には木棺の使用が想定されるが、石室内からは釘はまったくみられず、5号墳と同様に刳抜式か木 釘などを使用した木棺が使われたものと思われる。鏡の出土状況や、玉類のまとまった出土、列をなし た土器群と土器群中に散在する鉄器などのあり方から追葬が行われた可能性が極めて高い。

出土した須恵器の蓋杯は、5号墳石室のものと同じ特徴を持ち、概ね大阪府陶邑古窯址群田辺編年の TK10型式の特徴と類似している。須恵器の他器種の年代観もそれと矛盾するものではないと思われる。

雄山6号墳は6世紀中頃に築造された古墳で、築造時の初葬の段階で石室右側壁側に鏡を副葬した遺体を納め、それからあまり時間をおかない段階(須恵器一型式分の範囲)に石室左側壁側に追葬を1回行ったと推測される。

4 雄山 7号墳

予備調査で確認した古墳である。石室基底石がかろうじて残る程度の遺存状況で、古墳の上部構造の大半は失われていた。しかし遺物の遺存状況は良好で、玄室床面には須恵器・鉄製品が原位置を留めた状況で出土している。

調査方法は石室規模・主軸に合わせ、玄室内を4分割するセクションを設定し、それを墳丘に延長した。予備調査等の関係により、石室北西小口前面・墳丘盛土西端付近の一部を失ったため、当該箇所のセクション図は存在しない。

(1) 墳丘と外部施設

立地 (第111図)

1~6号墳は尾根斜面部に周辺地形に平行してほぼ一列に並んで立地しているが、7号墳は趣を異にしている。前述したように、4号墳は雄山から北東に延びる尾根とそこから瘤状に派生する尾根の付根に位置しており、7号墳はこの派生する尾根の現状での頂部付近から東斜面にかかる位置に占地する。4号墳との墳丘裾部間距離は約5mと近接しており、さらに対象地外に所在する3号墳(見かけの墳裾)とも近い位置関係となる。なお、7号墳玄室床面の標高は、約13mを測る。

墳丘 (第111・112図)

直径約6.5m前後を測る円墳である。上部は削平により失われていたが、周溝上端から約0.5mの高さで墳丘は遺存している。石室は墳丘中心やや南西に位置している。

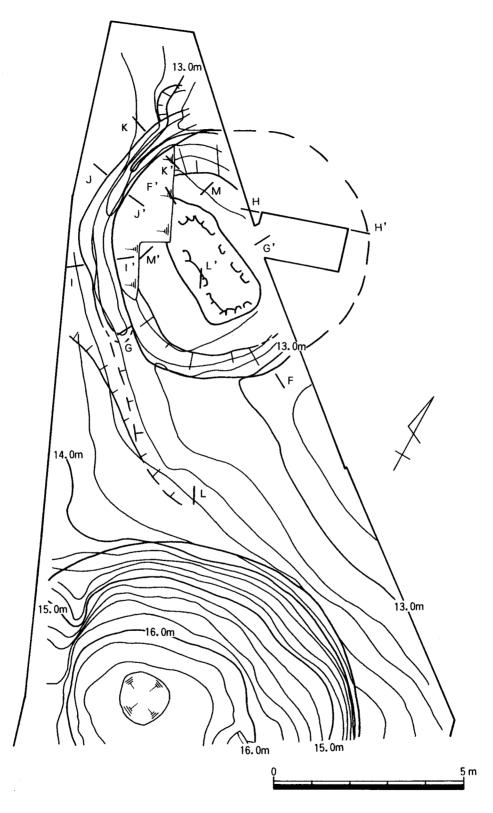
盛土の状況は、4号墳で示したような詳細な報告ができる遺存状況ではないが、墓壙掘削を含む石室 構築と関連した墳丘築造を想定することができる。以下、順を追ってその状況を説明する。

第112図の土層番号 2 (以下、土層番号のみ明記) は、旧地表を示すと考えられ、おおむね旧地表に沿った傾斜で堆積している。石室に直交・平行した両セクションに認められ、旧地表はおおむね南から北方位に10°の角度をもって傾斜していることが分かる。F—F'間のセクション図によると、墳丘南東付近で旧地表が途切れており、旧地形の整形を行ったと想定できる。

次に1の盛土がなされる。その範囲はセクション図によると、おおむね墳丘北半に限られており、斜面下方側、つまり旧地表の痩せている箇所に盛土を行うことによって、墳丘基礎を築造すると同時に、水平な墓壙掘削面を整えたと考えられる。墓壙掘削前の盛土であり、4号墳で確認した基部盛土と共通した性格のものである。盛土施行状況は、版築工法に準ずるような盛土ではなく、一度に積んでいるため、軟弱なものである。

基部盛土施行後、墓壙は掘削されるが、G—G'間セクションによると、掘り込み面は石室南西側では地山整形面であり、北東側では削平により明らかでないが、おおむね削平面とほぼ同レベルであったと想定することができる。土層観察の限りでは、墓壙深度は極めて浅く、基底石設置後、墓壙内裏込め土が充填され、その後石室構築と平行した盛土である4が積まれている。

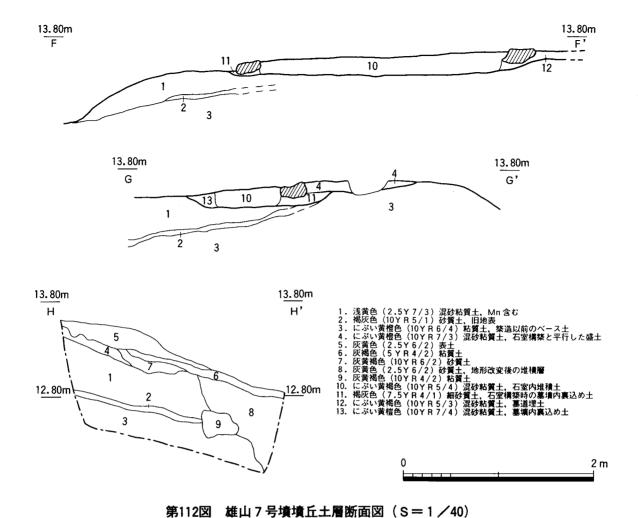
以上,墳丘築造と石室構築の関係をまとめると,①旧地形整形,②基部盛土,③墓壙掘削,④墓壙内 裏込め,⑤石室構築と平行した盛土という墳丘築造・石室構築過程が復元できる。



第111図 雄山7号墳墳丘測量図 (S=1/100)

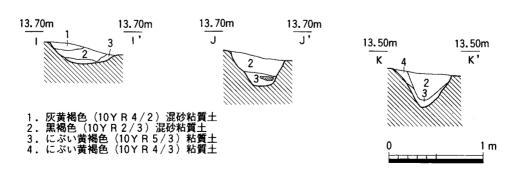
周溝 (第113図)

明確な掘り込み断面をもつ周溝が、尾根頂部側を中心に確認できる。周溝幅は0.6~0.7mを測り、0.3 m前後の深度をもつ。断面形状はセクションの設定箇所それぞれで異なり、 U字形・逆台形・浅い皿状

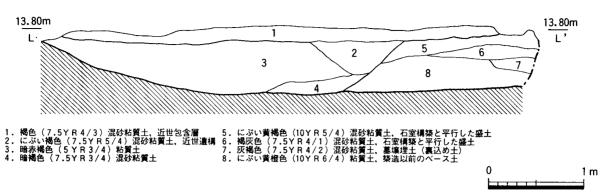


と多様である。埋土は開削後、緩やかに流入したにぶい黄褐色粘質土が下層ないし肩部に堆積し、その 後黒褐色混砂粘質土が一度に堆積し、最終的に埋没している。

4号墳との間隙部分(墳丘南東側)には明確な周溝は確認できず、幅広かつ浅い溝状の落ちがみられる。この溝状落ちが4号墳に伴い、明確な掘方をもつ周溝と重複関係を有するため、当該箇所でそれが確認できないという可能性も残るが、第114図の土層断面等が示すように、前後関係を肯定できるものではない。そのため、周溝平面プランは尾根頂部側に位置し、墳形に沿って馬蹄形を呈していたと考えられる。



第113図 雄山7号墳周溝断面図 (S=1/40)



第114図 雄山7号墳及び4・7号墳間土層断面図(S=1/40)

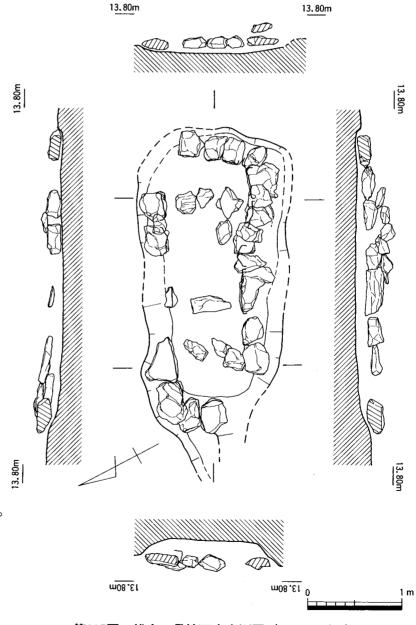
(2) 埋葬施設

石室 (第115図)

埋葬施設はN61°Wにとる横 穴式石室で,周辺地形に対し斜 行する主軸方位をとる。地形改 変による削平のため,基底石を 残す程度の遺存状況で,基底石 すら確認できない箇所もある。 平面規模は石室全長2.82m,玄 室長2.54m,玄室奥壁幅0.93m 玄室中央幅0.74m,推定玄所。 幅0.46mを測る。後述するが, 羨道部は存在せず,墓壙掘削時 に届り込まれた墓道が連 結している。

墓壙は地山整形,基部盛土設置後に掘削されている。平面形はおむね長方形を呈し、一方の小口部には舌状に延びる墓道が取り付くと想定できる。墓壙長軸長約3.1m,幅1.4~1.6mを測り、基底石設置後の裏込めが十分行えない程の規模である。また、深度は0.1~0.2mと浅く先に触れたように基底石レベルから石室構築と平行した盛土が施されている。

玄室プランは中央部において



第115図 雄山7号墳石室実測図 (S=1/40)

土圧により内側にせり出していることを考慮しても、極端に幅狭であり、竪穴式石槨の可能性も想定可能である。しかし右側壁と玄門部の隅角部分で、右側壁の石材が玄門部の石材の上に置かれている点を重視し、右片袖式の横穴式石室と判断した。玄門部幅に比して奥壁幅がやや幅広であるが、羽子板状プランと言えるものではなく、元来は狭長な長方形プランを呈していたと想定できる。また、棺台設置個所と奥壁側両側壁の間隙がほぼ等間隔である点から、奥壁側に限っては、原位置に近い状態であると想定できる。

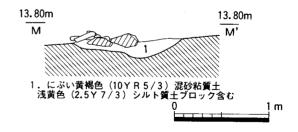
床面は墓壙掘削時の底面には10石の石材を確認した。そのうち木棺を安置させるための棺台と思われる石材が7石あり、他は転落した壁体使用石材等であると考えられる。棺台の上端レベルは奥壁側がやや高く、埋葬頭位を奥壁側に向けていた可能性があるが、詳らかではない。なお、床面の高さは墓壙底面と同様であるが、基底石を見ると奥壁寄りでは床面上に置かれているが、中央部から玄門部側にかけて、基底石設置箇所に0.1m弱の置土を行っている。調査段階では、右片袖の横穴式石室で、一部の基底石は置土を行った後に設置すると想定したが、類例に乏しく、検討の余地がある。

基底石の石材は、30cm 前後の塊石から厚さ10cm にも満たない板状石材までみられ、大きさ・形状の整った石材を使用する意図は読み取れない。前述したように基底石設置レベルも一様でなく、奥壁側のみ墓壙底面(玄室床面)に置かれている。石材の積み方も、横積み・小口積みが混在し、規則性はみられない。左側壁の一部に基底石より上段の壁体が遺存しており、その在り方は、基底石使用石材と大差のない塊石を横積みないし小口積みしている。しかし、これらの壁体は土圧により激しく内傾し、削平段階に原位置を失っている可能性が高い。

墓道・閉塞施設 (第116図)

予備調査により大半を掘り抜いてしまい、全容は明らかでないが、墓道は墓壙と同時に掘削されたと想定できる。検出した限りでは墓壙の一方の小口部から舌状に延びており、4・5号墳の在り方と近似したものと想定できる。玄室床面と墓道底面の関係であるが、前述した基底石設置レベルの高低差を考慮すると、段差は確認できないが、墓壙・墓道掘削段階には、0.1m程の緩やかな段差が存在する。框構造は確認できないが、玄門部に2石ある基底石を框石と想定すると、竪穴系横口式石室とすることも可能である。なお、第112図が示すように、墓壙裏込め土と墓道埋土の識別は不可能であったが、掘り直しを想定できる埋土は一切確認できず、初葬のみの埋葬と考えられる。

ここでは右片袖式の横穴式石室と想定しており、玄 門部の左側壁と接する石材を袖部として、その脇に位 置する石材を閉塞石と判断した。右側壁との隅角部分 の石材は既に失われており、詳細は不明であるが、袖 石と左側壁間に2石並べられていたと想定できる。な お、閉塞石に対する控え積みはみられない。

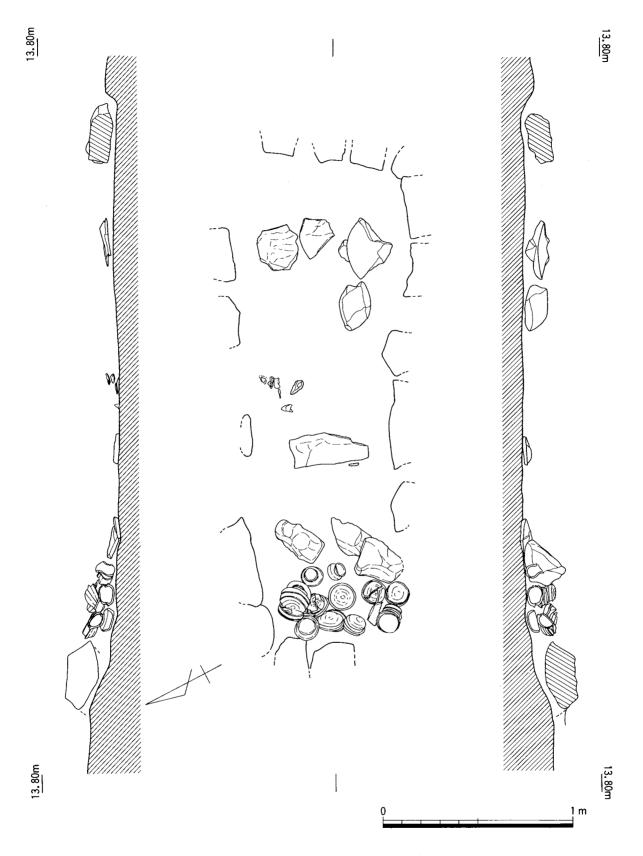


第116図 雄山 7 号墳墓道断面図(S=1/40)

(3) 遺物の出土状況

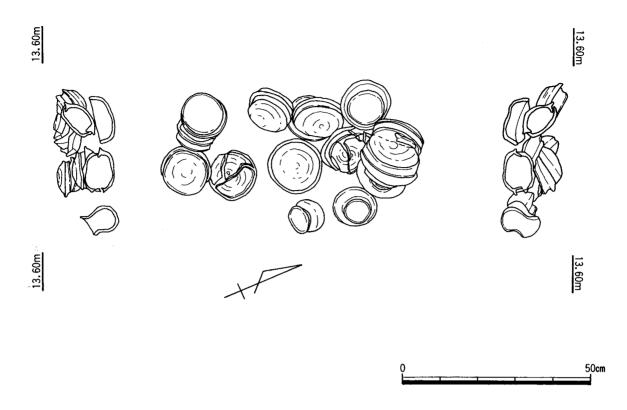
玄室(第117~119図)

玄門部を中心に須恵器,石室中央やや北寄りに鉄製品がそれぞれほぼ原位置で出土している。棺台の 在り方から,鉄製品は棺内に副葬されていた可能性が高い。鉄製品は鉄鏃鏃身部4,鉄鏃頸部片3,須 恵器は坏身10,蓋坏10,短頸壷2,土師器小型丸底壷1がみられる。須恵器の出土した玄門部床面には,



第117図 雄山 7 号墳玄室遺物出土状況図 1 (S=1/20)

棺台に一部重なるように30cm 弱の塊石が存在する。当初、壁体の一部が転落したものと想定していたが、掘り下げが進み、左側壁基底石の下方に潜り込ませる形で検出され、さらにそれに接するように須恵器が置かれていることが判明し、この塊石は棺設置後、その安定を計るための控え積み的な石材であ

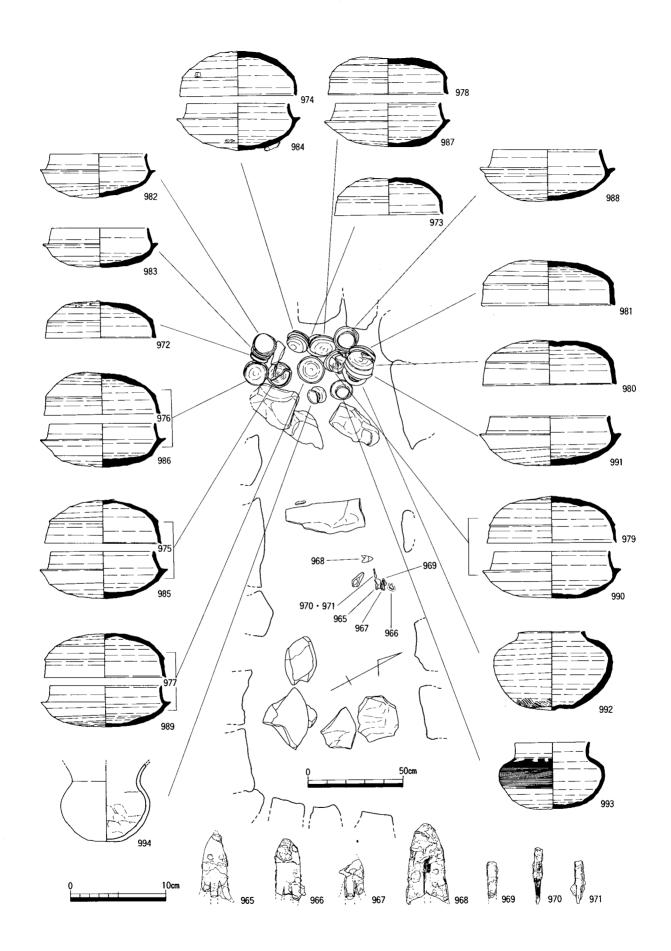


第118図 雄山 7 号墳玄室遺物出土状況図 2 (S=1/10)

った可能性が高いが、須恵器を副葬する空間を創出した可能性も拭いきれない。

須恵器は、玄門部において規則性は持たないものの、整然とした状態で埋納されている。坏身・蓋坏それぞれ10点のうち、6点はセット関係で出土している(974・984、975・985、976・986、977・989、978・987、979・990)。須恵器内には少なからず土が混入しており、すべての土に対し、洗浄・フローリングを行ったが、食物供献の痕跡は認められなかった。セット関係で出土した12点以外にそれぞれ4点坏身・蓋坏が出土している。その出土状況を見ると、982・983・972は、セット関係を取らず、口縁部を上に向けた3段重ねという出土状況であった。981・980・991も崩れているが、全く同様の埋納方法である。また、973はセット関係で出土した978・987の下に位置し、口縁部を上に向けていた。988は口縁部を上に向けており、位置関係から981・980・991と関係する可能性はある。短頸壷は2点出土しており、互いに接するようにいずれも口縁部を上に向けて副葬されていた。その脇には土師器小型丸底壷が出土しており、用途の類似する器種が近い位置に置かれていると言える。

セット関係を取らない重ねられた坏身・蓋坏の存在は、追葬に伴う片付けの所産とも類推可能であるが、墓道の掘り直し痕跡はみられず、副葬品の整然とした配列等から単葬墓であると判断できる。



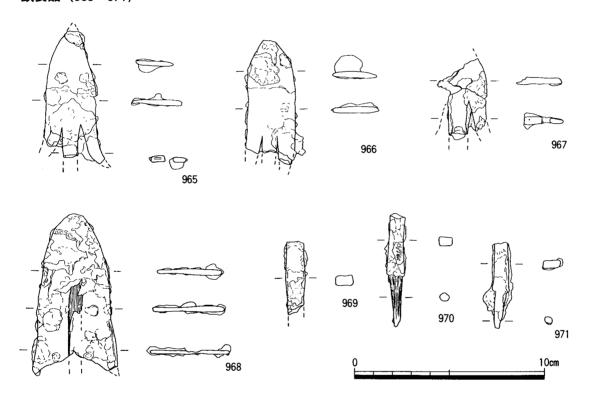
第119図 雄山 7 号墳玄室遺物出土状況図 3 (石室:S=1/20, 遺物:S=1/4)

周溝

周溝の遺物出土状況は極めて稀薄である。第113図の I — I 間周溝断面の土層番号 1 において、馬形 埴輪片を数点確認しているのみで、その他の周溝埋土から埴輪、須恵器等の出土は皆無に近い。なお、土 層番号 1 は、周溝の最終埋没段階に、墳丘外から流入したものである。また、4・7号墳間の溝状落ちに は多量の埴輪・須恵器が出土しているが、7号墳の周溝遺物出土状況から、4号墳に伴う遺物と判断した。

(4) 出土遺物 玄室出土遺物

鉄製品 (965~971)



第120回 雄山 7 号墳玄室床面出土遺物実測図 1 (S=1/2)

965~967は腸抉三角形鏃である。965は逆刺部の一部と頸部下半以下を欠き,残存長は残存鏃身長と同じ7.0cm,鏃身幅は中央部で2.5cmを測る。X線撮影によると,逆刺部は抉りが深く,刃部側は緩やかに開いている。鏃身は平造りで,頸部断面は方形である。966は965と似た平面形態を持つが,鏃身は片丸造りないし両丸造りである。逆刺部の一部と頸部下半以下を欠き,残存長は6.6cmを測る。土圧によるためか,逆刺部は頸部と接しており,元来の形状は不明であるが,現状では刃部は三角形をなした後,ほぼ直線的に下り,逆刺部に至る。頸部断面は方形である。967は大半が欠損しており,残存長は4.3cmしかない。逆刺部は深く,残存刃部は先端に向かって弧を描いており,1.5cm前後延長した箇所で刃部先端が復元できる。968は無頸鏃である。逆刺部の一部を欠くのみで,ほぼ完存している。残存長・鏃身長は8.6cm,刃幅4.5cmを測る。透し穴はないが,大形の鏃身を有する。鏃身中軸線上において木質痕が両面に遺存しており,矢柄の一部と考えられる。鏃身は平造りである。無頸鏃は4~6号墳では確認できず,杉山氏によると,このタイプの鉄鏃は古墳時代後期に入り,関東地方を中心に盛行するという状況を示すとされており。340,7号墳の被葬者像を想定する上で意義深い資料である。969は断

面が方形をなす鉄鏃頸部である。970・971は鉄鏃頸部~茎部である。共に台形関で,頸部断面は方形, 茎部断面は円形を呈する。970の茎部には木質が遺存する。965~967と接合関係は持たないが,969~971 はこれら腸抉三角形鏃の頸部~茎部であると考えられる。

須恵器 (972~991)

すべて玄室床面玄門側で検出し、前述したように一括性の高い資料である。出土時に蓋坏・坏身がセット関係で出土したものは、974と984、975と985、976と986、977と989、978と987、979と990の6組存在する。

蓋坏 (972~981)

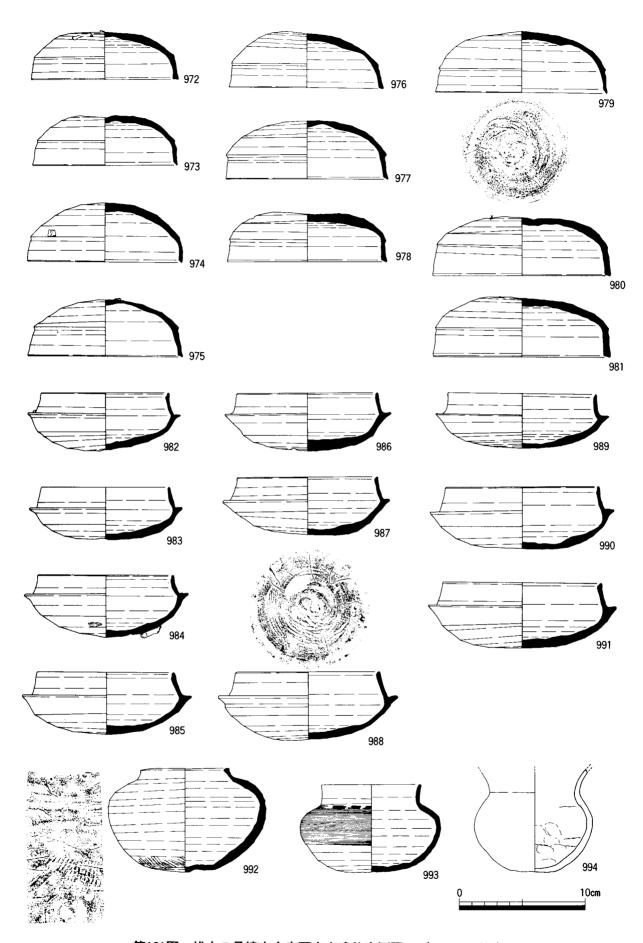
口径と器高により、972・973、974~976、977、978、979、980・981の6群に分類できる。ロクロの回転方向は973と979のみが左回転で、他は右回りである。端部や焼成の差異がみられるが、煩雑になるため細分は行わなかった。

972・973は口径11.5cm 前後、器高3.8cm を測る。口縁部と天井部との境はやや突出し、にぶい稜を もつ。口縁部は斜め外方へ開き気味に垂下し、端部に至り、端部は972がわずかに内傾する段を、973が 内傾する凹面をもつ。天井部はやや丸味のある狭い平坦面を有する。974~976は口径12.2cm 前後,器 高4.6cm を測り、器高の高い丸味のある天井部を有する。口縁部は974が内湾気味に垂下し,975・976 は外方にやや開く。端部はわずかに内傾する段をもち,天井部と口縁部との境に断面三角形の稜線を施 すが、976は三角形をなさず、突出するものの丸味を有する。977は口径12.7cm, 器高4.7cm を測る。 器形は975・976に似るが,法量がやや大きい。稜は断面三角形を呈するが,にぶいものである。978は 口径12.5cm, 器高3.85cm を測り, 天井部平坦面が広く, 低い器形である。口縁部は垂下し, 天井部と 口縁部の境にややシャープな稜をもつ。端部はわずかに内傾する面をもち、段を有する。天井部の器厚 が他に比して,分厚い作りとなっている。979は口径13.5cm,器高5.0cm を測り,天井部が高く,丸い 器形である。天井部外面のヘラ削りは粗く,全体の1/2程度しか施されていない。稜は上下に強い回 転ナデ調整が加えられることにより,シャープに突出している。口縁部はやや外方に開きながら下り, 端部付近で外反し内面に段を有する。天井部内面中央付近には,同心円文のスタンプが残されている。 重複関係から, 回転ナデ→同心円文スタンプ→不定方向ナデという順序が復元でき, 成形の第二段階(ロ クロ成形=回転ナデ)と成形の第三段階(調整)の間に施されたことになる⁽³⁵⁾。980・981は口径14.0cm, 器高4.7cm を測る。稜は980がやや稜線を残すのに対し,981はかろうじて突出しているのみで,稜とは 呼び難いものである。口縁端部はわずかに内傾し,沈線をもつ。天井部は口径に比して低平で,狭い平 坦面を有する。口縁部はやや外方向に開きながら垂下する。

坏身(982~991)

口径と器高により、982・983、984、985~988、989、990・991の5群に分類できる。ロクロの回転方向は、983・985・986が左回りで、他は右回りである。蓋坏と同じく細分可能であるが、法量のみの分類に留めた。

982・983は口径10cm, 器高4.2~4.6cm を測る。982は内傾して立ちあがり,端部付近でやや外反し,端部に段を有する。受け部には蓋坏と正位で重焼きした際に熔着した蓋坏口縁端部がみられる。983は端部まで内傾して立ちあがり,丸く収まる。底部内面と口縁部との境,口縁端部には強い回転ナデが施され,口縁部は先細りする断面形状である。なお,982は器形・焼成・胎土・色調等において972と酷似し,窯詰めの段階から近い位置関係にあったと想定できる。984・985は口径10.6cm 前後,器高5.0cm



第121図 雄山7号墳玄室床面出土遺物実測図2 (S=1/3)

を測り、器高が高く丸味のある底部となる。984の口縁部は内傾して立ちあがり、端部付近で外反する。 端部は内傾し,段を有する。受け部には蓋坏との重焼きによる口縁端部の熔着が認められ,外面には内 面を外方に向けた坏の底部ないし天井部の一部が付着している。窯詰め方法として、蓋坏・坏身を正位 で合わせ、さらにこれを一単位として、上下に重ねていたと想定できる。これに呼応するように外面の 降灰や焼成の在り方に群が生じている。また、984は器形・焼成・胎土・色調等において974と酷似して おり、窯詰めの段階から近い位置関係にあったと思われる。985は口径、器高は984と同じであるが、立 ちあがり高が1.9cm を測り984より長く、底部高は逆に低い。986~988は口径11cm 前後、器高4.5cm 前 後を測る。いずれも口縁部は内傾して立ちあがるが、端部は986・987が段をもつのに対し、988は丸味 をもつ。受け部は水平方向に延び、987・988は蓋坏を受ける沈線がめぐる。988は986・987に比して、 底部・端部等に丸味をもち、口縁部の立ちあがりも直線的に内傾し、様相がやや異なる。また、内面中 央には同心円文スタンプが確認でき、979と同様の段階で施されたと考えられる。989は口径11.7cm, 器高4.5cm を測る。口縁部は内傾して立ちあがり、端部にかすかな段を有する。胎土に黒色粒を含み、堅 綴に焼成されている。底部前面に自然釉がかかるが口縁部にはみられないため. 蓋坏と正位で合わせた 重焼きが想定できる。990·991は口径12cm, 12.5cm を越え, 器高は4.9cm, 5.3cm を測る。口縁部は内 傾し,端部に浅い段を有する。ともに焼成が不良である。受け部はほぽ水平に延び,浅い凹線を有する。 短頸帝 (992・993)

992は口径7.0cm, 器高8.3cm を測る。肩部は張り、口縁部は短く内傾し、端部には水平面を有する。底部から体部を中心に平行叩きがみられ、底部には粗いへラ削り、胴部には回転ナデ調整が施されている。色調が灰赤色を呈する箇所があり、972・982と共通している。993は口径7.7cm, 器高7.0cm を測る。肩部が張り、口縁部はやや長く、外反気味に立ちあがる。肩部から胴部上半にかけてカキ目、胴部下半から底部には回転へラ削りが施される。992に比して、器壁厚が薄く、小型である。

土師器 (994)

994は土師器直口壷で、口頸部を欠く。胴部は球体形を呈するが、底部は狭い平坦面をもつ。調整は器壁表面の剥落・摩耗により不明である。

周溝他出土遺物 (995~1001)

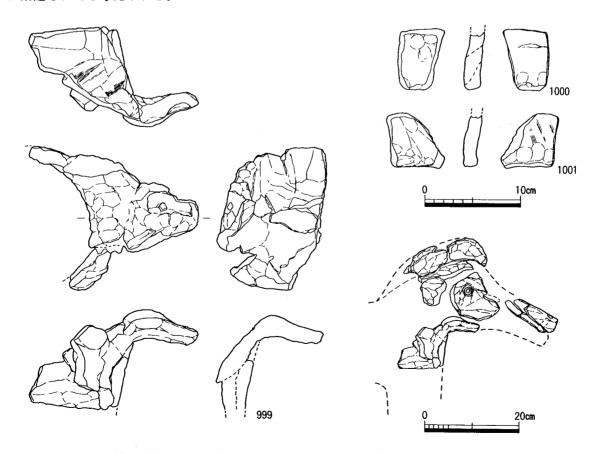
出土遺物は前述したように、馬形埴輪を周溝から検出しているのみである。995は耳から頬の部分である。目は穿孔され、耳は別作りのものを取り付けている。その取り付け方は、頭部の粘土帯接合段階に中空のものをくるむものか、頭部成形後、穿孔して取り付けたと想定できるが、いずれかは不明である。しかし、どちらの製作法であっても、外面の耳付け根には粘土を付け足し、補強している。996は上顎部分である。口先から1 cm 入った頂部両端に、径1 cm 程度の鼻孔がやや奥よりに斜めに穿孔されている。口先から1.5cm までは切り込みがあるが、この位置に鏡板は確認できない。その製作は、上顎頂部から側部を粘土板で逆U字状に作り、その窪みに粘土を充填し、さらに厚さ1 cm を測る別の粘土板を上顎と下顎の間に挟み込み、最終的に鼻孔を穿孔している。この挟み込まれた粘土帯が母胎となる上顎から剥落した状態で出土しており、その観察によると、強いナデ調整を加え、上顎の母胎部分に貼付しており、その接合面には母胎の凹凸面に合わせた凹凸がみられる。997は耳の小破片である。998はたて髪で、前寄りで大きく彎曲して立ち上がり、後方に向かい緩やかな弧を描く。断面形状は上方は板状をなすが、下方に下るにつれ裾広がりの形態を呈する。たて髪は頸部から剥落しており、後の接合であることが明瞭である。999は喉元から胸部にかけてである。鞍の可能性も考慮したが、屈曲して突出

した部分の内面に接合痕が残り、外面と想定することが困難であるため、喉元から胸部と判断した。製作は粘土板により、喉元から胸部にかけてと胸部を別作りし、胸部が前者をくるんでいる状況が内面に顕著に残る接合痕から窺える。また、胸部に粘土板を再度貼付することで、喉元から胸部を補強している。調整は外面が強いナデないし板ナデ、内面は指押さえ、ナデが施されている。1000・1001は脚部であると想定できるが、径の復元は不可能であった。これら馬形埴輪は集中した出土状況、胎土・焼成等を考慮すると同一個体であると言え、第123図に提示したような復元が可能である。復元によると、轡・面繋・胸繋・手綱等の馬具の表現が一切なされていないことが分かる。剥離した可能性も残るが、観察した限りでは確認できず、裸馬であると考えられ、4号墳出土の飾り馬と対照的である。

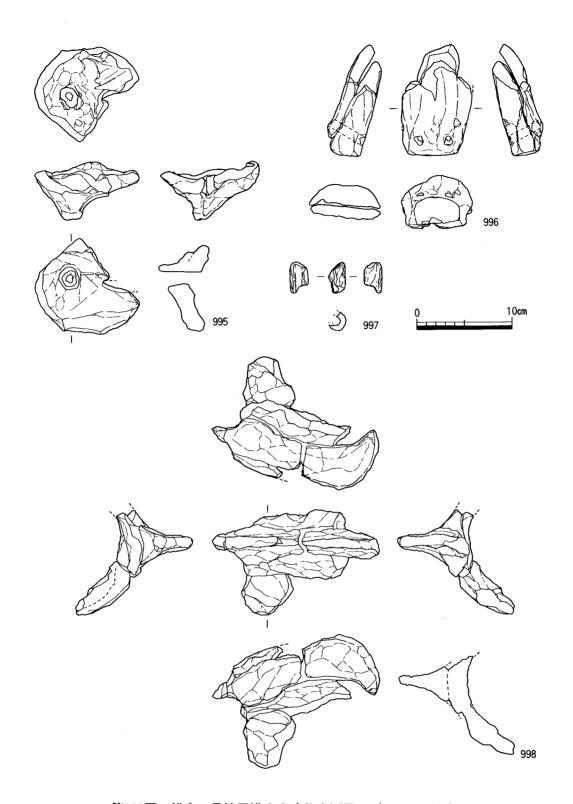
(5) 小結

7号墳は直径6.5mを測る円墳で、尾根頂部側に周溝が確認できる。埋葬施設は右片袖の横穴式石室と考えられるが、基底石と一部2段目まで遺存している程度で上部構造は不明である。羨道がなく、墓道がそれに代替しており、4号墳に似た構造をとる。床面には7石の棺台を確認したが、鉄釘がみられず、直接遺体を安置したか(木釘を用いた組合式木棺)の使用が想定できる。

玄室床面玄門部側からは須恵器・土師器、中央部からは鉄鏃が原位置を保ち出土している。須恵器の特徴からそれぞれ陶邑古窯址群の田辺編年(36)のTK47 (972・973・982・983)、MT15型式 (974~978・984~988)、TK10型式 (979~981・989~991) の特徴と合致する。しかし、その出土状況が示すように一括性が高いものであり、追葬の痕跡がみられない点からMT15型式とTK10型式の共伴する時期に築造されたと考えられる。



第122図 雄山7号墳周溝出土遺物実測図1(S=1/4,1/8)



第123図 雄山 7 号墳周溝出土遺物実測図 2 (S=1/4)

5 その他の調査区

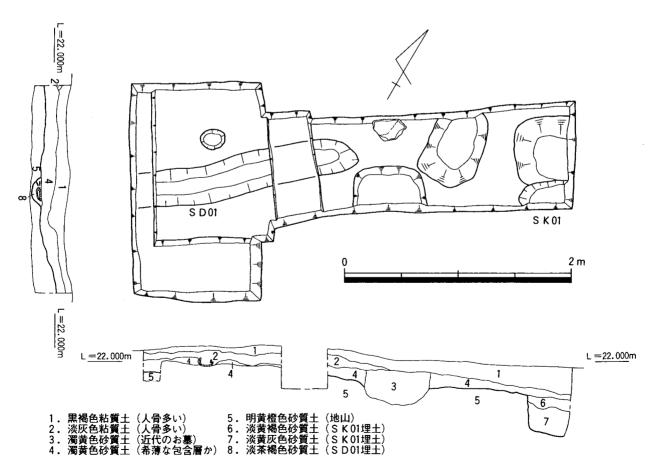
(1) 予備調査31トレンチ他 (第124~126図)

調査対象範囲全域にわたって実施した予備調査のうち、周知の遺構として対象地内に存在しているはずの逼照院裏山古墳(調査時にはすでに消滅)の確認を目的として南尾根ピークに数条のトレンチを設定した。その内の一つである31トレンチの概要をここに報告する。

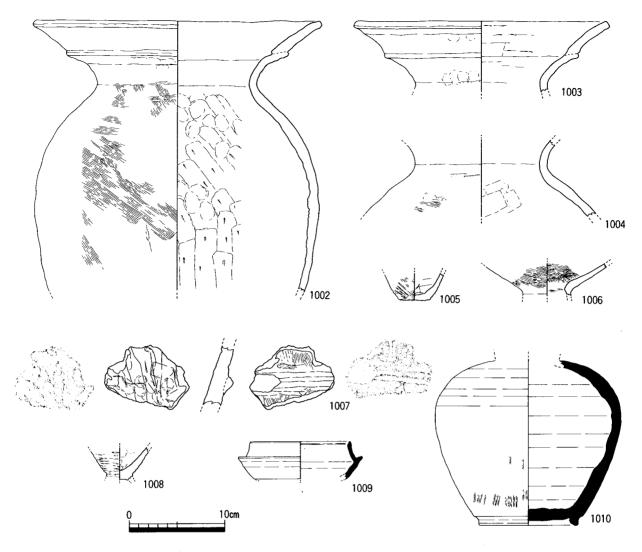
31トレンチは南尾根のピークからやや南斜面側に下がった標高約22mの地点に設定したトレンチである。最初は等高線に直行する方向のトレンチを設定して掘り下げたところ、中央付近で等高線に平行する溝状遺構 S D01を検出したため、その延長方向にトレンチをした。その結果、溝状遺構 S D01と土坑 1 基 S K 01を確認した。

SD01は検出長約19m,検出幅約30cm,深さ約10cm の規模で,等高線と平行に築かれている。溝状 遺構の断面はU字形を呈しており,底面はなだらかで凹凸は認められない。西壁付近で土師器壷が破片 の状態で折り重なって出土した。SK01はトレンチの隅部で,その一部を確認できたにすぎない。

第125・126図には31トレンチ出土遺物を中心にその他若干の遺物を掲載した。1002~1005は31トレンチSD01から出土した遺物である。1002・1003は土師器の二重口縁壷である。縦長の偏球型の胴部から大きく外反する口頸部がのび、さらに粘土を貼り足してやや外反気味の二重口縁を形成している。胴部は外面が細かなハケ調整で、内面には指頭痕とヘラ削り調整が認められる。1004は壷の肩から頸部であるが、1003と同一個体の可能性が高い。1005は外面に叩き調整を残す甕の底部である。これらは弥生時代後期のものである。1006はSK01から出土した弥生時代後期の高杯の杯部である。円盤充填を施した

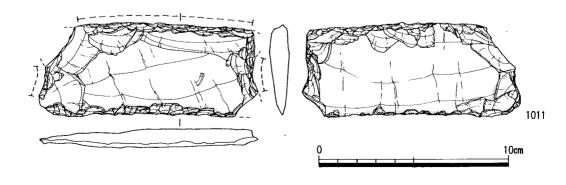


第124図 予備調査31トレンチ平・断面図



第125図 予備調査出土遺物実測図① (1/4)

部分が欠損している。この土器の年代から、SK01は弥生時代後期の土坑といえる。1007~1009は31トレンチの包含層から出土した遺物である。1007は外面に縦ハケ調整を残す円筒埴輪片で、断面下三角形の低い凸帯を貼り付けている。1009の須恵器杯身はその形状から雄山5・6号墳の年代と同時期のものであろう。1010は9トレンチの包含層から出土した須恵器の長頸壷胴部である。口頸部を欠損している。9世紀頃のものであろう。1011は21トレンチの包含層から出土したサヌカイト製の打製石庖丁である。背部には敲打痕がみられる。

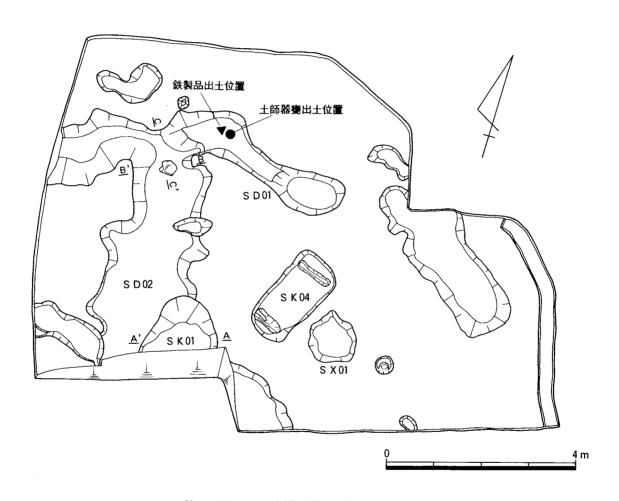


第126図 予備調査出土遺物実測図②(1/2)

(2) IV区 (第127図)

北尾根のピークからやや北東側に下がった位置にあたり、急斜面にかかる傾斜変換点までの平坦地にトレンチ4本(17~19・21トレンチ)を設定して予備調査を行った。そのうち北寄りの21トレンチで不明鉄製品2個を含む溝状遺構1条と底面が焼けたような土坑状の不明遺構1基を検出したことから、平坦地の北半部に設定した調査区である。

調査の結果, 溝状遺構 2条, 土坑 6基, 柱穴 2基, 不明遺構 1基を検出した。いずれの遺構からも出土した遺物はきわめて少ないため, 遺構の時期決定が困難なものが多い。以下, 主な遺構について個別に述べていく。

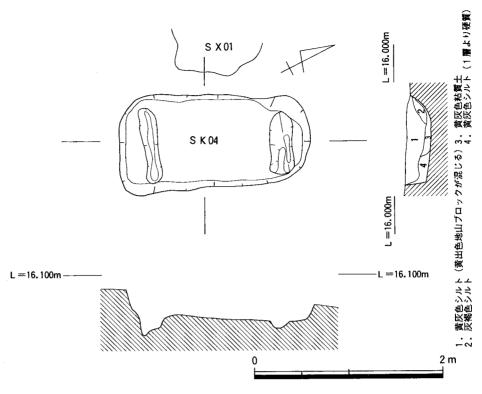


第127図 Ⅳ区遺構配置図 (1/80)

Ⅳ区SK04(第128図)

調査区のほぼ中央部で、不明遺構 S X 01 の西側に接するような形で検出した遺構である。平面形は隅丸の長方形を呈しており、長さ2.0 m、幅1.1 \sim 9.2 mの規模で、主軸方向はN 27 ° E の方向を有する。上半を削平されているものと思われるが、検出面からの深さは約30 cm である。両小口付近には短い溝状の小穴がそれぞれ掘られており、床面は平らに削られている。遺物は出土していないために、この遺構の時期ははっきりしない。

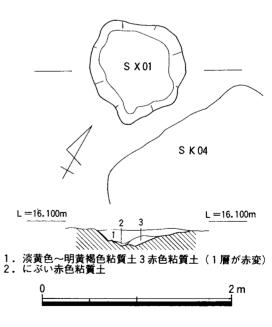
以上述べた形態上の特徴から、この土坑は墓であると判断できる。平らに整形した床面に底板を敷き、 両小口板を一段掘り下げた掘方に固定した構造の土壙墓が想定できる。長側板や蓋板の構造ははっきり し小のよは時る言のす南やこ頭可い板のなり、大きにめ方こも側広から南にかののくら南がでが、たかののくら南がでが、大きにめ方にかののくら南がにかないのなりので小な考西にがにう方いとったがにう方いとったをも、



第128図 N区SK04平·断面図(1/40)

Ⅳ区SX01 (第129図)

Ⅳ区S K 04のすぐ東隣で検出した,不整形の土坑状の遺構である。平面形態は崩れた隅丸方形状にもみえるがはっきりしない。規模は96×108cmを測り,上部は削平されているため,現状で深さ18cmを測る。底面は特に平坦にされているわけでもなく,凹凸がみられる。埋土の中央付近にはにぶい赤色を呈した粘質土がみられ,底部の地山も赤化している部分がみられることから,この遺構の内部で火を焚いたことがうかがえる。周囲のやや離れた位置に柱穴2基が存在するが,建物の存在をうかがわせるようなものではなく,いかなる目的でこの遺構で火を焚いたのかは判断できない。遺物は全く出土しなかったため,遺構の年代は不明である。また,Ⅳ区S K 04との関連を示すような材料も見当たらなかった。



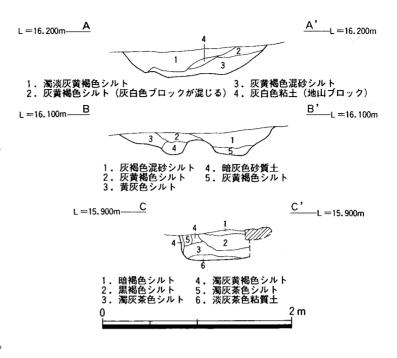
第129図 N区SX01平·断面図(1/40)

Ⅳ区SD01(第130図)

予備調査でその一部を検出した溝状遺構である。IV区の北端付近にあたり、急斜面との傾斜変換点までは1m程しか間隔が空いていない。溝状遺構の肩部はかなりいびつに歪んでおり、底面もかなりの凹

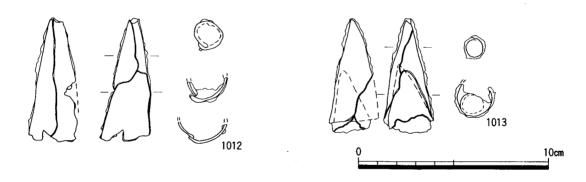
凸が認められる。途中でS D02と合流 しており、土層断面の観察からは両者 に時間差は認められず、同時期のもの と判断できる。検出長6.2m、幅0.5~ 1.3m、現状での深さ32cm を測る。

溝状遺構の中からは、用途不明の鉄製品2点(第131図)が出土している。 鉄製品は鉄板を丸めてキャップ状にしたもので、槍などの石突きもしくは鉄 鐸と思われる。先端を揃えるような状態で置かれており、その上には直径30cm程度の石が載せられていた。その近辺からは土師器の甕が1点出土したが、風化のために剥落・磨滅が進んでおり、図化することは不可能であった。古墳時代のものと思われる。



第130図 IV区SD01・02断面図(1/40)

第131図の1012・1013は不明鉄製品である。どちらも鉄板を丸めたもので、中空のものである。先端はわずかに隙間が空いている。1012は全長6.3cm、1013は全長5.3cmで1012の方がやや大きい。1013は一回り小さな同じ形態の鉄製品を入れ子にしている。



第131図 N区SD01出土遺物実測図(1/2)

Ⅳ区SD02(第130図)

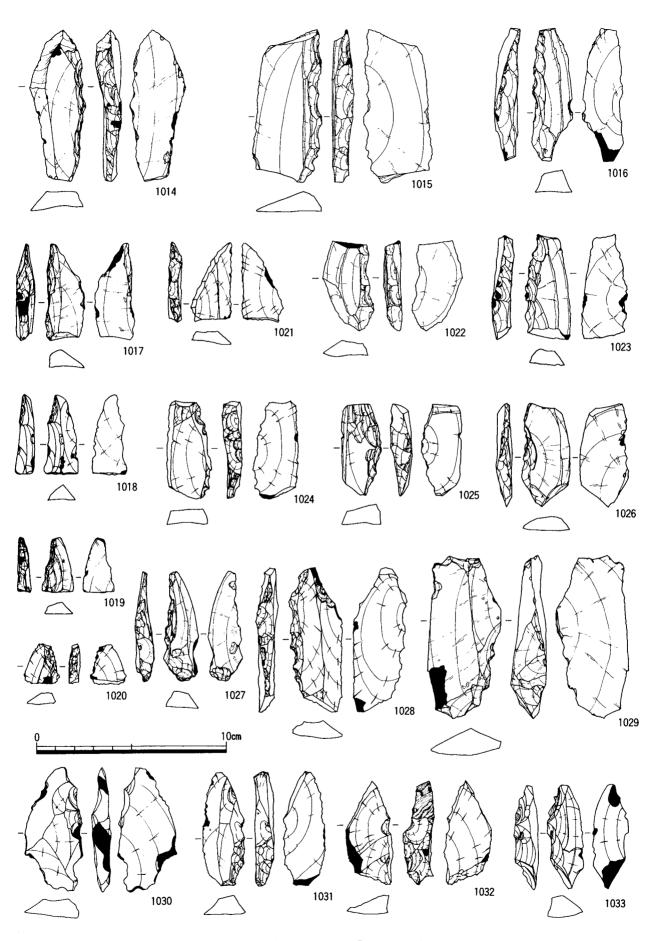
IV区の調査区西壁沿いに検出した溝状遺構で、北端でSD01と合流している。SD01と時期差は認められない。検出長4.2m,幅1.4~2.3mの規模で、深さは56cm とSD01よりもやや深い。遺物は出土していないため、詳しい時期は不明である。

(3) 予備調査等出土の旧石器 (第132~135図)

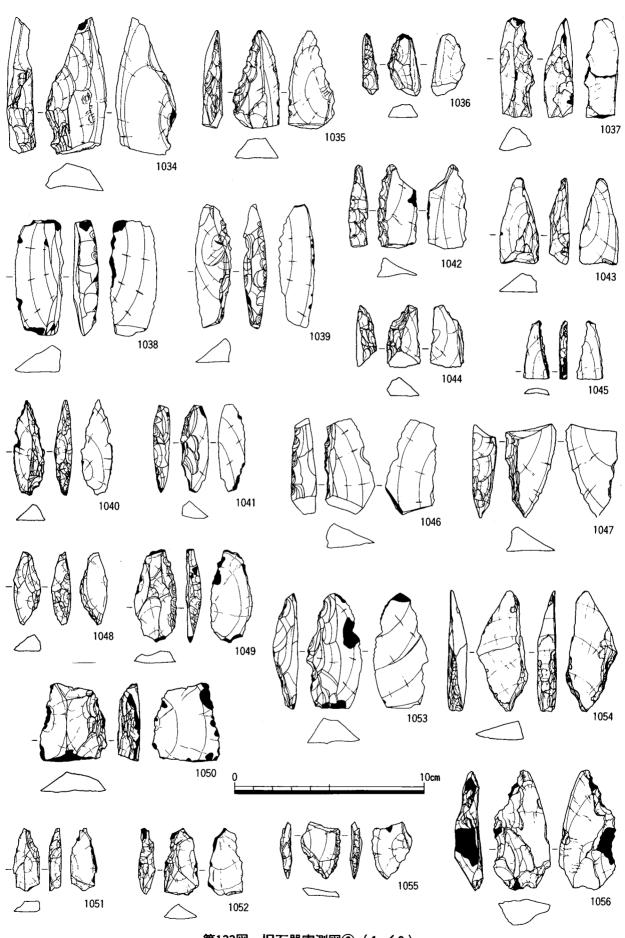
雄山古墳群の所在する雄山から東南に派生する尾根の稜線上は、旧石器の散布地として周知の遺跡である雄山東麓遺跡として知られている。今回の調査区では古墳の位置していた南側尾根がそれにあたる。また、雄山は石器の素材として知られているサヌカイトこそ産出しないものの、細石器の素材として多用されているハリ質安山岩の産出地のひとつである。

今回の調査に際しても、古墳の周囲や予備調査のトレンチから多数の旧石器を検出している。いずれの調査区・トレンチにおいても、原位置を保った状態で出土したものはなく、すべて弥生土器や須恵器片などと共に包含層から出土している。各調査区・トレンチからの出土量については表を参照されたい。出土した旧石器には製品・剥片・石核などがみられる。それらの中から主だったものを図化した。

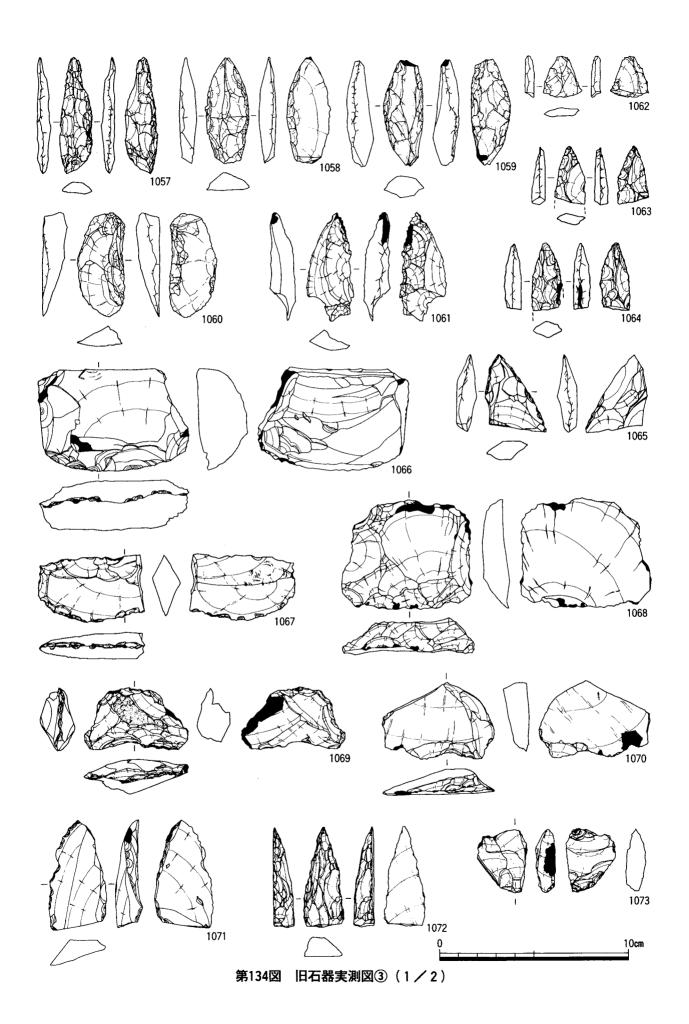
1014~1056はナイフ形石器である。素材には圧倒的にサヌカイトが使われているが、1056の1点だけはハリ質安山岩を素材としている。1057~1065は尖頭器である。ナイフ形石器同様サヌカイトが大半を占めるが、1064・1065のようにハリ質安山岩を素材とするものもみられる。1066~1071はスクレイパーである。1072は角錐状石器で、今回の調査では唯一の出土である。1073は両端に加撃痕がみられる楔形石器である。1074~1084は翼状剥片である。剥片は図化した以外にも横長剥片や縦長剥片が認められる。ハリ質安山岩の産出地ということもあってか、ナイフ形石器や尖頭器の素材としてハリ質安山岩が使用されているのがひとつの特徴といえよう。また、素材の大半を占めるサヌカイトであるが、蛍光X線分析などの理化学的分析を行ったわけではないので定かではないが、距離的にも近い、雄山のすぐ東方にそびえる国分台産のものを採取してきた可能性が高いと思われる。



第132図 旧石器実測図①(1/2)



第133図 旧石器実測図②(1/2)



-147 -



第135図 旧石器実測図④ (1/2)

		器				種			剥			片		7	ī	ħ	亥	そ	石	材
調査区・	ナイ	尖	角錐	楔	削	敲	小	翼	横	縦	盤	加工	小	翼状	横長	石	小	o	サヌ	ハリ
トレンチ名	フ形	頭	状石	形石		打		状剥	長剥	長剥	状 剥	のある		翼状剥片石核	長剥片石核			"	ヘカイ	リ質安山岩
	石器	器	器	器	器	具	計	片	片	片	片	剥	計	核	核	核	計	他	١	<u> </u>
予備調査 1 トレンチ							0	1					100				0.	0.	100	0
予備調査 2 トレンチ	5						5 38.5	5				2	7 53.8			1.	7.7	66	13 68.4	31.6
予備調査 3 トレンチ	3	1			1		5 31.3	5	2		ļ	1	8 50	3		ļ	3 18. 7	8	16 66. 7	33.3
予備調査 4 トレンチ	1						100						0				0	66	1 14.3	85. 7
予備調査 5 トレンチ	1						100						0			Ī	0.	1.	1 25	75
予備調査 7 トレンチ	1						1						0				0.	0.	100	0
予備調査 8 トレンチ	1						1 25				1.		1 25			2	2 50		100	0
予備調査9 トレンチ	1						100				ļ	ļ	0				0	 .	100	.0
予備調査11 トレンチ							0.				ļ		0.				0	1	0	100
予備調査12 トレンチ							0.				·		0				0	1	0.	100
予備調査15 トレンチ	1.				1.		28.6	3	1.		ļ		4 57.1			1	14.3	9	7	9 56
予備調査16 トレンチ							0	1.					100				0		100	0
予備調査19 トレンチ							0						0			1.	100		100	0
予備調査21 トレンチ		1					100						0				0		100	0
予備調査22 トレンチ	2						100						0.				0	ļ	100	0
予備調査23 トレンチ	1						50	1.					1 50				0	1	66.7	33.3
予備調査24 トレンチ							00	1.			ļ		100			· · · · · ·	0	1.	1 50	50
予備調査26 トレンチ							0	1.				1.	100				0.	1	66.7	1
予備調査27 トレンチ	7.	1.					8 47.1	5	3			1.	9 52.9				0		17 100	0
予備調査28 トレンチ					1.		11.1	4		1.	·····		5 55.6			3	33.3		9 100	0
予備調査29 トレンチ							0						0				0	3	_	
予備調査30 トレンチ	4	2					6 27.3		3			2.	5 22.7	7		4.	11 50	4.	22 84.6	15.4
予備調査30拡 トレンチ	9	1		1	1.		12 42.8		5				5 17.9	6	1	4.	11 39.3	3	28	3
予備調査31 トレンチ	4				1.		5 15.6	2	7.	7	2	2.	20 62.5	1	2	4.	7 21.9	1		1
予備調査32 トレンチ	3						37.5	1.	4				5 62.5	•			0		100	0
予備調査17~19 ・21トレンチ	5				2		7 46.7	2.				1.	3 20	2		3	5 33.3	1.	15 93.8	6.2
NX	2						40			1.		1	2 40			1	1 20	17	5	+
4 号墳	1				2.		3.18.8	3	1	1			5 31.3			8.	8 50	5	16	5 23.8
5 号墳	1		ļ				12.5	1.	1	1			37.5	3		1.	50 50	6	8 57.1	6
6号墳	24	6	1		3	1	_	43	7.			1	51 51	2	1.	11	14	1	96 89.7	11
7 号墳			ļ				0						0			1	100		100	0

第9表 雄山古墳群出土旧石器集計表

第4節 調査のまとめ

1 雄山 4号墳の築造過程

今回調査した古墳のなかで最も遺存状況が良好な古墳が4号墳である。石室奥壁及び左側壁の一部は崩壊していたが、天井石・閉塞石を含めほぼ完存し、墳丘も同様であった。本文中でも触れたが、以下石室構造や使用石材の規模、横目地の通り方、墳丘盛土の施工状況等を基に雄山4号墳の築造過程を整理しておきたい。

石室主軸に合わせた墳丘の横断面・縦断面に玄門部側・左側壁側の石室実測図を整合した(第136・ 137図の番号が以下に挙げる築造工程番号に対応する)。

①地山成形及び基部盛土

地山の傾斜角度の20°に沿った堆積状況を示す旧地表面と考えられる黒褐色混砂粘質土が確認できる。 古墳築造箇所外に広がらないため,ある程度の地山成形が想定できる(古墳築造箇所に敷設した盛土の 可能性も残る)。この黒褐色混砂粘質土上に一部盛土が行われる(基部盛土)。確認した2箇所はいずれ も墓壙主軸線上であるため,次段階で掘削される墓壙に深度を持たせるため,または墓壙掘削における 安定した作業ヤードの確保を意図した処置と考えられる。

②墓壙掘削

地形の傾斜に平行して墓壙が掘削され、この工程でそれに連結する墓道も同時に掘り込まれていたと考えたい。斜面に掘削されたため、尾根頂部側では墓壙深度を有するが、斜面側では深度を持たず、横断面はL字形を呈する。

③玄室基底石の設置

基底石が設置され、玄室平面プランが確定される。これに平行して、左側壁では墓壙内の裏込めが、右側壁側は入念な盛土が同時に施工される。基底石は大形石材の横積み(平積み)であるが、右側壁玄門部寄りでは板状石材が用いられる。

④石室下部の安定化

左側壁基底石上端レベルまで各壁体が構築される。この段階の壁体構築に限り板石石材が用いられる ことが壁面使用石材の観察から窺える。同時に斜面側には、③と同等の入念な盛土が平行して行われる。 中・上部石室構築に備えた下部石室の安定化・水平化を意図する工程と言える。

⑤尾根頂部側の壁体構築

墓壙の上端レベルまで左側壁、奥壁及び左袖の構築が行われ、墓壙内の裏込めもなされる。石材は基 底石にも使用可能な大形石材~中形石材の横積みである。右側壁もこの段階で墓壙上端レベルまで構築 された可能性も残るが、横目地の通りや盛土施行状況に変化がみられない点から⑥工程に下げている。

⑥前壁最下段石材下端レベルまでの壁体構築

前壁最下段石材下端レベルまでの壁体が盛土の施行と平行しながら構築される。ここでの盛土は③~ ⑤の工程でなされる盛土と異なり、粗雑なものである。石材の積み方は中形石材の横積みが主であるが、 小形石材の小口積みも確認できる。

⑦石室上部の構築, 天井石構架及び埋葬

前壁最下段石材以高の壁体が墳丘盛土と平行して構築される。盛土は⑥同様粗雑である。③~⑦工程の壁体構築と平行した盛土を一次盛土と仮称する。その後,天井石が構架され,墓道を通って埋葬が行

われる。壁体は小形石材の小口積みが大半であるが、中形石材の横積みも一部みられる。隅角には力石の使用が顕著に認められる。

⑧閉塞, 墓道埋め戻し

玄門部において、塊石を用いた閉塞が行われ、墓道が埋め戻される。

⑨周溝掘削,二次盛土

尾根頂部側にのみ馬蹄形の周溝が掘削され、その土量で石室や埋め戻した墓道を被覆すると同時に墳 形が整形されたと考えられる。その後、墳丘に円筒埴輪・形象埴輪・須恵器が樹立される。

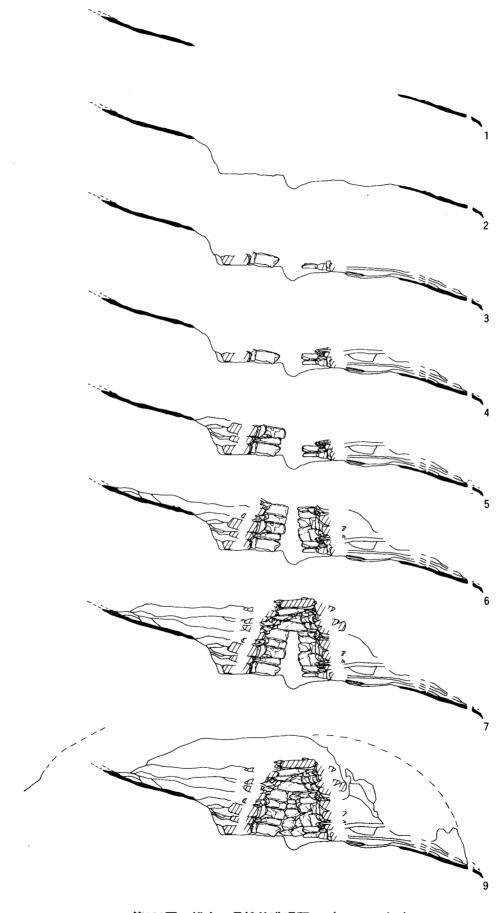
以上, 4号墳の築造過程を復元した。石室上半部及び墳丘の大半が消失していた5号墳もこの築造過程に共通したものである。6号墳は、①地山成形、②墓壙掘削、③基底石設置、④石室構築とそれに平行した盛土という施工順序に復元できる。④の盛土は版築状を呈し、堅緻に締まっている。6号墳の立地が斜面部というよりは、尾根頂部よりに近い緩斜面であるためか、墓壙横断面はL字形を呈さず、基底石が設置できる程度の深度を有する。4~6号墳の築造・構築法は地山成形→(基部盛土)→墓壙掘削→墓壙内石室構築→上部石室構築とそれに並行した盛土という一連の築造・構築過程となる。

次に当該期の古墳の築造・構築法を概観し、その比較を試みる。観音寺市千尋神社 6 号墳⁽³⁷⁾はMT15型式期に築造された古墳で、横穴式石室を埋葬施設とする。尾根筋に立地し、それに直交する石室主軸をとり、横断面L字形墓壙が掘削されている。盛土施行状況は石室構築と並行したもので、墓壙深度を有する側は粗く、深度を持たない側の盛土は入念である。築造過程を復元すると、①地山成形、(②前庭部に基部盛土)、②横断面L字形墓壙掘削、③基底石設置、④上部石室構築とそれに並行した盛土となり、雄山 4 号墳とほぼ同等の築造・構築法であるといえる。

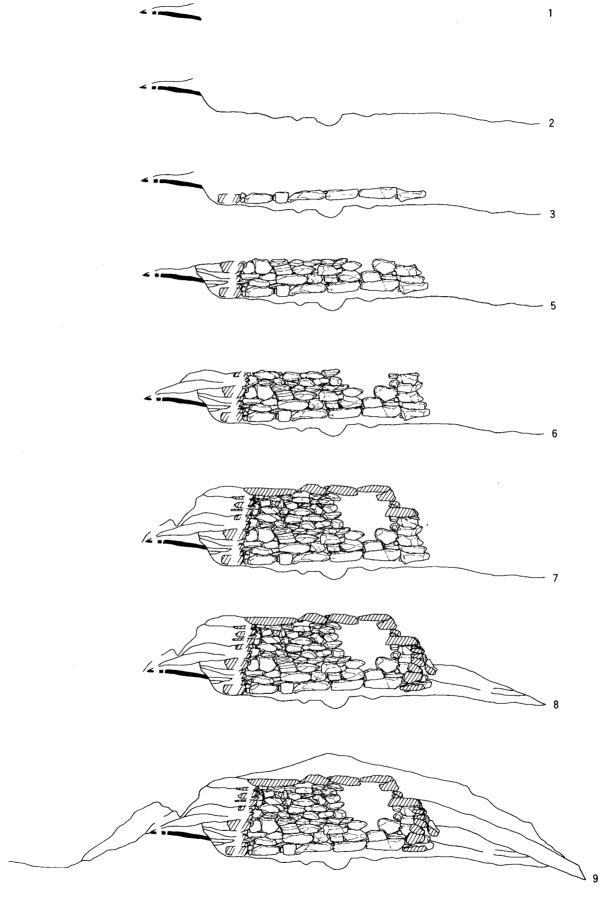
綾南町本法寺西古墳⁽³⁸⁾はTK10型式期に築造された独立墳で、埋葬施設にT字形を呈する両袖式横穴 式石室を採用している。その築造過程は、①地山成形、②墓壙・排水溝・墓道掘削、③基底石設置、④上 部石積み (墓壙以高は墳丘盛土と並行して実施)となる。墓壙深度が1mとかなり深い点が特徴である。

三野町大原塚古墳⁽³⁹⁾はなだらかな低丘陵上に立地し、MT15~TK10型式期に築造された古墳である。 埋葬施設は右片袖式の横穴式石室で、玄門立柱の使用が認められる。築造過程は報告者により、①地山 整形、②黒色土敷設(第一次盛土)、③墳丘盛土(第二次盛土)、④墓壙構築、⑤基底石設置、⑥上部石 積み、⑦天井石構架、⑧封土(第三次盛土)という復元がなされている。墳丘がある程度完成した段階 で墓壙掘削が行われており、その底面は地山まで到達せず、②工程で敷設された盛土で納まっている。

以上, 4号墳を中心に6世紀前半~中葉段階の県下横穴式石室の築造過程を復元した。個々の立地や石室系譜の差異等により、その築造・構築過程は多様性を示す。ここで注目しておきたいのが、被葬者の埋葬段階である。雄山4号墳は石室完成後、墓道を通り埋葬し、その後二次盛土が施工されている。大原塚古墳では、「石室下半部構築後、遺体埋葬及びそれに係る葬送儀礼が行われ、その後石室上半部の構築及び天井石構架がなされた」と報告されている。。その存否は追葬法を含め、再検討の余地は残るが、少なくとも⑧工程前段階までには被葬者の搬入が行われたと考えられ、雄山4号墳と共通した埋葬段階となる。6世紀前半は従来、県下における横穴式石室の導入時期であり。前代墓制の影響を残す段階と考えられる。千尋神社4号墳、大原塚古墳、浦山5号墳。等といった当該期の横穴式石室は、羨道部側壁ないし基底石は存在するが、天井石構架の存否は確認できず、前庭側壁の可能性も残る。前代墓制の影響に加え、こうした玄門部前面の不整備が、先に触れた遺体の埋葬段階にも反映されたと思われ、こうした在り方が当該期の横穴式石室の特徴であったと考えられる。



第136図 雄山 4 号墳築造過程 1 (S=1/80)



第137図 雄山 4 号墳築造過程 2 (S=1/80)

2 各古墳出土の須恵器について

今回調査を実施した4基の古墳の中で、4号墳は周溝内に転落した墳丘上で用いられたと思われる須恵器を検出したが、残る5・6・7号墳の3基に関しては横穴式石室内から副葬された状態を示す須恵器を検出した。7号墳の須恵器は1回の埋葬で使用されたものであり、埋葬当時の須恵器を知ることのできる資料といえよう。5・6号墳の須恵器はそれぞれ1回ずつの追葬の可能性が極めて高いものであるがまとまった量が出土しており、雄山古墳群の変遷を追求することのみならず、香川県の須恵器の変遷を考える上においても十分分析に耐えうる資料といえよう。

ここでは、5 · 6 · 7号墳の石室内から出土した須恵器について、特に豊富にみられる蓋杯を中心に 若干の検討を加えてみたい。

まず、それぞれの出土状況及び蓋杯について概要を述べる。

7号墳の須恵器は玄門部からまとまって出土している。蓋杯はセット関係を持つものと、セットにならず重ねられているものの両者がみられる。墓道の土層観察や土器の出土状況から追葬の可能性は考えられず、1回の埋葬に伴って副葬された一括資料と認定できる。蓋杯は口径や焼成などから2つに大別できる。蓋の口径11.4~12.7cmのもの(A群)と蓋の口径13.5~14.0cm(B群)の2つで、身もそれに対応している。本文で報告されているように、小さい口径のA群はさらに2つに細分することも可能である(43)。これら7号墳の蓋杯は口径や焼成に違いがみられるものの、器形はA・B群ともに類似した形態をとる。蓋は天井部と口縁部の境に稜を持ち、口縁端部はわずかに内傾する段を有している。身は口縁部の立ち上がりが直線的にやや内傾するもので、口縁端部は内傾する段を持つという特徴を有する。詳細に見ればB群の方が蓋の稜が退化していると見ることもできよう。

5号墳の須恵器は左袖部に折り重なって出土している。蓋杯はセットの状態のものと開けられて重ねられた状態のものの両者が見られるが、セットになっているものも蓋の口径が身の最大径を上回るものがみられるなど、本来のセットではないものを含んでいるものである。墓道の土層観察からは明瞭な追葬の痕跡を確認できなかったが、須恵器群中に鉄鎌が挟まれていることなどの出土状況から、土器類の片付けが行われたようであり、追葬の行われたことが想定される。しかし、土器類はひとかたまりとされているため、出土状況からは追葬の回数などを判断することはできない。蓋杯は蓋・身ともに7号墳のように口径のまとまりによるグループは認められない。蓋は口径13.4~15.0cmの範囲(例外的に口径16.4cmの386が1点あるが)で、身は口径11.1~13.7cmの範囲におさまる。この範囲の中には7号墳のB群が含まれることになる。蓋は天井部と口縁部の境に弱い稜を持つものと、その部分が凹線や沈線になったものがあり、口縁端部は丸く収める390の1点以外はすべて内傾する段を持つという特徴がある。天井部と口縁部の境に着目すれば大きく2つに分けることができよう。身は口縁部の立ち上がりが長いものとやや短めのもの、口縁端部が内傾する段を持つものと丸く納めるものがある。総じて立ち上がりの長いものは口縁端部が内傾する段を有し、やや短めのものは端部が丸く収まる傾向が見られる。

6号墳の須恵器は石室右側壁に沿うように列をなしたような状態で出土している。蓋杯はセットの状態のものと開けられて重ねられた状態のものの両者が見られるが、セットになったものは5号墳とは異なり本来のセット関係を保持しているものが多いと思われる。土層観察などからは追葬の痕跡を確認できなかったが、土器類や鏡および玉類などの遺物の出土状況から、片付けが行われたようであり、追葬の行われたことが想定できる。ただし、出土状況から追葬の回数などを判断することはできなかった。5号墳と同様に、口径のまとまりによるグループは認められない。蓋は口径13.3~15.5cmの範囲で、

身は11.2~12.9cm の範囲におさまる。5号墳と比較すると蓋はほぼ同じ範囲であるが、身は6号墳の 方が大きな口径のものが少ないといえる。その特徴であるが、蓋は天井部と口縁部の境に弱い稜を持つ ものと、その部分が凹線や沈線になったものがあり、口縁端部はすべて内傾する段を持っている。身は 口縁部の立ち上がりが長いものとやや短めのもの、口縁端部が内傾する段を持つものと丸く納めるもの がある。これらの特徴は、5号墳の蓋杯の特徴とほとんど同じであるが、身の中で口縁端部に段を持つ ものが立ち上がりが長い傾向があるのに対して、口縁端部を丸く納めるものは立ち上がりがやや短いも のだけでなく、長いものも一定量みられる点が5号墳のものとは異なっている。

ここで、6号墳の本来のセット関係を保持していると思われる蓋杯を見てみる。すると、蓋のうち天井部と口縁部の境に弱い稜を持つものは身の口縁部の立ち上がりの長いものと、天井部と口縁部の境に凹線や沈線をめぐらす蓋は身の口縁部の立ち上がりのやや短めのものとそれぞれ組み合っていることがわかる。そこで前者をC群、後者をD群と設定する。さらにC群の身の口縁部が内傾する段を持つものをC①群、丸く納めるものをC②群と細別することができる。5号墳の蓋杯は口径も形態も6号墳のものときわめて類似していることから、同様の類別が可能であろう。ただし、本来のセット関係が崩されていると思われるために、C①群とC②群の蓋を分離することは不可能である。

以上述べてきたように、5・6・7号墳の石室出土の蓋杯はA~D群の4大別、6細分することができた。次にそれらの比較を行う。7号墳の資料のA群とそれ以外の他の群を比較した場合、蓋の天井部と口縁部の境の稜がしっかりしていることや身の口縁部立ち上がりの内傾度が弱いこと、蓋・身ともに口縁端部に内傾するしっかりした段を持つことなどから、時期的に先行するものと位置付けることができ、今回の調査資料の中では最も古いものである。そこでこれらを雄山I期と設定する。A群はさらに2つに細分できることは先に述べた。これを時期差と捉えるのか、それとも同時期の異なる系統と捉えるのかについては、現段階では判断できず今後の課題としたい。

次に5・6号墳の資料であるC群とD群を比較してみる。型式学的には、蓋の天井部と口縁部の境は稜から凹線・沈線へ、身の立ち上がりは長いものから短いものへという蓋杯の変遷の流れが認められている。これに当てはめると、C群からD群への変化が想定されるのであるが、蓋の天井部と口縁部の境を見ると、C群としたものの稜は痕跡的なものでありD群とした凹線や沈線のものと同じ型式内に存在しても特に違和感のないものである。身の口縁部立ち上がりの長さや内傾度をみても極端な差があるとはいえないものである。したがって、ここでは両者をまとめて雄山II期と設定し、古い様相を持つC群をII期の古相、新しい様相を持つD群をII期の新相と捉えておきたい。とすれば、ここで問題になるのがB群の位置付けである。口径からはC・D群の領域に入るものであるが、C・D群と比較した場合、蓋の天井部と口縁部の境の稜はB群の方がわずかにその痕跡を留めており、口縁端部の内傾する段もむしろA群の平坦に近いものと類似するものといえる。これらの点から、B群は雄山II期の古相に含めてC群とは異なる系統と見ることもできるが、ここでは雄山II期の中に位置付けてA群とは異なる系統の一群としておきたい。

次に、5・6号墳で出土している蓋杯以外の器種を概観してみる。

5号墳の他の器種を見てみると、無蓋高杯は長脚化したものと長脚化しつつある段階のものに、短頸 壷は肩部の張るものとややなで肩のものに、壷は首の短めのものとやや長めのものにそれぞれ分けるこ とが可能である。6号墳のものでは、提瓶は大型で環状の把手を持つものと小型で鍵状の把手を持つも のに、無蓋高杯は杯部口縁が外反気味のものと直線的に立ち上がるものに、それぞれ分けることが可能 である⁽⁴⁾。また、**越**は石室内のものと周溝から出土したものを比較すると、石室内のものの方が口頸部が伸びて口縁部も大きく開いている。これらの大きく2つに分けられる器種を時期差と見るか、系統差と見るかという問題はあるが、蓋杯のあり方と組み合わせて積極的に評価すれば、雄山 II 期の古相と新相とみなすこともできよう。とするならば、5・6号墳では遺構として(堆積状況の土層観察など)捉えることのできなかった追葬を、遺物の面から検証したといえるのではなかろうか。

最後に、それぞれの段階の実年代であるが、県内での窯跡を基にした体系的な編年と実年代が確立していないため、あえて実年代の基準として引き合いに出される大阪府陶邑古窯址群の田辺編年⁽⁴⁵⁾と対比させてみる。雄山Ⅰ期の蓋杯の特徴はMT15型式と、雄山Ⅱ期はTK10型式の特徴と類似するものと思われ、それぞれ6世紀前半と、6世紀中頃の年代が想定できよう。すなわち、須恵器の年代観からは7号墳→5・6号墳の築造順序が想定されるのである⁽⁴⁶⁾。

3 雄山古墳群石室の位置付け

雄山古墳群には 7 基の古墳が確認でき、そのうち 4 基の調査を実施した。 $1 \sim 3$ 号墳の内容は不明であるが、その立地から斜面に築造された横穴式石室であると考えられ、構造的には 4 号墳に類似したものとなる可能性が高い。 $4 \sim 7$ 号墳は前述した玄室床面出土須恵器の検討から、MT15型式期の 7 号墳に続いて TK10型式期の $5 \cdot 6$ 号墳(4 号墳もこの時期だろう)と連続して築造されたと考えられる。以下その石室構造について検討する。

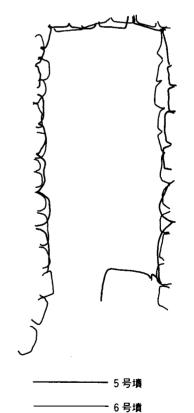
玄室平面形の比較

第10表は4基の古墳の石室規模をまとめたものである。これによると、7号墳の玄室比が飛び抜けて

高く、4~7号墳は2.0~2.5の範囲に収まる(47)。但し、6号墳は、玄室と羨道部ないし前庭側壁部の境が不明瞭であり(48)、7号墳も土圧等の影響により、玄室比は正確性を欠く結果となる。6号墳の玄室長は292cmと報告したが(左側壁長)、右側壁長は258cm前後となる。まず、注目できるのが、5・6号墳の玄室平面規模の一致である(第138図)。両者は出土遺物からほぼ同一時期の築造と想定でき、平面規格の共有が行われているが、袖部構造や石材規模に差異がみられ、異なる石室構造を採用していることになる。4号墳の副葬品の組成は不明であり詳細な比較検討はできないが、副葬品を見ると4号墳は馬具、埴輪、5号墳はU字形鋤先、6号墳は小型珠文鏡をそれぞれ単独で保有しているが、7号墳は玉類を持たないことが窺える。逆に共有する副葬品として、鉄鏃が挙げられ、その多量副葬が認められる。これらの副葬品がどの程度被葬者像を反映しているか不明であるが、異なる副葬品を保有する点のみ指摘しておきたい。

同様に, 5号墳の玄室長と7号墳のそれが一致している点に留意 する必要があるが,詳細は不明である。

各石室の玄室比及び玄室幅の対比を行うため、土井氏の作成した 筑前地方の横穴式石室、竪穴系横口式石室の玄室比と玄室幅の関係

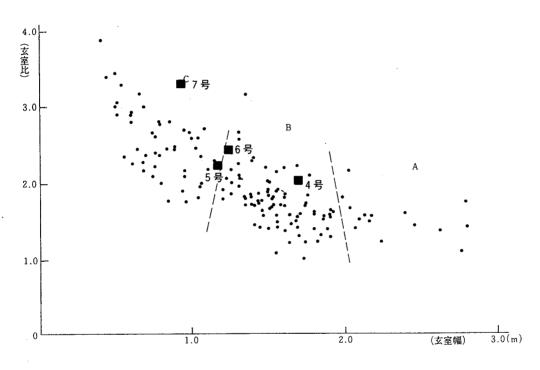


第138図 5・6号墳 玄室比較(S=1/40)

を捉えたグラフ⁽⁴⁹⁾にその数値を落とした(第139図、土井氏はA群を北部九州型石室A類、B群が北部九州型B類、C群を竪穴系横口(型横穴)式石室にそれぞれ該当させている)。平面形による限り、4・6号墳は北部九州型B類、5・7号墳は竪穴系横口式石室にそれぞれ対応している。しかし、石室構造が示すように、少なくとも筑前地方の平面形による分類には該当しないことが窺える。

	墳 名	袖部構造	7.	室 規	模 (cm)		備考
	惧 石	他可得足	玄 室 長	奥壁幅	玄門部幅	玄室比) VIII 45
4	号墳	両袖	左345,右275	168	57	2.01	円筒・形象埴輪
5	号 墳	左肩袖	256	116	64	2. 21	
6	号 墳	無袖	292	124	112	2.47	左肩袖の可能性あり、小型鏡
7	号 墳	右肩袖	254	93	46	3. 23	玉類の欠落

10表 各石室規模の比較



第139図 玄室比と玄室幅(註47)より抜粋。一部加筆)

4・5号墳の石室の系譜について

- 4・5号墳の石室の系譜について検討するが、その前にこれらの特徴をまとめると以下のようになる。
- 1. 羨道部を持たず、代わりに墓壙掘削時に同時に掘り込まれた墓道を有する。
- 2. 前壁を有し、袖部構造は板石を数段積み重ねたものである(玄門立柱石の使用は認められない)。
- 3. 袖石を覆う天井石(前壁最下段石材)は玄室天井石より、一段低い。
- 4. 玄室比は2~2.2前後となり、玄室幅に対して、約2倍程度の玄室長を有する。
- 5. 玄室平面プランは、4号墳に胴張り気味の傾向も窺えるが、概ね長方形プランである。
- 6. 袖部は4号墳が両袖式,5号墳が左片袖式である。

- 7. 閉塞は玄門部で行われ、塊石を用いる。
- 8. 玄室床面と墓道底面に段差はなく、框構造も確認できない。
- 9. 腰石の手法はみられない。

以上、その系譜を理解する上で重要な諸要素を9項目にまとめた。これらをもとに、森下浩行氏(50)による横穴式石室の分類や柳沢一男氏(51)、蒲原宏行氏(52)の竪穴系横口式石室の分類に対応させると、森下氏の「竪穴系横口式石室」系横穴式石室、柳沢氏の無羨道石室、蒲原氏の竪穴系横口式石室に連続(後続)する石室と称される石室構造に当てはまる特徴が多い。また、花田勝広氏(53)は竪穴系横穴式石室と呼称している。花田氏は、宗像地域において、石室を深い墓壙に納めて、墳丘を作るという造墓法と蒲原氏の規定した竪穴系横口式石室の要因によって羨道が未発達となり、後続する石室に竪穴系横口式石室に類似する特徴を有しながら、楣石、前壁を設け、高さ・床面積が飛躍的に拡大され、いわゆる横穴式石室と同質の埋葬施設であると規定されている。雄山古墳群と同一時期に築造された竪穴系横穴式石室である宗像市城ヶ谷15号墳は、胴張りの玄室平面プランに、高い天井を有する石室で、羨道部はなく、前庭側壁が付設されている。墓道底面と玄室床面との段差はみられず、墓道の水平化も著しい。この石室は花田氏の指摘通り、羨道の欠如という点を除けば、通有の横穴式石室と機能的な変化はなく、前述した4・5号墳の特徴1・8に共通している。加えて、玄門部における閉塞も共通したものである。

一方、特徴2とした板石数段積みの袖石構造は県内では類例に乏しく、大多数の石室には玄門立柱石の使用が認められる。4・5号墳は羨道部の欠落により、袖石が羨道部より突出するか否かを判断することはできないが⁽⁵⁴⁾、玄門部構造を見る限り、畿内型石室⁽⁵⁵⁾に近い構造を呈するものではないかと考えられる。同様に長方形の玄室平面プランや塊石による閉塞、腰石の未使用、平天井といった諸特徴も九州系の横穴式石室、竪穴系横口式石室、竪穴系横穴式石室の様相とは符号しない。

上記のように4・5号墳の諸特徴を九州と畿内における横穴式石室、竪穴系横口式石室と比較した場合、両地域の属性がそれぞれ付加された混在した状況が窺え、複数のベクトルにより構成された石室と考えられる。無袖式の石室である6号墳の石室に関しても、基底石の配置を見る限り玄室と羨道部を区切る石材は羨道部より内側にせり出していないが、羨道部の遺存状況の悪さが示すように、羨道部と確実に言い切ることはできず、前庭側壁の可能性も残り、4・5号墳石室構造の系譜と似た様相を示す。

ここで重視したいのが、4号墳から出土した無調整突帯(断続ナデ技法)を有する円筒埴輪である(56)。この技法はその分布が紀ノ川下流域に集中し、瀬戸内海南岸と九州北部に点在している点から、当時の政治的関係や海上交通と関連した技法であると考えられており(57)(58)、その存在意義は極めて重要である。県下では王墓山古墳(59)と香色山遺跡(60)(埴輪棺に転用される)、公文山古墳群(61)で確認でき、いずれも丸亀平野南西部において分布している。王墓山古墳は墳長46mを測る前方後円墳で、横穴式石室を埋葬施設に持ち、県内で唯一石屋形が内包されている。出土遺物からTK10型式期の築造が想定できる。無調整突帯と石屋形がセット関係をなす古墳として、ほぼ同時期に築造された福岡市東光寺剣塚古墳(62)があり、その関係が注目される。また、無調整突帯を有する松山市三島神社古墳(65)(墳長45.2mの前方後円墳)は畿内型の横穴式石室を埋葬施設としており、王墓山古墳や東光寺剣塚古墳とは異なる様相を呈している。なお、今回は検討することはできなかったが、無調整突帯を有する円筒埴輪は数次に渡る波及が想定でき、各段階別に石室構造を含めた詳細な検討が必要である。

以上の検討により、雄山古墳群は無調整突帯の分布に代表される6世紀前葉段階における政治動向や 海上交通網の再整備⁽⁶⁾に関連して築造された古墳と考えられる。瀬戸内海南岸航路の代表的な寄港地と して後世まで重要な位置を占めていた綾ノ津に面した立地もそれを首肯するものである。上記した石室の特徴が示すように九州や畿内の横穴式石室・竪穴系横穴式石室の属性がそれぞれ付加された石室構造もこうした瀬戸内海を媒介とした畿内と九州との関係のなかで構築されたと理解できる。換言すれば、雄山古墳群の各石室は、九州の影響を受けた石室、畿内型石室、在地的な石室という範疇では捉えきれないものではないかと考えられ、そうした在り方が雄山古墳群の石室構造の特徴と考えられる。

その後、このような石室構造は県内には確認されず、玄門立柱石を用い、羨道より内側に突出した袖 部形態を有する、いわゆる九州系の横穴式石室が盛行する。畿内型横穴式石室も少数ながら確認できる が、その分布状況が示すように、散在的な在り方である。現時点では極めて限定された時期に築造され、 少なくとも県内においてはその前後には系譜を辿ることができない石室構造と考えられる。

註

- (1) 玄室壁体はほぼ全域にかけて赤味を帯びていた。赤色顔料が塗布された可能性を考慮して、そのサンプリングを行い本田光子氏に見ていただいたところ、ベンガラであるとの御教示を得た。また、後述する閉塞石において、一部板状石材が使用されており、そこにもベンガラの塗布が認められる。記して謝意を表する。
- (2) 廣瀬常雄氏によると、県下の横穴式石室袖部の大多数は玄門立柱石の使用が認められ、板状石材を数段積み重ねて袖部を形成する古墳は、青ノ山6・8号墳などL字型の石室や真伏古墳などの片袖式石室など少数であるとされている(廣瀬常雄他1993「横穴式石室の地域性四国地方」『季刊考古学』第45号雄山閣)。その他、長砂古古墳、王墓山古墳、本法寺西古墳等の玄門立柱石の使用が認められない。
- (3) 柳沢一男1982「竪穴系横口式石室再考」『森貞治郎博士古稀記念古文化論集』 蒲原宏行1983「竪穴系横口式石室考」『古墳文化の新視点』
- (4) 宮代栄一1993「5・6世紀における馬具の「セット」について f 字形鏡板付轡・鉄製楕円形 鏡板付轡・剣菱形杏葉を中心に—」『九州考古学』第68号
- (5) 鉄鏃の分類に関しては、下記の分類を使用した(以下、鉄鏃の分類はこれに準じる)。 杉山秀宏1988「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集 第八』吉川弘文館
- (6) 古瀬清秀1991「農耕具」『古墳時代の研究 8』 雄山閣
- (7) 埴輪の分類に関しては下記の分類を参考にした。 弘田和司1988「埴輪」『物集女車塚』向日市埋蔵文化財調査報告書第23集向日市教育委員会
- (8) 高橋克壽1995「山津照神社古墳の埴輪と6世紀の畿内の埴輪」『琵琶湖周辺の6世紀を探る』京都大学文学部考古学研究室
- (9) 鐘方正樹・安井宣也・中島和彦1991「菅原東遺跡埴輪窯跡をめぐる諸問題」『奈良市埋蔵文化財 調査センター紀要 1991』
- (10) 実測番号95~110の断続ナデ技法Bの突帯に、ヨコナデ調整を加えても断続ナデ技法Aにみられる圧痕は形成されないため、第16図のような単純な理解では解決できない問題である。岩室池古墳出土円筒埴輪にも同様の圧痕がみられ、報告者である楠元哲夫氏は「タガとりつけ前に施されたナナメ方向のヘラ状工具による連続した刻み目がある。タガをつける位置の目印的意味をもつものであろう」と評価している。ヘラ状工具による突帯の母体となる粘土紐の貼付等を含め、検討の余地は残る。天理市教育委員会他1985『岩室池古墳 平等坊・岩室遺跡』天理市埋蔵文化財調査報告第2集
- (11) 前褐 (9)
- (12) 前褐(8)
- (13) 川西宏幸1978・1979「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2・4号 日本考古学会
- (14) 坂靖1988「埴輪編年と技法伝播の問題」『考古学と移住・移動』森浩一編
- (15) 前褐 (13)
- (16) 前褐 (14)
- (17) 前褐 (13)
- (18) 靫の形態に関しては下記の分類を参考にした。

栗林誠治1993「古墳時代・靫の分類と変遷」『眞朱』第2号 財団法人徳島県埋蔵文化財調査センター

- (19) 松木武彦1990「蓋形埴輪の変遷と画期―畿内を中心に―」『鳥居前古墳』大阪大学文学部考古学 研究室
- (20) 植野浩三1983「須恵器蓋杯の製作技術」『文化財學報 第2集』奈良大学文学部文化財学科
- (21) 田辺昭三1966『陶邑古窯址群』 I, 田辺昭三1981『須恵器大成』
- (22) 大久保徹也1992「古墳時代以降の土器製塩」『吉備の考古学的研究(下)』山陽新聞社
- (23) 斉藤賢一他1980「高屋遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報 昭和54年度』香川県教育委員会
- (24) 前掲(21)
- (25) 安山岩は現在でも多数見られることから、付近から採取して使用したものであろう。おそらく花 崗岩も付近のものを採取した可能性が高い。石材の使い分けなどが行われたことは考えられない。
- (26) 赤色を呈する石のサンプリングを行い本田光子氏に見ていただいたところ、ベンガラであるとのご教示を得た。また、後述する6号墳玄室床面から出土した小型鏡周辺に赤色顔料が遺存しており、同様に本田氏に見ていただいたところ、ベンガラに混じり微量の朱が認められるという結果を得た。
- (27) 言い換えれば一枚の板状に石を積み上げて閉塞したことになり、4号墳の巨大な板石を用いた閉塞を強く意識したものである可能性が高い。
- (28) 墓道を埋め戻してしまうと追葬を行う際に玄門までの掘り直しが困難になる、すなわち正確に玄門に到達できなくなる可能性も考えられよう。
- (29) 前掲(21)
- (30) 見かけの墳丘の中心とは石室の位置がずれていることから1墳丘2石室の可能性も考慮したが、 墳丘に設定したトレンチ調査では石室は確認されなかった。
- (31) 後述するように 6 号墳と 5 号墳の石室規模はほとんど同じであり、 5 号墳の玄門と墓道の角度は 6 号墳の右側壁の屈曲の角度と近似している。これらの点からは両石室が同一の規格に基づいて築かれた可能性もあり、 6 号墳の石室が左片袖式であった可能性も全く比定するわけにはいかない。
- (32) 古墳より上方からの転落石である可能性も残る。
- (33) 須恵器を中心とした土器群は右側壁に列をなすようにみえるが、初葬時のものないし追葬時のものの土器のまとまり(単位)を出土状況から判断することはできない。
- (34) 前褐(5)
- (35) 前褐 (20)
- (36) 前褐 (24)
- (37) 観音寺市教育委員会1973『母神山古墳群千尋支群第1・4・5・6号墳発掘調査概要』観音寺市 文化財調査報告第3号
- (38) 綾南町教育委員会1988『本法寺西古墳発掘調査概報 —香川県綾歌郡綾南町所在の後期古墳の調査—』
- (39) 三野町教育委員会1988『大原塚古墳発掘調査報告書 ─香川県三野町吉津北築圃場整備事業に伴う発掘調査─』
- (40) 前掲 (39)
- (41) 従来の県下における横穴式石室の導入期は6世紀前半~であったが、観音寺市丸山古墳の調査の進展により、5世紀中葉にまで遡る可能性が考えられる。その概要を以下に示す。
- 1. 墳丘規模は直径約35mの円墳である。

- 2. 埋葬施設は2基の竪穴式石槨が並列していると考えられてきたが、1基であることが判明した。 その規模は奥壁幅3.7m、玄室長4.0m以上(延長しても50cm 前後だろう)の略方形の平面プラン を有する。
- 3. 石室は板石・割石の小口積みで行われ、下半部は緩やかに内傾し、それ以高は持ち送りが進展し、いわゆる「穹窿式の天井部」の様相を呈する。
- 4. 石室内西側には九州産の石棺が安置されており、その年代観は5世紀中葉前後に比定できる(出土遺物との齟齬はない)。石棺配置や奥壁に沿った鉄刀の配置から、コの字形の屍床配置となる可能性が極めて高い。
- 5. 墳丘裾部には拳大の石材を用いた葺石が認められ、円筒埴輪に加え、蓋形埴輪、動物埴輪(馬・ 鳥他)が出土している。

観音寺市教育委員会1999『丸山古墳現地説明会資料』

- (42) 浦山古墳群発掘調査団1969 『浦山古墳群調査概報』香川県文化財調査報告第10号
- (43) 蓋の口径11.4cm の973と11.6cm の972の 2 つは一回り小さなもの(A①群)で,他の 5 個体(A ②群)とは焼成もやや異なる感じを受ける。
- (44)一方, 6号墳の短頸壷などのようにほとんど形態差のみられないものもあり,型式差(=時間差) として捉えるのではなく,短期間(一型式内)の系統差であることの傍証と捉えることもできよう。
- (45) 前掲(21)
- (46) 高杯の脚端部の折り曲げや聴の形態などから判断すると、5号墳よりも6号墳の方がわずかに先行する可能性がある。
- (47) 玄室比= (左側壁長+右側壁長) / (奥壁幅+前幅) 土井基司1989「竪穴系横口式石室小考―筑前地方を中心にして―」『岡山大学構内遺跡調査研究年報 6 』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- (48) 林日佐子1982「日本と朝鮮における竪穴系横口式石室」『考古学と古代史』森浩一編「羨道とは埋葬の場である玄室と墳丘をつなぐ通路の役割を持つものである。(中略) これに対して、前庭側壁は、横口部前面に設けた前庭の側壁面に、貼石状石積みをなすもので、決して天井石を構架しない」と区分している。また、これらの羨道部は横穴式石室の本質を充分理解できない段階において、玄門部前面に羨道ないし前庭側壁を模倣した構造物をつける「型」の模倣である可能性も否定できない。
- (49) 前掲(47)
- (50) 森下浩行1986「日本における横穴式石室の出現とその系譜」『古代学研究』111号 森下浩行1987「九州型横穴式石室考一畿内型石室出現前・横穴式石室の様相―」『古代学研究』 115号
- (51) 柳沢一男1982「竪穴系横口式石室再考」『森貞治郎古希記念古文化論集』
- (52) 蒲原宏行1983「竪穴系横口式石室考」『古墳時代の新視角』
- (53) 花田勝広1991「筑紫宗像氏と首長権」『地域相研究』第20号上巻 地域相研究会
- (54) 山崎信二1985『横穴式石室構造の地域別比較研究―中・四国編―』
- (55) 土生田純之1994「畿内型石室の成立と伝播」『ヤマト政権と交流の諸相 古代王権と交流 5』 名著出版

- (56) 断続ナデ技法Bの出現率は、底部から最下段の突帯まで残存する例が皆無に近いため、それぞれの比率を計測することはできないが、須恵質系埴輪全体の1/5程度と思われ、主体を占める技法ではなかったと考えられる。
- (57) 前掲(13)
- (58) 前掲(14)
- (59) 善通寺市教育委員会1983『王墓山古墳調査概報』 善通寺市教育委員会1992『史跡有岡古墳群(王墓山古墳)保存整備事業報告書』
- (60) 矢原高幸1973『善通寺市の古代文化』善通寺市 香川考古刊行会1994『香川考古』第3号―特集:香川の中期古墳―
- (61) 香川県教育委員会1983『新編香川叢書 考古編』 香川考古刊行会1994『香川考古』第3号―特集:香川の中期古墳―
- (62) 福岡市教育委員会1991『東光寺剣塚古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告第267集
- (63) 松山市教育委員会1972『三島神社古墳』
- (64) 5世紀中葉段階の九州産石棺の輸送ルートをはじめとした海上交通網に対する意味において,再整備という表現を用いた。

高木恭二1983「石棺輸送論」『九州考古学』第58号 九州考古学会

(補記)

校正中に保存処理を終えた鉄製品が納品され、個々で報告したものが接合することが判明した。以下、接合した鉄製品の報文番号を列挙し(かっこ内は現報告器種名)、最終的な器種を報告する。

- *448(腸抉三角形鏃鏃身部)と479(鉄鏃頸~茎部)が接合し,腸抉三角形鏃となる。
- 450 (腸抉三角形鏃鏃身部~頸部上半) と473 (頸部下半~茎部) が接合し, 腸抉三角形鏃となる。
- 457 (長頸鏃鏃身部) と484 (鉄鏃頸部) が接合し, 長頸鏃となる。
- 855 (圭頭鏃鏃身部) と868 (長頸鏃鏃身部) が接合し, 圭頭鏃となる。
- 🫂879(刀子)と871(鉄鏃頸部)が接合し,刀子となる。

観 察 表

雄山古墳群土器観察表

雄山 4 号墳土器観察表

18 Extra R. Construction C	報文番号	风版番号	· 新 新 公	器 籍 名	口径·底径	器第一胎士(単・中・細)	題 中 (1	外面調整	内面置線	残存度	**
1 STORMAN NOT STORE SEED STATE 1.5 C.		_	玄室内C区 IV区	養坏	_		外面:灰白(5Y7// 内面:灰オリーブ	100	天井郡3/5? 回転ヘラケ ズリ・他は回転ナデ	回転ナデ	口縁部小片	
15 STATION 1822 1822 1824	42		≥	1		中:石英·長石	外面:灰(5Y6/1) 内面:灰(5Y6/1)	MOZ. A	回転ナデ	回転ナデ	口榛部小片	
1 Service REFE See Back 10 Colorado Sec Back 10 Colorado	43	\vdash	1	ı		中:石英·長石	外面:青内面:青	口縁部と天井部の境は不明瞭で,浅い凹線がめぐる。 端部は内値し,稜を有する	回転ナデ	回転ナデ	口縁部小片	
1 ENTANCIS NEED CORP.	44		ı			中:石英·長石·	外面: 灰オリーブ(5Y6/ 内面: 灰(5Y6/1)	端部は内傾して立ちあがり、稜を有する	回転ナデ	回転ナデ	口縁部小片	
19	45	l		1		中:石英·長石·	外面:青灰(5 b) 内面:灰 (N6/		回転ナデ	回転ナデ	口縁部小片	
19	46	Г	玄室内B区 IV区	須恵器		中:石英·夏石 黒色粒少	外面: 灰 内面: 灰	_	回転ナデ・カキ目	ナチ	脚部都小片	透かし孔は1段か2段かは不明
6. Authority March 2015 19.14 1 - 16.5 A 2019 19.15 1 - 16.5 A 2019	27.1	Г	A区周清内A A区周清中央畦 より両	須恵器	П: 16.3	中:石英·長石	外面: 灰 内面: 灰	-	天井都4/5回転ヘラケズ リ・他は回転ナデ	回転ナデ	口縁部1/4	ロクロ回転方向右
日	272		A区周清内A A区周清内E A区高降·南西降图谱	須恵器	П:15.4	中:石英·長石	文·公 圖 子 (文)	+	回転ナデ	回転ナデ	口縁部1/6	器高が高くなる形態か?
	273		A区周清中央畦より東	須恵器	D: 14.7	中:石英·長石	外面: 灰白(2.5Y7/1) 以面: 灰白(2.5Y7/1)	稜はごくかすかに突出、端部はわずかな段をもつ	并都1/2 ·他进回	回転ナデ・中央のみ不定 方向ナデ	口縁部1/8	
	274		A区周清内A A区D区間畦畔 周進+増斤ぬ+	原器	П: 15.0		外面:青灰(5PB5/1) 内面:青灰(5PB5/1)	様は選化し、こくかすかに突出、端部は内値し、わず かな段を有する。天井部は平田で広い	并部3/5回	自転ナデ・中央のみ不定 方向ナデ	天井都都完存	内面中央やや外寄りに同心円文スタンプ・ロク ロ回転方向左
6	275		A区周律内A A区周律内E A区周建中央睢上的两A区周建	真患器	□:14.2	中:石英·長石	外面:青灰(5 P B6/1) 内面:青灰(5 P B6/1)	器高が低く、天井部は広い、口縁部と天井部の境に沈 編がめぐる、 端部はかすかな移をもつ	并部4/5回·他は回転	回転ナデ・中央のみ不定 方向ナデ	口練部1/8	内面中央周縁に円心円支スタンプ・ロクロ回転 方向た
6 (1988年 1988年 1	276		A区周律内E A区周律中央旺上的两	真影器	П:13.0	中:石英·長石	外面: 灰 (N6/) 内面: 灰 (N6/)	口縁部と天井郡の境に沈線がめぐる、端部はわずかな おを有する 翌点が高い彩戦	天井部1/2回転ヘラケズ リ・他は回転ナデ	4 =	口練部1/5	
6 (2000年 1982年	277		A区周溝中央畦より東	器道	口:12.9 底:4.5		外面:灰白(2.5Y7/1) 内面:灰白(10Y R7/1)	天井郎と口縁郡の境は丸みを帯び不明, 端部は内傾し。 段をもつ	天井部2/5組い回転ヘラケズリ・他は回転ナデ		口條部1/4	ロクロ回転方向右か・短頸壺の蓋の可能性も残 る
6	278		C区精査(損徭各り)第1遺構 耐ベース+ト面	(東器	П:11.3	中:石英·長石	外面:青灰(5 P B5/1) 内面:青灰(5 P B6/1)		回転ナデ		口縁部1/8	器高の高い形態
4. 6	279		A区周溝内E A区周溝中央畦 より西	(東震	П:13.3	中:石英·長石	外面: 灰 (N6/) 内面: 灰 (N6/)	稜は退化し、天井部と口縁部の境は不明瞭、端部は外 反し、内値する	回転ナデ	回転ナデ	口縁部1/8	ロクロ回転方向左か
6. A CANTENNAME AND	280		A区協議内AA区協議内E A 区協議中央睦より西 A区D区 顯駐群培庁+88十	[東器	D: 13.7	中:石英·長石	外面:青灰(5 P B5/1) 内面:青灰(5 P B5/1)	口縁部は内項し、端部は段を有する、受け部は水平に 1延び、菱坏を受ける、沈線を有する	底部2/3回転ヘラケズリ ・他は回転ナデ	回転ナデ・中央のみ不定 方向ナデ	口縁部1/2	ロクロ回転方向右・内面中央に同心円分スタン ブ
6. A K W M M M M M M M M M M M M M M M M M M	281		A区周谍内A	電電	П:13.6	中:石英·長石	外面: 灰 内面: 灰	口縁部は垂直に立ちあがり、端部は丸く収まる	底部1/2回転ヘラケズリ・他は回転ナデ	回転ナデ	口縁部1/8	ロクロ回転方向左
6. A Richard Manage	282		A区閣議内EA区周溝中央畦より西 A り東A区閣溝中央畦より西 A 区略・電光等国港	須恵器	П: 13.3		, 外面:明オリーブ(2.5Y 内面:氏 (N6/)	口縁部は短く内傾して立ちあがり、端部は丸く収める	底部2/3回転ヘラケズリ・他は回転ナデ	回転ナデ・中央のみ不定 方向ナデ	口縁部5/8	ロクロ回転方向左・内面に同心円文スタンプあり
6.	283		A区盛土流出層	須恵器	12.7	中:石英·長石	外面	口縁部は短く内傾して立ちあがり、端部は丸く収める	底部1/2回転ヘラケズリ・他は回転ナデ	回転ナデ	口縁部2/8	外面回転ナデは強く施される
45 A C G 全土 A C M を	284		A区閣溝内AA区閣溝内E A 区閣溝中央駐より西 A区西壁 - 南西駿閣港	須恵器	: 12.		本 石 層層	_	底部2/3回転ヘラケズリ・他は回転ナデ	回転ナデ	口縁部3/4	ロクロ回転方向左・内面に同心円文スタンプが 径7cm前後の範囲で施される
6. GES KW (CK KW (CK KW (CK KW	285		A 区盛土流出層 二次盛土	須恵器	D:11.7			口縁部は短く内傾して立ちあがり、端部は丸く収める	底部2/3回転ヘラケズリ・ (一部ヘラ切り未調整 ・ (一部ヘラ切り未調整 他は回転ナデ		口縁部小片1/ 3	ロクロ回転方向右か・273と胎土焼成が酷似→セット関係か・養と正位で重ねて焼成
6. 公子投資金額 表示 中 : 石夫 長石寺 月間 (大(5 kg))	286		C区SK02 C区4・7項間堆 箱土第1遺構面ペース土上面	須恵器		網:石英·長石:	外面:灰白(7.5Y7/1) 内面:灰白(7.5Y7/1)	稜はやや鋭く突出、端部は浅い沈線を有する。	回転ナデ	回転ナデ	口縁部小片	口縁部長がやや長い
45 CRS NOI (B(K)) 残寒器 を本 内面 TAS B(TA) 対策の指数を含くる。関係は対象をものできます。 関係 TAS B(TA) 対策を示するが限しています。 関係 TAS B(TA) 対策を示するが表すのできます。 日本語の大きをのできます。 日本語の大きのできます。 日本語のできます。 日本語の大きのできます。 日本語の大きのできます。 日本語のようのできます。 日本語のようのできます。 日本語のようのできます。 日本語のようのできます。 日本語のようのできますます。 日本語のようのできますます。	287		25トレンチ拡張区斜面部黒褐色 ∼茶褐色色土	須恵器		中:石英·長石	外面:灰(5Y6/1) 内面:灰(5Y6/1)	稜は突出せず,天井部と口縁部の境に凹線がめぐる。 蟠部は内傾し、かすかな段を有する	回転ナデ	回転ナデ	口縁部小片	一度成形した後に再度回転ナデ調整を施す?
45 AEGRIRPOLA AEGRIRPOLE (1982) 4 AEGRIRPOLA AEGRIRPOLE (1982) 4 AEGRIRPOLA AEGRIRPOLE (1982) 4 AEGRIRPOLA AEGRIPOLA (1982) 4 AEGRIRPOLA AEGRIPOLA (1982) 4 AEGRIRPOLA AEGRIPOLA (1982) 4 AEGRIRPOLA (1984) 4 AEGRIPPOLA (1984)	288		C属SX01 (B限)			細:石英・長石:	外面:灰(N5/) 内面:青灰(5PB6/1)	様は突出するが平坦な面をもつ、端部は内傾し、段を 有する	回転ナデ	回転ナデ	口縁部小片	
45 ACK 関係内入 ACK 関係内入 ACK 関係内入 ACK 関係内入 DE AT 2.5 H (20 MG) DE AT 2.5 H (20 MG) ACK 関係内入 DE AT 2.5 H (20 MG) DE AT 2.5 H (20 MG) </th <th>583</th> <th></th> <th></th> <th></th> <th></th> <th>網:石英·長石:</th> <th>外面:背灰(5PB6/1) 内面:青灰(5PB6/1)</th> <th> 口縁部と天井部の境は丸みを帯び,不明瞭,端部は内 値し,強く外反する</th> <th>回転ナデ</th> <th>回転ナデ</th> <th>口縁部小片</th> <th></th>	583					網:石英·長石:	外面:背灰(5PB6/1) 内面:青灰(5PB6/1)	口縁部と天井部の境は丸みを帯び,不明瞭,端部は内 値し,強く外反する	回転ナデ	回転ナデ	口縁部小片	
45 ACM/Ref	290		A区周溝内A	須恵器	/	網:石英·長石/	外面:灰(5Y5/1) 内面:青灰(5PB6/1)	口縁部と天井部の境に凹線がめぐる,端部は内傾し, 段を有する	回転ナデ	回転ナデ	口縁部小片	
45 ACEWING 類応募 (1986) 中:石英・坂石井 内面 (1986) 日本部は、大阪 (1986) 日本部は、大阪 (1986) 日本部は、大阪 (1986) 日本部に対してきるかり、強能はも、マブイ (1986) 日本部に対してきるかり、強能はも、マブイ (1986) 日本部に対してきるかり、強能はも、マブイ (1986) 日本部に対してきるかり、強能はも、マブイ (1986) 日本部に対してきるかり、強能はも、マブイ (1986) 日本部に対してきるかり、強能はも、マブイ (1986) 日本のできるかり、強能は自動です。マブイ (1986) 日本部に対してきるかり、強能はおいています。「1986) 日本のできるかり、強能はおいています。「1986) 日本のできるかり、強能はおいています。「1986) 日本のできるかり、強能はおいています。「1986) 日本のできるかり、強能はおいます。「1986) 日本のできるかり、対しています。「1986) 日本のでき	291		A区周津中央畦より西 A区M 層	須恵器		網:石英·長石/	外面:青灰(5 P B6/1) 内面:青灰(5 P B6/1)	口縁部は内傾し、端部は丸い	回転ヘラケズリ・回転ナ デ	回転ナデ	口縁部1/8	
45 上ントンチ目標(2階) 淡吹黄色 (独態等 环身 織:石英・長石 夕 内面: 次(2.5% 6.1) 日縁がは短く、内積に立ちみり、満部は及、収め 回転ナデ 回転ナデ 回転ナデ 回転ナデ 日縁部18 日本・デースを持ち、デースを持ち、日本・デースを持ち、日本・デースを持ち、日本・デースを持ち、日本・デースを持ち、日本・デースを持ち、日本・デースを持ち、日本・デースを持ち、日本・デースを持ち、日本・	292		A K IV MB	須恵器		中:石英·長石	外面:灰内面:水面:水面:水面	_	底部3/5回転ヘラケズリ・他は回転ナデ	回転ナデ	口縁部1/8	
45 A 区間薄内E 類應整 高坏口線 中:石美・長石普 内面:芳代(3.55.4) 用機能を構造る場合の場に終るする。口解は外方的に関き 回転ナデー 回転ナデー 口線部小片 日本・大き 日本・ディカー 日本・大き 日本・大き 日本・ディカー 日本・デ	293		25トレンチ11層(2層,淡灰黄色 土層)	須恵器		細:石英·長石/	外面:灰		回転ナデ	回転ナデ	口縁部1/8	
45 1 Tre性中 須建馨 高体 中:石美、長石普 内面: オープK(2.65 V5.1) 場面は一致・できのできのできる。日報は外方的に関き 回転ナデー 回転ナデー 日報おから。日報は外方的に関き 回転ナデー 回転ナデー 日報からできる。日報は子が、ことのできる。日報は大学、大型大型、大型大型、大型大型、大型、大型、大型、大型、大型、大型、大型、大型、	294		A区周濮内E			中:石英·長石	外面:灰内面:水		回転ナデ	回転ナデ	口縁都小片	
45 2 Tr 填圧解検性医療材質 (292		1 Tr 唯中			中:石英·長石	外面:オリープ灰(2.5G V 内面:オリープ灰(2.5G V		回転ナデ	回転ナデ	口縁部小片	
45 団 CA 本 は 様 系分り 第 1 遺棒 (独態) 所有 認能 所述 (本 元 元 元 元 元 元 元 元 元 元 元 元 元 元 元 元 元 元	296		2 Tr 墳丘断割墳丘断割中			網:石英·長石	外面:青灰(5PB) 内面:褐灰(7.5Y		回転ナデ	回転ナデ・不定方向ナデ		
45 AC優積内A AC優積内A AC優積内A AC優積内A AC優積内A AC優積内A AC優積内A AC優積内A AC優積内A AC優積的 ACCESSION ACCESSI	297		C区精査(増稿各り)第1選構 面ペース土上面	嚣軍影	底:7.9	細:石英·長石/	外面:青内面:青	н	回転ナデ・不定方向ナデ	ナチ	脚部1/3	
45 C区等 1連接面ペース土 類態器 高环脚部 底:8.6 細:石英・長石少 内面: 氏(1.5.% 6.1) 力形四方速かしか? 報節には凹線がめぐる 同様ナデ・ナデ ナデ 脚部/3 脚部/3 45 C区西断剤 須恵器 高环 期:13.2 瀬田 天 (1.5.% 6.1) 口縁郡と底部の中位に二条の凹線が施される 底部回転へラケズリ・他 回転ナデ 小破片 45 C区西断剤 須恵器 高环 期:13.2 外面: 氏(1.5.% 6.1) 外面: 氏(1.5.% 6.1) 小破片 小破片 45 C区商務等等1選接面ベース上上 須恵器 高环 期:13.2 外面: 氏(1.5.% 5.1) 小破片 小破片 45 C 区積券券引 通接面ベース上上 須恵器 高环 期:13.2 外面: 氏(10.7.5.% 1.7) 小破片 小破片	298		A区周津内A A区周溝中央畦 より西	須恵器	底:9.2	中~細:石英··] 少	外面: 灰 内面: 灰	長脚化とは呼べない、脚部方形の三方透かしか?	回転ナデ・ナデ	ナデ	脚路1/3	
45 C反西断剤 須恵馨 高坏 期:13.2 細:石类・長石少 内面: K(10.N.5.1) 口縁部と底部の中位に二条の四線が備される 底部回線かきれる 成部を大デッケスリ・他 回転ナデ 小破片 45 C区内断剤 (A 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2	599		C 区第1 遺構面ペース土		底:8.6	網:石英·長石/	外面:灰 内面:灰	方形四方透かしか?裾部には凹線がめぐる	回転ナデ・ナデ	ナデ	脚部1/3	
45 C区域衝解 (須恵器 高环 暦:13.2 内面: 灰(10/5.7) 45 C区積積等第1遺構面ペース上上 (須恵器 高环 暦:13.2 内面: 灰(10/4.1) 15 (10/2.4)	300		C区西断割		M : 13.2	網:石英·長石5	外面:灰(内面:灰(口縁部と底部の中位に二条の凹線が施される	底部回転ヘラケズリ·他 は回転ナデ	回転ナデ	小破片	高坏体部か
45 C C N A 全等 1 連携面ペース上上 須恵器 高坏 刷:13.2 外面: 大(7.5 N 5/1)	301			1	月:13.2		外面:灰(7.5 Y 6/1) 内面:灰(10 Y 5/1)				小破片	
	302		-1		刷:13.2		外南:灰(7.5Y5/1) 内面:灰(10Y4/1)				小破片	

303 304 305 306 307	46 A+4⊕	A区周濂内A A区周濂中央畦									The second secon
304 305 306 307		より東1丁・畦周淳 A区周漭 中央畦より西A区域土淡出等 A区D区間畦南濱丰地丘路土 DIVMB DIV 部等等	須恵器 短頻壺	口颅 7.9 5.0 8	8.2 中:石英·長石曽	外面:青灰 (5 P B6/1) 内面:紫灰 (5 P6/1)	肩がやや張り、底部が平坦な形態, 口縁部はやや内頓 し、戴く丸く収まる	層部大半~底部回転へ ラケズリ・他回転ナデ・ カキ目	回転ナデ	体部1/3	ロクロ回転方向右・蓋を重ねて嫌いたため・口 縁部付近は自然輪がかからない
305 306 307	46 A	DOINT DOCKERS	須恵器 短頭壺	麗: 9.0	中:石英·長石書	外面:青灰(5PB5/1) 内面:青灰(5PB5/1)	用がやや扱る	口縁回転ナデ・胴部回転 ナデカキ目?	回転ナデ	小破片	
306	46 B	B区南東端IV層	須惠器 直口壺	D: 12.0	網:石英·長石少	外面:青灰(5PB6/1) 内面:青灰(5PB5/1)	類部は外方向に関き,口経過部は強部を折り返し,内 質させる	回転ナデ	回転ナデ	2月8日	
307	47 A	A区開港内A A区I・II層 B区開港ないし盛土流入土	須恵器 中甍	D: 25.0	中~網:石英·長石 普	外面:青灰(5 P B6/1) 内面:青灰(5 P B5/1)	口頸部が短く外反して立ち上がるが、輪部手前でさら に大きく開く、端部は丸く上方につまみ上げ、下端に 凸線文を1条施す	回転ナデ	回転ナデ	口條部4/8	
	47 A	A区周溝中央畦より東	須恵器 中甍	П: 26.6	中~綱:石英·長石 普	外面:暗青灰(5PB3/1) 内面:灰(5Y6/1)	<u>口類部は外反し,</u> 強部付近でやや大きく開く,獨部は 丸く上方に突出させ,下端に凸線文を1条施す	回転ナデ	回転ナデ	口縁部小破片	366と同一個体の可能性が高い
308	47 4	4 TrN層 D区墳丘断割(墓道検出)墳丘盛土	類思器 中臺	П: 26.0	編:石英·長石少, 黒色石粒少	外面:灰(5 Y 4/1) 内面:灰(5 Y 6/1)	口頭部は長く外長するが、瑜部付近で強く折れる。端 部は上方へ延び、外端面をもつ。端部下には鈍い凸線 文を3条施す	回転ナデ	回転ナデ	口條部1/8	
309	47 C	C区4・7号域間堆積土第1遺 構面ペース土	須恵器 中豊	☐ : 24. 2	中~細:石类·長石 少,黑色石粒少	外面:灰 (N5/) 内面:灰(7.5YR6/1)	口縁部は直立気味であるが、小破片であり傾きに誤り がある可能性も残る、適能手順で強く折れ、さらに上 方へ配厚させる、外端面を有し、下端に凸線文1条権	回転ナデ	回転ナデ	口縁部小破片	
310	A A	A区開港内B A区開港内E A区開港中央畦より東 A区開 等由品牌より第 C T B	須恵器 中豊	□: 24.0	中~編:石英·長石 少,黒色石粒少	外面:青灰(5 P B5/1) 内面:灰(10 Y 6/1)	口敷部は外反し、確都手前で強く折れ、さらに確認は 上方へつまみ出す、確節は外線面を有し、強い回転ナ 学書数により、回面を表皮する	口頸部:回転ナデ 体部:格子目クタキ	同心円文あて具板→ナ デ消し	口練問5/8	
311	47 女	玄室内IV層	須恵器 中豊	□: 23.6	網:石英・長石ご 少	く 外面:にぶい黄橙(10Y R7/2 内面:暗赤灰(7.5Y R3/1)	<u>「可解高は外反し、場路を上下に拡張し上下2方に面を</u> もつ、端面下半には1条ないし2条の凹線が施される	回転ナデ 体部:タタキ?	回転ナデ 同心円文あ て具痕	口練幣1/8	顕部外面に凸線文と沈線・波状文が施されるが ・自然軸が多量にかかり詳細は不明である
312	47 C	C区拡張区I・II・IV層 C区第 1連構面ペース土C区	須恵器 中甍	D:24.0	編:石英・長石ご 少	く 外面: 灰(7.5 Y 4/1) 内面: 灰(5 Y 4/1)	口類都は外反し、適格上下に拡張するため、上下2方 に面をもつ、適面下半には1ないし2条の凹線が結さ	回転ナデ 液状文	回転ナデ	口條部1/8	胎士・端部形態・口頸部長等か311と酷似し外面 に自然軸はかからないが・同一個体に近い存在
313	47 A	A区周谍内A	類惠器 小麦	П: 19.6	中:石英·長石曽	外面:暗青灰(5PB4/1) 内面:灰(10Y4/1)	口類部は短く外反し、場部を上に強く、長く、下にやや拡張、建而中央に同転ナデを加える	回転ナデ 体部:カキ 目	回転ナデ 体部:不定 方向ナデ	口條部1/8	
314	47 C	C 区積委(填稿客り)第1通構 面ペース士上面	須恵器 小甍	П: 18.6	中:石英·長石普	外面:紫灰(5RP6/1) 内面:紫灰(5RP6/1)	口類部は外反し、連絡下前でやや前く、強部上下に拡張し、上下 2 方に面をもつ	回転ナデ	回転ナデ	口縁部1/8	内外面に自然軸付着
315	47 25	25トレ南拡張区黒褐色土層	須恵器 壺	П:21.0	中:石英·長石眷	外面:灰(574/1) 内面:灰(576/1)	「 <u>口敷部は外反し、轟部手前で大きく開く、轟部は上下</u> に拡張し、上下2方に離面を有する	回転ナデ	回転ナデ	口縁都小破片	口縁部下の頸部には1条の凸線文が施される
316	47 25	25トレS X01集石部分	須恵器 壺	D:21.0	中:石英·長石曹	外面:灰(5Y5/1) 内面:灰(5Y6/1)	口頸部は外反し、端部下前で強く開く、端部は上下に 拡張し、上下2方の端面を有する、口縁端部と頸部の 境に2条の凸線文を施す	回転ナデ	回転ナデ	口縁部小銭片	器壁厚がやや薄い
317	47 C	C区4・7号墳間堆積土第1遺構面ペース土	須恵器 中甍	D:21.0	中:石英·長石普	外面: 灰白(5 Y 7/2) 内面: 灰(5 Y 6/1)	□ 「	口類部:回転ナデ 体部:格子タタキ	回転ナデ 同心円文あて具痕	口縁部2/8	口縁部の焼き歪みが激しい
318	47 47 47 47 47	C区4・7号頃中央断割第1選 構面ペース士C区4・7号頃間 堆積土第1選構面ペースC区4 ・7号墳中央断割墳丘盛土+4 ・7号墳町権辞+4	須恵器 小豊	П:19.8	中:石英・長石曽	外面:灰(7.5 Y 6/1) 内面:灰(5 Y 6/1)	雑都は水平面を持ち、内棚にやや拡張される。端面を 有し下方は折り込むように垂下させる	回転ナデ	回転ナデ	口縁部小破片	317と同一個体の可能性が高い
319	47 墳	4 丁二二	須恵器 中豊	П: 22.0	中:石英·長石書	外面: 灰(5 Y 5/1) 内面: 灰 (N 5/)	口頸部は外反し、端部手前で大きく開く、端部は水平 面を有し、内側にやや拡張する、端面は広く、断面が 玉彩を号する。	回転ナデ	回転ナデ	口縁部小銭片	焼成・色調から326と同一個体と思われる
320	47 CI	CKSK02	須恵器 中甕	П: 22.6	中:石英·長石普	外面:青灰(5 P B5/1) 内面:灰(5 V 6/1)	機能は上下に大きく拡張され、上下2方に端面を有する。 それぞれ他い同能ナデにより、やや勢い	回転ナデ	回転ナデ	口縁部小破片	
321	47 A	A区周溝下層		П: 15.8	中~粗:石英·長 善 異色石紋少	外面:繁灰(5P5/1) 内面:青灰(5PB5/1)	<u>「国勤郡は外湾し、編都は上方に肥厚させ、端面をもつ。</u> 下艦には続い凸線文を有する	伝ナデ	回転ナデ	口縁部小破片	
322	47 A	A区周溝中央畦より西		D: 16.8	中:石英·長石普, 黒色石粒少	外面:略育灰(5 P B 4/1) 内面:青灰(5 P B 5/1)	<u>口類部は外反し、矯部を上に突出し、端面を有する。</u> 増面下方は折り返すように垂下する	類部:カキ目 デ	回転ナデ	口縁都小破片	
323	47 C	C区4・7号頃間堆積土第1遺 構面ペース土	須恵器 小甍ないし小型壺	□:15.4	中:石英·長石普	外面:オリープ灰 (2.5G Y6/ 内面:オリープ灰 (2.5G Y6/	<u>「</u> 」類都は外海、着都はわずかに上下に拡張し、凹線文 が施される	類部:カキ目 デ	回転ナデ	口縁都小截片	
324	47 CI	C 区等 1 遺構面ペース土	須恵器 中曼	□: 23.8	中~粗:石英·長石	外面:灰(7.5 Y 4/1) 内面:灰(5 Y 6/1)	口類部は外湾し、雑部手前で強く開く、強部は上下に 大きく拡張され、雑面強い回転ナデが加えられる	口類部:カキ目 回転 ナデ	回転ナデ	口縁部小截片	内面及び端面に自然釉
325	47 ZS	25トレロ層(淡灰黄色土層)D 区IV層	須恵器 中豊	D:25.6	中:石英·長石書	外面:暗灰 (N3/) 内面:灰(7.5 Y 6/1)	□顕都は外湾気味に立ち上がり、端部手前で大きく屈 曲、□獨都中央に1条の凸線文を配し、文様寄を上下「□ に反切り、それぞれに後状文が構きれる端部は丸く収 か、4面1-m下の位置に加速や始す	口類都:淡状文 回転 ナデ	回転ナデ	口緣部小數片	
326	48	C区SX01 (A区) C区4・7号域中央断割第1連構面ペース十	須恵器 中甍	類部: 22.0	中:石英·長石曽	外面:紫灰(5 P 5/1) 内面:背灰(5 B 5/1)		平行タタキ後、・ヨコハ ケないしカキ目	同心円文あて具痕後弱 いヨコナデ	口縁部小破片	319と同一個体
327	48 CI	C区10トレ北周洋直上層	須恵器 甍屑部	M : 17.0	粗:石英·長石多	外面:オリーブ灰(2.5GY6/1) 内面:灰(N5/)	-	平行クタキ後カキ目	回転ナデ・同心円文あて 具裁	口縁部小破片	
328	\$ ○雅雅	C区10トレ北周洋直上層 C区第10トル北周洋直上層 C区第1・1・1・1・1・1・1・1・1・1・1・1・1・1・1・1・1・1・1・	須恵器 小甕体部			外面: 青灰(5PB6/1) 内面: 紫灰(5P6/1)		平行タタキ後カキ目	同心円文あて具痕後ョ コナデ	体部5/8	
329	48 1	1 Tr 畦中	須恵器 甍底部	刷: 23.0	編:石英・長石ご 少	く 外面:暗赤灰(5R4/1) 内面:背灰(5PB6/1)	底部は円盤状粘土を継ぎ足す→外面クタキの方向が変 わる	格子目風タタキ	同心円文あて具痕	口縁部小破片	外面自然釉 311胎土・自然釉が酷似
330	8 4 〇 4 4 严 権	C区第1選集面ペース士 C区 4・7号域間推積土第1選構面 ペース土 C区4・7号域中央 所約域丘監士+4・7号域間推 額44・7号域間推発土		底:10.6	中:石英・長石曽	外面:青灰(5 P B6/1) 内面:灰(5 Y 6 1)		格子目風タタキ	同心円文あて具痕	底部8/8	内面のあて具板は底部は入会になされている が・体部はやや粗い・底部の地面設置部分は摩 靴が激しい
331	48 AI	\区周濂内臣 A区周濂中央畦:9西	負惠器 喪屑部	₩ : 19.0	中:石英•長石眷	外面:青灰(5P B6/1) 内面:明青灰(5B7/1)	-	平行タタキ後カキ目	同心円文あて具痕	開第2/8	
332	48 CI	C⊠SX02	須恵器 底部		中:石英·長石曽	外面:青灰(5PB6/1), 青灰(5PB6/1), 青灰(5PB6/1) 内面:青灰(5PB6/1)	が付着し	格子目風タクキ	同心円文奏で具痕	底部小破片	
333	49 2.	Tr直層	須恵器 口縁部		中:石英·長石書	外面:暗青灰 (5 P B3/1) 内面:暗青灰 (5 P B4/1)	・	回転ナデ 波状文	回転ナデ 波状文	口縁部小銭片	
334	49 E	C区材査(墳裾寄り)第1連構 面ペース土上面	須恵器 口縁部		中:石英·及石普	外面:略青灰(5PB3/1) 内面:略青灰(5PB4/1)	口類都は確やかに外荷、端部は狭い面を有し、端部下 0.5.1.5mの位置に凸線文を離す、類部には下脚に2 条上に1条での交帯文で文様帯を区画し、それぞれ改 状文が施される。	回転ナデ 液状文	回転ナデ 波状文	口縁部小戦片	

ł	Q		1		E	W (1 / W //				E
4	A区間溝中央畦より東 A区周 9 港中山井 トル西	1 口類的	┼		外面:暗紫灰 (5 P 3/1) 内面:紫灰 (5 P 5/1)	2条の凸線文が施される	回転ナデ 波状文	回転ナデ 波状文	小破片	334・335と同一個体
<u> </u>		弥生土器 壺	D: 14.4	中~細:石英·長石 普,雲母書,砂少	4位面	口縁部は緩やかに外反して開く。	類部: ヨコナデ 肩部: ヨコナデ後板ナ デ	類節:指押さん役ョン ナデ 肩部:ヨコ方向の板ナ デ or ケズリ	類~底部小蔵 片	
E	C区墳丘断割墳丘盛土	 	□ : 18.4	中:石英·長石普, 赤色粒少	外面:程(7.5Y R6/6) 内面:にぶい黄褐(10Y R5/3)	口縁部は強く外反して開き、端部は上下に拡張されるが、下方に強く引き出している。	体部:タテハケ 類部:指押さえ後ナデ □縁部:ヨコナデ	口縁郡:ヨコナデ 類部:ヨコハケ後ヨコ ナデ	口縁部小破片	
	Th.	弥生土器 魔	П: 16.0	中:石英·長石普, 赤色粒少, 雲母少	がた	口縁部は強く折れて、外反気味に開く。端部は四角く 収めるが、やや下方につまみ出す。	口縁部:指押さえ後ヨ コナデ 肩部:板ナデ	口っ原理	口糅部小破片	
+	C区填丘上I隔+填丘路土	弥生土器 薨	П: 18.0	中~細:石英·長石普,赤色粒少,雪	4 外面:橙(7.5Y R6/6) 内面:黒褐(7.5Y R3/1)	口縁部はくの字に折れ、きわめて短い。	口縁部:タタキ後ヨコ ナデ 体部:タタキ	口縁部:ヨコナデ 体部:ヨコナデ後一部 タテハケ	口縁部小破片	
2 Tr 壁面精査中	rtin-	弥生土器 鉢	П: 27.0	中:石英·長石書, 赤色粒少, 雲母少, 路心	ル 外面: 灰黄褐(10YR4/2) ル 内面: 黒褐(10YR3/1)	内湾気味の体部から、強く折り返して水平に開く口縁 部を持つ。矯部は丸く収める。	口縁部:指押さえ後ョ コナデ·タタキ後タテハ ケ	口縁部:ヨコナデ・タテ ハケ	口縁部小破片	
پد سد	A区周溝中央畦より西	弥生土器 長頸壺	П:8.4	中:石英·長石普, 赤色粒少, 梁母多, 每開石華	外面:にぶい黄楊(10Y R5/4) 内面: 楊(10Y R4/6)	口縁部は直線状に開き、端部は丸く収める。	不明	指押さえ後入念なタテ ハケ	口縁部小破片	下川津B類土器
	ran a	弥生土器 高坏		中~篇:石英·艮石 少,赤色粒少,雪	1 外面:橙(5YR6/6) 内面:橙(5YR6/6)	脚柱部は太く、裾部は穢やかに開く。	足輪部:タテハケ·指押 さえ	脚輪部:シギリ目 脚下半:ヨコナデ	脚~坏部小破 片	
	-	弥生土器 鉢	底:4.45	中:石英·長石普, 赤色粒少, 砂少	外面:橙(5Y R6/6) 内面:橙(5Y R6/6)	底部はやや突出し、平底気味である。	タクキ後指押さえ	粗いハケ	底部8/8	
3 TrI層 (機乱中)		弥生土器 鉢ないし甕	底:3.2	和:石英・長石音, 赤色粒音, 8 mm 8のハレキ	前 外面:橙(7.5YR6/6) 内面:橙(7.5YR6/6)	底部はやや突出し,平底気味である。	底部:指押さえ 体部:ケズリ	板ナデ	底部7/8	
À	A区周溝上面(IV層残る)	弥生土器 鉢ないし甍	展:6.6	中~粗:石荚·長石 普,赤色粒少,等	景 外面:明黄褐(10 Y R6/6) 内面:橙(7.5 Y R6/6)	底部はやや突出した平底。	底部のみ指押さえ	底部のみ指押さえ·ケズ リ?	底部4/8	平底
3 Tr 墳丘断割	rts.	弥生土器 鉢	底:4.0	中:石英·夏石普, 赤色粒小 繁母心	外面	底部は突出するが、平坦面を持たない。	不定方向ナデ・指押さえ	ヨコハケ後左上がりナ デ (左回転)	底部8/8	歪な底部
	45.72	1	底:6.4	中:石英·長石書 赤色教少, 寒母少		底部は平坦でクタキが擒される。	タタキ	底部:指押さえ 体部:タテケズリ?	底部1/4	底面→外面調整用のタタキ板と同じ原体によるタタキ痕あり
A区周溝中央畦より西		数生土器 鉢	展:4.8	中: 石英·長石書, 84.8	A 画 画	底部は平坦でタタキが施される。	タタキ後タテハケ	斜めハケ	底部2/8	
B区周溝中央断割		1	底:4.1	中:石英·長石書, 赤色物小 常丹小	外面:明黄褐(10YR7/6) 内面:姆(7 5VR6/6)	底部は強く突出した平底である。	タタキ	指ナデーケズリ	底部6/8	蓋の可能性も残る
A区周溝中央畦より	*		底:3.4	中:石英·長石書, 未色数少、粉少	A 阿 阿 河	脚柱部から緩やかに開いた後、直線状に延びる体部。 底部は繰り部を短くつまみ出した上げ底を呈する。	指押さえ	指押さえ	底部7/8 体部1/8	
A区周溝内A		製塩土器	底:4.0	中:石英·長石書, 赤色粒少 略少	A 西 所 。	張りの強い体部に、ハの字形の脚台を有する。	指押さえ	指押さえ	底~体部3/8	
A区周溝中央畦より西		製塩土器	底:4.2	中:石英·長石書, 赤色對少 動少	外面: にぶい黄橙(10 X R6/3) 内面: にぶい茜梅(10 Y R6/3)	ハの字形の脚台。	指押さえ	指押さえ	底部8/8	
C区拡張区工層		製塩土器 脚部	底:4.7	中:石英·長石書, 砂少	外面:浅黄橙(10 Y R 8/4) 内面:浅黄橙(10 Y R 8/4)	ハの字形の脚台。やや厚みがある。	指押さえ	指押さえ	底部5/8	
		製塩土器	底:4.1	中:石英·長石善、 赤色粒ごく少	文	ハの字形の脚台。			底部5/8	
##	D区墳丘断割(幕道検出)墳丘 盤土	製塩土器	庚:4.1	中:石英・長石書, 赤色粒ごく少, 8	外が内が	ハの字形の脚台。	指押さえ	指押さえ	底部6/8	
		製塩土器	底:3.6	中:石英·長石書, 赤色約少, 砂少	外面:	ハの字形の脚台。	指押さえ	不明	底部3/8	
A区周溝中央畦より東		製塩土器	底:3.5	中:石英·長石普, 赤色粒少, 砂少	外面: 橙(7.5Y R7/6), にぶい 黄橙(10Y R7/4) 内面: にぶい橙(5Y R7/4) 貴(5 5 V7/4)	ハの字形の脚台。薄作りである。	指押さえ	指押さえ	底部4/8	
CESX01 (BE)		製塩土器	底:3.3	中:石英·長石普, 赤色粒少, 砂少		ハの字形の脚台。	指押さえ	不明	底部6/8	
A区周溝中央畦より東		製塩土器		中:石英·長石普, 赤色粒少,砂少	外面:黄褐(10Y R5/6), 橙(7.5 Y R7/6) 内面:明褐(7.5 Y R5/6), にぶい時間(1.5 Y R5/6), にぶい時間(1.7 Y R6/3)	ハの字形の脚台。	指押さえ	指揮さえ	底部3/8	
A区周溝中央畦より東		製塩土器		中:石英·長石普, 砂少	外 画 画	ハの字形の脚台。脚柱部に厚みがある。	指押さえ	指押さえ	底部2.8	
		製塩土器	底:4.6	中:石英·長石書, 赤色粒少, 砂少	外面:橙(7.5 Y R 7/6) 内面:橙(7.5 Y R 6/6)	ハの字形の脚台。	指押さえ	指押さえ	底部2/8	
(石室直上)		製塩土器	底:4.6	中:石英·長石書, 赤色粒少	外面:オリーブ黒(5Y3/1) 内面:オリーブ黒(5Y3/1)	ハの字形の脚台。	指押さえ	不明	底部1/8	
		主師質主器 風炉ない し火鉢		中:石英·長石書, 赤色粒少	外面:橙 内面:浅黄橙	体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部に強く折れる。 雑部は丸く収める。	ヨコナデ・指押さえ	ヨコハケ	口縁部小破片	
	1,42	磁器 染付 腕	□:13.0		外内面面面	口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は丸く収める。	施釉	施袖	口縁部小酸片	
			口: 6.4 展: 2.3	1.2	外面:におい赤褐内面:におい赤褐	小型品。	施釉	施釉	口縁部小截片	
	140	瓦質土器 円盤形土製品	0.9	恭	外面:路灰内面:路灰	ほぼ円形をなし、端部はすべて加工している。			完作	
25トレS X01畦		大	П: 15.0	石英・長石ごく少	外面:灰褐色内面:灰褐色	口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は外方に強くお り、丸く収める。	箱釉・ヨコナデ	施釉	口縁部小嵌片	
和班	25トレンチ南拡張区S X 01黒褐 6 色砂盤土層	磁器 瘾	8.6: 🗆	葉	外面:浅黄橙 内面:にぶい黄橙	口縁部は直線上に立ち上がり、端部は丸く収める。	権権・ヨコナデ	維釉	口餐部1/8	
抗張		磁器 高台付碗	底:5.3	整	外面:灰黄 内面:灰黄	内傾気味のやや高めの高台を持つ。	拖釉	施釉	底部3/8	
3. 4	25トレ集石部分 (S X 01)	代器 川	成:4.4	華	外面:赤灰 内面:灰オリーブ	底部は糸切り後,内側をえぐり出す。	休部: ヨコナデ・ナデ 底部: 糸切り 施釉	植釉·砂目積痕	成都4/8	砂目積・底部糸切り
有抗張					11 日本・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		1100 400 1 11			

文番号 図版番号	華	名	器種名	口径·底径	□径・底径 器高 胎士 (粗·中·細)	争	鼆	形態の特徴	外面調整	内面調整	残存度	備	
CKSX01			主師質土器 風炉ない し火鉢		中:石英·長石普, 赤色粒少	外面:浅黄橙 内面:橙		体部は内湾気味に立ち上がり、端部は丸く収める。	ヨコナデ・板ナデ (タ 指押さえ・ヨコナデテ)		口縁部小骸片		
CKSX01 (AK)	(AK		主節質主器 風炉ない し火鉢		中:石英·長石普, 赤色粒少	外面:にぶい褐内面:檀	***************************************	体部は内湾気味に立ち上がり、蟾部は水平に収める。 ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ?	口縁部小破片		
CESX01 (AE)	(AK		を	□:7.2	五	外面:浅黄色 内面:浅黄色		口縁筋は内湾し、端部は丸く収める。	権権・回転ナデ	施釉・回転ナデ	口縁部2/8		
CKSX01 (BK)	(BK		機器 魔	展:5.6	粟	外面:灰黄褐 内面:灰白色		高台は低く,幅広い。	回転ナデ・ナデ	施釉	底部4/8	砂目積	
DKIV#			磁器 染付碗	康:5.0	粟	外面:浅黄橙 内面:浅黄橙色		高台は外傾し,やや高い。	施釉	施釉	底部2/8	砂目積	
C区第1連構面ペース土	大画 料	-7±	土師質土器 小皿	□:7.8 廃:5.5	1.3 中:石英·長石書	外面: 内面: 内面: 内面: 格勒:		口縁部は外傾し、端部は丸く収める。	口縁部:回転ナデ 底部:ヘラ切り	回転ナデ	底部4/8	底部ヘラギリ	
DKIVM			陶器 染付碗	П: 12.4	粟	外面:灰白 内面:灰白		口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は丸く収める。 権権	施釉	施釉	口縁部小破片		
AKIVB			陶胎染付碗	D: 10.4	編:石英・長石ごく 少	外面:オリープ灰 内面:オリープ灰		口縁部は直線上に立ち上がり、端部は丸く収める。	施釉	施釉	口縁部:1/8		
C区第1選構面ペース土	養権面え	-7±	上師質土器 足釜		中:石英・長石書、 赤色粒少、角閃石 ごく少	外面:橙 内面:橙		体部は丸みを帯び、口縁部にかけて内湾する。銅は短 口縁部:指押さえ後ヨ 口縁部:指押さえ後ヨ コナゴン 〈垂れ下がる。 「体部:タテハケ 体部:ヨコハケ	口縁部:指押さえ後ヨ コナデ 体部:タテハケ	口縁部:指押さえ後ヨ コナデ 体部:ヨコハケ	口縁部小破片		

雄山5号墳土器観察表

20 20 10 10 10 10 10 10	報文番号 図版	5. 基础	遺構 名	器種名	口径·底径	器商	胎士(粗・中・細)	色離	434-	外面調整	内面調整	残存度	新
20mm 2mm 2	382	02	雄山5号墳石室内床面	須恵器 杯蓋	□:15.1	5.3	粗:石英·長石:や や少	外面:灰白(10Y 7/1) 内面:灰(10Y 5/1)	∨ ∓	天井部外面の1/2回転へ ラケズリ・回転ナデ	回転ナデ・仕上げナデ	ほぼ完存	ロクロ回転方向右・383とセットで出土
Amage Physics 11 11488	383	70	雄山5号墳石室内床面	須恵器 杯身	□:12.7	4.7	網:石英・長石:や や少	外面:オリーブ灰(50 内面:オリーブ灰(2	1 34	外面の2リ・回転	転ナデ・当 げナデ		ロクロ回転方向右・382とセットで出土・当て具 抜あり
19	384	02	雄山5号墳石室內床面	須恵器 杯蓋	□ : 14.8	4.6	中:石 英・長 石・黒 色粒:やや少	人 石 画面	口縁部と天井部の境に緩やかな稜を持つ、口縁端部は 内傾する凹面をなす, 天井部は平坦で扁平な器形	天井部外面の2/5回転へ ラケズリ・回転ナデ	回転ナデ・当て具痕		ロクロ回転方向右・385とセットで出土・当て具 振あり・外面に灰かぶり・内面に黄褐色の薄い 膜状が付着
17.	-	Г	雄山5号墳石室内床面		П: 12.8	4.7	相:長石:ごく少	外面:オリープ灰(2.5G 内面:青灰(5B5/1)	1内傾し、端部は内傾する凹面を	底体部外面の1/3回転へ ラケズリ・回転ナデ	回転ナデ・当て具痕後ナデ		ロクロ回転方向右・384とセットで出土・当て具 振あり
70			雄山5号墳石室内床面		П: 16.4	5.2	細:石英・長石・灰 色粒:やや少	外面:灰白(10.X.7 内面:にぶい赤褐		天井部外面の1/2回転へ ラケズリ・回転ナデ	回転ナデ・仕上げナデ		ロクロ回転方向右・全体に生焼け・387とセット で出土
20			雄山5号墳石室内床面		П:13.6	5.2	編:長石・赤色粒: やや少	外面:卷(7.5 Y R 内面:卷(5 Y R6/	口縁部の立ち上がりは内積し、端部は丸く収める。底 部は丸い	度体部外面の2/5回転へ ラケズリ・回転ナデ	回転ナデ・当て具痕後仕 上げナデ	完存	ロクロ回転方向右・当て具痕あり・全体に生焼 け・386とセットで出土
17.	<u>_</u>		雄山5号墳石室内床面		☐ : 14. 65	2	中:石英・長石:ご く少	外面:略青灰 (5 P B3/1) 内面:略青灰 (5 B3/1)	と天井部の境に浸い。 る面を持つ,天井部1	天井部外面の2/5回転へ ラケズリ・回転ナデ	1.	_	ロクロ回転方左・389とセットで出土
19	-		雄山5号墳石室内床面	須恵器 杯身	П:13.0	2	粗:長石:ごく少	外面:略青灰 (5B G4/1) 内面:略音灰 (5B 4/1)	左ち上がりは内傾 P.H.	体部外面の1. ケズリ・回転	Kナデ・ ギナデ	-	ロクロ回転方向右・388とセットで出土・当て具 痕あり
10			雄山5号墳石室内床面	須恵器 杯蓋	П: 14.7	5.6	粗:石英・長石:こ く少	外面:灰 (N4/) 内面:略音灰 (5B4/1)	11 / 3h	10	回転ナデ・当て具痕後ナ デ	-	ロケロ回転方右・391とセットで出土・当て具痕 あり
19			雄山5号墳石室内床面	須恵器 杯身	П: 12.8	5.1	中:長石:ごく少	外面:灰(N4/) 内面:音灰(5B5/1)	ごち上がり 路はやや平	本部メ	回転ナデ・当て具痕後仕 上げナデ	_	ロ 回転方向右・390 り
19 自由の分類な形が形成			雄山5号墳石室内床面	1	П:14.1	4.5	網:石 英・長 石・黒 色粒:やや少	外面:灰(7.5 内面:青灰(1	口縁部と天井郡の境に弱い稜を持つ,口縁端部は内傾 する凹面をなす,天井都は平坦	天井部外面の2/5回転へ ラケズリ・回転ナデ	回転ナデ	完存	伝方向右・393とセット 本の一部が熔着
17			雄山5号墳石室内床面		П:11.8	4.8	粗:石英・長石:や や少	外面:灰 (N 内面:者灰 (5	内面	天井部外面の2/5回転へ ラケズリ・回転ナデ	回転ナデ・仕上げナデ	完存	足力ドラン
1			雄山5号墳石室内床面		D:14.5	4.9	中:石英・長石:や や少	外面:暗青灰 (5 P B3/1) 内面:灰白 (10 Y 7/1)	口縁部と天井部の境に沈線をめぐらす。口縁端部は内 値する凹面をなす。天井部は平坦	天井部外面の1/3回転へ ラケズリ・回転ナデ	回転ナデ	完存	元方向右)・395と
1			雄山5号墳石室内床面		□:12.5	5.2	中:長石・灰色粒: やや少	外面:灰白(7.5Y7/1) 内面:にぶい櫓(7.5Y	内値し、強部(底体部外面の1/4回転へ ラケズリ・回転ナデ	回転ナデ・当て具痕後仕 上げナデ	_	ログロ回転方向右・内面は生焼け・当て具痕あり・394とセットで出土
1	<u>.</u>		雄山5号墳石室内床面		П:14.7	4.8	中:石葵·艮石·灰 色粒:少	外面:灰 (NS/ 内面:磨木リー	弱い稜を持つ。 部は丸く扁平が	天井部外面の1/2回転へ ラケズリ・回転ナデ	回転ナデ・当て具痕後仕 上げナデ		ロクロ回転方向右・397とセットで出土・当て具 疲あり
17 韓田5号墳石室内株面			雄山5号墳石室内床面		D: 12.4	4.9	中:長石・黒色粒: やや少	外面:灰(7.5Y) 内面:明青灰(5	口縁部の立ち上がりは内頓し、端部は内値する凹面を なす、底部はやや平坦	底体部外面の1/2回転へ ラケズリ・回転ナデ			ロクロ回転方向右・外面灰かぶり・当て具痕あり・396とセットで出土
17 韓山ら9項石密内床面 須建器 休舎 10:11.6 5 中・4 本 年 長 5 で			雄山5号墳石室内床面		П:15.0	5.2	中:長石:ごく少	外面:暗青灰 (10B G 4/1) 内面:暗青灰 (5B 4/1)	口縁部と天井部の境に弱い稜を持つ,口縁端部は内傾 する凹面をなす,天井部は丸い	井部外面の1/2回転へ ケズリ・回転ナデ	加回	_	ロクロ回転方向右・399とセットで出土・当て具 痕あり
17 韓山 8 均元 8 均元 8 均元 8 4.7 中 4.5 日 1.2 6 5.9 中 3 時 2 時後 1.2 2 7 4 中 3 日 1.2 8 4.7 中 4.5 日 1.2 8 5.9 中 3 日 1.2 8 4.7 中 4.5 日 1.2 8 4.8 日 1.2 8 日 1.2 8 日 1.2 8 4.8 日 1.2 8 日 1.2 8 4.8 日 1.2 8 日 1.2 8 日 1.2 8 日 1.2 8 日 1.2			雄山5号墳石室内床面		П:11.6	2	中:石英・長石:ご く少	外面:暗青灰 (5P B4/1) 内面:暗青灰 (5P B4/1)	ち上がりは内傾 は丸い	体部外面の ケズリ・回転		完存	方右
7.1 雑山ら号塊石室内体面 須恵路 杯舎 D : 12.6 5.9 自身よび 子が、 分面 できたい。			雄山5号墳石室内床面		П:14.8	4.7	中: 長石: ごく少	外面:暗緑灰(5G4/1) 内面:青灰(10BG5/1)	口縁部と天井部の境に浅い沈線がめぐる。口縁編部は 凹面をなし段を持つ。天井部は平坦	天井部外面の1/5回転へ ラケズリ・回転ナデ		ほほ完存	ロクロ回転方右・401とセットで出土・当て具痕 あり・口縁の一部を欠損
11 健山 5 9項石室内床面 須穂器 杯蓋 口 14.9 4.3 程元 6 2 4.0 4 2 4.0 4.0 4.3 4.0 4.0 4.0 4.0 4.0 4.0 4.0 4.0 4.0 4.0			雄山5号墳石室内床面	須恵器 杯身	П:12.6	5.9	中:石英·長石·灰 色粒:少	外面:オリーブ灰(2.5G Y) 内面:暗音灰(5B4/1)	の立ち上がりは内 器高は深く底部は	ほう	回転ナデ・回転ナデ後当 て具痕後ナデ	_	ロクロ回転方向右・400とセットで出土・当て具 振あり
11 種田 5 均積 5 均積 2 向 1			雄山5号墳石室内床面		D:14.9	4.3	租:石 英・長 石・黒 色粒:やや多	外面:灰(N6/) 内面:略青灰(5B4/1)	と天井部の境に凹 面をなす、天井部	天ラ	回転ナデ・当て具痕後仕 上げナデ	_	ロケロ回転方向左・403とセットで出土・当て具 獲あり
11 雄山 5 号地石室内床面 須穂器 杯蓋 口 11.4.2 4.1 離 4.4 単元 4.7 前 度 4.7 mm 度 4			雄山5号墳石室内床面		□:12.8	4.4	粗:石 英・長 石・黒 色粒:やや多	外面:青灰(5 内面:暗青灰	口縁部の立ち上がりは内植し、端部は内植する凹面を なす、器高は浅く底部は平坦	底体部/ ラケズ	回転ナデ・仕上げナデ	完存	ロクロ回転方向右-外面灰かぶり・402とセット で出土
2 建山ら号域石室内株面 須建彦 杯金 11:12.1 4.8 相:長石:ビシタ 内面:青花に18273 日本野の立ち上がりは内値し、場面は大人収める。底 路体部の1/2014~2 日本サイエリナデ 完在 ロフロ回転方向右が1 日本サイエリナデ 完在 ロフロ回転方向右が1 2 2 2 2 2 2 2 2 2			雄山5号墳石室内床面		П: 14.2	4.1	細:石 英・長 石・黒 色粒:やや少	外面:灰 (N 内面:青黒(5	口縁部と天井都の境はなだらかに屈曲する。口縁端部 は内値する凹面をなす、天井部は平坦で扁平な器形	天井部外面の3/5回転へ ラケズリ・回転ナデ	回転ナデ・仕上げナデ	ほぼ完存	ロクロ回転方向左・焼き歪む・405とセットで出 土
2 建山5号墳石室内床面 須建2 本の をいったります のの			雄山5号墳石室内床面		П:12.1	4.8	相:長石:ごく少	外面:暗背灰 內面:青灰(5	の立ち上 姐	底体部外面の1/4回転へ ラケズリ・回転ナデ	回転ナデ・仕上げナデ	完存	中回転方向右
22 建山5号墳石室内床面 須恵器 内金 11.12.2 4.6 電子石・黒色粒 内面:軽好(SGVT) 口縁部の立ち上がりは内積し、端部は扱い、底部はや、底部はや、皮部が面の13回転へ 上げチャーとて具織を出ている。 回転子・当て具織化 日本			雄山5号墳石室内床面		D: 14.4	4.6	細:長石・黒色粒: やや少	外面:灰(内面:青灰	部と天井部 をなし段を	天井部外面の1/2回転へ ラケズリ・回転ナデ	回転ナデ・当て具痕	完存	n左・内面に黄褐~茶褐色 あり・407とセットで出土
72 単山5号項石室内床面 須恵藤 存姜 口13.4 4.8 中・石英・Б石:や 均面・解析(10.64.1) 口降部と手料部の項目開発があぐる。口降郵店人供める。底部 底体部が面付き回転で、回転・デー当で具紙 で出 で出 72 単山5号項石室内床面 須恵整 存み 口11.1.1 4.6 中・石英・長石:C 介面・解析(10.64.1) 日本部の支上がは内域に、運動力を行政に関係がある。底部 底体部が面付き回転・ 同転・デー当で具紙 日本市デー当で具紙 で出 72 単山5号域石室内床面 須恵整 存金 ロ1.1.8 4.7 第一大・石英・長石:C 介面・解析(10.84.1) 日本市 大井 市 大井			雄山 5 号墳石室内床面		П: 12.2	4.6	編: 長石・黒色粒: ごく少	外面: 綠灰(5 G 6/1) 内面: 青灰(5 G 5/1)		底体部外面の1/3回転へ ラケズリ・回転ナデ	回転ナデ・当て具痕後仕 上げナデ		ロクロ回転方向左・外面に自然釉・内面に黄褐 色の沈着がある・当て具痕あり・406とセットで 出土
72 建山ら号域石室内体面 須建富 内外 1 日本部人 (1982) 日本部 (1982) 日本 (1982)<			雄山5号墳石室内床面	1	П:13.4	4.8	中:石英・長石:や や少	外面:暗青灰 (10B G4/1) 内面:青灰 (5G5/1)		天井部外面の1/3回転へ ラケズリ・回転ナデ	回転ナデ・当て具痕	完存	ログロ回転方向左・当て具痕あり・409とセット で出土
72 建山 5 均積 5 室内 6 面 2 回 2 を			雄山5号墳石室内床面		П:11.1	4.6	中:石英・長石:ご く少	外面:暗紫灰(5P4/1) 内面:暗青灰(5B4/1)	口縁部の立ち上がりは内頓し,端部丸く収める,底部 はやや平坦	底体部外面の1 ラケズリ・回転	回転ナデ	ほほ完存	ロクロ回転方向左・408とセットで出土
72 単山5号墳石室内床面 須恵器 杯金 ロコ1.8 4.7 中・石英・長石:や 内面・天 N(2.0 SG Y6.0) 日幕都の立ち上がりは内積し、着部は扱い、政部は対し、カメガリ面域での15回転へ 回転すデータインの120mm 24 日本のより、10様都がありる。 24 日本のより、10様都がありる。 24 日本のより、日本のよ	_		雄山5号墳石室内床面		П:13.6	4.7	細:長石・黒色粒: ごく少	外面:灰 (N5/) 内面:青灰(5B5/1)	口縁部と天井部の境は浅い沈線がめぐる,口縁端部は 凹面をなし段を持つ,器高が高く天井部は丸い	天井部外面の2 ラケズリ 回転	回転ナデ	完存	ロクロ回転方向左・411とセットで出土
72 単旧5号墳石等内体面 須恵器 杯書 口:14.8 4.6 中:長石・長右・長石・長石・長石・大子・石・大子・石・大子・大子・大子・大子・大子・大子・大子・大子・石・大田・大子・石・大子・石			雄山5号墳石室内床面	須恵器 杯身	В:11.8	4.7	中:石英・長石:や や少	外面:オリーブ灰(2.5GY6/1) 内面:灰 (N6/)	口縁部の立ち上がりは内傾し、端部は鋭い、底部は丸い	底体部外面の ラケズリ 回転	回転ナデ	完存	ロクロ回転方向左・410とセットで出土
72 韓山5号墳石室内床面 須恵器 杯身 ロ:11.7 4.6 粗:石英:ごく少 外面:オリーブ灰(5G Y5/1) 口縁部の立ち上がりは内頓し、端部は鋭い、底部は丸、、底部は丸、、底部は丸、、 回転ナデ 回転ナデ 会存 ロクロ回転方左・412とセット・ ラケズリ・回転ナデ 回転ナデ コクロ回転方左・412とセット・ ラケズリ・回転ナデ 回転ナデ 日本ナデ 日本ナ			雄山 5 号墳石室内床面		□:14.8	4.6	中:長石・灰色粒: やや少	外面:青灰(5BG5/1) 内面:青灰(5PB5/1)	井部の境は凹線 持つ、天井部は	天井部外面の3/5回転へ ラケズリ・回転ナデ	回転ナデ	完存	ロクロ回転方向左:内面に黄褐色の沈著あり・ 413とセットで出土
			雄山 5 号墳石室内床面		D:11.7	4.6	相:石英:ごく少	Y5/1)	ち上がりは内傾	底体部外面の2/5回転へ ラケズリ・回転ナデ	回転ナデ	完存	ロクロ回転方左・412とセットで出土

う面に黄褐	1出土	1	±	#	#		条なし・当	条なし	なし・外面	茶なし	条なし	よる・当て	系なし	アットや田	ヒットな田	・当て兵機	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	条ない。天	zł.		,				が付着			孔)3個所												
橋 ロクロ回転方向右・外面灰かぶり・内面に黄褐	~茶褐色の沈着あり・415とセットで ロクロ回転方面右・414とセットで	また こうこう かんしょう かんしょう かんしょう かんしょう かんしょう かんしょう かんしょう かんしょう かんしょう しょうしょう しょうしょく しょうしょく しょく しょうしょく しょうしょく しょうしょく しょくしょく しょくしょく しょくしょく しょくしょく しょくしょく しょくしょく しょくしょく しょくしょく しょく	ロクロ回転方向左・417とセットで出土	ロクロ回転方向左・416とセットで出土	ロクロ回転方向左・419とセットで出土	ロクロ回転方左・418とセットで出土	ロクロ回転方向右・セットで出土関係なし・当 て具痕あり	ロクロ回転方向右・セットで出土関係なし	ロクロ回転方右・セットで出土関係なし・外面に反かぶり	ロクロ回転方向右・セットで出土関係なし	ロクロ回転方向右・セットで出土関係なし	ロクロ回転方向右・外面にゴマをかぶる・当 具痕あり・セットで出土関係なし	ロクロ回転方向左・セットで出土関係なし	ロクロ回転方向右・内面は生焼け・七 土関係なし	ロクロ回転方向右・内面は生焼け・も 土関係なし	ロクロ回転方右・430とセットで出土・当て具扱 あり・口縁の一部を欠損	ロクロ回転が付けるとできていましたが、重なりには、これには、120円では、120円にはにはにはにはにはにはにはにはにはにはにはにはにはにはにはにはにはにはには	ロクロ回転万回左・セットで出工网かぶり	一部自然釉がかかる・口縁部焼き歪み				ガラス化した自然軸付着		ロクロ回転方向右・内外とも自然釉が付着	透かし孔は3方向	灰かぶり	全体にゴマがかかる・透かし孔(穿孔)	黒斑あり (内面)		甍の口縁か	自然釉・ロクロ回転方向左			輪がかかっている	焼成前の穿孔 (外→内)		当て具痕あり		
存度			完存	完存	完存	完存	完存	完存	7/8春	完存	4/8存	完存	完存	完存	完存	部7/8存		完存	完在	完存	完存	口縁部1/12	口縁部小破片	肩部1/6	完存	完存	完存	完存	ほほ完存	(基ほ完在 (口 縁の一部を欠 揖)	口縁部1/8	口縁部1/5	口緣部2/8	口縁部1/8	口類部1/6	底部3/4	口縁部1/8	天井都2/8	口~肩部1/8	底部3/8
内面 實際	回転ナデ・仕上げナデ	回転ナデ・仕上げナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ・当て具痕後仕 上げナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ・仕上げナデ	回転ナデ	回転ナデ・当て具痕後任 Lげナデ	回転ナデ・仕上げナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ・指押さえ後当 て具痕	回転ナデ・当て具痕	ナデ·指押さえ後ナデ・ 当て具痕	回転ナデ	ヨコナデ	回転ナデ・当て具痕	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	指ナデ	指押さえ後ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ・当て具痕後ナ デ	ヨコナデ	タテナデ・ヨコナデ	指押さえ後板ナデ	回転ナデ	回転ナデ・当て具痕	回転ナデ	ナデ
外 面 調 整 非部外面の2/5回転へ	アズリ・回転ナデ	本部74間の1/3回転で ケズリ・回転ナデ # 報付金 6.10日転・	F部外面の1/2回転へ ケズリ・回転ナア	本部外面の1/3回転へ ケズリ・回転ナデ	井部外面すべて回転 ラケズリ・回転ナデ	体部外面の1/3回転へ ケズリ・回転ナデ	井部外面の4/5回転へ ケズリ・回転ナデ	井部外面すべて回転 ラケズリ・回転ナデ	井部外面の3/5回転へ ケズリ・回転ナデ	井部外面の3/5回転へ ケズリ・回転ナデ	井部外面の1/2回転へ ケズリ・回転ナデ	体部外面の1/2回転へ ケズリ・回転ナデ	体部外面の2/5回転へ ケズリ・回転ナデ	体部外面の1/3回転へ ケズリ・回転ナデ	体部外面の1/4回転へ ケズリ・回転ナデ	井部外面すべて回転 ラケズリ 回転ナア	転ナア・凹転ヘフケス ・カキ目	転ナデ・回転ヘラケス ・回転ヘラギリ	転ナデ・回転ヘッケス 後回転ナデ・ヘッケズ ・指押さえ後タクキ目	回転ナデ・回転ヘラケズ リ・タクキ目	ヨコナデ後カキ目・平行 タタキ後ヨコナデ後カ キ目	回転ナデ	回転ナデ・沈線 1条	転ナデ・平行タタキ後 キ目	転ナデ・回転ヘラケズ ・回転ヘラギリ	転ナデ・仕上げナデ	転ナデ·タタキ目 or 目?	転ナデ	押さえ後ナデ	ハケ目後ナデ	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズ リ・沈線?	回転ナデ	ヨコナデ	ヨコナデ後カキ目	後ナデ	回転ナデ	-	クチ後	指押さえ後ナデ
形態のの特数 2021年数 2021年 202	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	K部の立ち上がいは内閣し、強即は内閣との国を持 統部は大い 統第は大い	#部と大井郡の境は弱い機を持つ、口縁衛部は内側 3 四面をなす、天井郡は丸い	8部の立ち上がりは内傾し、端部は鋭い、器高は浅。 5部は丸い	口篠郎と大井郎の境は茂い凹鏡がめぐる, 口篠竈郎は 天: 内値する面をなし段を持つ, 天井部は丸くやや扁平な へ: 1) 智統	永部の立ち上がりは内傾し,端部は鋭い,器高は浅 も部は丸い	§節と天井部の境は凹線がめぐる,口縁端部は内傾 ゞ 5凹面をなす,天井部は丸く扁平な器形	育部と天井部の境は弱い稜を持つ,口縁端部は内傾∣ 。 5凹面をなす,天井は平坦	\$部と天井部の境は弱い稜を持つ,口縁端部は内傾 3 8四面をなす,天井部は平坦で扁平な器形 1	口縁部と天井部の境は弱い後を持つ、口縁端部は凹面 をなし段を持つ、天井部は平坦でやや扁平な器形	を設めて、 を表して、 を表して、 をは、 をは、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は	最の立ち上がりは内積し、端部は内積する凹面を ・ 底部は平坦	8部の立ち上がりは内傾し、嘴部は丸く収める。底	於部の立ち上がりは内傾し,端部は鋭い,底部は平	を部の立ち上がりは内傾し、端部は丸く収める,底 ル {平坦	口縁部と天井の境は穢やかに屈曲する,口縁端部は内 天 傾する四面をなす,天井部は小さな平坦面を持つ。 へ	R時に短くやそ内閣し編的に丸く収める。 肩が関へ 平坦な底部を持つ	ド部は短く直立し端部は鋭い、肩はやや張り、平坦 5部を持り	口縁部は大きく外反する,端部は屈曲して面を持つ, 体部は肩の張った珠形で,底部は丸い	口縁部は殺やかに外反する,端部は丸く下方に肥厚す る,体部はやや肩の張った球形で,底部は丸い			口縁部は外反する,端部は丸く下方に拡張する [口縁部は外反する,体部は肩の張った珠形	を部は大きく外反し、端部は面を持つ、口径は体部 、径をわずかに凌ぐ、体部は強く肩が張った偏球形 	k部の中央に弱い稜を持つ、蟷部は内値する凹面を - 、脚部は短脚で長方形の透かし孔を3方向から穿 鑓部は屈曲する	《群の中央に弱い稜を持つ、端部は丸く収める、脚 長脚で長方形の透かし孔を3方向から穿つ、端部 そかに広がる	口様部の中央に弱い様を持つ、端部はやや外反し丸く 取める、鞠部は長脚で円形の遠かし孔を3方向から穿 回 り、端部は緩やかに広がる	口縁部から底部に緩やかにつづく、端部は丸く収める	体部中央に牛角形の大きな把手を持つ,口縁部は直線 的に外上方へのび,端部は丸く収める,底部は小さな」、 平坦面を持つ		口縁部の立ち上がりは内傾し、端部は丸く収める		端部は丸く収める	1縁部は大きく外及し、端部外面に2条の凸骨を貼り すける	\rightarrow	口棒部と大井部の境は検を持つ、端部は内観する凹面 をなす		口縁部は大きく外反し、端部は丸く肥厚する	1.1四份,不归了生礼成器,七五份了专业社及经过
色 調 : 联白(7.5.V.7/1)	: 青炭(5.85/1)	(/eN	: 既 (N6/) : 既 (N6/)	面:オリープ灰(2.5GY6/1) 口輪面:灰 (N6/)	: 展 (N6/) : すリーブ展(2.5G Y6/	: 灰(7.5Y6/1) : 青灰(10BG6/1)	:暗青灰 (10B G4/1) :暗青灰 (5B4/1)	:暗青灰 (10B G4/1) :暗青灰 (5P B3/1)	面:暗赤灰 (5R4/1) 面:暗青灰 (10BG3/1) すえ	: 明オリーブ灰(2.5GY7) : オリーブ灰(2.5GY6/	:暗青灰(5B3/1) :暗青灰(5BG3/1)	: 展 (N5/) : 展由 (N7/)	: 灰白(7.5Y7/2) : オリーブ灰(5G Y6/1)	: 灰白(7.5Y7/1) : 橙(5YR7/6)	: 灰白(7.5Y7/1) : 橙(5YR7/6)		:暗育灰 (10 B G 4/1) :暗青灰 (5 B 4/1)	: 暗背灰 (5 B 4/1) : 暗背灰 (5 B 4/1)		面:明オリーブ灰(5GY7/1) 口輪 面:青灰(10BG6/1) る,	面: 联表(2.5YR4/2) 口輪面: 暗背灰(5B3/1) 肩の	20	:暗オリーブ灰(5GY4/1) :暗青灰(10BG4/1)	: 第 (N6/) : 第 (N6/)	面:青黒(5B2/1) 口輪 面:暗青灰(5B3/1) 最力	面: 脊灰(5B5/1) 口輪面: 暗脊灰(5B4/1) なすの。	面:明オリーブ灰(2.5G Y 7/1) 口離 面:明オリーブ灰(5.G Y 7/1) 部に	: 暗青灰 (5B3/1) : 暗青灰 (5B3/1)	面:明赤褐(5YR5/6) 面:明赤褐(5YR5/6)	: 橙(7.5 Y R 6/6) : 暗灰黄(2.5 Y 4/2)	: 明オリーブ灰(2.5G Y7/1) : 明オリーブ灰(2.5G Y7/1)	П	: 灰(7.5Y5/1) : オリーブ灰(2.5G Y5/1)	面:オリーブ灰(2.5GY6/1) 口輪 面:オリーブ灰(2.5GY6/1)	-	国:(こぶいを(7.5 Y K5/4) 国:(2.5 Y R6/6)		35/1)	-	聞:によい質(10 Y K5/4) 画:によい黄(10 Y K5/4) 高・岩田(C 5/1)
F	粗:長石:ごく少 内	台	4.7 細:石 英・長 石・黒 外 色粒:やや少	外内	4.3 編:石英・長石: ご 外 ペ少 内	文内	: 石英・長石: や 外 レ	外内	3.9 中: 石英・長石:ご 外	外内	外 内	4.7 中:石英・長石・灰 外4.7 色粒:やや少	环内	坏内	4.4 細:石英・長石・灰 外 4.4 色粒:やや少	外内	6.8 中:長石:やや少 内	外内	外内	外内	外内	和:石英·長石·黑 外 色粒:少	外内	外内	12.3 中:石英・長石:や 外	12.15 中:長石:ごく少 内	14 中:石英·長石:少 外	外内	外内	紫 女内	中:石英・長石:ご 外 く少	外内	外内	細:石英・長石:少 外	網:石英・長石:少内	租:白央·灰白·景 外母:多	者:長石・黒也和: 外にく少	4種:石英・長石:こ 外 く少	中:白美・長石・黒外色社: やや多	粗:石英·長石:少 外
	D: 14.4	□:12.9	П: 13. 45	□:12.1	П:13.8	П: 12.0	П:15.1	D:14.4	П:14.6	П:13.9	П:14.8	□:13.35	П:12.1	D: 13.7	□:12.3		日:8.2 最大:13.8	口:7.4 最大:12.7		口:12.6 最大:15.2		П:15.0		П:16.6	口:12.0 最大:12.0		口 : 9.6 : 8.0	口:11.2 底:8.2	口:13.2 底:6.1	□ 10.8 □ 5.4	□:13.8	П:13.5	П:11.2	П:11.8	□:24.6	底:3.2	П:13.3		П:13.8	底:7.9
		須恵器 杯身	須恵器 杯蓋	須恵器 杯身	須恵器 杯蓋	須恵器 杯身	須恵器 杯蓋	須恵器 杯蓋	須恵器 杯蓋	須恵器 杯蓋	須恵器 杯蓋	須恵器 杯身	須恵器 杯身	須恵器 杯身	須恵器 杯身	須恵器 短頸壷蓋		須恵器 短頸壷身	須恵器 歯	須恵器 壷	須恵器 壷	須恵器 壷?	須恵器 売	須恵器 蹇	須恵器 建	須恵器 無蓋高杯	須恵器 無蓋高杯	須恵器 無蓋高杯	上節器 椀	土節器 把手付袍	須恵器 壷	須恵器 杯身	須恵器 壷	須恵器 壷	須恵器 甍	弥生土器 甑	須恵器 杯蓋		棚!	弥生土器 童
游 株 名	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山 5 号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山 5 号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山 5 号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山 5 号墳石室内床面	雄山 5 号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄 山 5 号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山 5 号墳石室内床面	雄山5号墳石室内埋土	雄山5号墳石室内埋土	雄山5号墳石室内埋土	雄山 5 号墳石室内床面	雄山 5 号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山 5 号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山 5 号墳石室内床面	雄山5号墳周溝	雄山5号墳SX02	雄山5号墳SX02	雄山5号墳SX02	雄山5号墳S X 02	雄山5号墳SX02	雄山 5 号墳包含層	雄山5号墳包含層	雄山5号墳包含層	雄山5号墳包含層
		\neg	7.2	72 #	72 ##	72		73	73	73 建	73		73	73	73	74	74	74	74	74 雄	74	74	74	74 雄	74 #	74	74 ##	74	74 雄	74	98	87	87 体	87 体	87	\neg	88	$\neg \tau$	T	**
図版番号	72	72	1												1																				-	~	- 1			

音架中游	章 奏 古轮纸图	女 製 精 火	口径,库径	(戦・中・戦・中・戦)	瀬	米 稿 の 特 像	外面播款	女医醫养	母存度	看
791	88 雄山5号墳包	須恵器	H: 13.5		少 外面: 明オリーブ灰(2.5GY7/1) 少 内面: 田オリーブ灰(2.5GY7/1)	で持つ、雑的	回転ナデ	回転ナデ		軟質
792	88 雄山5号墳包含層	円筒填輪		粗:石英·長石:	外面:にぶい機(7.5 Y R5/3) 内面: 橋灰(7.5 Y R4/1)		ヨコナデ・タテ方向のハ ケ目	指ナデ・指押さえ	小蔵片	硬質
793	89 雄山5号墳ペース層	弥生土器 童		相:石英·長石:	多 外面:明褐(7.5Y R5/6) 多 内面:にぶい褐(7.5Y R5/4)		剥簾・マメツ	剥離・マメツ	口縁部小截片	
794	89 雄山5号墳ペース層	弥生土器 蹇	底:2.6	細:石英:少	外面:灰黄褐 (10Y R5/2) 内面:にぶい黄褐 (10Y R5/4)		ナデ (マメツ)・ハケ目	マメツ	底部1/4	外面に黒斑
262	89 雄山5号墳ベース層		17.2	粗:石英・長石:・ や多	や 外面:明黄褐 (10Y R 7/6) 内面:明黄褐 (10Y R 7/6)		マメツ	マメツ	口綠部1/8	
962	89 雄山5号墳ペース層		口:11.0	中:石英·長石· 色粒:多	・赤 外面:にぶい黄橙(10Y R7/4) 内面:橙(7.5Y R6/6)		ナデ・タタキ後ハケ目	指押さえ後ヨコナデ	口類部1/8	
797	89 雄山5号墳ペース層	弥生土器 蹇		粗:石英·長石:	多 外面:にぶい黄楊(10Y R4/3) 内面:にぶい黄楊(10Y R4/3)		+	ヨコナデ	小破片	
798	89 雄山5号墳ペース層	弥生土器 喪	底:3.3	相:石英·長石:	多 外面:黒褐(7.5Y R2/2) 多 内面:にぶい黄褐(10Y R4/3)		タタキ後ナデ·指押さえ 後ナデ	指押さえ後ナデ	底部5/8	
662	89 雄山5号墳ペース層	弥生土器 魔	展:4.6	網:石英·長石:	多 外面:にぶい褐(7.5 Y R5/4) 内面:黒褐(7.5 Y R3/2)		ナチ	マメツ	底部1/8	
800	89 雄山5号墳ペース層	弥生土器 高杯	□:4.0	祖:石英・長石・ウ色を対して	赤 外面:にぶい黄橙(107 R6/3) 内面:にぶい櫓(7.5 V R6/4)		指ナデ	ナデ・棒?圧痕	8/29/1	大きく低く広い脚部
801	89 雄山5号墳ペース層	赤生土器 台付鉢	底:4.6	相:石英·長石:	少 外面: 明赤褐(5Y R5/6) 少 内面: 明赤褐(5Y R5/6)		板状工具によるナデ・マ メツ	板状工具によるナデ·マ メツ	底部4/8	底面は黒い
雄山 6	雄山6号墳土器観察表									
報文番号	図版番号 選 構	名 器 種 名	口径·底径	器高 胎士 (粗・中・縄)	軍	形態の特徴	外面灣整	内面 籌整	残存度	备
802	86 雄山 6	須恵器 杯蓋	П:13.8		少 外面:青灰(5B5/1) 少 内面:青灰(5B5/1)	口縁部と天井部の境は弱い稜を持つ,口縁端部は内傾 する凹面をなす,天井部はやや平坦	天井部外面の1/2回転へ ラケズリ・回転ナデ	回転ナデ・当て具痕後ナ デ	ほほ完存	ロクロ回転方向左・803とセットで出土・当て具 摂あり・口縁部焼き歪み・内面に粘土小塊が <u>烙着</u>
803	98 雄山6号墳石室内床面	ii 須恵器 杯身	□:11.8	5.2 中:石美·長石:、 人少	ご 外面:縁灰 (10G5/1) 内面:青灰 (10B G5/1)	口縁部の立ち上がりは内傾し、端部は鋭い,底部は平 坦	底体部外面の1/4回転へ ラケズリ・回転ナデ	回転ナデ・当て具痕後ナ デ		ロクロ回転方向右・802とセットで出土・口縁部 焼き <u>歪み・当て具痕あり</u>
804	98 雄山6号墳石室内床面	有惠器 杯蓋	П:14.8	4.8 中:石英·長石:	少 外面: 青灰(10BG5/1) 少 内面: 青灰(10BG5/1)	口縁部と天井部の境は弱い後を持つ, 口縁端部は内傾 する凹面をなす, 天井部はやや平坦	天井部外 ラケズリ	回転ナデ・当て具痕後ナ デ	完本(□縁の 一部やわずか 「か描)	ロクロ回転方向右・805とセットで出土?・当て 具痕あり
802	98 雄山6号墳石室内床面	有惠器 杯身	П:12.3	5.2 中:石英・長石:や	や 外面:オリープ灰(2.5G Y5/1) 内面:オリープ灰(2.5G Y5/1)	口縁部の立ち上がりは内傾し,端部は丸く収める,底 部は平出	底体部外面の1/3回転へ ラケズリ・回転ナデ	回転ナデ・当て具痕後ナ デ		ロクロ回転方向右・804とセットで出土・当て具 職あり
908	98 雄山6号墳石室内床面	1 須恵器 杯蓋	□:14.8	5.2 中:石英・長石・	黒 外面:青灰(10B G5/1) 内面:青灰(5B5/1)	口縁部と天井部の境は弱い稜をもつ、口縁端部は内傾 する四面をなす。天井部は丸い	天井部外面の1/4回転へ ラケズリ・回転ナデ	回転ナデ・回転ナデ後仕 トげナデ(当て具痕?)	完存	ログロ回転方向右・807とセットで出土・当て具 痕あり
807	98 雄山6号墳石室内床面	須恵器 杯身	П: 12.6	5.5 中:長石:ごく少	少 外面:暗背灰(5B3/1) 少 内面:暗背灰(5B3/1)	口縁部の立ち上がりは内頓し、端部は内傾する凹面を なす。底部は丸い	度体部外面の2/5回転へ ラケズリ・回転ナデ	回転ナデ・当て具痕後ナ デ	ほほ完存	ロクロ回転方向右・806とセットで出土・当て具 痕あり
808	98 雄山6号墳石室内床面	須恵器 杯蓋	П:14.0	5.1 細:石英・長石・黒 6粒:やや少	黑 外面:灰(10~6/1) 内面:灰白(7.5~7/1)	口縁部と天井部の境は沈線がめぐる。口縁端部は凹面 をなし段を持つ。器高は高く天井部は丸い	天井部外面の3.		完存	ロクロ回転方向左・809とセットで出土
808	98 雄山6号墳石室内床面	1 須恵器 杯身	П:11.8	4.9 中:長石:ごくタ	、 外面:暗青灰 (5 B 4/1) 内面:暗青灰 (5 B 4/1)	口縁部の立ち上がりは内値し、端部は九く収める,底 部は丸い	底体部外面の1/3回転へ ラケズリ・回転ナデ	回転ナデ・当て具痕後ナ デ	完存	ロクロ回転方向左・808とセットで出土・当て具 痕あり
810	99 雄山6号墳石室内床面	1 須恵器 杯蓋	П:13.8	5 粗:石英・長石:	や 外面:暗青灰 (5 P B 3/1) 内面:青灰 (5 P B 6/1)	口縁部と天井部の境は凹線がめぐる,口縁端部は内傾 する面をなす,天井部はやや平坦	天井部外面の2/ ラケズリ・回転サ	回転ナデ	完存	ロ回転方向左・811とセット 出土
811	99 雄山6号墳石室内床面	1 須恵器 杯身	D:11.4	4.4 網:石英·長石:	ご 外面:オリーブ灰(2.5GY5/1) 内面:暗青灰(5B4/1)	口縁部の立ち上がりは屈曲気味に内傾し、端部は丸く 収める、底部は丸い	底体部外面の2/5回転へ ラケズリ・回転ナデ	回転ナデ・当て具痕後ナ デ	ほほ完存	110
812	99 雄山6号墳石室内床面	j 須恵器 杯蓋	П:13.3	6 中:石英·長石: 6 へ少	ご 外面:暗青灰 (5B3/1) 内面:暗青灰 (5P B3/1)		天井部外面の2/5回転へ ラケズリ・回転ナデ		7/8口縁の一 部を欠損	ロクロ回転方向左・外面に自然釉・813とセット で出土
813	99 雄山6号墳石室内床面	j 須恵器 杯身	П: 12.3	5 細:石 英・長 石・黒	黒 外面:灰 (N4/) 内面:暗オリーブ灰(5G Y 3/1)	口縁節の立ち上がりは内傾し、端部は鋭い、底部は丸 い	底体部外面の1. ラケズリ・回転	ΑΠ		ロクロ回転方向左・812とセットで出土・当て具 疲あり
814	99 雄山6号墳石室内床面	i 須恵器 杯蓋	П:13.9	4 細:長石:ごく少	、 外面:暗青灰 (5B3/1) 内面:暗青灰 (5B4/1)	口縁部と天井部の境は沈線がめぐる,口縁端部は内傾 する凹面をなす,天井部は平坦で扁平な器形	天井部外面の1/4回転へ ラケズリ・回転ナデ	回転ナデ・当て具痕後ナ デ		ロクロ回転方向左・当て具痕あり・815とセット で出土
815	99 雄山6号墳石室内床面	j 須恵器 杯身	П:12.3	4.8 細:長石:ごく少	・ 外面:明オリープ灰(2.5G Y7/1)・ 内面:明オリープ灰(2.5G Y7/1)	口縁部の立ち上がりは内傾し、端部は丸く収める,底 部は丸い	底体部外面の1/ ラケズリ・回転サ	回転ナデ	7/8口縁の一 部を欠損	814とセットで出土
816	99 雄山6号墳石室内床面	j 須恵器 杯菱	□:15.2	3.9 中: 長石・黒色粒:	: 外面:青灰(10B G5/1) 内面:暗青灰(5B4/1)	口縁部と天井部の境は弱い稜を持つ,口縁端部は凹面 をなし段を持つ,天井部は平坦でやや扁平な器形	天井部外面の1/2回転へ ラケズリ・回転ナデ	回転ナデ・当て具痕後ナ デ		ロクロ回転方向左・817とセットで出土・当て具 痕あり・口縁の一部を <u>欠損</u>
817	99 雄山6号墳石室内床面	須恵器 杯身	П: 12.9		黒 外面:青灰(5 P B 6/1) 内面:青灰(5 P B 6/1)	口縁部の立ち上がりは屈曲気味に内傾し、端部は丸く 収める、器高は深く底部は平坦		回転ナデ・当て具痕後ナ デ	ほほ完 存(か えりの一部を 欠措)	ロクロ回転方向右・816とセットで出土・当て具 疲あり・底部外面へラ記号あり
818	99 雄山6号墳石室内床面	須恵器 杯蓋	D:14.1		外面:灰(N6/ 内面:暗背灰(5	口縁部と天井部の境は弱い稜を持つ、口縁端部は凹面をなし段を持つ、天井部はやや平坦	天井部外面の3/5回転へ ラケズリ・回転ナデ		-	ロクロ回転方向左・819とセットで出土
819	99 雄山6号墳石室内床面	有惠器 杯身	□:12.1		黒 外面:オリーブ灰(5G Y5/1) 内面:灰(N5/)	立ち上部は丸	展体部外面の2/5回転へ ラケズリ・回転ナデ	回転ナデ・回転ナデ後仕 上げナデ	ほほ完存(口縁)の一部を欠損。	- 4 4 8 18 5 4 ~ 4 4
820		須恵器	□:14.2		少 外面:暗青灰 (5 B 4/1) 少 内面:青灰 (5 B 6/1)	口縁部と天井部の境は稜を持つ,口縁端部は内傾する 凹面をなす,天井はやや平坦	天井部外面の1/5回転へ ラケズリ・回転ナデ	回転ナデ	ほほ完存	ロクロ回転方向右・821とセットで出土・内面に にぶい黄褐色の薄い酸状の付着物
821	99 雄山6号墳石室内床面	有恵器 杯身	П: 12.0	4.1 中:石英·長石·) 6粒:少	×	ゴ原	底体部外面の1/5回転へ ラケズリ・回転ナデ	- 1	完存	ロクロ回転方向左・820とセットで出土
822	99 雄山6号墳石室内床面	須恵器 杯蓋	П:13.8		少 外面: 灰 (N6/) 少 内面: 育灰(5BG5/1)	口縁部と天井部の境は凹線がめぐる、口縁端部は内傾する面をなす、器高は高く天井部はやや平坦	天井部外面の2/5回転へ ラケズリ・回転ナデ	回転ナデ・当て具痕後ナ デ		ロクロ回転方向左・823とセットで出土・当て其 獲あり
823	99 雄山6号墳石室内床面	須恵器 杯身	П:11.2		や 外面:青灰(5 P B5/1) 内面:青黒(10 B G3/1)	口縁節の立ち上がりは内質し、端部は丸く収める,底 部は平坦	底体部外面の1/5回転へ ラケズリ・回転ナデ	回転ナデ・当て具痕後ナ デ	はほ完年(かえりの一部を大権)	ロクロ回転方向左・822とセットで出土・当て具 痕あり
824	100 雄山6号墳石室内床面	須恵器 杯蓋	П:13.6	4.4 網:石英·長石: こ く少	ご 外面:暗背灰 (5 B 4/1) 内面:暗青灰 (5 B 4/1)	口縁部と天井部の境は弱い稜を持つ,口縁端部は凹面 をなし段を持つ,天井部は平坦	101/	回転ナデ		ロクロ回転方向右・825とセットで出土
825	100 雄山6号墳石室内床面	須恵器 杯身	[]: 12.4		少 外面:暗青灰 (5 B 3/1) 少 内面:暗青灰 (10 B G 3/1)	口縁部の立ち上がりは内┫し,端部は凹面をなし段を 持つ,底部は丸い	底体部外面の2/5回転へ ラケズリ・回転ナデ	回転ナデ	完存	824とセットで出土・外面にゴマがかかる
826			□:13.4	5 相:長石:ごく少	, 外面:灰 (N5/) 内面:脊灰(5B5/1)	口縁部と天井部の境は弱い稜線を持つ。口縁端部は凹 面をなし段を持つ。天井部はやや平坦	の2/三	回転ナデ	完存	ロクロ回転方向左・827とセットで出土
827			П: 12. 4	4.4 網:石英·長石:、	外面:青灰(5 B4/1) 内面:暗青灰(5 B3/1)	口縁部の立ち上がりは屈曲気味に内傾し、端部は鋭い。 底部はやや平坦	底体部外面の1/4回転へ ラケズリ・回転ナデ		完存	ロクロ回転方向左・826とセットで出土
828	100 雄山6号墳石室内床面	須恵器 杯蓋	☐:14.8	4.9 中:石英・長石:ペ	? 外面:灰(N5/) 内面:青灰(5B5/1)	口縁部と天井部の境は凹線がめぐる,口縁端部は丸く 収める,天井郡はやや平坦	天井都外面の1/2回転へ ラケズリ・回転ナデ		ほぼ完存(口縁) の一部を欠損)	ロクロ回転方向右・829とセットで出土・当で具 痕あり
828	100 雄山 6 号墳石室内床面	須恵器 杯身	П:12.8	4.6 細:石英·長石·県 色粒:多	黒 外面:灰(10Y6/1) 内面:灰白(N7/)		底体部外面の1/5回転へ ラケズリ・回転ナデ	回転ナデ・回転ナデ後仕 上げナデ・当て具板後ナ デ	完存	ロクロ回転方向左・828とセットで出土・当て具 疲あり
830	100 雄山6号墳石室内床面		П:13.8	4.6 細:石 英・長 石・黒	黒 外面:灰白(10~6/1) 内面:緑灰(10G5/1)		天井部外面の1/2回転へ ラケズリ・回転ナデ	回転ナデ	7.8存	ロクロ回転方向左・831とセットで出土
831	100 雄山 6 号墳石室内床面	須恵器 杯身	П:11.6	5.6 網:石英·長石·J	天 外面:暗青灰(5B4/1) 内面:青灰(10B5/1)	口縁龍の立ち上がりはやや屈曲気味に内槓し、端部は 丸く収める、底部はやや平坦	底体部外面の1/3回転へ ラケズリ・回転ナデ	回転ナデ・仕上げナデ	完存	ロクロ回転方向右・830とセットで出土

100 100	報ウ発与 団路	沿路等沿	美	路着久	口径·底径	(駅・中・駅)+路 寛銘	## (##	形態の特徴	外面調整	内面調整	残存度	套
10	-	_	雄山6号墳石室内床面	杯	D:14.1	4.9 中:石英・長石:こ	Z Z	口縁部と天井部の境は弱い稜を持つ,口縁端部は内傾 する而をなす。天井部はやや平坦	天井都外面の1/2回転へ ラケズリ・回転ナデ	回転ナデ	完存	ロクロ回転方向右・セットで出土関係なし
10	╀	$\overline{}$	雄山 6 号塘石窑内床面		D: 15.5	5.2 中:石英·長石・黒	2	口縁部と天井部の境は凹線がめぐる。口縁端部は内傾しまる凹面をなよ。 子士教はをお来出	大井部外面の1/3回転へ ラケブリ・回転ナデ	回転ナデ	完存	ロクロ回転方向右・セットで出土関係なし
19	+	\top	第110つでは135年日 番目の 早齢 石安内 下面		11.11	5 6 中:石英・長石:ご	25	3.0円間をなり、人工的は、下工部に 口縁部の立ちがりは内傾し、端部は凹面をなし段を は、これでは、これでは、10元は一面をなし段を	度体部外面の1/3回転へ ラケブ11 回転する	回転ナデ・当て具痕後仕	ほほ完存	ロクロ回転方向右・セットで出土関係なし・当 アヨギキの
10	+	_	第四000公立共136年日本に、日本に、日本に、日本に、日本にかられた	1		3. 4 年·長石·黒	四面	付つ, 谷色は米、塩町は入v: 口縁部と天井部の境は緩やかに屈曲する, 口縁端部は	天井都	エリノノ回転ナデ	ほほ完存	ロケ兵なの ロケロ はない はない はない はない はない はない 一部 ない はない はない はない これ はない ない はなり はない
10	\dashv		毎mg 夕気石里73 小園	AZ.M. III. B.		い。 色粒:少 市・7 株・耳 1・8	四四	四面をなし段を持つ, 大井はやや半田 口縁部は知く内極する。 層が第った値接形を呈する。	ファスリ・凹転ナア 同転ナデ・回転ヘラケズ		4	然和付着
10	4		雄山 6 号墳石室内床面	短頻亜身	最大:12.6	7 十 4 4 1 4 1 4 1	7	(おおけないこと、こと、そのでは、ことのでは、このではない。) はっぱん いっぱん かんしん はんしん はんしん はんしん はんしん はんしん はんしん はんし	リ・カキ目のショケア	回転ナデ	光件	ロクロ回転方向左・835とセットで出土が、ロカロ回転上向左・毎難器028とルットが出土
10 自由の 9年に至中に対し、			雄山6号墳石室内床面	無蓋高杯 (杯	П:10.4	粗:石英・長右:こ く少	外面:育炊(5 P B5/1) 均面:青灰(5 P B5/1)	口棒部の円尖に繋い投機を行う、増加は繋が、即即に 長方形の透かし孔を3方向から穿つ	回転ナア・回転*、ファス リ後ナデ ロギュニ ロギニ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	回転ナデ	口條部4/8	レンド回転が同任・位類型coocモンド・ロエル・きかし孔は三方向
11	_		雄山6号墳石室内床面		D:7.8 最大:13.4	8.2 中:石英・長石・黒8.2 白粒: やや少	外面:オリーブ灰(5GY) 内面:縁灰(7.5GY6/1)	口縁部は短く直立気味に内傾する, 用の扱った偏球形 を呈する,成部は丸い	回転ナデ・回転ヘラケス リ・カキ目	回転ナデ	完存	ロクロ回転方右・837とセットで出土か?
10			雄山 6 号墳石室内床面		日:10.9 最大:15.0	16.1	조선	口縁部は大きく外反する、端部は丸く肥厚する、体部 はやや肩の張った球形を呈し底部は丸い	回転ナデ・枚ナデ or カ キ目・カキ目後回転ナデ ・ククキ目後カキ目・カ キ目をカル・カーロー	回転板ナデ・回転ナデ・ 指押さえ後当て具痕	完存	
10	╁-	1	雄山 6 号墳石室内床面		П:11.6	13.1 中:石英・長石:ご	4 四 四 四 四 四 四 四 四 四 四 四 四 四 四 四 四 四 四 四	口縁部は大きく外反する。端部は上方に肥厚し面を持つ、体部は肩の張った偏球形を呈し、底部は尖り気味	コース・フェーン・コーロー 回転ナデ・回転ヘラケズ リ後ナデ・沈線	回転ナデ・指押さえ後ナデ	完存	ロクロ回転方向左
19	-		推116 基础方案内库面	報報	8.6:□ # : 9.8	2, 2,		に入い. に発がけたきく外反し。端部は丸く肥厚する、体部は に縁部はたきで外反し。端部は丸く肥厚する、体部は	回転ナデ・カキ目	回転ナデ	はほ完存(口縁の一部と耳	ロクロ回転方向左・自然袖付着・胴部下位に別 偶体(ないし繁選具)の一部が熔着する(3個
10	+	T	体 出り 夕気付玉だが 田	7.E./M	庫:14.7	3	<u>区</u>				-つを欠損)	
10			雄山6号墳石室内床面	提瓶	屋大:12.7 厚:8.7	14.2	外面:暗オリーブ灰(5GY4/ 内面:青灰(10BG5/1)	が味むけんごうなほびを呈げる。 が大きくつぶれた偏様形を呈げる。鍵状の把手を有する る	コナデ・カキ目し)	不明	ほぼ完存	ロクロ回転方向右・耳の一部を欠損
10	-		雄山 6 号墳石室内床面	かいか	口:12.6 最大:9.8		外面:灰白(10Y7/1) 内面:灰白(5Y7/1)	口縁部は直線的に外上方へのび,端部は大きく開いて 丸く収める,口径は体部最大径を遂ぐ,体部は肩の張 ったタマネギ形を呈し,底部は丸い	転ナデ·カキ ・ヘラケズリ	回転ナデ	ほほ完存	ロクロ回転方向右・口縁の一部欠損・内外面に ゴマかぶり
10	\vdash		雄山 6 号墳石室内床面	1	口:9.8 底:6.7	9.7 番:長石・黒色粒:	外面:灰(N6/) 内面:灰(N6/)	口縁部の中央で鈍い稜を持つ,端部は丸く収める。脚 部は越脚で円形の透かし孔を3方向から穿つ,端部は 前端を注:回よっ	回転ナデ・回転ヘラケズ リ	回転ナデ	7/8存	ロクロ回転方向右・口縁部と脚端部の一部を欠損・透かし孔(穿孔)3ヶ所
10.	╂	T	雄山 6 号墳石室内床面	4	日:11.1	5.2 相:石英・長石:ご	外面:橙(7.5 Y R 6/6) 内面:阻止组(10 V R 6/6)	日縁部は内湾し緩やかに底部につながる,端部は丸く 取める	指ナデ・板ナデ・マメツ	指押さえ後ナデ	7/8口縁の一部を欠損	
101	-	$\overline{}$	雄山6号墳石室内床面	1	13.1	5.7 44:石英・長石:や	外面:橙(5 Y R6/6) 内面:梅(7.5 Y R4/4)	口練部は内湾し緩やかに底部につながる,端部は丸く 収みる	マメツ (指押さえ後ナデ)	マメツ (指押さえ後ナデ)	8/9	崩落が進む
101	-		雄山6号墳石室内床面		平 14.8	3.9 補:石英・長石:や	外面:にぶい赤褐(5YR5/4) 内面:暗赤褐(5YR3/2)	口縁部は内湾し緩やかに底部につながる,端部は丸く 収める	指押さえ後ナデ	ョコナデ	1/8	表面の磨滅が著しい
10. 韓田の号項信部内部	_	1	雄山6号墳石室内床面		再10.8	6 細: 長石・紫母: ご 6 くル	外面:明黄褐(10 Y R 7/6) 内面:明蓄褐(10 Y R 7/6)	口縁部は内湾気味に立ち上がる。底部は丸みを帯びた。 平坦。体部中央に牛角形の大きな把手を付ける。	指ナデ・指押さえ・ナデ	指ナデ・指押さえ	7/8口縁の一 部を欠損	
10. 韓山の砂塊石油水油 上部部 地子 10.3 10.1	-		雄山6号墳石室内床面		五二二 2.0	5.2 細:石英・長石・雲 5.2 母:やや多	外面:明黄褐 (10 Y R 7/6) 内面:明黄褐 (10 Y R 7/6)	口縁部は内湾気味に立ち上がる,底部は平坦,体部下 方に牛角形の大きな把手を付ける	指押さえ後ナデ	指押さえ後ナデ	2/8	把手の上方,口縁部付近に一部赤彩の痕跡あ り
101 韓山の号地石を発展が発生	-	П	雄山6号墳石室内床面	土師器 把手付桅	□:7.4 廃:3.2	5.7 細:石英·長石:少	外面:橙(7.5YR6/6) 内面:橙(7.5YR6/6)	口縁部は内湾気味に立ち上がる,底部は丸みを帯びた 平坦,体部中央に牛角形の大きな把手を付ける	指押さえ後ナデ・ナデ	指押さえ後ナデ	8/9	
105 韓山ら野境に強土 初北等 妻 11:21.0 南・5年 長に 少 万面 新代の 5 7 8 7 8 7 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	-		雄山6号墳石室内床面	土師器 小型壷	□:9.2	10.1 細:石英・長石:や 20.1 や多	外面:明黄褐 (10 Y R 7/6) 内面:明黄褐 (10 Y R 7/6)	口縁部は外上方に直立気味で,口径は体部最大径より 小さい,体部は <u>算盤玉形を呈する,底部は丸</u> い	コナデ·指押さえ・タ ハケ	ヨコナデ·指押さえ・ナ デ	ほぼ完存	開外側の一部に赤彩の痕跡あり
105 独山 6 分類 (現実 2 元 元 元 元 元 元 元 元 元 元 元 元 元 元 元 元 元 元			雄山 6 号墳石室内埋土		П: 21.0	編:石英・長石:ご く少	外面:褐灰(7.5Y R5/1) 内面:暗青灰(10B G4/1)	口縁部は短く外反し、端部は上方に肥厚させる	転ナア・カキ目後格士目 タキ後部分的にカキ目	回転ナデ・タタキ(当て 具痕)	口~肩部1/4	自然釉付着
105 建山 6 分類 (_		雄山 6 号墳周溝埋土		□:15.2	中:石英·長石:少		口縁部は大きく外反し、端部は上下に肥厚させ,凹線 を有する	回転ナデ・凹線	回転ナデ	口縁部2/8	
105 韓山ら号境間線能面 現態器 (A2 247 - A2 2			雄山6号墳周溝埋土		□:12.2	4番:長石:ごく少	\sim	口縁部は直立気味の類部から短く外及する、端部は面 を持つ	回転ナデ	回転ナデ	口條部1/8	
105 韓山の砂塊関連性			雄山6号墳周溝底面	3	П:11.8	12.8 4 : 石英・長石: ごく少く少	4×4×	口縁部は外上方に直線的にのび、端部は内値する凹面 をなし投き持つ、口径は肩部最大径をわずかに後ぐ、 体部はやや肩の傷った珠杉を早し、底部は丸い	回転ナデ·回転ナデ後タ タキ	回転ナデ	体部完存·口 鞣部4/8	
105 株山 6 号板間達成而	ļ	Т	雄山6号墳周溝埋土	ı	類:10.2	中:石英·長石:少	外面:オリーブ灰(5GY6/1) 内面:音灰(5B5/1)	体部は球形に近い供形を呈すると思われる	平行クタキ・カキ目	当て具痕	第~層部1/10	小飯片を図上で復元
100 韓山6号境保底面 須恵器 大苑蔓 中・石奏・長石:今 内面:暗音灰 (108 1) 基格を含する (108 1) 基本を含する (108 1) 日本を含む (108 1) 日本を含む (108 1) 基本を含む (108 1) 日本を含む (108	-		雄山 6 号墳周溝底面		西: 11.0 第:8.0		外面:灰 (N6/) 内面:灰 (N5/)	口縁部は中央で弱い稜を持つ、端部は鋭い、脚部は長 脚気性で3.方向から長方形の透かし礼を穿つ、端部は 開出す。	回転ナデ・ヘラケズリ後 ナデ	回転ナデ	ほぼ完形	ロクロ回転方向左・脚部三方透かし
107 韓山6号境境に盛士 須恵馨	-		雄山6号墳周溝底面		攤:36.8	中:石英・長石:やや少	外面:暗青灰 (10 B G 4/1) 内面:暗青灰 (5 B 3/1)	口縁部は大きく外反して開く、開部はわずかに縦長の 球形を呈する、底部は丸いが、開部下半から底部が大 まったます。	P.99+B	当て具痕・丁寧なナデ	第~底部1/6	焼成の際の焼け歪みが特に底部周辺に着しい
107 韓山6号境境に陸士	╄		雄山6号墳墳丘盛土		D: 14.9	4.9 租:石英·長石·黑	外面:灰(N4/) 内面:灰(N4/)	る人なります。 「時都と天井郡の境は弱い稜を持つ、口縁端部は凹面 をかし野を持つ、天井船はやや平田	‡部外面の2 r ズリ・回転	回転ナデ	ほほ完存	ロクロ回転方向左
107 韓山6号境境に産土	ļ	T	雄山6号墳墳丘盛土		П: 14.8	中: 長石·灰色粒:	外面:灰(5Y8/1) 内面:灰(5Y8/1)	<u>口縁部と天井部の境は弱い稜を持つ,口縁端部は内傾</u> する凹面を持つ	屋ナデ	回転ナデ	月~口縁部1 8	
107			雄山6号墳墳丘盛土		□:14.2	細:石英·長石:少	4面:青灰 (5 B5/1) 4面:青灰 (5 B5/1)	口縁部と天井部の境は弱い稜を持つ,口縁端部は凹面 をなし段を持つ	回転ナデ	回転ナデ	口縁部2/8	
107	_		雄山6号墳墳丘盛土	須恵器 杯身	□: 12.3	4.7 中:石英·長石·灰 4.7 色粒:少	4面:暗青灰 (5 B 4/1) 9面:青灰 (5 B 5/1)	口縁部の立ち上がりは屈曲気味に内頼し、端部は丸く 収める、底部は平坦	底体部外面の1/3回転へ ラケズリ・回転ナデ	回転ナデ・仕上げナデ	完存	ロクロ回転方向左
107 様山6号境境に盛土 須恵器 45 11.2 6 5.1 中・万美・投行: 外面 緑灰(7.5 (7.87) 口縁部は交 (直立方の は内側) 発売に対例 2.5 (場所 1.8.7) 中・万美・投行: 外面 緑灰(7.5 (7.8.7) 日韓都は変(直立方の 1.8.4 を行う) 中・万美・投行: 外面 緑灰(7.5 (7.8.7) 日韓都は変(直立方の 1.8.4 を行う) 中・万美・投行: 外面 緑灰(7.5 (7.8.7) 日韓都は及(直立方の 1.8.4 を行う) 中・万美・投行: 外面 緑灰(7.8.8) 日韓都は及(直立方の 1.8.4 を行う) 中・万美・投行: 外面 株 (7.8.8) 日韓都は入きく外反する。 中・万美・投行: 中・万美・投行: 中・万美・投行: 中・万美・投行: 日韓都に入る) 日韓都に大き、外面 大田 (7.8.8) 日韓都に大き、外面 大田 (7.8.8) 日韓都に大き、外面 (7.8.8) 日韓都と大手・大利の 日韓和 (7.8.8.8) 日韓都と大手・大田 (7.8.8.8.8.8.8.8.8.8.8.8.8.8.8.8.8.8.8.8	_		雄山 6 号墳墳丘盛土	須恵器 杯身	П: 12. 6	編:石英・長石:こ ヘ少	4面:灰(5Y7/1) 9面:灰(5Y7/1)	口縁部の立ち上がりは屈曲気味に内傾し, 端部は丸く 収める	回転ナデ・回転ヘラケズ リ	回転ナデ	口~開部1/4	ロクロ回転方向右
107 株山6号境境企産士 須恵器 短額電各 間:3.7 中:石美・長石:9 内面:	-		雄山 6 号墳墳丘盛土		□:12.6	5.1 中:石英・長石:こ	4面:略素灰(5R P 3/1) 4面:灰(N5/)	口縁部の立ち上がりは内傾し,端部は内傾する凹面を なす,底部は平坦	底体部外面の2/5回転へ ラケズリ・回転ナデ	回転ナデ	4/8	ロクロ回転方向右
107 様山6号境境 20 42 42 42 42 43 44 45 44 45 45 45 45			雄山 6 号墳墳丘盛土		□ : 9.1	8.5 細:石英·長石:少	77	口縁部は短く直立する, 体部はやや肩の張る偏球形を 呈する, 底部は丸い	回転ナデ・カキ目・回転へラケスリ・回転へのラケズリ・回転へラギ リ後ナデ	回転ナデ	全体の1/3	ロクロ回転方向左
108 韓山6号墳包合階 須恵器	┝	T	雄山6号墳墳丘盛土	1	П: 18.7	中:石英·長石:少	外面:暗灰内面:灰()		回転ナデ・タタキ目後ナ デ	回転ナデ・当て具痕後ナ デ	口頸部4/8	
108 株山6号墳包合層 須恵器	<u> </u>		雄山 6 号墳包含層	1	D: 14.6		外内		回転ナデ・凹線・回転へ ラケズリ	回転ナデ	4/8	ロクロ回転方向右
108 韓山6号墳包含層 須恵器 杯菱 口:15.8 縄:石英・長石:少 内面:灰(7.5 Y5.7) 口縁部と天井部の境は四線がめぐる。口縁楽部は丸く 回転ヘラケスリ・回転す アイントロール・ファイン ファイントロール・ファイントロール・ファイン ファイントロール・フィール・ファイントロール・フィール・フィール・フィール・フィール・フィール・フィール・フィール・フィ			雄山 6 号墳包含層		[]: 13.7		外内		天井部外面の2/5回転へラケズリ・回転ナデ・凹線	回転ナデ	6/8 (口縁の 一部を欠損)	ロクロ回転方向右
108 権由6号境名を層 須恵器 杯身 ロ:11.4 4.9 和: 石英・長石:少 内面:灰白(10.77.1) 口報節の立ち上がりは内積しやや型い、雑部は投い、 欧部は大の 政部は大の 大の 大の 大の 大の 大の 大の 大の	-	T	雄山 6 号墳包含層		11:15.8	網:石英·長石:少		口縁部と天井部の境は凹線がめぐる。口縁端部は丸く 収める	回転ヘラケズリ・回転ナ デ	回転ナデ	口縁部1/8	ロクロ回転方向左
ı	Н		雄山 6 号墳包含層	須恵器 杯身	D:11.4	4.9 細:石英·長石:少	. 外面:灰白(5 Y 7/1) 内面:灰白(10 Y 7/1)	口縁郡の立ち上がりは内傾しやや短い、端郡は鋭い。 底部は丸い	底体部外面の1/3回転へ ラケズリ・回転ナデ	回転ナデ	6/8 (口縁の 一部を欠損)	ロクロ回転方向左

替零之權	异零强风	5	路籍名	口径・底径	製菓	(第・中・課)	0	大 徳 の 称 徳	九 匝 編 勢	2	珠在唐	看
946	108	雄山6号墳包含層	杯身	П: 12. 1		網:石英·長石:少	外面:灰(N6/) 内面:灰(N6/)	口縁部の立ち上がりは内傾し、端部は丸く収める	回転ナデ			
947	108	雄山 6 号墳包含層	須恵器 短頸壷身	П:15.8	Ť	網:石英・長石:ご く少	外面:暗青灰(5BG4/1) 内面:オリーブ灰(5GY6/1)	口縁部は内傾する, 体部は肩が強く扱った偏珠形を呈 する, 底部は小さな平坦面を持つ	回転ナデ・カキ目・回転 ヘラケズリ	回転ナデ	肩~底部1/5	
948	108	雄山 6 号墳包含層	須恵器 壷	☐:13.2	**	網:石英·長石:少	外面: 灰(10Y5/1 内面: 灰(7.5Y6/	<u>口縁部は途中で配曲気味に外茂する,獨部は下方に肥</u> 厚させ丸く収める	回転ナデ	回転ナデ	口類部1/5	
949	108	雄山 6 号墳包含層	須恵器 壷		***	編:石英・長石:ご く少	外面:青灰 (10B G5/1) 内面:明オリーブ灰 (2.5G Y7/ 1)	- 口縁部は大きく外反する,端部は内湾気味に丸く収め る	カキ目後回転ナデ·カキ 目	回転ナデ	口緣部小飯片	
950	108	雄山 6 号墳包含層	須恵器 蹇		1.4	中:石英・長石:や や少	外面:暗灰 (N3/) 内面:緑灰(10G5/1)	口縁部は大きく外反する、端部は面を持ち、外面に1 条の凸帯を貼り付ける	回転ナデ・回転ナデ後波 状文(10条)	回転ナデ	口縁部小破片	
946	108	雄山6号墳包含屬	須恵器 杯身	□:12.1	- SE	網:石英·長石:少	外面:		回転ナデ	回転ナデ	口縁部1/8	
947	108	雄山 6 号墳包含層	須恵器 短類壷身	П: 15.8	***	編:石英・長石:ご く少			回転ナデ・カキ目・回転 ヘラケズリ	回転ナデ	肩~底部1/5	
948	108	雄山 6 号墳包含層	須恵器 壷	П:13.2	9#	細:石英·長石:少	A 西 国	口縁部は途中で屈曲気味に外皮する,端部は下方に肥 厚させ丸く収める	回転ナデ	回転ナデ	口類部1/5	
949	108	雄山 6 号墳包含層	須恵器 壷		**~	網:石英・長石: C く少	外面:青灰 (10B G5/1) 内面:明オリーブ灰 (2.5G Y7/	口縁部は大きく外反する,端部は内湾気味に丸く収め る	カキ目後回転ナデ·カキ 目	回転ナデ	口縁部小破片	
920	108	雄山 6 号墳包含層	須恵器 売		T.	中:石英・長石:ややル	外面:暗灰内面:蜂灰	口縁部は大きく外反する,端部は面を持ち、外面に1 4の凡帯を貼り付ける	回転ナデ・回転ナデ後次 抹 ケ(10条)	回転ナデ	口縁部小戦片	
951		雄山 6 号墳包含層	須恵器 甍(壷)	D: 17.4	34	網:石英·長石:少	12KK	口縁部は直立気味に外反する,端部は面を持ち,凹幕 をかぐらす	回転ナデ	回転ナデ	口緣部1/8	
952	108	雄山 6 号墳包含曆	須恵器 器台?		城	細:長石:ごく少	外面:略灰 内面:尿(10		構構き波状文	回転ナデ	小破片	ゴマがかかる
953	108	雄山 6 号墳包含層	上節器 高杯	□:18.8	T 2	中:石 英·長 石·雲 母·角閃石:多	-	口縁部は屈曲して外反する、端部は丸く収める	ヨコナデ・ヘラミガキ?	マメツ	小破片	勝減者しい
954	108	雄山6号墳ペース層	製塩土器	類:2.8 底:4.2	#	中:石英·長石:多	を配いて		指押さえ・ナデ	指押さえ・ナデ	脚部のみ完存	
922	108	雄山6号墳ペース層	製塩土器	底:3.2	#	粗:石英·長石:多	外面:にぶい黄橙(10Y R7/3) 内面:黒(10Y R2/1)		指押さえ後ナデ	指押さえ後ナデ	脚部完存	
926	108	雄山 6 号墳ペース層	土製品 人形の手?	長:5.8	±#	中:石英·長石赤色 粒:多			マメツ (ナデ)	マメツ (チヂ)	片手	
957	108	雄山6号墳ペース層	弥生土器 童		新	粗:石英·長石·雲 母:多	外面:にぶい黄橙(10Y R7/4) 内面:にぶい黄櫓(10Y R7/4)		ナデ後解歯紋+竹管文 ・沈線1条	指押さえ後ナデ	口縁部小破片	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
928	108	雄山 6 号墳ペース層		D: 25.4	#	中:石英·長石:多	外面:櫓(2.5 X R6/6 内面:におい黄櫓(10		マメツ	マメン	口縁部小破片	
929	108	雄山6号墳ペース層	弥生土器 壷		# 2	粗:石英·艮石·雲 母:多	20		ナデ・鋸歯紋	ナデ	小破片	
396	110	雄山 6 号墳 S K 01	土師質土器 土綿	П: 33.2	#	中:石英·長石:少	外面:にぶい黄稿(10Y R7/3) 内面:浅黄檀(10Y R8/3)		指押さえ後ナデ·指押さ え後タテハケ目	指押さえ後ヨコハケ目	8/9蝦鼬~口	,
963	110	雄山 6 号墳 S K 01		口:8.2 底:6.2	1.3	中:石 英・長 石・赤 色粒:やや多	外面:浅黄橙(10 X R 8/4) 内面:浅黄橙(10 X R 8/4)		回転ナデ・ヘラギリ後ナ デ	回転ナデ	-	ロクロ回転方向右
964	110	雄山 6 号墳 S K 01	土節質土器 ミニチュ ア豊	口座	9.9	網:石英·長石:少	外面:浅黄(2.5Y7/3) 内面:黒(10Y2/1)		指押さえ後ナデ	指押さえ後板ナデ・板ナ デ	鍋(一部欠損), 畫1/3	、手づくねのミニチュア・鍋の底外面には炭化物 が付着しており実際に火を受けたらしい
供工.	7 号墳	雄山7号墳土器観察表										
報文番号	図版番号	議 構 名	器種名	口径·底径	器高馬	器高 胎士(粗・中・細)	#	形態の特徴	外面調整	内面貨幣	残存度	葡
972	121	玄室内遺物 4	須恵器 蓋坏	11.6	3.8	3.8 細:石英-長石少	外面:灰赤(7.5R4/2)~褐灰(5 Y R6/1) 内面:暗音灰(5P B4/1	稜は剣く突出,天井部は平坦気味	天井部3/5ヘラケズリ・ 回転ナデ・	回転ナデ・中央部不定方 向ナデ	8/8完存	天井部中央には自然釉が付着しない→重ね焼き、粘土塊付着・内部中央に焼成時の不明付着 物あり・ロクロ回転方向右
973	121	玄室内遺物 8	須恵器 蓋坏	11.4	3.8 #	3.8 中:石英·長石幣	外面: 灰(7.5Y6/1) 内面: 楊灰(10Y R5/1	稜は鈍く突出,端部はやや鋭く段状になる	天井郡4/5ヘラケズリ・ 回転ナデ・	回転ナデ	8/8完存	ロクロ回転方向右
974	121	玄室内遺物 6 B	須恵器 蓍坏	12.2	4.7 中	中:石英・長石少~ 普	外面:黄灰(2.5Y6/1) 内面:黄灰(2.5Y6/1)	天井郎は高く丸みがある。稜はやや鈍く突出、端部は 明確な沈線を有し、シャープである	天井部4/5ヘラケズリ・ 回転ナデ・	回転ナデ	8/8完存	ロクロ回転方向右・端部に幅2■の粘土帯が付着しており・坏身と正位で重ねた重焼きと想定 できる・仏面には自然軸がかみる。
975	121	玄室内遺物 5 B	須恵器 蓋坏	12.2	4.6	網:石英:長石少	外面:青灰(5 内面:青灰5	天井郡は高く丸みがある。稜はやや剣へ突出、端部は ややシャーブで段状になる	天井都5/6ヘラケズリ・ 回転ナデ・	回転ナデ·中央部不定方 向ナデ	8/8完存	ロクロ回転方向右
926	121	玄室内遺物 1 B	須恵器 蓋坏	12.1	4.4	中~細:石英・長石 少~普	外面内面		ŀ	回転ナデ・中央部不定方 向ナデ	8/8完存	
977	121	玄室内遺物 9 R	須恵器 蓋坏	12.7	4.7	p~細:石英·長石 >, 黒色粒少	外面:灰(10) 内面:灰(7.5	稜は鈍く突出,端部は段状になる	天井部4/5ヘラケズリ・ 回転ナデ・	回転ナデ・中央部不定方 向ナデ	8/8完存	ロクロ回転方向右・外面へラケズリに際し・含 有鉱物の移動が激しい。
826	121	玄宰内遺物 7 B	須恵器 養坏	12.5	3.85	p~細:石英・長石 >	外面:灰(10Y6/1) 内面:灰10Y6/1	B, 端部は段状, 天井部は低平になる		回転ナデ・中央都不定方 向ナデ	8/8完存	ロクロ回転方向右
626	121	玄室内建物10B	須恵器 蓋坏	13.5	2 開	h:石英·長石書,]色粒少	外面:灰白(7 Y 8/1) 内面:灰(7.5 Y 6/1)	プに突出気味、端部はややシャープで外方こなる、天井部は丸く、器高が高い		回転ナデ·中央部不定方 向ナデ	8/8完存	ロクロ回転方向左・内面中央に円心円交スタン プあり
086	121	玄室内遺物13	須恵器 蓋坏	14	4.7 中	中~粗:石英·長石 多,黑色粒少	外面:灰白(10 Y 7/1) 内面:灰白(7.5 Y 7/1)	種は退化し、口縁部と天井部の境がごくわずかに突出 するのみ、 雑部は沈線が巡るが丸みがある	天井都5/6ヘラケズリ・ 回転ナデ・	回転ナデ	8/8完存	ログロ回転方向右: 胎士中の鉱物は 5 m前後の ものを含む・器壁厚がやや厚い
186	121	玄室内遺物12	須恵器 養坏	13.9	4.7 争	p∼粗:石英·長石 5. 黒色粒普	外面:灰(10Y6/1) 内面:灰白(5Y7/1)	稜はシャープに突出する,端部は丸みがあるが,段状 になる	天井都5/6ヘラケズリ・ 回転ナデ・	回転ナデ	8/8ほほ存	ロクロ回転方向右・器壁厚が厚く・重量感がある る
286	121	玄室内遺物 2	須恵器 坏身	10	4.6	網:石英·長石少,	外内面面	口縁部は内傾し、端部は段をもつ	底部4/6ヘラケズリ·回 転ナデ	回転ナデ	8/8完存	ロクロ回転方向右・受け部に蓋坏端部が付着→ 合わせ口を正位にした重焼き・底部自然釉のか かり方にムラがあり・重焼きを想定できる
983	121	玄室内遺物 3	須恵器 坏身	10	4.2 中	中~細:石英·長石 少	外面:オリーブ灰(2.5GY6/1) 内面:灰(5Y6/1)	口縁部は内傾し、踏部は丸い	底部4/5ヘラケズリ·回 転ナデ	回転ナデ	8/8完存	ロクロ回転方向左
984	121	玄室内遺物 6 A	須恵器 坏身	10.6	2	網:石英·長石少	外面内面	口縁部は内傾し、端部に明瞭な段をもつ,底部は丸く 深い	底部4/6ヘラケズリ·回転ナデ	回転ナデ	8/8完存	ロクロ回転方向右・蓋环端部が付着→合わゼロ ・正位による重焼き・外面に坏の一部が付着→ 面積きの痕跡
982	121	玄室内遺物 5 A	須恵器 坏身	10.7	2	中~細:石英·長石	外面:灰(10 Y 5/1) 内面:灰(10 Y 5/1)	口縁部は内傾し、端部に段をもつ	底部4/5ヘラケズリ·回 ギャデ	回転ナデ・中央部不定方向エデ	8/8完存	ロクロ回転方向左
000	Г				1	1~细·五蓝.耳万			W 300 / C = 1 - 1 C	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1		

ロクロ回転方向左 ロクロ回転方向右・口縁部に焼け歪みがみられ 2 ロクロ回転方向右・中央に同心円文スタンプあ 1

口縁部は内傾し、端部に浅い段をもつ 口縁部は内傾し、端部にかすかな段をもつ 口縁部は内傾し、端部に段をもつ

5 中一網·元美·長石 外面·沃(10 Y S J J)
4.6 中 網·石英·長石 外面·沃(10 Y S J)
4.6 中 網·石英·長石 外面·沃(15 Y S J)
4.6 中 - 網·石英·長石 外面·沃(15 Y S J)
5.4 中·西·石英·長石 外面·沃(15 Y S J)
5.4 中·石英·長石普 外面·沃(10 Y Y)
5.4 中·石英·長石普 外面·沃(10 Y Y)

類患器 坏身 類恵器 坏身

玄室内遺物 7 A

121 121

982 984

121 玄室内建物11

886

84

須恵器 坏身

口縁部は内傾し、端部は丸い

玄室内遺物 6 A 玄室内遺物 5 A 玄室内遺物 1 A

報文番号 图	図版番号		器種名	口径·底径	□径・底径 器高 胎土 (粗・中・綱)	(土・中・建)	卸置	形態の特徴	外面調整	内面調整 残存度		拿 聯
686	121	121 玄室内 建物 9 A	須恵器 坏身	11.7	4.5 中:石	英·長石書, 外間 普	面:灰黄 (2.5 Y 6/2) 頓:黄灰 (2.5 Y 6/1)	口縁部は内傾し、蟾部にかすかな段をもつ	底部5/6ヘラケズリ·回 転ナデ	<u> </u>		ロクロ回転方向右・外面全面に自然釉・焼成・胎 土が極めて異質
066	121	121 玄室内建物10A	須恵器 坏身	12	4.9 中~粗	:石英·長石 外個 色粒少 内國	葡:灰白(7.5Y7/1) 葡:灰白(7.5Y7/2)	口縁部は内傾し、端部に段をもつ	底部5/6ヘラケズリ·回 転ナア	回転ナデ	8/8完存	ロクロ回転方向右・底部厚が厚い
991	121	121 玄室内建物14	須恵器 坏身	12.5	5.3 中:石英·長石多	英·長石多 内記	面: 灰白(5 Y 7/1) 恒: 浅黄(5 Y 7/3)	口縁部は内傾し、嘴部に段をもつ	底部5/6ヘラケズリ·回転ナデ	底部5/6ヘラケズリ・回 回転ナデ・中央部のみ指 8/8ほぼ完存 ロクロ回転方向右 転ナデ	8/8ほほ完存	ロクロ回転方向右
865	121	121 玄室内遺物15	須恵器 短賴壺	7	8.3 中~葡	8.3 中一編:石英·長石 外配8.3 少	外面:楊灰(5YR5/1) 内面:楊灰(10YR5/1)	口縁郎は短く内頓し、矯邸は幅2mmの水平面をもつ。口縁~觸郁回転ナデ・返。同じ円分スタンブ後・回 8/8完存 肩がはり、底部は丸みがある スリ・指揮さえ	口縁~胴部回転ナデ・底 部平行タタキ後ヘラケ ズリ・指押さえ	同じ円分スタンブ後・回 転ナデ・不定方向ナデ	8/8完存	口縁部の周辺の焼成が胴部と異なり・蓋をした 状態で焼成したと思われる
993	121	121 玄室内遺物16	須恵器 短甄壺	7.7	7 中~細	: 石英·長石 色粒少	外面:褐灰(7.5 Y R 4/1) 内面:褐灰(10 Y R 5/1)	口縁高は外反気味に直立し、遠部は丸い、肩部ははる 口縁回転ナデ・肩部カキ 回転ナデ・中央部のみ指 8/8完存 が、底部は丸みがある	口縁回転ナデ・肩部カキ 目・底部回転ヘラケズリ	回転ナデ・中央部のみ指 押さえ		ロクロ回転方向左
994	121	121 玄室内遺物17	須恵器 直口壺		中:石赤色粒	英·長石書, 外面 少	外面:橙(5YR7/8) 内面:橙(5YR7/6)	底部は狭い平坦面をもつが、胴路は球形である	不明	指押さえ	8/8体部	

予備調査等土器観察表

_		_			,		,		,
看		二重口縁・内面に一部黒斑・1004と同一個体?					開一底部小破 表面の剥離が著しい		高台の一部に板の圧痕・ロクロ回転方向右
残存度	2 A 8 H	口縁部2/8	類部3/8	底部1/2	大部	層部小破片	■~底部小破 片	1/8	体部4/8
内面测整	マメツ・ヨコナデ・指押さえ指ナデ・ヘラケズリ	板ナデ・ヨコナデ	ヨコナデ·板ナデ·指押 さえ	指押さえ後板ナデ	ナデ・分割ヘラミガキ	指ナデ・板ナデ	板ナデ	回転ナデ	回転ナデ
外面調整	マメツ・ヨコナデ・板ナ マメツ・ヨコナデ・指揮 2月8日 デ後ヨコナデ・ハケ目 きえ指ナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ナデ・指押さ 板ナデ・ヨコナデ え後ナデ	ココナデ・指押さえ後ハ ヨコナデ・板ナデ・指押 <u>類部3/8</u> ケ目	指押さえ後クタキ目	ナデ・分割ヘラミガキ ナデ・分割ヘラミガキ 坏部	ハケ目・ナデ	指押さえ・タタキ	回転ナデ・回転ヘラケズ リ	板ナデ・平行タタキ
形態の特徴	2							口縁部の立ち上がりは内頓する, 端部は凹面をなし段 回転ナデ・回転ヘラケズ 回転ナデを持つ	体部はやや雨の張った偏縁形を呈する, ていぶは平坦 板ナデ・平行タタキ で高台を貼り付ける
鱼	外面:橙(7.5 Y R 7/6) 内面:橙(7.5 Y R 6/6)	外面:橙(7.5 Y R 6/6) 内面:明黄褐(10 Y R 6/6)	外面:橙(5 Y R6/6) 内面:明褐(7.5 Y R5/6)	外面:橙(5 Y R6/6) 内面:黒褐(10 Y R3/1)	外面:にぶい掲(7.5 Y R5/4) 内面:にぶい掲(7.5 Y R5/4)	外面:明褐(7.5YR5/6) 内面:にぶい黄褐(10YR4/3)	外面:灰黄褐(10 Y R 4/2) 内面:黒(N2/)	外面:暗背灰 (5 B 3/1) 内面:暗背灰 (5 B 3/1)	外面: 灰白(10 X 7/1) 内面: 灰白(10 X 7/1)
(単・中・種) 平器 5	中:石英·長石·赤 色粒·雲母:多	中:石英·長石·赤 色粒·雲母:多	赤関	中:石英·長石·雲母:多:	編:長石·赤色粒· 雲母·角閃石:多	中:石 英·長 石·赤 色粒·雲母:多	中:石英·長石:多	粗:石英:ごく少	細:石英・長石:ご 〈少
口径·底径 器高	□:29.4 難:16.6	П:26.0	類:14.0	底:3.1	< 0.4π:5.0		⟨ U#:2.6	П: 10.4	最大:16.0 第:5.6 库:8.4
器 種 名 口径・底径 器高 胎士 (粗・中・細)						円筒埴輪		有声器 坏身	須恵器 長頸壷
	予備調査31トレンチ拡張区SD 上飾器 童 01	予備調査31トレンチ拡張区SD 土師器 垂 01	予備調査31トレンチ拡張区SD 01	予備調査31トレンチ拡張区SD 弥生土器 要	予備調査31トレンチ拡張区SK 弥生土器 高坏 01	予備調査31トレンチ	125 予備調査31トレンチ拡張区 製塩土器	125 予備調査31トレンチ拡張区	1010 125 予備調査9トレンチ
展文番号 図版番号	125	125	125	125	125	125	125	125	125
11文番号	1002	1003	1004	1005	1006	1001	1008	1009	1010

雄山古墳群石器観察表 ^{雄山 4号墳石器観察表}

I	WHAT TO THE BUSINESS AND THE PROPERTY OF	X		,										
報文番号	図版番号	源	構名	1 /10	器種名	馬な融	聖	 	買みら	直量 9	树	質	備	
363	20	D区IV層			打製石鏃	2.2		1.7	3		サヌカイ	<u>_</u>	五十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二	

雄山6号	墳石器観察	察表							
報文番号	図版番号	遺 構 名	器種名	wo マ ゴ	mo cm	mo マ	重量の	材質	編
096	109	雄山6号墳包含層	打製石斧	11.2	6.7	1.7	120.72	サヌカイト	刃部に使用による磨滅痕・擦痕あり
961	109	雄山 6 号墳包含層	打製石鏃	1.6	1.9	0.3	0.72	サヌカイト	先端を欠損する,凹基式

N区石器観察表

₩	
典	刃部に使用による磨滅痕あり
魺	/
*	サヌカ
重量の	69.72
mo マ 直	1
5	4.9
哩	2
東な留	11.
器種名	打製石庖丁
佑	
通構	N区包含層
図版番号	126
報文番号	1011

雄山古墳群出土旧石器観察表

報文番号	図版番号	遺構名	器種名	野な戦	mg Cm	まな	重量	材質	備
1014	132	IVK	ナイフ形石器	8	2.8	1.1	23.27	サヌカイト	
1015	132	31トレンチ	ナイフ形石器	8.1	2.9	1.1	33.11	サヌカイト	
1016	132	IVK	ナイフ形石器	7.1	2.1	1.2	18.4	サヌカイト	
1017	132	雄山 4 号墳	ナイフ形石器	5.1	1.9	П	8.74	サヌカイト	
1018	132	7トレンチ	ナイフ形石器	4.2	1.8	0.8	5.04	サヌカイト	
1019	132	3トレンチ	ナイフ形石器	2.9	1.6	0.7	3.04	サヌカイト	
1020	132	雄山5号墳	ナイフ形石器	2.1	2	9.0	2.28	サヌカイト	
1021	132	22トレンチ	ナイフ形石器	4.1	2.1	0.7	6.05	サヌカイト	
1022	132	2トレンチ	ナイフ形石器	4.8	2.4	0.8	11.25	サヌカイト	
1023	132	雄山6号墳	ナイフ形石器	5.6	2.4	0.7	15.07	サヌカイト	
1024	132	雄山6号墳	ナイフ形石器	5.2	2.4	П	14.52	サヌカイト	
1025	132	2トレンチ	ナイフ形石器	4.8	2.1	1.1	11.82	サヌカイト	
1026	132	8トレンチ	ナイフ形石器	5.5	2.5	0.8	12.61	サヌカイト	
1027	132	27トレンチ	ナイフ形石器	2.8	1.7	0.9	8.56	サヌカイト	
1028	132	雄山6号墳	ナイフ形石器	7.7	2.7	1.2	20.45	サヌカイト	
1029	132	表探	ナイフ形石器	9.8	3.7	1.9	48.33	サヌカイト	
1030	132	27トレンチ	ナイフ形石器	6.1	2.9	1	15.77	サヌカイト	

卷				-																												
======================================																																
材質	サヌカイト	ハリ質安山岩	サヌカイト	サヌカイト	サヌカイト	サヌカイト	サヌカイト	サヌカイト																								
重量の	13.19	16.91	66.6	26.73	11.65	4.07	14.32	23.9	12.88	5.73	5.53	6.97	8.86	4.98	1.63	13.48	10.85	4.18	8	17.6	3.07	4.03	17.55	14.76	3, 39	20.62	6.78	10.88	15.21	13.32	12.42	1.95
mo マ 直	1	1.7	1.2	1.3	1.1	0.7	1.5	1.4	1.3	0.8	6.0	1	1.1	1	2.5	1.3	1.3	6.0	9.0	1.1	9.0	0.8	1.4	1	9.0	1.4	0.7	0.9	1.3	1.1	1.4	0.4
wo em	2.2	2.5	1.9	3.2	2.4	1.7	1.7	2.5	1.9	1.7	1.4	2.1	2.1	1.8	1.3	2.5	2.7	1.4	2.2	3.5	1.4	1.8	2.7	2.5	2.1	3	1.7	2.3	2.1	2.4	2.5	2
単な	9	5.5	5.5	7.2	5.2	3.3	5.3	9	6.1	5	4.5	4.4	4.1	3.3	3.1	22	4.9	3.9	4.9	8.2	3.3	6.5	6.1	6.4	3	6.4	6.1	2.6	5.6	5.5	5.7	2.2
器種名	ナイフ形石器	火頭器	火頭器	尖頭器	尖頭器	尖頭器	尖頭器																									
号 遺 構 名	雄山6号墳	2トレンチ	雄山6号墳	30トレンチ	雄山6号墳	IVK	5トレンチ	雄山6号墳	雄山6号墳	雄山6号墳	25トレンチ	27トレンチ	27トレンチ	30トレンチ	23トレンチ	15トレンチ	32トレンチ	2トレンチ	25トレンチ	9トレンチ	3トレンチ	4トレンチ	雄山6号墳	30トレンチ	22トレンチ	雄山6号墳	雄山6号墳	雄山6号墳	雄山6号墳	27トレンチ	21トレンチ	30トレンチ
図版番号	132	132	132	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	134	134	134	134	134	134
報文番号	1031	1032	1033	1034	1035	1036	1037	1038	1039	1040	1041	1042	1043	1044	1045	1046	1047	1048	1049	1050	1051	1052	1053	1054	1055	1056	1057	1058	1059	1060	1061	1062

遺構	袖	器種名	野な戦	mo 闡	きな	重量の	材質	備
		尖頭器	3.1	1.6	9.0	2.74	サヌカイト	
		尖頭器	3.5	1.6	0.9	4.75	ハリ質安山岩	
		尖頭器	4.1	2.9	1	9.4	ハリ質安山岩	
雄山 4 号墳		スクレイパー	7.2	5.3	2.5	133.58	サヌカイト	
30トレンチ		スクレイパー	5.5	3.4	1.4	25.98	サヌカイト	
雄山 4 号墳		スクレイパー	5.7	6.9	1.7	70.96	サヌカイト	
28トレンチ		スクレイパー	3	5.5	1.8	23.09	サヌカイト	
15トレンチ		スクレイパー	3.7	5.7	1.2	26.29	サヌカイト	
3トレンチ		スクレイパー	5.8	3	1.3	19.22	サヌカイト	
雄山6号墳		角錐状石器	5.3	2.1	1.1	10.91	サヌカイト	
30トレンチ		楔形石器	3.3	2.1	-	9.13	サヌカイト	
雄山5号墳		翼状剥片	11.7	4.3	2.3	79.54	サヌカイト	
30トレンチ		翼状剥片	8	5.1	1.9	58.41	サヌカイト	
30トレンチ		翼状剥片	6.5	4.1	1:1	28.33	サヌカイト	
27トレンチ		翼状剥片	9	3	0.9	16.38	サヌカイト	
27トレンチ		翼状剥片	5.4	3	0.7	11.84	サヌカイト	
30トレンチ		翼状剥片	6.5	3.4	8.5	24.16	サヌカイト	
雄山6号墳		翼状剥片	5.9	3	0.9	17.89	サヌカイト	
トレンチ		翼状剥片	6.7	2.5	0.8	8.25	サヌカイト	
2トレンチ		翼状剥片	5.5	3.3	1.4	21.31	サヌカイト	
雄山6号墳		翼状剥片	5.3	3.1	1.1	12.61	サヌカイト	
28トレンチ		翼状剥片	4.1	1.8	9.0	3.11	サヌカイト	

雄山古墳群鉄•銅製品観察表 ^{雄山 4}号墳鉄製品観察表

報文番号	図版	遺構名	器種名	全	先環径	先環間長	残存率	第
1	16	玄室内B区IV層	馬具·銜	10.7	2.5	5.5	8/2	先環は平行方向
報文番号	図版	遺構名	器種名	残存全長	残存幅	を	残存率	編
2	16	玄室内C区IV層	馬具·鏡板	5.0	4.1	0.2	2/8	f字形鏡板の可能性が高いが、縁金・鋲はない
報文番号	図版	遺構名	器種名	(残存)全長	(残存)幅	セ	残存率	第 卷
3	16	玄室内C区I層	刀子	2.0	2.2	1.4	8/8	鉄製飾金具
4	16	玄室内C区Ⅳ層	刀子	4.7	刃幅	岩	8/2	刀子, 刃部
報文番号	図版	遺構名	器種名	(残存)全長	(残存)幅	(残存)鏃身長	類部幅×厚み	(集)
2	91	D区工層	鉄鏃	9.9	4.0	5.7	0.8×0.4	腸快三角形鏃,頸部断面方形
9	16	玄室内C区IV層	鉄鏃	3.6	2.8	3.6		鎌身先端部
7	16	玄室内C区IV層	鉄鏃	2.7	2.0	2.7		長頸鏃, 鎌身部か
8	16	玄室内	鉄鏃	1.6			茎部径 0.7	鉄鏃茎部か
報文番号	図版	遺構名	器種名	(残存)全長	(残存)幅	せ 直	残存率	亲 期
6	16	玄室内D区I層	不明鉄器	6.1	0.8	0.3	۵.	鉄鏃頸部か?
10	16	玄室内C区 II 層	不明鉄器	8.3	2.3	0.4	5/8 ?	混入の可能性高い
報文番号	図版	遺構名	器種名	残存全長	刃部最大幅	刃部厚み	着柄部径	無 老
47	19	B区中央サブトレンチ周溝ないし盛土流入土	平鑿	14.1	1.8	9.0	2.1×2.4	有拨式
報文番号	図版	遺構名	器種名	残存全長	刃部中央幅	を直の事	着柄角度	()
48	19	Y 区周溝	鉄鎌	13.7	3.0	0.4	105°	刃部先端欠損, 基部折り返し

雄山 5 号墳鉄製品観察表

報文番号	図版	遺構	佑	器種名	(残存)全長	(残存)幅	(残存)全長 (残存)幅 (残存)鎌身長 類部幅×厚み	類部幅×厚み	備
444	75	雄山5号墳石室内		鉄鏃	14.8	4	7	4.0×0.3	4.0×0.3 陽抉三角形鏃・台形関・茎に木質が遺存
445	75	雄山5号墳石室内		鉄鏃	11.8	3	6	1.0×0.4	1.0×0.4 陽抉三角形鏃・斜関・逆刺と茎の一部を欠損
446	75	雄山5号墳石室内		鉄鏃	13.7	3.1	2	0.7×0.3	0.7×0.3 三角形鉄・台形関・茎に木質が遺存
447	75	雄山5号墳石室内		鉄鏃	12.8	4.1	6.1	0.9×0.5	6.1 0.9×0.5 腸抉三角形鏃・逆刺の一部を欠損・台形関・茎に木質が遺存
448	75	雄山5号墳石室内		鉄鏃	9.1	3.8	8.1	1	1.0×0.3 陽抉三角形鏃・逆刺と頸部以下を欠損
449	75	雄山5号墳石室内		鉄鏃	13.1	2.8	8.2	0.4×0.2	8.2 0.4×0.2 三角形鏃·台形関
450	75	雄山5号墳石室内		鉄鏃	7	2.8	6.2	0.8×0.3	6.2 0.8×0.3 陽抉三角形鉄・逆刺と頸部以下を欠損

来	7揖	でを欠損・矢柄の痕跡あり						著				先端を欠損				^)樹皮か)・台形関		断面方形・茎に木質が遺存			(桜の樹皮か)・台形関か	形関		茎に木質が遺存		を欠損
#	腸抉三角形鏃・頸部と逆刺を欠損	腸抉三角形鏃・逆刺と頸部以下を欠損・矢柄の痕跡あ	方頭鏃・茎を欠損・台形関	長頸鏃·完存·台形関	長頸鏃·台形関	長頸鏃	長頸鏃身部破片	長頸鏃・茎の先端を欠損・台形関	長頸鏃・角関か・茎を欠損	長頸鏃・頸部以下を欠損	長頸鏃身部破片	長頸鏃・台形関または角関・茎先端を欠損	長頸鏃・茎を欠損・台形関	長頸鏃・茎を欠損	長頸鏃身部破片	長頸鏃・鏃身部を欠損・台形関	長頸鏃·完存·台形関	長頸鏃·台形関	長頸鏃・鏃身の破片	長頸鏃・鏃身部破片	長頸鏃の鏃身破片か	長頸鏃・茎に木質が遺存(桜の樹皮か)	長頸鏃·頸部~茎破片·台形関	頸部下半~茎の破片・台形関・断面方形・茎に木質が遺存	鉄頸部·台形関	茎破片・木質が遺存	長頸鏃・茎に木質が遺存(桜の	長頸鏃·頸部下半~茎破片·台形関	頸部下半~茎の破片・台形関か	鉄頸部下半~茎破片・台形関・茎に木質が遺存	茎破片	長頸鏃・角関か・鏃身と茎先端を欠損
類部幅×厚み	0.8×0.3	1.0×0.2	0.6×0.4	0.5×0.3	0.5×0.3	0.7×0.5	0.3×0.2	0.5×0.3	0.5×0.3	0.6×0.2	0.4×0.2	0.5×0.2	0.4×0.3	0.5×0.3	0.8×0.2	0.5×0.2	0.5×0.3	0.4×0.2	1.4×0.3			0.5×0.5	0.5×0.3	0.8×0.4	0.5×0.3	0.3×0.3	0.4×0.4	0.4×0.3	0.8×0.2	0.7×0.3	0.6×0.3	0.5×0.2
(残存)鏃身長	5.2	5.7	7.2	2.2	1.9	1.8	1.7		2.1	2.7	2.5	2.5	1.7	2.1	1.7		2.3	1.4	2.8	1.6	1.9	1.7	1	-				1				
(残存)幅	3.3	2.8	2.6	1	1.1	1.1	0.9	2.3	1.1	1.4	1.2	1.1	1	1.2	0.8	0.5	1.1	1.2	1.4	1.2	1.2	1	0.5	П	0.5	0.3	0.4	0.4	0.8	0.7	9.0	0.5
(残存)全長	5.9	6.1	7.6	16.5	12.8	4.5	3.1	14.4	11.4	4.6	4.7	12.8	11.9	5.9	1.7	9.4	11.1	9.6	2.8	1.6	1.9	11.8	9	6.4	2	4.6	11.3	4.7	5.6	4.4	2.6	10.5
器種名	鉄鏃	鉄鏃	鉄鏃	鉄鏃	鉄鏃	鉄鏃	鉄鏃	鉄鏃	鉄鏃	鉄鏃	鉄鏃	鉄鏃	鉄鏃	鉄鏃	鉄鏃	鉄鏃	鉄鏃	鉄鏃	鉄鏃	鉄鏃	鉄鏃	鉄鏃	鉄鏃	鉄鏃	鉄鏃	鉄鏃	鉄鏃	鉄鏃	鉄鏃	鉄鏃	鉄鏃	鉄鏃
佑																			17													
遗構	雄山5号墳石室内	雄山5号墳石室内	雄山5号墳石室内	雄山5号墳石室内	雄山5号墳石室内	雄山5号墳石室内	雄山5号墳石室内	雄山5号墳石室内	雄山5号墳石室内	雄山5号墳石室内	雄山5号墳石室内	雄山5号墳石室内	雄山5号墳石室内	雄山5号墳石室内	雄山5号墳石室内	雄山5号墳石室内	雄山5号墳石室内	雄山5号墳石室内	雄山5号墳石室内	雄山5号墳石室内	雄山5号墳石室内	雄山5号墳石室内	雄山5号墳石室内	雄山5号墳石室内	雄山5号墳石室内	雄山5号墳石室内	雄山5号墳石室内	雄山5号墳石室内	雄山5号墳石室内	雄山5号墳石室内	雄山5号墳石室内	雄山5号墳石室内
図版	75	75	75	92	92	92	92	92	92	92	92	92	92	92	92	92	92	26	92	92	92	77	77	77	77	77	77	77	77	77	77	22
報文番号	451	452	453	454	455	456	457	458	459	460	461	462	463	464	465	466	466	467	468	469	470	471	472	473	474	475	476	477	478	479	480	481

器種名	(残	(残存)全長	(残存)幅	(残存)鏃身	(残存)鏃身長 頸部幅メ厚み	を直×	備
鉄鏃		3.7	0.3	·	0.3	0.3×0.2	長頸鏃の茎か
鉄鏃		3.4	0.3		- 0.5	0.5×0.3	頸部下半から茎破片・台形関
鉄鏃		3.7	9.0	'	9.0	0.6×0.3	鉄・頸部破片か
鉄鏃		2.7	0.8		.8.0	0.8×0.3	鏃頸部破片
鉄鏃		8.4	0.5	'	- 0.5	5×0.2	長頸鏃・台形関・鏃身と茎先端を欠損
鉄鏃		2.9	0.5	'	- 0.5	5×0.3	長頸鏃の頸部小破片か
鉄鏃		1.3	0.7	1.	65	1	片刃鏃身破片か
鉄鏃		3.8	0.5	•	0.4	0.4×0.3	茎または頸部の一部・断面長方形・台形関
鉄鏃		4	0.8	•	.8.0 -	0.8×0.2	鉄頸部破片か
鉄鏃		2.5	9.0		- 0.6	0.6×0.2	鉄・類部の一部か
鉄鏃		9.9	0.8	•	- 0.8	0.8×0.3	長頸鏃・茎先端と鏃身部を欠損・台形関
鉄鏃		3.4	1.1	3.	4		片刃鏃身破片・刀子の先端か?
鉄鏃		3	1		3	1	片刃鏃身破片・刀子の先端か?
鉄鏃		3.8	0.5		- 0.5	5×0.2	鎌・頸部下半~茎の破片・台形関
鉄鏃		2.6	0.5		- 0.5	0.5×0.2	鉄頸部片か
鉄鏃		1.4	0.5		- 0.5	5×0.1	鏃・頸部破片か
器種名	(残1	(残存)全長	(残存)幅	を直	残存	₩ ₩	編
刀子		10.3	1.3	0.	0.3	8/9	片関・先端を欠損
刀子		3.4	1.2	0.	0.3	3/8	刀子身破片か
器種名		残存全長 刄	刃部中央幅	背の厚み	着柄角度	角度	備
鉄鎌		10.3	2.3	0.	0.3	1	着柄部を欠損・先端をわずかに欠損
鉄鎌		19.3	33	0.4		96.5°	直角柄·左鎌
器種名		(残存)全長	(残存)幅	を	残存	樹	編
鋤先		15	17.6		1	8/8	U字形鋤先
鋤先		12.8	18.4	1	1	8/8	U字形鋤先
鋤先		13.8	17.7	l		8/8	U字形鋤先
器種名		(残存)全長	(残存)幅	や	残存	 	備
ヤリガンナ		4.5	1.3	0.	2	3/8	長頸鏃の鏃身部か
ヤリガンナ		5.8	1.7	0.3	3	3/8	長頸鏃の鏃身部か
器種名	(残4	(残存)全長	(残存)幅	や	残存	₩ ₩	編
不明鉄器	_	0	-			0/ 4	発倒か, 復正係 7 mの田形

刃部を研ぎ直し?) 妣 ₩ (破損後、 長頸鏃の頸部の一部・断面長方形 長頸鏃の頸部と茎破片・台形関 長頸鏃の頸部・断面長方形 片関・木質が一部に遺存 **鏃頸部破片か・断面方形** 両関·鉄製飾金具が錆着 頸部あるいは茎破片 圭頭鏃・鏃身の一部 腸抉三角形鏃·角関 長頸鏃頸部·台形関 長頸鏃の鏃身部か 長頸鏃の鏃身破片 茎破片·断面方形 茎のみ・断面方形 靊 長頸鏃の頸部片 長頸鏃の頸部片 長頸鏃の頸部片 長頸鏃·台形関 鏃頸部·台形関 腸抉三角形鏃 長頸鏃の鏃身 圭頭鏃·角関 圭頭鏃·角関 ほぼ直角柄 台形関 圭頭鏃 茎破片 片関 0.6×0.4 8// 8/8 (残存)鎌身長|頸部幅×厚み 0.8×0.2 0.6×0.4 0.6×0.4 0.5×0.4 0.5×0.4 0.5×0.3 0.5×0.3 0.4×0.2 0.6×0.3 0.4×0.3 0.9×0.5 0.8×0.4 0.5×0.3 0.6×0.4 0.5×0.3 0.4×0.3 0.5×0.4 着柄角度 62存 强 2.5 3.8 3.8 6.62.2 6.7 8.1 0.3 2.1 0.3 0.3 0.3 6 4 背の厚み 画 0.5 刃部中央幅 (残存)幅 3.4 2.1 2.5 3.7 3.4 4.1 1.1 0.6 0.5 0.5 0.5 0.4 9.0 1.8 1.8 0.4 0.9 0.5 0.4 0.5 0.5 0.4 1.5 2.1 (残存)幅 (残存)全長 3.8 9.5 4.6 12.6 9.7 (残存)全長 3.8 12.3 8.1 1.62.9 1.3 3.2 12.3 残存全長 7 2.7 2.4 1.4 2.1 3.8 2.7 3.9 2.8 14 7 4 柘 柘 牰 庫 闡 鉄鏃 鉄鉄鉄 鉄鏃 鉄鏃 刀子 刀子 刀子 鉄鎌 왦 點 點 牰 和 和 雄山6号墳石室内 雄山 6 号墳石室内 雄山 6 号墳鉄製品観察表 102 102 102 102 102 102 102 102 102 102 102 103 103 図版 102 102 102 102 102 102 102 103 103 103 103 103 103 103 103 103 図版 図版 報文番号 報文番号 報文番号 852 853 854 855 856 857 858 829 860 863 865 998 898 872 861 862 864 298 698 870 871 873 874 877 878 875 928 879 880

兼	
華	茎の破片か
残存率	4/8
49	0.3
一位	
(残存)幅	1.6
(残存)全長	6.2
器種名	鉇
佑	
華	墳石室内
飘	雄山6号墳
図版	103
報文番号	881

			, , , ,		20	3			2.5		٦
葉山6号	墳銅製	山 6 号墳銅製品観察表									
報文番号	図版	魙	華	袖	器種名	直径	直	み 紐直径×厚み	み 残存率	二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二	
882	103	雄山6号墳石	1室内		鏡	5.6	0	0.3 0.8×0.3	3 完存	珠文鏡	

雄山7号墳鉄製品観察表

図版	禀	構	袖	器種名	(残存)全長	(残存)幅	(残存)鏃身長 類部幅X厚み	類部幅×厚み	年
120	玄室内遺物213	玄室床面		鉄鏃	7.0	3.2	7.0	7.0 0.6×0.3	陽快三角形鏃, 頸部断面方形
120	玄室内遺物23玄	玄室床面		鉄鏃	9.9	2.7	9.9	6.6 0.8×?	陽快三角形鏃, 頸部断面方形
120	玄室内遺物22玄	玄室床面		鉄鏃	4.3	2.6	3.1	0.9×0.4	陽快三角形鏃,頸部断面方形
120	女室内遺物24玄	玄室床面		鉄鏃	8.6	4.5	8.6		無茎鏃、矢柄の一部残存
120	玄室内遺物20玄	玄室床面		鉄鏃	3.9	0.9		0.9×0.5	頸部断面方形
120	玄室内遺物17玄	玄室床面		鉄鏃	0.9	1.0		1.3×0.8	頸部断面方形, 台形関
120	玄室内遺物17玄	玄室床面		鉄鏃	4.6	1.7		1.7×0.8	頸部断面方形, 台形関

N区鉄製品観察表

報文番号	図版	遺構名	器種名	(残存)全長	(残存)幅	直	4	残存率	備
1012	131	N区(予備調査19トレンチ北端) S D01	不明鉄器	6.3	2.4		0.2	8/2	鉄鐸あるいは石突
1013a	131	IV区(予備調査19トレンチ北端) S D 01	不明鉄器	5.3	2.6		0.2	8/9	鉄鐸あるいは石突・入れ子状態の外側
1013b	131	IV区(予備調査19トレンチ北端) S D 01	不明鉄器	2.7	2.3		0.2	8/8	鉄鐸あるいは石突・入れ子状態の内側

雄山古墳群出土玉類観察表 雄山4号墳玉類観察表

報文番号	図版番号	遺構名	器種	直径mm	長さ聞	孔径mm	重量	色調	穿孔	材質	備
11	17	玄室内C区IV層	碧玉製管玉	0.8	2.50	0.25	3.58	濃緑色	片側穿孔	署王	上下面に不定方向の研磨痕を有する
12	17	玄室内C区IV層	碧玉製管玉	0.8	2.50	0.25	2.79	濃緑色	片側穿孔	碧王	上下面に不定方向の研磨痕を有する
13	17	玄室内C区Ⅳ層	碧玉製管玉	0.8	2.00	$0.20 \sim 0.25$	2.63	濃緑色	片側穿孔	碧王	上下端面に研磨痕が入る
14	17	玄室内C区Ⅳ層	碧玉製管玉	0.7	1.90	0.25	1.48	淡灰色	片側穿孔	碧王	
15	17	玄室内D区IV層	碧玉製管玉	0.7	2.10	0.25	1.63	淡灰色	片側穿孔	碧王	
16	17	玄室内D区IV層	碧玉製管玉	0.7	1.80	0.25	1.27	淡灰色	片側穿孔	五量	
17	17	玄室内A区Ⅳ層	ガラス小玉	0.8	0.90	0.10	0.55	維色		ガラス	
18	17	玄室内A区IV層	ガラス小玉	0.9	0.70	0.25	0.73	紺色		ガラス	
19	17	玄室内C区Ⅳ層	ガラス小玉	0.9	09.0	0.10	0.56	維色		ガラス	
20	17	玄室内C区Ⅳ層	ガラス小玉	0.8	09.0	0.15	0.51	紺色		ガラス	
21	17	玄室内IV層	ガラス小玉	0.7	09.0	0.20	0.53	維色		ガラス	
22	17	玄室内C区IV層	ガラス小玉	0.7	0.50	0.15	0.32	紺色		ガラス	
23	17	玄室内IV層	ガラス小玉	0.7	09.0	0.15	0.36	維色		ガラス	
24	17	玄室内C区IV層	ガラス小玉	0.7	09.0	.0.15	0.36	紺色		ガラス	
22	17	玄室内C区IV層	ガラス小玉	0.9	0.70	0.15	0.75	濃紺色		ガラス	
56	17	玄室内C区IV層	ガラス小玉	0.9	0.70	0.20	0.58	濃紺色		ガラス	
27	17	玄室内IV層	ガラス小玉	0.8	0.65	0.15	0.65	濃紺色		ガラス	
28	17	玄室内C区IV層	ガラス小玉	0.9	0.70	0.15	0.77	淡青色		ガラス	上端面が突出し、巻きづくりの可能性がある
29	17	玄室内C区IV層	ガラス小玉	0.7	0.45	0.25	0.28	紺色		ガラス	
30	17	玄室内D区IV層	ガラス小玉	0.7	0.50	0.20	0.27	維色		ガラス	
31	17	玄室内C区IV層	ガラス小玉	0.7	0.65	0.20	0.36	濃紺色		ガラス	
32	17	玄室内IV層	ガラス小玉	0.5	0.30	0.10	0.06	紺色		ガラス	
33	17	玄室内C区IV層	ガラス小玉	0.5	0.35	0.10	0.09	紺色		ガラス	
34	17	玄室内C区IV層	ガラス小玉	0.4	0.30	0.10	0.07	紺色		ガラス	
35	17	玄室内C区IV層	ガラス小玉	0.4	0.30	0.10	0.02	紨色		ガラス	
36	17	玄室内C区IV層	ガラス小玉	0.4	0.30	0.10	0.08	淡青色		ガラス	
37	17	玄室内IV層	ガラス小玉	0.4	0.30	0.80	0.07	淡青色		ガラス	
38	17	玄室内Ⅳ層	ガラス小玉	0.5	0.40	0.10	0.14	明緑灰色		ガラス	
39	17	玄室内C区IV層	小玉	0.3	0.40	0.10	0.06	赤褐色		不明	
40	17	玄室内Ⅳ層	練玉	0.7	0.50	0.15	0.22	黒褐色		11	
1 1 1 1	十二十十十二	# 中年									

	WWW C C L	VE 10000												
報文番号	図版番号	製 駅	佑	器	種 [直径mm	振な聞	孔 4	松量	重量	色調	穿孔	材質	無
208	80	雄山5号墳石	室内床面	貸玉		12.5	30.5	E3.0,	下1.0	9.88	濃緑色	片面穿孔	碧玉	穿孔末端部の割れを削る
209	08	雄山5号墳石	室内床面	農王		11.0	30.5	£4.0,	下1.0	8.37	濃緑色	片面穿孔	碧玉	穿孔末端部の割れを削る
510	80	雄山5号墳石	室内床面	貸玉		12.0	29.2	£4.5,	下1.0	8.00	濃緑色	片面穿孔	碧王	

備	穿孔末端部の割れを削る	わずかに編模様が入る	薄い縞模様が入る		緑白色の縞模様が入る	淡緑色の縞模様が入る	薄い編模様が入る	薄い縞模様が入る		穿孔末端部がわずかに欠ける		鉄器の錆が付着	六角、穿孔末端部の割れを削る	六角, 穿孔末端部の割れを削る	六角,穿孔末端部の割れを削る,鉄器の錆が一部付着	六角, 穿孔末端部の割れを削る	穿孔末端を破損,丸玉状	丸玉状	丸玉状	丸玉状	断面隅丸方形,臼玉状		一部欠損		破損														
材質	碧王	碧王	碧王	碧王	岩田	岩田	碧王	碧王	碧王	碧王	結晶片岩	木晶	木晶	十品	木晶	木晶	木晶	ガラス																					
穿孔	片面穿孔	片面穿孔	片面穿孔	片面穿孔	片面穿孔	片面穿孔	片面穿孔	片面穿孔	两面穿孔	片面穿孔		片面穿孔	片面穿孔	片面穿孔	片面穿孔	片面穿孔	片面穿孔																						
色調	濃緑色	濃緑色	濃緑色	濃緑色	濃緑色	濃緑色	濃緑色	濃緑色	濃緑色	濃緑色	白緑色	透明	透明	透明	透明	透明	透明	紺色	紺色	紺色	紺色	紺色	淡緑色	淡緑色	青色	青色	紺色	淡緑色	紺色	青色	淡緑色	紺色	青色	青色	淡緑色	整色	紺色	雑色	青色
重量の	6.01	4.95	4.72	3.15	3.08	3.29	2.30	4.44	3.37	2.46	0.84	2.95	2.47	2.41	1.91	1.94	09.0	0.53	0.40	0.33	0.38	-0.08	0.06	0.08	0.07	0.08	0.07	0.07	0.05	0.04	0.07	0.06	90.0	0.02	0.04	0.06	0.05	0.04	0.06
孔径咖	上2.6, 下1.0	上3.2, 下1.0	上2.0, 下1.0	上5.0,下1.0	上3.6, 下1.3	上4.5, 下1.0	上3.0, 下1.5	上2.0, 下1.0	上2.5, 下2.5	上3.5, 下0.5		上2.5, 下1.0	上3.5,下1.5	上3.7, 下1.5	上4.5, 下1.0	上3.0,下3.0	上2.0, 下1.0	上1.0, 下1.0	上2.0, 下2.0	上1.4, 下1.2	上2.5, 下2.5	上1.5, 下1.5	上1.5,下1.8	上1.0, 下1.0	E1.0, F1.2	上1.0,下1.0	上1.5, 下1.0	上2.0, 下2.0	上1.0,下1.0	上1.0,下1.0	上1.0,下1.0	上1.5, 下1.5	上1.0,下1.0	上1.0,下1.0	上1.0,下1.0	上1.0, 下1.0	E1.0, F1.0	上1.0,下1.0	上1.0,下1.0
振な聞	26.5	26.0	25.0	24.5	24.0	24.0	23.5	23.5	22.0	21.5	18.0	15.0	14.0	14.0	14.0	12.0	6.3	6.5	4.5	4.5	0.9	3.0	2.5	3.0	3.0	3.1	2.5	4.0	2.2	2.0	3.3	2.0	2.5	2.5	2.2	2.5	2.0	2.0	2.9
直径mm	10.0	9.0	9.4	7.5	8.0	8.0	6.5	9.0	8.0	7.0	11.0	13.5	12.0	12.5	10.0	11.0	8.3	8.0	7.5	7.3	5.0	4.5	4.0	4.0	4.5	4.1	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	3.5	3.5	3.5
器種	美工	第	加出	(農王	美王	第三	第王	管 王	農王	4	勾王	切子玉	切子玉	切子玉	切子玉	切子王	小玉	小王	小玉	小王	小玉	小玉	小玉	小王	小玉	小王	小玉	小王	小玉	小玉	小玉								
遺構名	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面
図版番号	80	08	08	80	08	80	8	80	80	80	80	08	80	80	80	80	81	81	81	81	81	81	81	81	81	81	81	81	81	81	81	81	81	81	81	81	81	81	81
報文番号	511	512	513	514	515	516	517	518	519	520	521	522	523	524	525	526	527	528	529	530	531	532	533	534	535	536	537	538	539	540	541	542	543	544	545	546	547	548	549

備																				,																			
材質	ガラス	+1	+1	+1	+1	+1	+1	#1	+1	#	干	#	+1	+1	Ŧ	+1	+	+1	#	+1	+1	+1	Ŧ	Ŧ	4	#1	+1	#1	+1	+1	+1								
穿孔										焼成前																													
色調	淡緑色	雑色	青色	淡青色	淡緑色	淡緑色	淡緑色	淡緑色	淡青色	黒褐色																													
重量の	0.04	0.02	0.06	0.04	0.02	0.03	0.03	0.02	0.03	0.64	0.52	0.68	0.58	0.61	0.58	0.57	0.56	0.53	99 .0	0.63	09.0	0.53	0.48	0.61	0.53	0.47	0.55	0.54	0.57	0.52	0.57	0.55	0.56	0.51	0.52	0.65	0.62	0.48	0.51
孔 径 mm	上1.0,下1.0	上1.0,下1.0	上1.2, 下1.2	上1.0, 下1.0	上1.1,下1.1	上1.0,下1.0	上1.5, 下1.5	上1.0,下1.0	上1.0, 下1.0	上1.8, 下1.1	上1.0,下1.0	上1.5, 下1.5	上1.5,下1.5	上1.5,下1.5	£1.5, F1.0	上2.3, 下2.0	£1.8, F1.5	上2.3, 下2.2	上2.0, 下1.5	上1.8,下1.8	上1.2, 下1.2	上1.5,下1.8	上1.5, 下1.5	上1.5, 下1.0	上1.5, 下1.5	上1.0, 下1.5	上1.5, 下1.5	上2.0, 下2.0	上1.5, 下1.5	上1.1,下1.1	上1.5, 下1.0	上1.5, 下1.5	上1.8, 下1.2	上1.5,下1.5	E1.2, F2.0	上1.0,下1.0	L2.0, F2.0	上2.0, 下2.0	上1.5, 下1.2
置や単	3.0	2.9	2.5	3.0	3.0	2.0	1.5	3.0	3.5	8.0	8.0	9.0	8.5	8.0	8.0	7.9	8.2	8.7	8.5	8.5	7.0	8.0	6.5	8.0	7.5	7.2	7.5	7.0	7.5	7.0	8.0	8.0	8.5	8.0	7.5	8.0	8.0	8.0	7.5
直径mm	3.5	3.2	3.2	3.1	3.1	3.0	3.0	3.0	2.0	10.0	9.5	9.2	9.2	9.5	9.2	9.4	9.3	9.2	9.2	9.1	9.1	9.0	9.0	9.0	9.0	9.0	9.0	9.0	9.0	9.0	9.0	9.0	9.0	9.0	9.0	9.0	9.0	9.0	9.0
器種	小玉	小玉	小玉	平小	小玉	小玉	小玉	小玉	小玉	練王	練王	練王	練王	練玉	練王	糠玉	糠玉	練玉	練玉	糠玉	練王	練王	糠田	練王	糠田	練王	練王	練王	練王	練王	練玉	練玉	練玉	練王	練王	糠玉	練王	糠王	練王
演 構 名	雄山5号墳石室内床面																																						
図版番号		81	81	81	81	81	81	81	81	82	82	82	82	82	82	82	82	82	82	82	83	82	82	82	82	83	82	82	88	82	82	83	82	82	82	83	82	82	82
報文番号	550	551	552	553	554	555	556	557	558	559	260	561	295	563	564	292	266	292	268	269	570	571	572	573	574	575	226	222	228	629	580	581	582	583	584	585	286	282	588

₩																																							
備																			The state of the s																				
材質	+1	+1	+1	#1	+1	+1	+1	Ŧ	+1	+1	+1	+1	+1	41	+1	+1	+1	+1	+1	+1	+1	+1	+1	+1	+1	+1	+1	+1	+1	+1	+1	+1	+1	+1	+1	+1	+1	+1	+1
穿孔	焼成前	焼成前	焼成前	焼成前	焼成前	焼成前	焼成前	焼成前	焼成前	焼成前	焼成前	焼成前	焼成前	焼成前	焼成前	焼成前	焼成前	焼成前	焼成前	焼成前	焼成前																		
色調	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色																		
重量	0.43	0.61	0.51	0.51	0.39	0.52	0.45	0.47	0.43	0.48	0.52	0.57	0.52	0.57	0.47	0.46	0.50	0.41	0.51	0.49	0.52	0.55	0.51	0.48	0.53	0.49	0.49	0.47	0.41	0.33	0.42	0.53	0.38	0.54	0.44	0.42	0.50	0.48	0.33
孔径㎜	上1.2, 下1.3	上1.1,下1.5	上1.5, 下1.0	上2.0, 下2.0	上2.0, 下1.5	上2.3, 下2.2	上1.5, 下1.5	上1.5, 下1.5	上1.5,下1.0	上1.0, 下1.0	上1.5, 下1.2	上1.5, 下1.5	上1.5, 下1.5	上1.5,下1.5	上1.0, 下1.0	上2.0, 下1.5	上1.0,下1.0	上1.5, 下1.0	上1.0,下1.0	上1.5, 下1.5	上2.0, 下2.0	上2.0,下1.8	上1.5, 下1.5	上1.0, 下1.0	上2.0, 下1.5	上1.5, 下1.5	上2.3, 下1.8	上1.9, 下1.5	上1.5, 下1.5	上1.1,下1.0	上1.5, 下1.5	上2.0, 下1.5	上1.0,下1.5	上1.5, 下1.5	上1.5, 下1.5	E1.0, F1.0	E1.5, F1.5	上1.5, 下1.5	上1.5, 下1.0
振な聞	8.5	8.0	8.0	7.5	7.0	8.4	7.0	8.5	7.0	7.5	7.5	8.0	8.0	8.0	7.5	7.5	7.5	7.0	8.0	8.0	8.0	7.5	8.0	7.5	7.0	7.0	8.1	7.5	7.0	- 8.9	8.0	8.0	7.5	8.0	7.0	7.0	7.5	8.0	6.5
直径mm	9.0	9.0	9.0	9.0	9.0	8.6	8.5	8.5	8.5	8.5	8.5	8.5	8.5	8.5	8.5	8.5	8.5	8.5	8.5	8.5	8.5	8.5	8.5	8.5	8.5	8.5	8.4	8.3	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0
器種	秦田	練王	練王	練王	練玉	練王	練玉	練王	練王	糠玉	練玉	糠王	練玉	練王	練玉	練玉	練玉	練王	練王	練玉	練王	練田	練 玉	禁田	瀬田 田田	糠压	練王	練王	練玉	練王	禁田	練玉	練王						
遺構名	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面																		
図版番号	82	82	82	82	82	82	82	82	82	82	82	82	82	82	82	82	82	82	83	83	83	83	83	83	83	83	83	83	83	83	83	83	83	83	83	83	83	83	83
報文番号	289	290	591	262	593	594	262	296	262	298	299	009	601	602	603	604	605	909	209	809	609	610	611	612	613	614	615	616	617	618	619	620	621	622	623	624	625	979	627

備																																		c .					
材質	+1	41	+1	+1	+1	+1	Ŧ	#1	#	+1	#1	+1	#	Ŧ	#	#1	+1	#1	#1	Ŧ	#1	41	Ŧ	4	+1	+1	+1	1	#	Ŧ	#	#	+1	+1	Ŧ	+1	#	+1	+1
攀孔	焼成前																																						
色調	黒褐色	黒色	黒褐色																																				
重量	0.51	0.49	0.50	0.52	0.39	05.0	98 '0	0.46	0: 30	0:30	0.37	0.36	0.35	0.41	0.35	0.34	0.26	0.36	0.34	0.47	0.37	0, 33	0.36	0.41	0.42	0.33	0.28	0.30	0.31	0.35	0.36	0.33	0.40	0.31	0.30	0.40	0.30	0.34	0.34
孔 径 mm	上1.5,下1.5	上1.5,下1.5	上1.0,下3.0	上2.0,下1.5	上1.5, 下1.5	上1.0, 下1.0	上1.5,下1.0	£1.0, 下1.0	上1.2,下1.0	E1.8, F1.6	上1.7, 下1.7	£1.8, 下1.5	上1.0,下1.0	上1.5,下1.0	上1.0,下1.0	E1.0, F1.0	E1.0, F1.0	上1.7,下1.6	£2.0, 下1.5	上1.5,下1.0	上1.0,下1.0	上1.0, 下1.0	£1.0, 下1.0	上1.0,下1.0	上1.5, 下1.0	上2.0, 下1.5	上1.0,下1.0	E1.0, F2.0	上1.7, 下1.5	上1.5, 下1.0	上0.9, 下0.9	L2.1, F2.0	上1.5, 下1.0	上1.5,下1.5	上1.2, 下1.2	上1.2,下1.2	上1.4, 下1.2	上1.9,下1.8	上1.5,下1.4
振さmm	7.5	7.5	7.0	8.0	7.0	8.0	8.9	7.0	5.5	6.5	7.0	7.0	6.5	7.5	6.5	6.5	0.9	6.5	7.0	8.0	6.5	6.5	6.5	7.0	7.0	6.5	5.5	0.9	6.1	6.5	7.0	7.1	7.0	6.5	6.2	7.5	6.1	6.5	7.0
直径mm	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0	7.7	7.7	7.7	7.6	7.5	7.5	7.5	7.5	7.5	7.5	7.5	7.5	7.5	7.5	7.5	7.5	7.5	7.5	7.5	7.5	7.5	7.5	7.5	7.5	7.5	7.5	7.5	7.5	7.5	7.4	7.4
器種	練玉	練王	練王	練王	練玉	練王	練王	練王	練玉	練王	練王	練玉	練王	練王	練玉	練玉	練玉	練玉	練玉	練王	練玉	練玉	練玉	練王	練玉	練王	練玉	練玉	練玉	練王	練王								
遺構名	雄山5号墳石室内床面																																						
図版番号	83	83	83	83	83	83	83	83	83	83	83	83	83	83	83	83	83	83	83	83	83	83	83	83	83.	83	83	83	83	83	83	83	83	84	84	84	84	84	84
報文番号	628	629	630	631	632	633	634	635	989	637	638	639	640	641	642	643	644	645	949	647	849	649	650	651	652	653	654	655	656	657	658	629	099	661	299	663	664	665	999

無																																							
材質	Ŧ	#	+1	+1	#	+1	+1	41	#	#	#	1	#	7	Ŧ	#	+1	+1	+1	+1	+1	+1	+1	+1	+1	41	+1	Ŧ	41	Ŧ	+1	#1	+1	+1	+1	+1	Ŧ	#	+
穿孔	焼成前	焼成前	焼成前																																				
色調	黒褐色	暗褐色	黒褐色	黒褐色	黒色	黒褐色	黒褐色	黒褐色																															
重量の	0.30	0.34	0.28	0.29	0.30	0.30	0.33	0.36	0.30	0.28	0.36	0.33	0.33	0.27	0.23	0.34	0.25	0.31	0.29	0.27	0.30	0.35	0.29	0.26	0.29	0.29	0.31	0.31	0.32	0.26	0.27	0.30	0.35	0.29	0.37	0.36	0.22	0.36	0.27
孔 径 mm	上1.7, 下1.5	上1.8, 下1.7	上1.7,下1.4	上1.5, 下1.2	上1.8, 下1.5	上1.5, 下1.5	上1.4, 下1.2	上1.9, 下1.2	上1.6,下1.5	上1.5, 下2.0	上1.0,下1.0	上1.0,下1.0	上1.0,下1.0	上1.0,下1.0	上1.0,下1.0	上1.0,下1.0	上1.1,下1.0	上1.0, 下1.0	上1.0, 下1.0	上1.5, 下1.5	上1.0,下1.0	上2.0, 下1.0	上2.0, 下2.0	E1.0, F1.0	上1.0,下1.0	上1.0,下1.0	上1.0,下1.0	上1.5,下1.5	上1.0,下1.0	上1.9, 下1.7	上1.5, 下1.5	上1.0, 下1.0	上1.6,下1.5	上1.0,下1.0	上1.0,下1.0	上1.0,下1.0	上1.3, 下1.0	上1.2, 下1.0	上1.5,下1.5
長さ酬	0.9	7.1	6.5	6.5	6.4	0.9	7.0	7.1	6.4	6.5	7.0	8.0	7.0	5.5	5.5	6.5	0.9	6.5	2.0	0.9	0.9	8.0	7.5	0.9	6.5	0.9	6.5	6.5	0.9	6.2	6.5	0.9	6.9	6.5	6.5	8.0	6.5	6.5	6.5
直径mm	7.4	7.3	7.3	7.2	7.2	7.2	7.2	7.1	7.1	7.1	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0
器種	練玉	練玉	練出	練玉	練玉	練玉	練王	練玉	練王	練王	練玉	練玉	練王	練玉	練王	糠田	糠王	練玉	練王	練王	練王	練王	練玉	練王	兼田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田	練王	練王												
遺構名	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面																																				
図版番号	84	84	84	84	84	84	84	84	84	84	84	84	84	84	84	84	84	84	84	84	84	84	84	84	84	84	84	84	84	84	84	84	84	84	84	84	84	84	84
報文番号	299	899	699	029	671	672	673	674	675	929	229	829	629	089	681	682	683	684	685	989	289	889	689	069	691	269	693	694	695	969	269	869	669	200	701	702	703	704	705

備																																							
材質	+1	#	#1	Ŧ	#1	#	#	Ŧ	Ŧ	+1	+1	#	#	Ŧ	7	#	4	+1	+1	Ŧ	#	+	+1	+1	Ŧ	#	#	Ŧ	#	+	+1	+	+1	#	干	+	+1	#	+
穿孔	焼成前	焼成前	焼成前	焼成前	焼成前	焼成前	焼成前	焼成前	焼成前	焼成前																													
色調	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色																													
重量	0.26	0.25	0.27	0.30	0.34	0.33	0.32	0.30	0.30	0.31	0.36	0.33	0.34	0.33	0.26	0.34	0.33	0.29	0.33	0.29	0.28	0.25	0.27	0.29	0.34	0.31	0.34	0.36	0.32	0.33	0.32	0.30	0.33	0.29	0.31	0.27	0.27	0.28	0.29
孔径mm	上1.0,下1.5	上1.0,下1.5	E1.0, F1.0	上1.0,下1.0	上1.0,下1.0	上1.9, 下1.0	上1.5, 下1.0	上1.5,下1.5	上1.0,下1.0	E1.0, F1.0	上1.0,下1.0	上1.0,下1.5	上1.5,下1.5	上1.5,下1.0	上1.0,下1.0	上1.0,下1.5	上1.5, 下2.0	上1.4, 下1.4	E1.0, F1.0	上1.5, 下1.5	上1.5,下1.5	上1.8, 下1.5	上1.0, 下1.0	上1.5, 下1.4	上1.0,下1.0	上1.5,下1.0	上1.0,下1.0	上1.0,下1.0	上1.8, 下1.6	上1.5,下1.3	上1.0,下1.5	上1.7,下1.4	上2.0,下1.7						
馬さmm	6.5	0.9	5.5	0.9	7.0	7.5	0.9	6.5	0.9	6.5	7.0	6.0	7.0	6.5	0.9	6.5	7.0	0.9	6.5	0.9	6.5	5.0	6.5	6.4	6.5	6.5	7.0	6.5	6.5	9.9	7.0	0.9	6.5	0.9	7.0	6.1	6.5	8.9	7.3
直径mm	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	6.9	6.9	6.8	8.9	8.9
器種	練王	練王	禁田	練王	練玉	練玉	練 王	練玉	練玉	練玉	練玉	練王	練玉	練玉	練王	練玉	練王	練玉	練王	練玉	練王	練王	横王	禁 田	練王	練王	練王	練王	練王	練王	糠田								
遺構名	雄山5号墳石室内床面	雄山 5 号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山 5 号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面																												
図版番号	84	84	84	84	84	84	84	84	84	84	84	84	84	84	84	84	84	84	82	85	85	82	85	85	85	85	85	82	85	85	85	82	85	85	85	85	85	85	85
報文番号	902	707	208	402	710	711	712	713	714	715	716	717	718	719	720	721	722	723	724	725	726	727	728	729	730	731	732	733	734	735	736	737	738	739	740	741	742	743	744

備考																																			
材質	#1	+1	41	+1	41	41	+1	41	+1	+1	41	+1	H	+1	+1	+1	+1	+1	41	#	44	41	+1	#1	+1	41	#	+1	+1	+1	#	#1	+1	+1	#
容	焼成前	焼成前	焼成前	焼成前	焼成前	焼成前	焼成前	焼成前	焼成前	焼成前	焼成前	焼成前	焼成前	焼成前	焼成前	焼成前	焼成前	焼成前	焼成前																
色調	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	暗褐色	黒褐色																
重量	0.31	0.29	0.33	0.30	0.25	0.22	0.25	0.22	0.32	0.27	0.27	0.28	0.30	0.29	0.29	0.27	0.22	0.30	0.23	0.25	0.23	0.29	0.20	0.24	0.23	0.29	0.24	0.27	0.28	0.31	0.26	0.28	0.28	0.26	0.26
孔 径 mm	上1.5,下1.8	上1.5,下1.5	上1.0,下1.0	上1.5, 下1.5	上1.0,下1.0	上1.5, 下1.5	上1.0,下1.0	上1.0,下1.0	上1.5,下1.5	上2.0, 下1.0	上1.0,下1.0	上1.0,下1.0	上1.5, 下1.0	上1.0, 下1.0	上1.0, 下1.0	上1.5, 下1.0	上1.0, 下1.0	上1.0,下1.0	上1.0,下1.0	上1.5,下1.3	上2.0, 下1.6	上1.2,下1.2	上1.0,下1.0	上1.5,下1.5	上1.0,下1.0	上1.5, 下1.5	上1.5, 下1.2	上1.2, 下1.0	上1.0,下1.0	上1.5, 下1.0	上1.0,下1.0	上1.0,下1.0	上1.5, 下1.5	上1.0,下1.0	上1.0,下1.0
振な聞	7.5	6.5	7.5	7.0	0.9	5.5	0.9	0.9	6.5	6.5	0.9	6.5	6.5	0.9	0.9	0.9	5.5	0.9	5.5	0.9	6.5	0.9	5.5	5.5	5.5	6.5	8.9	0.9	0.9	6.5	0.9	6.1	6.5	0.9	5.5
直径mm	8.9	6.5	6.5	6.5	6.5	6.5	6.5	6.5	6.5	6.5	6.5	6.5	6.5	6.5	6.5	6.5	6.5	6.5	6.5	6.4	6.3	6.2	6.2	0.9	0.9	0.9	6.0	0.9	0.9	0.9	0.9	6.0	6.0	6.0	5.0
器種	練 王	練玉	練王	練王	練用	禁田	練王	横田	練王	練王	練玉	練王	練用	横田	練	輸出	4 田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田	練 田	練王	瀬 田	練王	練王	練王	練王	練	練王	練王								
遺構名	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	2	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面	雄山5号墳石室内床面																
図版番号	85	85	85	82	85	82	82	82	82	82	82	82	82	82	82	82	82	85	82	82	82	82	82	85	85	82	85	82	82	85	85	85	85	85	85
報文番号	745	746	747	748	749	750	751	752	753	754	755	756	757	758	759	092	761	762	763	764	292	992	191	892	692	770	771	772	773	774	2775	276	777	778	622

												2							, 丸玉状																		
氟				わずかに縞模様が入る	わずかに縞模様が入る		わずかに縞模様が入る	一端を一部欠損	一端を一部欠損	一端を一部欠損		穿孔末端部を一部欠損する	一端を一部欠損				途中で折損	丸玉状	細い白色の線が3本人る			丸玉状															
材質	緑色凝灰岩	緑色凝灰岩	緑色凝灰岩	碧王	碧玉	緑色凝灰岩	碧玉	碧玉	増玉	緑色凝灰岩	五量	碧王	緑色凝灰岩	碧王	碧王	碧玉	緑色凝灰岩	ガラス	ガラス	ガラス	ガラス	ガラス	ガラス	ガラス	ガラス	ガラス	ガラス	ガラス	ガラス	ガラス	ガラス	ガラス	ガラス	+1	#	+1	4
築	片面穿孔	片面穿孔	兩面穿孔	小室面	片面穿孔	片面穿孔	片面穿孔	片面穿孔	片面穿孔	阿面穿孔	片面穿孔	片面穿孔	両面穿孔	片面穿孔	片面穿孔	片面穿孔	片面穿孔																	焼成前	焼成前	焼成前	指金类
色調	緑白色	緑白色	緑白色	濃緑色	濃緑色	緑白色	濃緑色	濃緑色	濃緑色	緑白色	濃緑色	濃緑色	緑白色	濃緑色	灰緑色	淡緑色	緑白色	紺色	紺色	紺色	紺色	淡青色	淡青色	紺色	紺色	紺色	淡青色	淡青色	淡青色	維色	紺色	紺色	維色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	里規佈
重量の	2.12	1.86	2.06	2.66	2.89	1.23	1.93	1.59	2.01	1.21	1.74	1.07	0.51	1.77	0.34	0.16	0.40	0.96	0.56	0.45	0.16	0.24	0.11	0.11	0.08	0.09	0.10	0.09	0.08	0.02	0.04	0.03	0.03	0.47	0.43	0.41	0 45
公公司	上2.0, 下1.0	上3.5,下1.5	上2.5, 下2.5	上2.5,下0.8	上3.0,下1.0	上2.0,下1.5	上2.0, 下1.0	上2.5, 下1.0	上2.0, 下1.0	上3.0,下3.0	上2.0,下1.2	上2.5, 下1.0	£2.0, ¥2.0	上2.5, 下1.0	上1.5,下1.0	上2.0,下1.5	上1.5, 下1.0	上2.5, 下2.5	上1.5, 下1.5	E2.0, F2.0	上2.2, 下2.0	上1.5, 下1.5	上1.5,下1.5	上1.5, 下1.0	上1.5, 下1.5	上1.5, 下1.3	£1.6, F1.5	上1.5,下1.5	上1.2,下1.0	上1.5,下1.5	上0.9, 下0.8	上1.0,下1.0	上1.0,下1.0	上2.0,下1.5	上1.0,下1.0	上1.1, 下1.3	1 V
長さmm 孔	24.0 E	23.0 E	23.0 E	22.5 E	22.0 E	20.5 E	20.0	20.0	19.0 E	19.0 E	18.5 E	17.0 E	16.5 E	16.5 E	9.5 F	8.0 上	6.5 E	7 0.3	2.0 上	5.0 上	3.9 E	王 0.3	2.5 上	3.5 上	3.0 F	4.0 E	4.1 E	3.0 E	3.5 E	2.5 上	3.5 E	2.0 E	3.0 E	7.5 E	7.0 E	7.0 E	7 7
直径mm	7.5	7.0	8.5	7.0	7.5	8.0	7.0	6.5	7.0	7.0	6.0	5.0	4.5	7.0	4.0	3.0	6.5	10.0	8.0	7.5	6.9	6.0	5.5	5.0	5.0	4.5	4.5	4.5	4.0	4.0	3.7	3.5	3.0	9.0	8.5	8.5	α r
器種	神田田	貸玉	管玉	管玉	貸 王	貸王	(農王	4	果 里	4	管玉	(管 王	貸 王	管玉	- 農王	電玉	小王	小王	小玉	小玉	小玉	小玉	小玉	小玉	小王	小玉	小玉	小玉	小玉	小玉	小王	小玉	練王	練王	練王	神
遺構名	雄山6号墳石室内床面	雄山 6 号墳石室内床面	雄山 6 号墳石室内床面	雄山 6 号墳墳丘盛土	雄山 6 号墳石室内床面	雄山6号墳墳丘盛土	雄山 6 号墳石室内床面	雄山 6 号墳石室内床面	雄山 6 号墳石室内床面	雄山6号墳墳丘盛土	雄山6号墳墳丘盛土	雄山 6 号墳石室内床面	雄山6号墳石室内床面	雄山6号墳墳丘盛土	雄山6号墳墳丘盛土	雄山6号墳墳丘盛土	雄山6号墳墳丘盛土	雄山 6 号墳石室内床面	雄山 6 号墳石室内床面	雄山6号墳墳丘盛土	雄山6号墳墳丘盛土	雄山 6 号墳石室内床面	雄山6号墳墳丘盛土	雄山 6 号墳石室内床面	雄山 6 号墳石室内床面	雄山 6 号墳石室内床面	雄山6号墳石室内床面	雄山 6 号墳石室内床面	雄山6号墳石室内床面	雄山6号墳石室内床面	雄山6号墳石室内床面	雄山6号墳石室内床面	雄山 6 号墳石室内床面	雄山6号墳石室内床面	雄山6号墳石室内床面	雄山6号墳石室内床面	推川 6 号增万零内床面
図版番号	104	104	104	104	104	.104	104	104	104	104	104	104	104	104	104	104	104	104	104	104	104	104	104	104	104	104	-	-	104	104	104	104					104
報文番号	883	884	885	988	887	888	889	890	891	892	893	894	895	968	897	868	668	006	901	305	903	904	902	906	907	806	606	910	911	912	913	914	915	916	917	918	919

Г	—-т	_	Т				_
	備			一部を欠損			
	材質	#1	#	#	#	+1	41
	穿孔	焼成前	焼成前	焼成前	焼成前	焼成前	焼成前
	色調	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色
	重重 9	0.41	0.40	0.40	0.38	0.29	0.46
	孔 径 mm	上1.5,下1.3	上1.0,下1.0	上1.0,下1.0	上2.0, 下1.2	上2.0, 下1.7	上1.0,下1.0
	馬な聞	7.8	7.5	7.0	7.0	6.7	7.5
	直径mm	8.2	8.0	8.0	8.0	8.0	7.5
	器種	練王	練王	練玉	練王	練王	練玉
	遺構名	雄山6号墳石室内床面	雄山 6 号墳石室内床面	雄山6号墳墳丘盛土	雄山 6 号墳石室内床面	雄山 6 号墳石室内床面	雄山 6 号墳石室内床面
	図版番号	104	104	104	104	104	104
	報文番号	921	922	923	924	925	926

雄山古墳群埴輪観察表

雄山 4 号墳円筒埴輪観察表

屋屋	- 44124	筆様々・氏+ひ節	が(題・度)後	一 売・中・建)	白鷺(内・外)	字 蒂 分 籍	外面鋼整	参 蓋 屋 区	世数	幾存率	分類及び備考
+			п	中:石英・長石普、赤 色粒ごく少	J灰(5Y R4/1) Y R5/4) 橙 (7 Y (2.5Y R6/2)		タテハケ (9~10条/cm)	突帯貼付時指 1のハケ			口縁い類,突帯上部に左上がりの圧 痕,円形透かし 50・51と同一関体
20	£2 ∠ ₹+1	A区周溝内A A区周溝内遺物 A区周溝状遺構中 共駐より東 4号項1Tr 2TrM層 (K黄色粘質 土)	П: 27.4	中:石英・長石書,赤 色粒ごく少	外面:褐灰(5YR4/1),にぶい赤 褐色(2.5YR5/4)橙(7.5YR7/6) 内面:橙(2.5YR6/6),暗灰黄 (2.5Y5/2)	I類	タテハケ (9∼10条/cm)	タテ (層部) ~左上がりナデ (口縁),口縁端 ヨコ方向のハケ・ヨコ方向ナデ	*	開部3/8	口縁い類,焼きムラあり,円形透か し
51	23 A配表	A 区周溝内A A 区周溝内D A 区周溝内E A 区 周溝状遺構中央畦より東 A 区周溝 F 層 A 区中 央畦中 おトレンチ弥生包含層上層	涮: 25.4	中:石英・長石普、赤色粒ごく少	外面:褐灰(5Y R4/1),にぶい赤 褐色(2.5Y R5/4)橙(7.5Y R7/6) 内面:橙(2.5Y R6/6), 暗灰黄 (2.5Y5/2)	I	タテハケ (9∼10条/cm)	タ チハケ	₽¥	層部3/8	口縁い類、円形透かし
52	24 4	4 Tr填丘断割	П:23.0	中~細:石英·長石普, 赤色粒少	外面: にぶい黄橙(10Y R6/4) 内面: にぶい黄橙(10Y R7/4)		タテハケ (8~9条/cm)	左上がりナデ, 口鎌上部左上がりハケ, 口縁 ヨコ方向ナデ, 口縁上部ヨコ方向ハケ	₩ 1	口縁部小破片	口縁い類
53	24 A	A区周溝状遺構中央駐より東	不明	中~細:石英·長石普 ~少	層圖		タテハケ (9条/㎝)	た上がりナデ, ヨコ方向ハケ (一部), ヨコ方 向ナデ	1	口縁部小破片	口縁い類、端部に圧痕あり
54	24 A	A区周溝状遺構中央畦より東	□:30.6	中~細:石英・長石書、 赤色粒ごく少	外面:にぶい黄橙(10Y R7/4) 内面:にぶい黄橙(10Y R6/4)		タテハケ (9条/㎝)	左上がりナデ, 口縁ヨコ方向ナデ(3回)、口縁 ヨコ方向ハケ	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	口縁部小戦片	口縁い類
22	24 B	B区南東端 (黒褐色砂質土)	不明	中:石英·長石少	外面:にぶい黄橙(10Y R6/4) 内面:にぶい黄橙(10Y R7/4)		タテハケ (8条/cm)	ヨコ~ナナメハケ (8条/cm), 口縁部のみヨコ 方向のナデ	- EX	口縁部小破片	口縁い類
26	24 B	B区周溝状遺構	不明	中:石英·長石普	外面:にぶい橙(7.5Y R7/4) 内面:にぶい黄橙(10Y R7/4)		タテハケ (6条/四)	ヨコ方向のナデ (ナデ前の指押さえ)	氧	口縁部小破片	口縁い類、ベンガラ塗布
57	24 B	B区開溝状遺構	□:24.2	中:石英·長石普~多	外面:にぶい黄橙(10Y R6/4) 内面:にぶい黄橙(10Y R6/4)		タテハケ (7条/cm), 口縁部の み弱いヨコ方向のナデ	左上がりナデ (強い),口縁部のみヨコ方向の ナデ(2回)	やや軟	口縁部小破片	口縁ろ類
82	24 25	25トレンチ(南端)落ち込み10層(灰色シルト層)	П:26.6	中:石英·長石普,赤 色粒少,黑色石粒少	外面:にぶい黄橙(10Y R6/3) 内面:にぶい黄橙(10Y R6/3)		タテハケ(10条/cm),口縁部 弱いヨコ方向のナデ	左上がりナデ, 口縁ヨコ方向ナデ(2回), 突帯 貼付時の指押さえ, ナデ前の指押さえ	歐	口縁部小破片	口縁は1類
29	24 A	A区1丁r IF (灰白色粘質土) A区1丁rV· TIF (暗褐色砂質土)	不明	*	外面:にぶい黄橙(10Y R6/4) 内面:にぶい黄橙(10Y R6/3)		タテハケ (9条/cm), 口縁部の みヨコ方向のナデ	左上がりナデ, 口縁部のみヨコ方向ナデ, ナ デ前の指押さえ	歐	口縁部小破片	口縁は1類, 口縁端部に圧痕, ヘラ 記号
09	24 A	A 区 II 陽 + II 陽	П:23.6	*	外面:にぶい黄橙(10Y R6/4) 内面:にぶい黄橙(10Y R6/3)		タテハケ (9条/cm), 口縁部弱 いヨコ方向のナデ	ナデ, 口縁部ヨコ方向の軽いナデ(2回)	製	口縁部小破片	口縁は1類,口縁端部に圧痕
19	24 25	25トレンチ 2 層談灰黄色土層	П: 22.0	中:石英・長石少,赤 色粒ごく少,黒色石粒 少	外面:にぶい黄橙(10Y R6/3) 内面:にぶい黄橙(10Y R6/3)		タテハケ(9条/cm), 口縁部ヨ コ方向のナデ	ヨコ方向のナデ、指押さえ、ナデ前の指押さえ	歐	口縁部小破片	口縁は1類,口縁端部に圧痕
29	24 25	25トレンチ茶褐色色細砂質土 (マンガン含む)	П: 22.0	中:石英·長石普,赤 色粒少,雲母?少	外面:にぶい黄橙(10Y R6/4) 内面:にぶい黄橙(10Y R6/3)		タテハケ (8条/cm), 口縁部のみヨコ方向のナデ	ナデ前の指押さえ、ナデ、口縁部のみョコ方 向のナデ	康	口縁部小破片	口縁は1類
63	24 A	A 区 IV 層 (黒褐色砂質土)	П:24.0	*	外面:にぶい黄橙(10Y R6/4) 内面:にぶい黄橙(10Y R6/3)		タテハケ (10条/cm), 口縁部 のみヨコ方向のナデ	ヨコ方向のナデ,ナデ前の指押さえ	展	口縁部小破片	口縁は1類
64	24 A	A区周溝内C	П:23.8	中: 石英・長石書, 赤 色粒ごく少	外面:明赤楊(5Y R5/6) 内面:にぶい黄橙(10Y R6/4)		タテハケ(11~12条/cm, 左 →右),口縁端部のみヨコ方向 のナデ	左上がりナデ, 口縁端部のみヨコ方向ナデ	₩	口縁部小破片	口縁は2類、突帯ヨコナデ上部に左 上がりの圧痕
65	25 A	A 区 A·咖間層 (暗褐色砂質主)	П:19.8	中:石英·長石普	外面:明赤褐(5Y R5/6) 内面:にぶい支機(10Y R6/4)		タテハケ (9条/cm), 口縁部のみヨコ方向のナデ	左上がりナデ、口縁部のみヨコ方向ナデ	₩.	口鞣部小嵌片	口縁は2類
99	25 25	25トレンチ族生包含層下層	不明	中:石英·長石普	外面:明赤褐(5Y R5/6) 内面:にぶい黄橙(10Y R6/4)		タテハケ (6条/cm), 口縁部ヨ コ方向のナデ	左上がりナデ、口縁都ヨコ方向のナデ	やや軟	口縁部小破片	口縁は2類
29	25 4	4 TrV層(黒灰色粘質土)	□:14.2	中:石英·長石書,赤 色粒少	外面:灰(5 Y 4/1) 内面:灰(7.5 Y R 5/1)		タテハケ(10条/cm),口縁部 のみヨコ方向のナデ	左上がりナデ, 口縁部のみヨコ方向のナデ, 指押さえ	<u>₽</u>	口縁部小破片	口縁は3類,口縁端部に圧痕,口縁 部 内面に工具痕?
89	25 CI	C 区落ち込み01(A 区) Ⅲ層除去後	□:30.6	奉			タテハケ (8条/㎝)	ナデ前の指押さえ,左上がりナデ,口縁ヨコ 方向ナデ,口縁左上がりハケ	***	口縁部小破片	口縁に1類
69	25 1	1 Tr 畦周溝内	[]: 26.0		外面:橙(5 Y R 7/8) 内面:橙(5 Y R 7/8)		タテハケ (8条/㎝)	左上がりナデ, 口縁端ヨコ方向のナデ(2回), ナデ前指押さえ	良	口縁部小破片	口縁に1類
20	25 AI	A区周澹内E A区周滯状遺構中央畦より東	П: 26.0	粗~中:石英·長石多, 赤色粒少	外面:橙(5 Y R 7/8) 内面:橙(5 Y R 6/6)		タテハケ (11条/cm)	・デ(2回),口縁	1 準令令	口縁部小破片	口縁に1類
7.1	25 AI	A区周溝内B	П: 25.4		外面:橙(5 Y R 6/6) 内面:橙(5 Y R 7/8)		タテハケ (10条/cm)	ヨコ方向ナデ(2回),指押さえ, ヨコ方向のハ ケ?	1 準みみ	口縁部小破片	口縁に1類
7.2	25 1	1 Tr畦周溝内 1 TrW層	□:28.6	中:石英·長石普, 赤 色粒少	外面:橙(5YR7/8) 内面:橙(5YR7/8)		タテハケ(10条/cm), 口縁ヨ コ方向のナデ	左上がりナデ	良	口縁部1/8	口縁に2類、突帯ヨコナデ上部に左 上がりの圧痕
73	25 A I	A区周漆内D	□:28.6		外面:橙(7.5YR6/6) 内面:橙(5YR7/6)		タテハケ (9条/㎝)	左上がりナデ、口縁部のみヨコ方向のナデ	1 海中中	口縁部1.8	口縁に2類
74	25 1	1 Tr 畦周溝内	П:28.0	中:石英·長石書,赤 色粒少	外面:橙(5YR7/8) 内面:橙(5YR7/8)		タテハケ (8条/ca), 口縁部の みヨコ方向のナデ	左上がりナデ, ナデ前の指押さえ	1 海ゆゆ	口縁部小破片	口縁に2類
75	25 CI	C 区落ち込み01下層	不明	中:石英·長石書	外面:橙(5YR6/6) 内面:橙(5YR6/6)		タテハケ (8条/㎝)	左上がりナデ, 口縁のみヨコ方向のナデ	良	口縁部小截片	口様に2類
92	25 AI	A区周溝状遺構中央畦より東	П:30.0		外面:橙(5YR6/6) 内面:橙(5YR7/8)		タテハケ (9条/cm)	左上がりナデ, 口縁のみヨコ方向のナデ(2 固)	やや軟	口縁部小破片	口縁に2類
77	25 AI	A区周諱内A	П:21.0	崇	外面:橙(5 Y R 7/8) 内面:橙(5 Y R 7/8)		タテハケ (?条/cm)		やや軟	口縁部小截片	口様に 2 類
82	25 A [A区間谍内臣	[I]: 26.0	中:石英·長石普, 赤 色粒少	外面:橙(5YR6/6) 内面:橙(5YR6/6)		タテハケ (7条/cm), 口様ヨコ 方向のナデ	\hat{L} 上がりナデ, 口縁ヨコ方向のナデ(2~3回)	良	口縁都小破片	口縁に2類

AEA DE L 英王 1 22.0 中に 5 2 2 4 5 4 5 4 5 4 5 4 5 4 5 4 5 4 5 4	図版	遺構名・出土位置	口縁 (퉭·底) 径	路士(種・中・種)	色質(内・外)	突带分類	外面調整	内面 建树	条页	残存率	分類及び備考
25 AEGMRAPA D1:22.0 自収分率投行器 素 25 SFレンテ権経版区派機色士婦 D1:22.0 自収分率投行器 素 25 BEG本海路区派機色士婦 D1:22.0 自収分率投行器 素 25 BEG本海路区派機色士婦 D1:22.0 自投分率投行器 素 26 BEG本海路区域、機色土婦 D1:22.0 自投分率投行器 素 27 AEGMRAPA D1:22.0 自投分率投行器 素 28 AEGMRAPA D1:22.0 自投分率投行器 素 29 AEGMRAPA D1:22.0 自投分率投行器 素 20 AEGMRAPA D1:22.0 自投分率投行器 素 21 BEAMRAPA D1:22.0 自投分率投行器 素 22 AEGMRAPA D1:22.0 自投分率投行器 素 23 AEGMRAPA D1:22.0 自投分率投行器 素 24 AEGMRAPA D1:22.0 自投分率投行器 素 25 AEGMRAPA D1:22.0 自投分率投行器 素 26 AEGMRAPA D1:22.0 自投分率投行器 素 27		[丘上表土層及びカク乱層	□:30.8	中:石英·長石書	外面:橙(5 Y R 6/6) 内面:橙(5 Y R 6/6)		タテハケ (6条/cm), 口縁部ヨ コ方向のナデ	左上がりナデ, 口縁ヨコ方向のナデ(3回)	やや軟	口縁部小破片	口縁に2類
25 3 De	-	区周濮内A	П: 22.0	中:石英·長石普, 赤 色粒少			タテハケ (9条? / cm), 口縁ヨ コ方向のナデ	左上がり~ヨコナデ, 口縁ヨコ方向のナデ(2 回)	本や軟	口縁部小截片	口縁に2類
55 A EX G Man M F Man H L D F M M L D M D D D D D D D D D D D D D D D	-	1トレンチ南拡張区黒褐色土層	□:22.0	中:石英·長石普, 赤 色粒少	外面:橙(5 Y R 6/6) 内面:橙(5 Y R 6/6)		タテハケ (7条?/cm), 口縁部 のみヨコ方向のナデ	左上がりナデ, 口縁ヨコ方向のナデ(2回)	やや軟	口縁部小破片	口縁に2類
25 BEは地帯市も込み、現地形の南も込み 口:2.0 自転点券 投格的 高も込み 日には海豚も込み、現地形の南も込み 日:2.0 自転点券 投格 日本 本 25 AE ME は は は は は は は は は は は は は は は は は は		区西端南西端トレンチ周溝上の落ち込み	不明	中:石英·長石普, 赤 色粒少	外面:橙(5YR7/8) 内面:橙(5YR7/6)		タテハケ (7条/cm)	左上がりナデ,口縁のみヨコ方向のナデ(2回), ナデ前の指押さえ	やや軟	口縁部小破片	口縁に3類
55 BG中央断額 口: 8.0 自分方 × 及石幣 赤 55 AGM 源内連動 口: 21.6 自分方 × 及石幣 赤 55 AGD 原列連幹下層 口: 21.6 自分方 × 及石幣 赤 55 AGD 原列連件下層 口: 27.6 自分方 × 及石幣 赤 55 AGD 原列連件下層 口: 27.6 自分方 × 及石幣 赤 55 AGD 原列連件下層 口: 22.4 中・万米 及石幣 赤 55 AGD 原列	-	区北端落ち込み・現地形の落ち込み		中:石英·長石書, 赤 色粒ごく少	外面:橙(5YR6/6) 内面:橙(5YR7/8)		タテハケ (6条/四)	左上がりナデ, 口縁ヨコ方向のナデ(1回)	戟	口縁部小破片	口縁に3類
55 ARM端降連載 D1.21.6 自身投資 株 石書 本 50 CR 5 5 5 5 4 0 1 7 個 D1.20.0 自身投資 株 石書 本 50 ARD DE DIR BREFF D1.20.0 自身投資 株 石書 本 50 ARD DE DIR BREFF Trul 自身投資 株 石書 本 50 ARD HARD REPRESENTED BREFF D1.20.0 自身投資 株 石書 本 50 ARD HARD REPRESENTED BREFF D1.20.0 自身投資 株 石書 本 50 ARD HARD REPRESENTED BREFF D1.20.0 自身投資 株 石書 本 50 ARD HARD REPRESENTED BREFF D1.20.0 自身投資 株 石書 本 50 ARD HARD REPRESENTED BREFF D1.20.0 自身投資 株 石書 本 50 ARD HARD REPRESENTED BREFF D1.20.0 自身投資 株 石書 本 50 ARD HARD REPRESENTED BREFF D1.20.0 自身投資 株 石書 本 50 ARD HARD REPRESENTED BREFF D1.20.0 自身投資 株 石書 本 50 ARD HARD REPRESENTED BREFF D1.20.0 自身投資 株 石書 本 50 ARD HARD REPRESENTED BREFF D1.00.0 自身投資 株 石書 本 50 ARD HARD REPRESENTED BREFF D1.00.0 自身投資 株 石書 本 50 ARD HARD REPRESENTED BREFF D1.00.0 自身投資 株 石書 本 50 ARD HARD REPRESENTED BREFF D1.00.0 自身投資 株 石書 本 50 ARD HARD REPRESENTED BREFF	-	区中央断割	П:18.0	中:石英·長石書,赤 色粒少	外面:橙(7.5YR7/6) 内面:橙(7.5YR6/6)		タテハケ (10条/㎝)	左上がりナデ, 口縁ヨコ方向のナデ(2回),ナ デ前の指押さえ	可	口縁部小破片	口縁に3類
25 CK高さ込み01下層 D: 20.0 由性の参表の7番 26 AKD DK MBLBFF FF D: 20.6 由性の参表日本 26 AKD DK MBLBFF FF 不明 由いる英長石幣・赤 26 AKD KAMBLBFF FF 不明 由いる英長石幣・赤 26 AKD WARA WARA WARA TA LY LY YAME LA LA WARA WARA WARA WARA WARA WARA WAR		区間溝内遺物	П:21.6	中:石英·長石書,赤 色粒少	外面:橙(7.5YR7/6) 内面:橙(7.5YR7/6)		タテハケ (6条/㎝)	左上がりナデ, 口縁ヨコ方向のナデ(1回)	斑	口縁部小破片	口縁に3類
25 AEDEGMBBFF層 口:27:6 申1の多 長石香、赤 26 AEDEGMBBFF層 不明 申1の多 長石香、赤 26 AEDEGMBBFF層 不明 申1の多 長石香、赤 26 AEGPABETATE DATA 口:22.4 申1の多 長石香、赤 26 AEGPABETATE AND THE DATA 口:23.0 申1の多 長石香 26 7.4号期間算状帯を 口:23.0 申1の多 長石香 26 7.4号期間算状帯を 口:23.0 申1の多 長石香 27 AEGMB株は電梯中央建上り車 口:23.0 申1の多 長石香 28 AEGSACO (機構土地) 中1の3 日本 中1の多 長石香 29 AEGMB株は電梯中央建上り車 底:21.0 申1の多 長石香 20 AEGMB株は電梯中央建上り車 底:21.0 申2の多 長石香 20 Shレン子参生包含層上層 底:21.0 申2の多 長石石香 21 Shレン子の単位を 底:21.0 申2の多 長石石香 22 AECMETATE 面積でをとのを 底:21.0 申2の多 長石香 22 AECMETATE 面積でを 底:21.0 申2のををとのを 22 AECMETATE の 底:21.0 申2のをを 22 AECMETATE の 底:21.0 申2のをを 22 AECMETATE の 底:22.0 申2のを 22 AECMETATE の 底:22.0 申2のを 22 AECMETATE の 底:22.0 申2のを <th></th> <th>区落ち込み01下層</th> <th>П:30.0</th> <th>中:石英·長石普,赤 色粒少</th> <th>外面:橙(5YR7/6) 内面:橙(5YR7/8)</th> <th>Ι₩Į</th> <th>タテハケ (9条/cm), 口縁部弱 いヨコ方向のナデ</th> <th>左上がりナデ, 口縁ヨコ方向のナデ(1回),突 帯貼付時の指押さえ</th> <th>ūΥ</th> <th>口樣部1/8</th> <th>口縁に4類,突帯ヨコナデ上部に左 上がりの圧痕,口縁部高9.2cm</th>		区落ち込み01下層	П:30.0	中:石英·長石普,赤 色粒少	外面:橙(5YR7/6) 内面:橙(5YR7/8)	Ι₩Į	タテハケ (9条/cm), 口縁部弱 いヨコ方向のナデ	左上がりナデ, 口縁ヨコ方向のナデ(1回),突 帯貼付時の指押さえ	ūΥ	口樣部1/8	口縁に4類,突帯ヨコナデ上部に左 上がりの圧痕,口縁部高9.2cm
25 ARDRIMBMFF層 不明 申: 万季 長石書、赤 26 ARDRIMBMFF層 11:24.0 申: 万季 長石書、赤 26 ARUMWAMAMBMPLALEDM 11:24.0 申: 万季 長石書、赤 27 ARUMWAMBMPLAM	-	区D区間畦畔下層	П: 27.6	中:石英·長石普,赤 色粒少	外面:橙(5YR7/8) 内面:橙(5YR7/8)		タテハケ(11条/cm),口縁部 かすかなヨコ方向のナデ	左上がりナデ, 口縁部ヨコ方向のナデ, 突帯 貼付時の指押さえ	やや軟	口椽部小嵌片	口縁に4類,突帯
25 C 区域丘面 X 層 口:22.4 中: 万夫・長石書 赤 26 A 区間席状連絡中央性より東 口:24.0 中: 万夫・長石書 赤 26 A 区間席状連絡中央性より東 口:24.0 中: 万夫・長石書 赤 26 A 区間席状連絡中央性より東 口:22.0 中: 万夫・長石書 赤 26 A 区間線状連絡中央性より東 口:20.0 申: 万孝・長石書 赤 26 A 区間線状連絡中央性より東 区:21.0 申: 万孝・長石書 赤 27 A 区間線状連絡中央性より東 底:21.0 申: 万孝・長石書 赤 28 A 区間線状連絡中央性より東 底:21.0 申: 万孝・長石書 赤 29 A 区間線状連絡中央性より東 底:21.0 申: 万孝・長石書 赤 20 A 区間線状連絡中央性より東 底:21.0 申: 万孝・長石書 赤 27 A 区間線大連橋中央性より東 底:21.0 申: 万孝・長石書 赤 27 A 区 1 編 (22.4 底:20.0 申: 万孝・長石書 赤 27 A 区 1 編 (22.4 底:20.0 申: 万孝・長石書 赤 27 A 区 1 編 底:20.0 申: 万孝・長石書 赤 27 A 区 1 編 (22.4 底:20.0 申: 万孝・長石書 赤 27 A 区 1 編 底:20.0 申: 万孝・長石書 赤 27 A 区 1 編 底:20.0	+	区D区附畦畔下塘	不明		外面:橙(5YR7/6) 内面:橙(5YR7/6)		タテハケ(10条/cm),口縁の み弱いヨコナデ	左上がりナデ, 口縁のみヨコナデ(1回)	良	口縁部小畿片	口縁に4類
25 A G M (株 大連 株 大連 株 中 上) 23.0 中: 万夫 長石青 ・ 赤 26 A G M (株 大連 株 大連 株 大連 株 大連 株 大連 株 大連 株 大車			□: 22.4	中:石英·長石普	外面:橙(5YR7/8) 内面:橙(5YR7/6)		タテハケ (8条/cm), 口縁部の みヨコ方向のナデ	左上がりナデ, 口縁のみヨコナデ(1回),ナデ 前の指押さえ	やや軟	口縁部小破片	口縁に4類
25 A及田ç田・ナトレンチ境圧・開講 口:23.0 申: 石类・長石普 赤 26 27.4号町間線水落ち 口:23.0 申: 石类・長石普 赤 26 25トレンテ工層 (ラミナ状砂層) ごトレンチ単近 口:24.9 無元・長石青 赤 26 25トレンテ工層 (ラミナ状砂層) ごトレンチ単近 口:24.9 無二条長石青 赤 27 24 24 24.3 中: 石类・長石青 赤 28 A区間薄状遺構中央畦より東 底:16.8 申: 石类・長石青 赤 27 A区間薄状遺構中央畦より東 底:16.8 申: 石类・長石青 赤 27 D区4 Tr壁面がりかけ中 底:24.8 申: 石类・長石青 赤 27 D区4 Tr壁面がりかけ中 底:20.0 単に石炭・長石青 赤 27 A区工場 一面 (資産色) 底:20.0 申: 石类・長石青 赤 27 A区工場 一面 (資産色) 底:20.0 申: 石类・長石青 赤 27 A区工屋			П: 24.0	١.	外面:橙(5YR7/8) 内面:橙(5YR7/8)		タテハケ(10条/cm),口縁部 弱いヨコ方向のナデ	左上がりナデ、口縁部ヨコ方向のナデ	Ą	口樣部小破片	口縁に4類
25 7・4号間別様状落ち ロ:20.0 中: 5条、長石者・赤 26 55人とテエ層 (ラミナ状砂菌) ひトレンチ東塩 口:24.9 一年・五巻、長石者・赤 26 32人とグチ工層 (ラミナ状砂菌) ひトレンチ東塩 口:24.9 一年・五巻、長石者・赤 26 34人選権 成:21.0 中: 5条、長石者・赤 26 A A 区間溝状遺標中央建より重 成:21.0 中: 5条、長石者・赤 27 A A 区間溝状遺標中央建より重 成:21.0 中: 5条、長石者・赤 27 D B C 4 T・壁面がりかけ中 成:21.0 中: 5条、長石者・赤 27 A B A 2 T・壁面がありかけ中 成:21.0 中: 5条、長石者・赤 27 A B A 2 T・軽面が 関係(協長色) 成:20.4 中: 5条・長石者・赤 27 A A 2 T 2 M 2 T 2 M 3 M 3 M 3 M 3 M 3 M 3 M 3 M 3 M 3 M	-		LI: 23.0	中:石英·長石普	外面:橙(5YR7/6) 内面:橙(5YR7/6)		タテハケ (7条/cm), 口縁軽い ヨコ方向のナデ	左上がりナデ, 口縁ヨコ方向のナデ(1回)	やや軟	口綠部小破片	口縁に4類
25 日区 10 日 1	-	・4号間周溝状落ち	П: 29.0	١.	外面:橙(5YR7/8) 内面:橙(5YR7/8)		タテハケ (6条?/㎝)		やや軟	口縁部小破片	口縁に4類
25 B及2BQ1 B区B区B储稼の埋土か? 9階 B区B 口131.5 中: 石巻・長石帯 赤 26 A区B建株金藤中央畦より東 底: 21.0 白枝を長石帯 赤 27 A区B環状連携中央畦より東 底: 21.0 白枝を長石帯 赤 27 B区填圧上面X層 底: 17.0 白枝を長石帯 赤 27 D区4 Tr壁面がりかけ中 底: 21.0 間の対象・長石青 赤 27 A区1階 (ラミナ状砂脂) SFレン子東北張区 底: 10.0 間に行む か 日枝 石砂 か 27 A区1階 (同様氏色シルト) 底: 20.0 中: 石巻・長石青 赤 27 A区1階 (開発色) 医: 20.0 中: 石巻・長石青 赤 27 A区1階 (開発色) 底: 20.0 中: 石巻・長石青 赤 27 A区1階 (開発色) 底: 20.0 中: 石巻・長石青 赤 27 A区1階 (開発色) 底: 20.0 中: 石巻・長石青 赤 27 A区1曜 開展 (開発色) 底: 20.0 中: 石巻・長石青 赤 27 A区1曜 開展の砂質土 底: 20.0 中: 石巻・長石青 赤 27 A区1曜 開機色砂質土 底: 20.0 中: 石巻・長石青 赤 27 A区1曜 開機色砂質土 底: 20.0 中: 石巻・長石青 赤 27 A区1曜 に乗しの様 底: 20.0 中: 石巻・長石青 赤 27 A区1曜 に乗しの時 底: 20.0 中: 石巻・長石青 赤 27 A区1曜 に乗しの時 成: 20.0 中: 石巻・長石青 赤 28 A区間様は電はの時 成: 12.0 中: 石巻・長石青 赤 29 A区間様は電はのは	-	ンチ東拡	□ : 24.9	粗~中:石英·長石多~普,赤色粒少	外面:橙(5YR7/8) 内面:灰褐(7.5YR5/2)		タテハケ(10条/cm),口縁ヨ コ方向ナデ	左上がりナデ, 口縁ヨコ方向のナデ(1回)	やや軟	口榛部1/8	口緣任類
26 A区間溝状連構中央建より東 底:21.0 申: 万美・長石帯、赤 26 A区間溝状連構中央建より東 底:21.0 申: 万美・長石帯、赤 26 A区間溝状連構中央建より東 底:16.8 申: 万美・長石帯、赤 27 B区址工庫面がりかけ中 底:21.0 無二人妻・長石曽・赤 27 A区工庫・面面がりかけ中 底:21.0 無二方妻・長石曽・赤 27 A区工庫・面層(紫色色) 底:20.4 市・石寿・長石曽・赤 27 A区工庫・面層(紫色色) 底:20.4 市・石寿・長石曽・赤 27 A区工庫・面層(紫色色) 底:20.4 市・石寿・長石曽・赤 27 A区工庫・面層(紫色色) 底:20.4 市・石寿・長石曽・赤 27 A区工庫・面層(紫色色) 底:20.0 中: 石寿・長石曽・赤 28 A区園線・北連島・大崎北 張田・大崎大・長石曽・赤 底:20.0 中: 石寿・長石曽・赤 29 A工・宇宙局・保護・大崎大原子子子・大崎大原子子・大崎大原子・原・大原・大田・大田・大田・大田・大田・大田・大田・大田・大田・大田・大田・大田・大田・		1	П:31.5	中:石英·長石書	外面:橙(5YR6/6) 内面:橙(5YR6/6)		タテハケ (6条/cm), 口縁ヨコ 方向のナデ, ミガキ状の凹線	左上がりナデ, 口縁のみヨコナデ(1回)	かや緩	口練部1/8	口縁へ類
25 内区間凍状遺構中央性より東 底:16.8 申記 分 申記 名 投口 表 投口 者 提出 者 表 工工 者 上工 表 上 有 上工 表 上 看 上工 表 上 石 者 上工 表 上 石 者 上工 表 上 石 者 上 五 素 上 石 者 上 五 素 上 石 者 上 五 素 上 石 者 上 五 素 上 石 者 上 五 素 上 石 者 上 五 素 上 石 子 上 石 者 上 五 素 上 石 子 上 石 者 上 五 素 上 石 子 上 石 者 上 五 素 上 石 子 上 石 者 上 五 素 上 石 子 上 石 全 上 五 書 上 五 素 上 石 全 上 五 書 上 五 素 上 石 子 上 石 者 上 五 素 上 石 子 上 石 者 上 五 素 上 石 子 上 石 者 上 五 素 上 石 子 上 石 者 上 五 素 上 石 子 上 石 者 上 五 素 上 石 子 上 上 工 書 上 五 素 上 石 子 上 上 工 書 上 五 素 上 石 子 上 工 書 上 五 素 上 石 子 上 上 工 工 工 工 工 工 工 工 工 工 工 工 工 工 工 工 工		区周諱状遺構中央畦より東	底:21.0	中:石英·長石普, 赤 色粒少	外面:灰オリーブ(5 Y 6/2) 内面:灰オリーブ(5 Y 5/2)		タテハケ(10条/cm),底部板 ナデ	左上がりナデ,突帯貼付時の指押さえ	やや軟	底部小截片	無調整突帶 a 類,底部調整
27 B 区域圧上面X層 成:24.8 中: 万米 長石着。 27 B 区域圧上面X層 成:17.0 中: 万米 長石着。 27 D 区 4 Tr壁面がりかけ中 成:21.0 無合税分。据色石砂 方 27 27 E L M ラネル を		区周溝状遺構中央畦より東	底:16.8	中:石英・長石書, 赤 色粒ごく少, 黒色石粒 少	外面:灰オリーブ(5Y6/2) 内面:灰オリーブ(5Y5/3)		タテハケ (10条/cm)	ナデ,突帯貼付時の指押さえ	礟	底部小破片	無調整突帶a類
27 B 区項丘上面X層 底:17.0 中: 万美と百者・赤 27 D 区 4 Tr壁面がりかけ中 底:21.0 概元年、長石者・春 27 25 F レンチ S X O1 集石部分 底:20.4 市、石英・長石者・春 27 25 F レンチ S X O1 集石部分 底:20.4 市、石英・長石者・春 27 A 区 IIM + IIM (資報色) 広:20.4 市、石英・長石者・春 27 A 区 IIM + IIM (資報色) 底:20.0 中: 石英・長石書・赤 27 A 区 IIM (資報色) 底:20.0 中: 石英・長石書・赤 27 A 区 IIM (資報色) 底:20.0 中: 石英・長石書・赤 27 A 区 IIM (資報色) 底:20.6 中: 石英・長石書・赤 27 A 区 IIM - IIM (資報色) 底:20.6 申: 石英・長石書・赤 27 A 区 IIM - IIM (資報色) 底:20.6 申: 石英・長石書・赤 27 A 区 IIM - IIM (資報色) 底:20.6 申: 石英・長石書・赤 29 A 区 IIM - IIM (日本 IIM - IIM		トレンチ弥生包含層上層	底:24.8	中:石英·長石書,赤 色粒少,黑色石粒少	外面:灰オリーブ(5 Y 6/2) 内面:灰オリーブ(5 Y 5/2)		タテハケ (10条/㎝)	左上がりナデ、突着貼付時の指押さえ	歐	底部小破片	無調整突帯 a 類
27 D区4 Tr壁面がりかけ中 底:21.0 無色化数 株と移名 27 SSPLン子SXO1集石能分 底:20.4 本を移む、現色化数・ 本を移む、現色化数・ をを移む 中: 万孝・長石少・書 本を移む・ をを移む 本を移む・ をを移む 中: 万孝・長石少・書 本を移む・ をを移む 本を移む・ をを移む 子 日本・長石参・ をを移む 本を移む・ をを移む 子 日本・長石参・ をを移む 本を移む・ をを移む 子 日本・長石参・ をを移む 本を移む・ をを移む 日本・石参・長石書・ をを移む 本 日本・石参・長石書・ ををおき 本 日本・石参・長石書・ ををおき 本 日本・石参・長石書・ ををおき 本 日本・石参・長石書・ ををおき 本 本 日本・石参・長石書・ ををおき 本 本 日本・石参・長石書・ ををとりま 本 本 日本・石参・長石書・ ををとりま 本 本 日本・石参・長石書・ をとりま 本 本 日本・石参・長石書・ をとりま 本 本 日本・石参・長石書・ をとりま 本 本 日本・石参・長石書・ をとりま 本 日本・石参・長石書・ をとりま 本 日本・石参・長石書・ をとりま 本 日本・石参・長石書・ をとりま 本 日本・石参・長石書・ をとりま 日本・石参・長石書・ をとりま 本 日本・石参・長石書・ をとりま 日本・石をのま 本 日本・石参・長石書・ をとりま 本 日本・石参・石工書・ をとりま 本 日本・石参・石工書・ をとりま 本 日本・石参・石工書・ をとりま 日本・石参・石工書・ をとりま 日本・石参・石工書・ をとりま 日本・石工書・ とりま 日	_	区墳丘上面X層	底:17.0	中:石英·長石普,赤 色粒少			タテハケ (9条/cm)	左上がりナデ,突帯貼付時の指押さえ,指押 さえ(粘土紐接合時)	豪	底~胴部小破 片	無調整突帶 a 類
27 SST-LVグチS X01集石部分 底:20.4 申: 万米 長右少春 27 SZT-IM (ラミナ状砂陽) SST-LVグチ薬は張区 底:16.4 申: 万米 長右子 (中: 万米 (上子		区4Tr壁面ガリかけ中	底:21.0	粗~中:石英·長石多, 黑色石粒少			タテハケ (10条/㎝)	突帯貼付時の指押さえ→板ナデ	硬	底部小破片	無調整突帯 a 類,底部調整
27 第74 編	_		底:20.4	中:石英·長石少~普, 赤色粒少, 黑色石粒少	外面:灰オリーブ(5 Y 6/2) 内面:灰オリーブ(5 Y 5/2)		タテハケ (9条/㎝)	タテナデ, 突帯貼付時, ナデ前の指押さえ	優	胴部小破片	無調整突帯 a 類
27 A 区 I M + II M (域色色) 底:20.0 中 石 A · 長石 中 · 内面 ·	$\overline{}$	25トレンチ東拡張区	底:16.4	中:石英・長石普,赤 色粒ごく少	外面:橙(5YR7/6) 内面:明褐(7.5YR5/6)		タテハケ (9条/四)	タテナデ、指押さえ	豪	底~胴部小破 片	無調整突带b類
27 ストレン子幹面部国際(暗灰色シルト) 底:20.0 中: 石类・長右書 内部 20 27 AKV・W回帰(暗褐色砂質士) 底:20.6 中: 石类・長右書 小 内面 27 C 区域在中水層 底:20.6 相: 石类、長右書 小 内面 27 A 区 工場・国際 底:20.6 相: 石类、長右書 小 内面 27 A 区 工場・国際・工場を設定 不明 日本・石类・長右書 小 内面 27 A 区 工場・工場面がりかけ中 底:23.6 中: 石炭、長石書 小 内面 28 A Tr壁面別場色砂質士 底:17.0 由: 石炭、長石書 小 内面 28 A 区間線状遺標中央性より東 底:17.0 由: 石炭、長石書 小 内面 28 A 区間線状遺標中央性より東 底:18.0 自2.5 日内部 29 C 区 電:12.8 自2.5 日内部 29 C 区 電:12.8 由: 石炭、長石書・ 外面 29 C 区 電:12.4 由: 石炭、長石書・ 外面 20 C 区 電:24.0 相: 石炭、長石書・ 外面 20 E : 24.0 超: 石炭、長石書・ 外面 20 E : 24.0 超: 石炭 日本石書・ 外面 20 E : 24.0 超: 24.0 M 外面 25 E : 24.0 M が 原		区工層+ 皿屬 (黄橙色)	底:18.6		外面:橙(7.5YR7/6) 内面:明褐(7.5YR5/6)		タテハケ (9条/㎝)	タテナデ,突帯貼付時の指押さえ,ナデ前の 指押さえ	礟	底~胴部小破 片	無調整突帯 b 類
27 A K V · 哪 阿爾 · (職務色砂質主) 底: 20.6 中: 5条長石帯・赤 外面 27 C 区域压中X層 底: 18.8 租: 5条長石帯・赤 外面 27 C 区 国 届 板: 18.8 租: 5条長石帯・赤 外面 27 A 区 I M + 国 M · (資程色) 底: 26.6 棚 - 中: 石井・長石 多 外面 27 A 区 I M + 国 M · (資程色) 底: 23.6 中: 万井・長石 書 ・	_	トレンチ斜面部皿層(暗灰色シルト)	底:20.0		外面:橙(5YR7/8) 内面:明褐(7.5YR5/8)		タテハケ (9条/㎝)	タテナデ、ナデ前の指押さえ	やや硬	底~胴部小破 片	無調整突帯 b 類
27 C 区域近中X層 施:18.8 離:有条技行業、外面 包括2.5c.6 利用 網、有条、長石等、外面 27 内面 27 MC IMS・工程を提行者 内面 27 A 区 IMS・工程を提供を 27 MC IMS・工程を 28 イ工業面別機色砂質土 29 成:25.6 相一行表・長石者・赤 内面 29 A 区 IMS・工程を 29 A 区 IMS・工程を 29 MC : 21.4 中:石巻・長石者・赤 内面 29 A D IMS・工業を 29 A D IMS・工業を 29 MC : 21.4 中:石巻・長石者・赤 内面 29 A D IMS・工業を 29 A D IMS・工業を 29 MC IMS・TES MC IMS IMS・TES MC IMS IMS MC IMS IMS<	-		底:20.6	茶	外面:明赤褐(5Y R5/8) 内面:明赤褐(5Y R5/6)		タテハケ (9条/㎝)	タテハケ(8条/cm),指押さえ	やや鏝	底~胴部小破 片	無調整突帯 c 類
27 C 区面層 施 : 26.6 編一中: 石奏・長石多 内面	-	区墳丘中X層	底:18.8	奉	外面:明赤褐(5Y R5/8) 内面:明赤褐(5Y R5/6)		タテハケ (10条/cm)	タテハケ (10条/cm), 指押さえ	やや硬	底~胴部小破 片	無調整突帯 c 類
27 A 区 I W - II W 不明 本 中 : 万来 長 石 者 人 名 人 名 人 名 人 名 名 人 名 人 名 人 名 人 名 人 名			底:26.6		外面:明赤褐(5Y R5/8) 内面:明赤褐(5Y R5/6)		タテハケ (9条/cm)	タテハケ (10条/cm), タテハケ前の指押さえ	やや硬	底~胴部小破 片	無調整突帯 c 類
27 A 区 I M + II M (数色色) 底:23.6 中: 万多長石者・赤 外面 27 25 トレンテ南松張区S X O.I II M 色砂質士 M () A II M		区I層·II層	不明	粗~中:石英·長石多 ~普	外面:明赤褐(5Y R5/8) 内面:明赤褐(5Y R5/6)		タテハケ (10条/四)	タテハケ(10条/cm),ハケ前の指押さえ	やや硬	底~胸部小破 片	無調整突帯で類
27 S5トレンチ南北張区S X01黒褐色砂質士陽 底:17.0 中: 万美長石者:赤 外面 27 D区4Tr壁面架のかけ中 底:21.4 中: 万美長石者:赤 外面 28 4Tr壁面黒褐色砂質士 底:21.4 中: 万美長石学:赤 外面 28 A区間溝状遺構中央畦より東 底:18.0 台石路が長石等:赤 外面 28 S5トレンチ端生包含層下層 底:12.8 中: 万美石等:赤 外面 29 C区 底:24.0 超: 万美長石等:赤 内面 20 医2.4.0 超: 万美長石等:赤 内面 20 医2.4.0 超: 万美長石等:赤 内面 20 医2.2.0 超: 万美長石等:赤 内部 20 医2.2.0 超: 万美長石等:赤 内部 20 西北東北京 内面 20 田本子等 内面 20 田本子等 内面 20 田本等 内面 20 田本等 内面 20 田本等 内面 20 田本等 内面	-	区工層+皿層(黄橙色)	底:23.6	中:石英·長石普,赤 色粒少	外面:明赤褐(5Y R5/6) 内面:明赤褐(5Y R5/6)		タテハケ (10条/㎝)	左上がりナデ、突帯貼付時の指押さえ	やや硬	底~胴部小破 片	無調整突带 d 類
27 D区4 Tr壁面がりかけ中 底:21.4 中: 石表・長石普 内面			底:17.0	中:石英·長石普,赤 色粒少	外面:明赤楊(5Y R5/8) 内面:明赤楊(5Y R5/6)		タテハケ (10条/cm)	指押さえ, 不定方向ナデ	豪	底~胴部小破 片	無調整突帯 d 類
28 4 Tr壁画馬場色砂質土 底:18.0 橋:75. 長石少・馬 外面 2.8 28 A区国澤北遺構中央畦より東 底:12.8 中:石秀・長石書・赤 外面 2.8 28 55.レンチ珠生包含層下層 底:12.4 中:石秀・長石書・赤 外面 2.8 28 C区 底:24.0 橋:75. 長石中・高・ 4.4 29 C区 成:24.0 橋:75. 長石中・周、外面 2.8 29 C区 成:24.0 橋:75. 長石中・周、外面 2.8 20 内面 2.4 日本日本・ 2.8 内面 2.4 20 日本日本・ 2.8 内面 2.4 20 日本日本・ 2.4 内面 2.4 20 日本日本・ 2.4 内面 2.8	aa 2	区4Tr壁面ガリかけ中	底:21.4	中:石英·長石普	外面:明赤楊(5Y R5/8) 内面:明赤楊(5Y R5/6)		タテハケ (9条/㎝)	タテナデ, 突帶貼付時の指押さえ, ナデ前の 指押さえ	やや硬	底部小破片	無調整突帯 d 類
28 A 区 随 漢 状 遺 様 中 央 畦 よ り 東 中 : 万 本 · 長 万 書 · 長 万 書 · 長 万 書 · 長 万 書 · 長 万 書 · 内 列		Tr壁面黑褐色砂質土	底:18.0	細:石英·長石少, 黑 色石粒少	外面:灰オリーブ(5 Y 6/2) 内面:灰オリーブ(5 Y 5/2)		タテハケ (13条/cm), 板ナデ	タテナデ, 底部指押さえ	豪	底部小破片	底部A1類, 底部調整
28 SS-Lン子集生包含層下層 底:12.4 中: 石条 長右者・赤 内面 28 C 区 (6.24.0 (6.52.0 (6.52.4 (6.5		区周諱状遺構中央畦より東	底:12.8	中:石英·長石誉,赤 色粒少, 黑色石粒少	外面:灰オリーブ(5Y5/2) 内面:灰オリーブ(5Y4/2)		タテハケ (10条/cm), 板ナデ	タテナデ後、指押さえ	康	底部小破片	底部A1類, 底部調整
28 CK 能:24.0 能:24.0 能:24.0 机分子 用 外面 App App App App App App App App App Ap	_		底:12.4	中:石英・長石書,赤 色粒ごく少	外面:灰オリーブ(5Y6/2) 内面:灰オリーブ(5Y6/2)		板ナデ	左上がりナデ,指押さえ	#	底部小破片	底部A1類, 底部調整
00 00 11 7 大学院の参加な十二年		R	底:24.0	細:石英·長石少, 照 色石粒少	外面:灰オリーブ(5 Y 4/2) 内面:灰オリーブ(5 Y 5/2)		タテハケ, 板ナデ	タテナデ前、指押さえ	豪	底部小破片	底部A1類, 底部調整
28 25トレンナ弘張区寅畿也工元乱 低:17.0 中:4英・長右晋 内面		25トレンチ拡張区黄褐色土攪乱	底:17.0	中:石英·長石眷	外面:橙(5 Y R 6/6) 内面:明褐(7.5 Y R 5/6)		タテハケ (10条/cm), 板ナデ	タテナデ後, 指押さえ	歐	底部2/8	底部A2類,底部調整,底面に圧痕

	1	ŀ	* * * * * * * * * * * * * * * * * * * *	42 (44 sm/ps+11	(10 th 10 th 10 th	(五、日) 開力	おかま	女招出教	日 隆 繼 费	世	時存率	分類及び備表
	区	M	+-	田(城) 湖, 城)	和二、和"中"和	で 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	3	1	タテナデ, 底部ヨコ方向指押さえ, ナデ前の		出稿小器性	存款 4 2 種 存鉄温敷
19 19 19 19 19 19 19	116			展:17.4	赤色粒少、角閃石ごく 少	内面:明褐(7.5Y R5/6)		枚ナデ	指押さえ	¥	AK III AMA LA MAK II	KIDA 2 M. KIDMEN
	117	83	├	底:15.0		外面:明赤褐(5Y R5/6) 内面:明赤褐(5Y R5/8)		格押さ	革	歐	底部小破片	
	118	<u> </u>	+	底:18.4		外面:明赤楊(5 Y R 5/6) 内面:黄楊(2.5 Y R 5/6)		板ナデ		やや優	底部小破片	
19 10 10 20 10 10 20 10 10 10 10 10 10 10 10 10 10 10 10 10	119	ļ	+			外面:橙(5YR6/6) 内面:灰黄褐(10YR6/2)	17類	タテハケ (10条/㎝)	左上がり強いナデ,ナデ前の指押さえ	豪	底部2/8	底部調整,
	120	₽-	+	_		外面:橙(5YR6/6) 内面:灰褐(7.5YR4/2)		板ナデ、底部指押さえ		獭	底部小破片	底部A5類, 底部調整, 底部に絞り 目?
	121	. 29	+	底:16.0		外面: 灰オリーブ(5Y6/2) 内面: にぶい黄(2.5Y6/3)		タテハケ(9条/c≡),底部のみ 指押さえ	左上がりナデ、底部のみ指押さえ	養	底部小破片	底部B類、底面に圧痕
5	122	53	+	不明	l	外面:灰褐(7.5Y5/2) 内面:橙(7.5YR6/6)		タテハケ(9条/C□),底部のみ 指押さえ	底部のみ指押さえ	预	底部小碳片	
2	123	29	+	底:23.0	*	外面:灰オリーブ(5Y6/2) 内面:橙(5YR6/6)		不明、底部のみ指押さえ	タテナデ, 底部のみ指押さえ	外:軟 内:やや硬		
	124	29	+	底:18.0	#	外面:灰オリーブ(5Y6/2) 内面:橙(5YR6/6)		不明、底部のみ指押さえ	タテナデ, 底部のみ指押さえ	桊	底都小破片	
	125	59	+-	不明	卡	外面: 灰オリーブ(5Y6/2) 内面: 橙(5YR7/8)		不明、底部のみ指押さえ	底部のみ指押さえ	*	底部小破片	
2 日 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	126	29	A区周谍内A A区周谍内建物	底:22.0	*	外面:にぶい黄橙 (10 X R 7/4) 内面:にぶい黄橙 (10 X R 7/4)	I M	タテハケ (8条/GB)	タテナデ, 突帯貼付時の指押さえ	良	底部5/8	底部C1類, 底部高16~17cm, 円形 透かし
(2) (2) (2) (2) (2) (2) (2) (2) (2) (2)	127	29		底:27.0	赤	外面:橙(5 Y R 7/8) 内面:橙(5 Y R 7/8)		タテハケ, 底部のみ指押さえ	タテハケ, 底部のみ指押さえ	**	底部小破片	底部C1類
	128	<u> </u>	+	底:23.0		外面:橙(7.5YR7/6) 内面:黄橙(7.5YR7/8)		タテハケ (10条/cm), 底部のみ指押さえ		やや軟	底部1/8	底部C1類
2 D G C A R A R A R A R A R A R R R R R R R R	129	29		底:23.7	-	外面:橙(7.5Y R6/6) 内面:にぶい橙(7.5Y R6/4)		タテハケ(8条/cm),底部のみ 指押さえ		阜	底部1/8	
(2) (公成日本) (日本) (日本) (日本) (日本) (日本) (日本) (日本) (130	53	+	底:21.0		外面:橙(7.5Y R7/6) 内面:橙(7.5Y R7/6)		タテハケ(9条/cm),底面指押 さえ		Ħ	底部小截片	
10 に関連は連載 E : DAT 1 自分子 本日市	131	30			110	外面:橙(7.5Y R 7/6) 内面:にぶい橙(7.5Y R6/4)		タテハケ (7条/cm), 底部ナデ		貝	底部小截片	
10 日本保護株理館・日本保護を受けます。 (4.1.4.0.) (4.6.5.5.4.0.1.8.4.0.1.8.0.) (4.6.5.5.4.0.1.8.0.1.8.0.0.1.8.0.0.1.8.0.0.1.8.0.0.0.1.8.0.0.1.8.0.0.0.0	132	30	+		132	外面:にぶい橙(7.5Y R6/4) 内面:にぶい橙(7.5Y R6/4)		タテハケ(9条/cm), 指押さえ		やや硬	底部小鞍片	
20 AZMARRARMA CARRARA NATIONAL MATERIA NATIONAL NATIONAL MATERIA NATIONAL NATIONAL MATERIA NATIONAL NATIONAL MATERIA NATIONAL NATIONAL MATERIA NATIONAL MATERIA NATIONAL MATERIA NATIONAL NATIONAL NATIONAL MATERIA NATIONAL NATIONAL NATIONAL NATIONAL MATERIA NATIONAL	133	<u> </u>	B区周溝状遺構		1.10	外面:橙(5 Y R 7/8) 内面:橙(5 Y R 7/8)		タテハケ?底部のみ指押さえ	底部のみ指押	やや軟	底部小破片	
30 存金件を提供 株に金砂様 株に34.0 お店券を存む。	134	30			110	外面:橙(5 Y R 7/8) 内面:橙(5 Y R 7/8)		底部のみ指押さえ		やや軟	底部小骸片	底部C1類
30 は下上が 第7.22 () () () () () () () () () (135	<u> </u>	⊢		46	外面:橙(5 Y R 7/6) 内面:橙(5 Y R 7/6)		底部のみ指押さえ	タテナデ,底部のみ指押さえ(2回)	やや敷	底部小破片	底部C1類
30 GKG 研修化	136	_		底:22.0	卡	外面:橙(5 Y R 7/8) 内面:橙(5 Y R 7/8)		不明, 底部のみ指押さえ		やや軟	底部小破片	底部C1類
20 日区域和磁化財優(開機色砂質士) 成:1.5.2 中心音を存む器 内部 (開発色砂質土) 水面 (200 R 77) 水面 (200 R 77)<	137	30		底:13.6	#	外面:橙(5 Y R 7/6) 内面:橙(5 Y R 7/6)		不明, 底部のみ指押さえ	左上がりナデ	桊	底部小破片	底部C1類
30 日民間線状態棒や突性と向音 自20至冬が石帯 内面 (6.15.2) 申20至冬が石幣 (8.15.2) 申20至冬が石幣 (8.15.2) 申20至冬が石幣 (8.15.2) 申20至冬が石幣 (8.15.2) 申20至冬が石粉 (8.15.2) 中20至夕が石粉 (8.15.2) 中20至夕が (8.15.2) 中20至夕が石粉 (8.15.2) 中20至夕が (8.15.2) 中20至夕が (8.15.2) 中20至夕が水 (8.15.2) 中20至夕が (8.15.2) 中20至夕が (8.15.2) 中20年夕が (8.15.2) 中20年夕が水 (8.15.2) 中20至夕が水 (8.15.2) 中20年夕が (8.15.2) 中20年分が (8.15.2) 中20年夕が (8.15.2) 中20年夕が水 (8.15.2)	138			底:15.2	卡	外面:橙(5 Y R 7/6) 内面:橙(5 Y R 7/6)		底部のみ指押さえ	左上がりナデ,底部のみ指押さえ	やや敷	底部小破片	底部C1類
30 CKEVIIIW CKEVIIIW 指揮きる 指揮を表し類 其間ののお推測を表します。 自身を表します。 はまる はまる <th>139</th> <th>30</th> <th></th> <th>底:15.2</th> <th>举</th> <th>外面:橙(5 Y R 7/8) 内面:橙(5 Y R 7/8)</th> <th></th> <th>摩滅が著しいが, 底部付近で 指押さえ</th> <th>タテナデ,底部付近で指押さえ</th> <th>やや敷</th> <th>底部小破片</th> <th></th>	139	30		底:15.2	举	外面:橙(5 Y R 7/8) 内面:橙(5 Y R 7/8)		摩滅が著しいが, 底部付近で 指押さえ	タテナデ,底部付近で指押さえ	やや敷	底部小破片	
30 DENPW (C業色色砂質土) 不明 中心音奏及右着。赤 外面: 機(3 PR nc) 大路の多 Reference 大上がりすず、底部のみ指揮きえ。た上がりすず、底部のみ指揮きえ。た上がりすず、底部のみ指揮きえ。た上がりすず、底部のみ指揮きえ。た上がりすず、底部のみ指揮きえ。た上がりすず、底部のみ指揮きえ。た上がりすず、底部のみ指揮きえ。た上がりすず、底部のみ指揮きえ。た上がりすず、底部のみ指揮きえ。た上がりすず、底部のみ指揮きえ。た上がりすず、底部のみ指揮きえ。た上がりすず、底部のみ指揮きえ。た上がりすず、底部のみ指揮きえ。た上がりすず、底部のみ指揮きえ。た上がりすず、底部のみ指揮きえ。た上がりまず、底部のみ指揮きえ。た上がりまず、底部のみ指揮きえ。た上がりまず、底部のみ指揮きえ。た上がりまず、底部のみ指揮きえ。た上がりまず、底部のみ指揮きえ。たまからからからからからが変すが、たまからがしまがとくからからがしまがという。 できた としまが、たまからがしまがという。 できた としき といまがしまがしまがという。 できた といまがしまがしまがしまがしまがしまがしまがという。 できた といまがしまがしまがしまがしまがしまがしまがしまがしまがしまがしまがしまがしまがしま	140	30		底:16.6	举	外面:橙(5 Y R 7/6) 内面:橙(5 Y R 7/6)		指押さえ	指押さえ	**	底部小破片	
30 AKM減耗速降中央建上り商 底 13.0 中心投資人表化石幣· 内面 20.8	141	30	_	不明	举	外面:橙(5 Y R 6/6) 内面:橙(5 Y R 6/6)		タテハケ, 底部のみ指押さ え?		やや軟	底部小破片	底部C1類
30 日VTM (規稿色砂質士) 庭:20.4 中: 万夫・長石普 内面: 程5.87.83 施都のお指押さえ ウテナア、底部のお指押さえ クテナア、底部のお指押さえ 今や軟 庭部小破片 30 日XVM (規稿色砂質士) 庭:17.0 中: 万夫・長石青・赤 内面: 程5.87.88 内面: 26.87.87 内面: 26.87.87 大船の (2.87.87) 大田の (2.87.87)<	142	_		底:19.0	*	外面:橙(5 Y R 7/8) 内面:橙(5 Y R 7/8)		タテハケ, 底部のみ指押さえ	左上がりナデ,底部のみ指押さえ	やや軟	底部小破片	底部C 1整
30 DEX.WR (無熱色砂質土) 庭:17.0 中:5条 長石青・赤 内面: 程/5 KT/6) 外面: 27.0 水面: 27.0 中:5条 長石青・赤 内面: 27.0 内面: 27.0 中:5条 長石青・赤 内面: 27.0 内面: 1.5 km (27.0) 大面: 27.0 中:5条 長石青・赤 内面: 27.0 内面: 1.5 km (27.0) 大面: 27.0 大面: 27.0 中:5条 長石青・赤 内面: 27.0 内面: 1.5 km (27.0) 大面: 27.0 大面: 27.0 中:5条 長石青・赤 内面: 27.0 大面: 27.0 中:5条 長石青・赤 内面: 27.0 大面: 27.0	143	_		底:20.4		外面:橙(5YR7/8) 内面:橙(5YR7/8)		底部のみ指押さえ	タテナデ,底部のみ指押さえ	やや軟	底部小破片	底部C 1類
30 C(K)S KOI II Wing At	144	30		底:17.0	栎	外面:橙(5 Y R 7/6) 内面:橙(5 Y R 7/6)		底部のみ指押さえ		やや軟	底部小破片	底部C1類
30 4下1階 (美土) 時、5条長石青・赤 内面におい稿で2 N 55-41 内面におい稿で2 N 55-41 内面におい稿で3 N 55-41 クテハケ・底部指押さえ カテア・底部指押さえ カテア・成部指導と、ナテア・ 成部指押さえ・ナテー 全や軟 底部1.8 を約1.8 内面におい稿で3 N 55-41 内面におい稿で5 N 55-41 外面によい機で1.5 N 8.6 イ明・文子・ハケル・ 成部 1 2 N 55-41 本の 2 N 55-41 <t< th=""><th>145</th><th></th><th></th><th>底:21.0</th><th>枨</th><th>外面:にぶい黄橙(10Y R6/4) 内面:にぶい褐(7.5Y R5/4)</th><th></th><th>タテハケ (10条/cm), 底部の み指押さえ</th><th>ナデ前の指押さえ,</th><th>氧</th><th>底部2/8</th><th> 1</th></t<>	145			底:21.0	枨	外面:にぶい黄橙(10Y R6/4) 内面:にぶい褐(7.5Y R5/4)		タテハケ (10条/cm), 底部の み指押さえ	ナデ前の指押さえ,	氧	底部2/8	1
31 CPLンチ階級級及入前の開発色検算士 ぶトレン 底:13.8 中: 万奏・長石青・赤 外面: 強機(5.5 FR.86) 本項、分子が大力が 本子が大力が クテナディ指揮さえ キや軟 鉱船/8 域間/8 31 CK は:17.0 中: 万奏・長石青・赤 外面: 環境(7.5 FR.86) 財面: 環境(7.5 FR.86) 成品の本指揮さえ た上がりナデ・成品のみ強い行上がりナデ・を申軟 鉱船/8 株部2.8 31 CK 本の開発・活動が 本の投入 本の投入 外面: 環境(7.5 FR.86) カール・ファン・のよりデ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	146	30	_	底:21.0	卡	外面:にぶい黄橙(10Y R6/4) 内面:にぶい褐(7.5Y R5/4)		タテハケ, 底部指押さえ	底部指押さえ,	やや軟	底部1/8	底部C 2類
31 C及 いたしたよろり (株式) (株式) (株式) (株式) (株式) (株式) (株式) (株式)	147		25トレンチ南拡張区 S X 01黒褐色砂質土 チ拡張区斜面部黒褐色~茶褐色色土	底:13.8	*	外面:黄橙(7.5YR7/8) 内面:浅黄橙(7.5YR8/6)		不明, タテハケか?	タテナデ?指押さえ	やや軟	底部1/8	底部D類
31 ACKV—唯の問層(隔積色砂質士) 底にのみ指揮さえ。 中・欄・万季・長石少・内面・淡黄像(7.5 N R %) 1 類 ファハケ (10条/cm) 成成のみ指揮さえ。 中・軟・ 線部/8 底部のみ指揮さえ。 本や軟・ 線部/8 底部のみ指揮さえ。 本や軟・ 線部/8 上部 8 原記/8 31 ACKV—唯の問層(隔積色砂質士) 第:24.0 中・行季・長石ヴ・ 赤 外面・投入を、接入の・ 赤 外面・提入の下の表別の下のよった。 1 類 ファハケ (8条/cm) 左上がりナデ・指揮さえ。 第 編都小破片 第 編都小破片 31 ACR (陽珠光準構中発性より東 第 : 22.0 中校・万季・長石少・ 赤 内面・にぶい橋(7.5 N e/4) 1 類 ファハケ (8条/cm) ファナデ・指揮さえ、ナデ前の指揮さ、 中級 開那小破片 1 動部小破片	148	31			中:石英·長石普, 赤 色粒少	外面内面		底部のみ指押さえ	底部のみ強い右上がりナ	やや軟	底部2/8	底部D類
31 AEV-唯の問題(略稿色砂質士) 期: 24.0 中: 万类・長石亭・赤 外面: 完成い程の下3.0 1 類 7ラハケ(8条/cm) 左上がりナデ、指押さえ、お押さえ、お押さま、お押さま、かずの指標され 硬 胴部小統片 脚部小統片 33 A区関係状態権中央社とり東 期: 22.0 中: 石类・長石少・赤 内面: に近い程(7.5 ½6.6) I 類 フテハケ(8条/cm) タテナデ、指押さえ、ナデ前の指押さよ やや硬 脚部小統片 脚部小統片	149	31	-			外面 内面			底部のみ指押さえ	やや軟	底部1/8	
31 A区陽溝状遺構中央蛙より東 嗣:22.0 中:石英・長石少・赤 外面:程(7.5 Y 6/4) I 類 タテハケ(9糸/4m) タテナデ、指押さえ、ナデ前の指押さえ やや硬	150	31	-			外面内面	I類	タテハケ (8条/cm)	若	歐	扇部小破片	突帯ヨコナデ上部に左上がりの圧痕
	151	31	-		中:石英·長石少,赤 色粒少	外面:橙(7.5Y6/6) 内面:にぶい橙(7.5Y6/4)	I類	タテハケ (9条/㎝)	桁押さえ,	酸合合	層部小破片	

	ł							35	1	+ +	神 雅 然 田 第 4
類図	3K)	適 構 名 · 出 土 位 置 ∧反因渗出。 ∧反由血畔由 ∧反因渗出渗燥由血畔	口椽(駒・底)径	部士(相・中・種) 中・万 権・原 万 少 赤	40 #	突帝分類	外面置影	E .	£	九 件 華	万根及い言ろ
152	31	_	∭ : 38.0	一 ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	内面:灰褐(5.Y.5/3)	II 🥦	タテハケ (8条/CE)	災命既付時指押さえ	*	開節小板万	
153	31	B区SD01 B区周溝中央断割	M : 22.2	中:石英·長石普	: にぶい橙(7.5Y I : 橙(7.5Y R6/6)	口類	タテハケ (9条/㎝)	左上がりナデ→陶鈴が上半とト半で異なる, 突帶貼付時指押さえ, ナデ前指押さえ	歐	層部1/8	
154	31	_	瞬:24.0	中:石英·長石書,赤 色粒少, 黑色石粒少	外面:にぶい黄褐(10Y R5/3) 内面:灰黄褐(10Y R5/2)) 第1	タテハケ (8~9条/四)	左上がりナデ,突帯貼付時指押さえ	歐	層部1/8	円形透かし
155	31	B区東斜面部VI階(黒褐色砂質土) B区中央断約 VI層	ij : 27. 4	中:石英·長石普, 赤 色粒少	外面:明黄楊(10 X R 7/6) 内面:卷(7.5 Y R 7/6)	口類	タテハケ(9?条/㎝)	左上がりナデ,突帯貼付時指押さえ	外:良内: 硬	層部2/8	円形透かし、外面にベンガラ塗布
156	31	A区II最·日曜	順: 24.5	中~細:石英·長石普, 赤色粒少	外面:にぶい楊(7.5Y R5/3) 内面:にぶい赤褐(5Y R5/3)	口類	タテハケ(10条/cm, 8条/cm)	ナデ後、突帯貼付時指押さえ	硬 (赤焼け) 断面黒)	퉭部小破片	外面調整に2種の工具がある, 円形 透かし
157	31	A区周溝内B	獨:18.8	中:石英·長石書	外面:赤灰(2.5Y4/1) 内面:灰黄褐(10Y R5/2)	11.00	タテハケ (9条/cm)	左上がりナデ,突帯貼付時指押さえ	₩.	胴部小破片	円形透かし
158	32	25トレンチ排土中	厕: 23.4	中:石英·長石普, 赤 色粒少	外面:灰(N4/) 内面:褐灰(7.5Y6/1)	口類	タテハケ (8条/cm)	左上がりナデ,突帯貼付時指押さえ	籔	開部小破片	
159	32	A区IV階	不明	中:石英·長石普, 赤 色粒少	外面:灰黄褐(10YR5/2) 内面:灰黄褐(10YR5/2)	工類	タテハケ (8条/cm)	左上がりナデ,突帯貼付時指押さえ	やや硬	肩部小破片	
160	32	A区表土 (+1層少し)	刷:20.4	中〜細:石英・長石少, 赤色粒ごく少	外面:楊灰(10Y R5/1) 内面:橙(5Y R6/6)	口類	タテハケ (10~11条/㎝)	ナデ (不定方向),突帯貼付時指押さえ	₩.	퉭部小破片	
161	32	A区V·W問層(暗褐色砂質土)	M : 20.0	中:石英·長石書,赤 色粒ごく少	外面:灰(5Y4/1) 内面:褐灰(10YR5/1)	五類	タテハケ (10条/四)	左上がりナデ,突帯貼付時指押さえ	硬(もっと も須恵質に 焼ける)	開部小破片	
162	32	25トレ弥生包含層下層	M : 25.0	中:石英·長石普	外面:にぶい橙(7.5Y R6/4) 内面:橙(5Y R6/6)	I M	タテハケ (8条/cm)	タテナデ, 指押さえ	やや優	屬部小破片	
163	32	C区填丘上面表土	屬:21.6	中:石英·長石普,赤 色粒少, 黑色石粒少	外面:橙(5 Y R6/6) 内面:灰黄褐(10 Y R5/2)	口類	タテハケ (9条/cm)	タテナデ, 突帯貼付時指押さえ	₩	層部1/8	
164	32	A区IV層 (黑褐色砂質土)	順:24.2	中:石英·長石普, 黑 色石粒少	外面:橙(5 Y R6/6) 内面:にぶい褐(7.5 Y R5/4)	日類	タテハケ (10条/㎝)	タテナデ, 指押さえ	礟	胴部小破片	
165	32	A区(25Tr西) 溝状遺構/埋土	屬:23.2	中:石英·長石少	外面:にぶい褐(7.5Y R5/3) 内面:灰褐(7.5Y R5/2)	口類	タテハケ (8条/cm)	左上がりナデ,突帯貼付時指押さえ	胀	胴部小破片	
166	32	A 区 A · 限問層(暗褐色砂質土) A 区 B 区間畦間溝残存埋土と墳丘部分	胴:28.4	中:石英·長石少.赤 色粒少, 黑色石粒少	外面:にぶい程(7.5Y R6/4) 内面:灰赤(2.5Y5/2)	第Ⅱ	タテハケ (8条/cm)	左上がりナデ,突帶貼付時指押さえ	瘷	胴部小破片	
167	32	A区IV層(黄橙色粘質土)	底:23.4	中:石英·長石普	外面:橙(2.5Y R6/6) 内面:橙(5Y R6/6)	丁類	タテハケ (10条/cm)	左上がりナデ,突帯貼付時指押さえ	蹶	퉭部小破片	
168	32	A区周谍内A	M : 20.0	中:石英·長石普,赤 色粒少,黑色石粒少	外面: 灰赤(2.5Y6/2) 内面: 灰黄褐(10Y R6/2)	自然	タテハケ (9条/cm)	左上がりナデ、突帯貼付時指押さえ	歐	胴部小破片	円形透かし
169	32	25トレンチ南拡張区 S X 01黒褐色砂質土層	月 : 26.0	細:石英·長石少,赤 色粒ごく少	外面:橙(7.5YR7/6) 内面:橙(7.5YR7/6)	正類	タテハケ (8条/cm)	左上がりナデ,突帯貼付時指押さえ	鵩	胴部小破片	
170	32	A区IV層 (黄橙色粘質土)	脚: 20.0	中~細:石英·長石少, 黒色石粒少	外面:にぶい橙(5Y R6/4) 内面:赤灰(2.5Y5/1)	IV類	タテハケ (10条/cm)	左上がりナデ,突帯貼付時指押さえ	緩	開部小破片	円形透かし
171	32	A区IV層(黑褐色砂質土)	不明	網:石英·長石少	外面:にぶい赤褐(5YR5/4) 内面:橙(2.5YR6/6)	IV.	タテハケ (8条/畑)	左上がりナデ,突帯貼付時指押さえ	账	肩部小破片	
172	32	35トレ弥生包含層下層	月 : 26.0	中~細:石英·長石少, 黒色石粒少	外面:にぶい赤褐(5YR5/4) 内面:にぶい橙(5YR6/4)	IV類	タテハケ (6?条/cm)	タテナデ, 突帯貼付時指押さえ	礟	顯部小破片	
173	32	A区V層 (黒褐色砂質土) A区B区間畦 (黒褐色 土層より上) 25トレ斜面部1層(2層~一部ラミナ 状砂層)	21.6		外面:橙(2.5Y R6/6) 内面:橙(2.5Y R6/6)	V類	タテハケ (8条/回)	タテナデ,突帯貼付時指押さえ	隊	屬部小破片	円形透かし
174	33	A区周谍内E	月 : 27.2	中:石英・長石普,赤 色粒ごく少	外面:にぶい黄褐(10Y R5/4) 内面:にぶい黄褐(10Y R5/4)	I類	タテハケ (7~8条/畑)	左上がりナデ、突帯貼付時指押さえ	やや軟	層都1/8	
175	33	A区周律内E	屬:25.0	粗~中:石英·長石多 ~普,赤色粒少	外面:橙(7.5YR7/6) 内面:橙(7.5YR7/6)	Ι¥Ι	タテハケ (8条/cm)	左上がりナデ, 突帯貼付時, ナデ前の指押さ え	苺	胴部小破片	突帯ヨコナデ上部に左上がりの圧痕
176	33	B区中央鞋除去中	屬:26.0	中:石英·長石普,赤 色粒少	外面:橙(7.5YR7/6) 内面:橙(7.5YR7/6)	I類	タテハケ (8条/cm)	左上がりナデ,突帯貼付時の指押さえ,ナデ 前の指押さえ	與	胴部小破片	突帯ヨコナデ上部に左上がりの圧痕
177	33	A区周溝内臣	M : 21.0	中:石英·長石普, 赤 色粒少	外面:橙(7.5YR7/6) 内面:橙(7.5YR7/6)	1数	タテハケ (9条/㎝)	左上がりナデ,突帯貼付時指押さえ	良~やや硬	胴部小破片	突帯ヨコナデ上部に左上がりの圧痕
178	33	B区北端落ち込み現地形の落ち込みか?	脚:23.6	中:石英·長石普, 赤 色粒少	外面:橙(7.5YR8/6) 内面:橙(7.5YR8/6)	I類	タテハケ (7条/㎝)	左上がりナデ,突帯貼付時指押さえ,透かし 穿孔時の指押さえ	百	胴部小破片	突帯ヨコナデ上部に左上がりの撥痕, 円形透かし
179	33	B区周譯状遺構	月 : 30.0	中:石英·長石書,赤 色粒ごく少	外面:橙(5 Y R 7/6) 内面:橙(5 Y R 7/6)	I類	タテハケ (8条/cm)	左上がりナデ,突帯貼付時指押さえ	載	胴部小破片	突帯ヨコナデ上部に左上がりの擦痕、 円形透かし
180	33	C区墳丘上面X層 C区墳丘皿·X層	퉭: 22.8	中:石英·長石普, 赤 色粒少	施施	I類	タテハケ (7条/cm, 下→上)	タテナデ, 突帯貼付時指押さえ	やや軟	層部2/8	突带開腦10cm
181	34	A区周律内E	JF : 29.1	中: 石英・長石書, 赤 色粒ごく少	外面:橙(5 Y R 7/8) 内面:橙(5 Y R 7/8)	I m	タテハケ(9~10条/cm, 下→ 上, 左→右)	タテナデ, 突帯貼付時, ナデ前指押さえ	冷や軟	開部2/8	円形透かし
182	34	こ区西壁 こ区	脚: 28.2	中:石英·長石普, 赤 色粒少	外面:橙(5YR7/8) 内面:橙(7.5YR7/6)	I類	タテハケ (10条/cm)	左上がりナデ,突帯貼付時指押さえ	やや軟	開部1/8	
183	34	C区境丘盛土断构	扇:26.5	中:石英·長石普, 赤 色粒少	外面:橙(7.5YR6/6) 内面:橙(7.5YR6/6)	I類	タテハケ (8条/cm)	左上がりナデ,突帯貼付時,ナデ前指押さえ	换	開部1.8	
184	34	C 区落ち込み01	瞬:29.0	中:石英·長石普, 赤 色粒少	外面:橙(7.5YR7/6) 内面:橙(7.5YR7/6)	I類	タテハケ?	左上がりナデ,突帯貼付時指押さえ	百	開部小破片	円形透かし
185	34	3 Tr 畦餘去中	闡:24.0	中:石英·長石普, 赤 色粒少	外面:橙(5YR7/8) 内面:橙(7.5YR7/6)	I類	タテハケ (8条/cm)	タテナデ, 突帯貼付時, ナデ前指押さえ	やや軟	開部1.8	円形透かし
186	34	A区周律内遗物	刷:25.4	中:石英·長石普,赤 色粒少	外面:橙(5YR7/8) 内面:橙(5YR7/8)	1類	タテハケ (9条/cm)	左上がりナデ,突帶貼付時指押さえ	やや軟	肩部2/8	円形透かし
187	34	CKSK02	月:27.0	中:石英·長石善,赤 色粒書~少	外面:橙(5 Y R 7/8) 内面:橙(5 Y R 7/8)	I類	タテハケ (9条/cm)	左上がりナデ. 突帯貼付時指押さえ, 板ナデ?	やや軟~良	層部1.8	円形造かし

Control C	N M	銀 少 十 丑 ・ 夕 録 表 ―――――――――――――――――――――――――――――――――	口经(题,成)级	第十(者,七,益)	金襴(内・外)	多种分离	女祖 雅 茶	日	往辈	現在本	分類及び備表
1	_	C区西壁	川林(順・馬)住 開:27.2	加工(相:中:種) 中:石英・長石書,赤 毎約か	外面: 格	k ∌	7. 四 西 敦 タテハケ (7条/四)		やや軟		2 X X C E b
Note the contention No. 10 20,55 4 5 6 7 6 7 6 7 5 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2	189	+	脚: 24.1	#	外面: 内面: 卷:	I類	タテハケ (8条/四)	テナデ.	व	層部1/8	円形透かし
1 A CHERNOLOGICO, N. 10 10 10 10 10 10 10 10	190	B区東斜面部VI層	開: 27.0	46	外面: 格	I類		١.	やや軟	層部1/8	円形透かし
	191		篇: 25.0	116	外面: 橙(5 Y R 7/8) 内面: 橙(5 Y R 6/6)	I類	(3,\$	テナデ,突帶貼付時,ナデ前指押さ	本や軟	8/2規劃	
	192	-	瞬: 25.0	146	外面:檀 內面:檀	I類	\ \	ア, 突帯貼付時指押	良	開部1/8	円形透かし
	193		票: 29.0	赤	外面:橙 内面:橙	I類		突带贴付時指押	やや軟	胴部小破片	円形透かし
	194	-	瞬:35.0	半		I類	\		やや軟	胴部小破片	円形透かし
(1) A COMMUNICATION (1) A COMMUNICATION (1) A COMMUNICATION (1) A COMMUNICATION (1) A COMMUNICATION (1) A COMMUNICATION (1) A COMMUNICATION (1) A COMMUNICATION (1) A COMMUNICATION (1) A COMMUNICATION (1) A COMMUNICATION (1) A COMMUNICATION (1) A COMMUNICATION (1) A COMMUNICATION (1) A COMMUNICATION (1) A COMMUNICATION (1) A COMMUNICATION (1) A COMMUNICATION (1) A COMMUNICATION (1) A COMMUNICATION (1) A COMMUNICATION (1) A COMMUNICATION (1) A COMMUNICATION (1) A COMMUNICATION (1) A COMMUNICATION (1) A COMMUNICATION (1) A COMMUNICATION (1) A COMMUNICATION (1) A COMMUNICATION (1) A COMMUNICATION (1) A COMMUNICATION (1) A COMMUNICATION (1) A COMMUNICATION (1) A COMMUNICATION (1) A COMMUNICATION (1) A COMMUNICATION (1) A COMMUNICATION (1) A COMMUNICATION (1) A COMMUNICATION (1) A COMMUNICATION (1) A COMMUNICATION (1) A COMMUNICATION (1) A COMMUNICATION (1) A COMMUNICATION	195	-	瞬: 28.7	赤		Ι¥Ι	タテハケ (8条/㎝)		やや硬	胴都小破片	
1 日	196	-	欄:30.0	中:石英·長石普,		Ι¥į	タテハケ (8条/cm)	左上がりナデ、突帯貼付時指押さえ	やや軟	胴部小破片	
	197	_	順: 28.4	中~相:石英·長石多, 赤色粒少		ΙΆ	タテハケ (6条/㎝)	左上がりナデ、突帯貼付時指押さえ	やや軟	爾部小破片	日形透かし
1 日本日本 (日本日本) 1 日本日	198		不明			I類	タテハケ (7条/㎝)	左上がりナデ, 突帯貼付時指押さえ	Ą	胴部小破片	
(2) (2) (2) (2) (2) (2) (2) (2) (2) (2)	199		騆: 20.4		外面:橙(5YR6/6) 内面:にぶい褐(7.5Y	I類	タテハケ (7条/㎝)	左上がりナデ,突帯貼付時指押さえ	やや軟	胴部小破片	
公司 (1982年) (2015年) (200		闡: 20.6	栎		I類	タテハケ (8条/㎝)	左上がりナデ,突帯貼付時指押さえ	冷や軟	胴部小破片	
(2) (2) (2) (2) (2) (2) (2) (2) (2) (2)	201		厕: 22.4	半		I類	タテハケ (7条/cm)	タテナデ, 突帯貼付時, ナデ前指押さえ	苺	開部小破片	円形透かし
3. G (KR 5-34-017年報)	202		胴:24.6	枨		I類	タテハケ (7条/四)	左上がりナデ、突帶貼付時指押さえ	Ą	肩部小被片	
3.0 はたいたいたいでは、	203		展: 27.8	卡	外面: 橙(7.5YR7/6) 内面: 橙(7.5YR7/6)	ΙΆ	タテハケ (?条/㎝)	左上がりナデ、突帯貼付時指押さえ	與	胴部小破片	
30 G CAMACHARM CONTINUENCE (1	204	_	不明	赤	外面: 橙(7.5YR7/6) 内面: 橙(7.5YR7/6)	I類	タテハケ (8条/㎝)	タテハケ (8条/cm), 突帯貼付時指押さえ	斑	胴部小破片	
35 G C G C G C G C G C G G C G G C G G C G	202	_	胴:30.4		外面:浅黄橙(7.5 Y R 8/6) 内面:浅黄橙(7.5 Y R 8/6)	I類	タテハケ (11条/cm)	左上がりナデ、突帯貼付時指押さえ	頁	퉭部小破片	
35 G CKR-12 MW (Page 2)	506		底:25.6	114	外面:明赤楊(5YR5/6) 内面:橙(7.5YR6/6)	12種	タテハケ?		榖	胴部小破片	円形透かし
35 日民商業庭刊等 (開発の数算上) 第 (1.5.8.4) 日本方本柱市 内面 (1.5.8.4.4.4.4.4.4.4.4.4.4.4.4.4.4.4.4.4.4	207		MH: 26.0	114	外面: 橙(7.5YR7/6) 内面: 橙(7.5YR7/6)	I M		突帯貼付時指押さ	やや軟	胴部小破片	日形透かし
35 G C R 2 L 2 L 3 M 2 M 2 M 2 M 2 M 2 M 2 M 2 M 2 M 2 M	208		厢:26.8	114	外面:橙(5YR7/8) 内面:橙(5YR7/8)	I類		テナデ,	やや軟	胴部小破片	
35 A CH中東亜出発の配置は 第5.30 日本分表を有か。 内面、電点でストスでおり。 対面に確認しています。 イ理 中ナディが変化が発酵を定します。 対面に確認しています。 対面に必要しています。 対面に確認しています。 対面に確認しています。 対面に確認しています。 対面に確認しています。 対面に確認しています。 対面に確認しています。 対面に確認しています。 対面に必要しています。 対しに必要しています。 対しに必要しています。 <th>509</th> <th>_</th> <th>脚: 23.4</th> <th>奉</th> <th>外面:橙(7.5YR7/6) 内面:橙(7.5YR7/6)</th> <th>I類</th> <th>剥落により不明</th> <th></th> <th>*</th> <th>퇽部小破片</th> <th></th>	509	_	脚: 23.4	奉	外面:橙(7.5YR7/6) 内面:橙(7.5YR7/6)	I類	剥落により不明		*	퇽部小破片	
35 CK營姓 AKP (APP) ARE (APP) ARE (APP) APP (APP) <th< th=""><th>210</th><th>_</th><th>月 : 25.0</th><th></th><th>外面内面</th><th>I類</th><th>不明</th><th></th><th>*</th><th>胴部小破片</th><th></th></th<>	210	_	月 : 25.0		外面内面	I類	不明		*	胴部小破片	
35 C C E M 2 E M 2 C E M 2 C E M 2	211	_	脚: 24.0	中:石英·長石普	外面内面	I類	タテハケ (8条/cm)		良	퉭部小破片	
36 CES RO2 第 18.6 精色技巧 基本百数 有面 接 (5 R 7 R 7) 内面 接 (5 R 7 R 7) V 第 不明 少子子,突带站付转指等之。 中午收 期 5 R 2 R 7 R 7 中收 有 2 R 2 R 3 R 3 R 3 R 3 R 3 R 3 R 3 R 3 R	212		月: 25.9	中:石英・長石普,赤 色粒ごく少	外面内面	I類	タテハケ (8条/cm)		良	駧部小破片	
36 C C M M M M M M M M M M M M M M M M M M	213		屬:18.6	488~中:石英·長石普, 赤色粒少	外面内	√類	不明		やや軟	駧部小破片	
36 CRIOTE-EXFORM 不明 CRIOTE-EXFORM April 245 k 2 fb			第:18.6	中:石英·長石普,赤 色粒少	外内	Ⅴ類	不明	突帯貼付時指押さえ	鱼	胴部小破片	円形透かし
36 C 区址丘正、X粉 期 : 2.0 中: 万条 投石書。 內面 提合 N R76 的 以	_		不明	中:石英·長石普, 赤 色粒少	外内	V類	不明	突帯貼付時指押さえ	やや軟	퉭部小破片	
36 CKT.IM PRINTAR 3 9 4 (ALC) PATIE 18 (ALC)			月:25.0	中:石英·長石普,赤 色粒少,角閃石少	外面	Ⅴ類	不明	タテナデ, 突帯貼付時指押さえ	真	胴部小破片	
36 CELT-mW 期 : 17.6 中: 万歩·長石普·赤 内面: 程6.7 R.6 (6) V類 不明 本年 外面: 程6.7 R.6 (6) V類 不明 今中子, 突帶貼付時指押きえ 中: 万歩·長石青·赤 内面: 程6.7 R.7 (6) V類 不明 今中子, 突帶貼付時指押きえ 中 期部小能片 36 C区垃圾屋(10丁-北) 工場 期: 20.0 白粒少少·枝石青·赤 内面: 程6.7 R.7 (6) V類 不明 不明 本明 申: 万歩·枝石青·赤 内面: 程6.7 R.7 (6) V類 不明 不明 本明 時期小能片 上 期部小能片 36 C区垃圾屋(10丁-北) 工場 期: 20.0 中: 万歩·枝石青·赤 内面: 程6.7 R.7 (6) V類 不明 不明 不明 本明 期部小能片 36 B区域域(10丁-北) 工場 期: 20.0 中: 万歩·枝石青·赤 内面: 程6.7 R.7 (6) V類 不明 不明 不明 本明 期部小能片 36 日区域域(10丁-北) 工場 期: 20.0 中: 万歩·枝石青 赤 内面: 程6.7 R.7 (6) T額 AT 不明 不明 本中 期部小能片 36 日区域域(10丁-北) 工場 期: 20.0 中: 万英·長石青 赤 外面: 程6.7 R.7 (6) T額 AT AT 本門 財 財 財 財 36 日上市 保存 田田 (灰白色松丁		36 10 Tr 南 3 号墳流入土周溝内埋土	篇: 22.0	中:石英·長石書,赤 色粒少	外面:橙(5 Y R 7/8) 内面:橙(5 Y R 7/8)	V類		突帯貼付時指押さえ	頁	關部小破片	
36 C 区域流区 (DE Mark Mark Mark Mark Mark Mark Mark Mark	218		月:17.6	中:石英·長石普,赤 色粒少	外面:橙(5YR6/6) 内面:橙(5YR6/6)	V類	不明	タテナデ, 突帶貼付時指押さえ	やや歌	퇽部小破片	
36 C C L L L L L L L L L L L L L L L L L L	219		不明	中:石英·長石書,赤 色粒少	外面:橙(5YR7/6) 内面:橙(5YR7/6)	V類	不明	突帯貼付時指押さえ	*	開部小破片	
36 C 保貸工品 X W + V W (照過色砂) 期 : 24.0 中: 万季· 长石 普· 赤 外面: 整(3.5 V R.76) V 額 Q (成代本 C 不明) 不明 不明 本 所 (1.5 V R.76) V 額 A (1.5 V R.76) A (1.5 V R.	220		瞬: 20.0	中:石英·長石普, 赤 色粒少		V類	不明	不明	良	퉭部小破片	
36 BC断解中 用 36.6 中式券·及石普· 亦 外面·複(SV R7/6) VIII P ランナ タテナデ、突衛貼付時期等え 軟 開路小破片 開路小破片 36 1 Tr II (K) CD 色粉質上 中式券·及石普· 亦 外面·複(SV R7/6) II II アナデ、突衛貼付時指押さえ やや軟 開路小破片 36 5 S D L D 子 序 并上 E (28.0) 中式券·及石普· 赤 外面·複(SV R7/6) III III フテナデ、突衛貼付時指押さえ 会軟 開路小破片	221		刷: 24.0	中:石英·長石書, 赤 色粒少		VI類	風化激しく不明	不明	兼	肩部小破片	
36 1 Tr IPB (灰白色粘質土) 期 :30.0 中: 万英・長石書・赤 内面: 程(5.78 R76) 国額 (5.8 R24) 所 : 20.0 中: 万英・長石書・赤 内面: 程(5.57 R76) 国額 (5.8 R24) 不明 タテナデ、突帝點付時指揮さえ 全や軟 開節小彼片 開節小彼片 36 55 トレンチ排土中 底: 28.0 中: 万英・長石書・赤 外面: 程(5.57 R7.6) 国額 (5.58 R2.6) 日額 (5.58 R2.6) 日前: 程(5.58 R2.6) 日前: 在(5.58 R2.6) <td< th=""><th>222</th><th>\rightarrow</th><th>月:26.6</th><th>中:石英·長石書,赤 色粒少</th><th></th><th>VI M</th><th>タテハケ</th><th> 1</th><th>奏</th><th>퉭部小破片</th><th></th></td<>	222	\rightarrow	月:26.6	中:石英·長石書,赤 色粒少		VI M	タテハケ	1	奏	퉭部小破片	
35 S5トレンチ排土中 底:28.0 中:石英・長石普、赤 外面:程(7.5Y R7/6) 電類 タテハケ(10条/cm) タテナデ、突衛貼付時指揮さえ 良 底部小破片	223	-	30.0	中:石英·長石普,赤 色粒少,角閃石	女女 園園	四類	不明	突帯貼付時指押さえ	やや軟	駧部小破片	
	_		底:28.0	中: 石英·長石普, 赤 色粒少	外面内面	W類			斑	底部小破片	低位置突帯埴輪か?

分類及び備考	円形透かし	円形透かし, ベンガラ塗布	円形透かし	円形透かし	円形透かし	円形透かし	円形透かし	円形透かし	円形透かし	円形透かし	円形透かし	円形透かし	ヘラ記号	外面にペンガラ塗布
残存率	胴部小破片	駧部小破片	퉭部小破片	駧部小破片	胴部小破片	퉭部小破片	胴部小破片	胴部小破片	胴部小破片	胴都小破片	胴部小破片	胴部小破片	開部小破片	胴部小破片
焼 成	やや軟	緩	緩	穫	要々々	憂ゆゆ	軟	良	Ħ	動ゆゆ	良	阜	登ゆゆ	穫
内面 離 整	左上がりナデ→ヨコ方向ナデ	左上がりナデ、突帯貼付時指押さえ	左上がりナデ,突帯貼付時指押さえ	左上がりナデ、指押さえ	左上がりナデ、指押さえ (突帯貼付時?)	左上がりナデ、突帯貼付時指押さえ	タテナデ, 突帯貼付時指押さえ	タテナデ, 突帯貼付時指押さえ	タテナデ, 突着貼付時・透かし穿孔時の指押 さえ	左上がりナデ、透かし穿孔時の指押さえ	タテナデ, 指押さえ	タテナデ、透かし穿孔時の指押さえ	指押さえ	左上がりナデ, 指押さえ
外面調整	タテハケ (6条/cm)	タテハケ (8条/四)	タテハケ (11条/四)	タテハケ(9条/cm, 6条/ 左上がりナデ, 指押さえ(m)	タテハケ (9条/四)	タテハケ (7条/㎝)		タテハケ (8条/四)	タテハケ (8条/㎝)	タテハケ (8条/cm)	タテハケ (9条/cm)	タテハケ (7条/四)	タテハケ (10条/cm)	タテハケ (11~12条/cm)
突带分類														
色調(内・外)	外面:浅黄橙(7.5 Y R 8/6) 内面:浅黄橙(7.5 Y R 8/6)	外面:楊灰(10Y R5/1) 内面:灰黄褐(10Y R5/2)	外面:橙(5 Y R 7/6) 内面:橙(5 Y R 7/6)	外面:橙(5 Y R 7/6) 内面:にぶい橙(7.5 Y R 6/4)	外面:にぶい橙(5Y R6/4) 内面:灰黄褐(10Y R5/2)	外面:橙(5 Y R 6/6) 内面:橙(5 Y R 7/6)	外面:橙(5 Y R 6/6) 内面:橙(5 Y R 6/6)	外面:黄橙(7.5YR7/8) 内面:黄橙(7.5YR7/8)	外面:橙(7.5YR7/6) 内面:橙(7.5YR7/6)	外面:橙(5YR7/8) 内面:黄橙(7.5YR7/8)	外面:橙(5 Y R6/6) 内面:橙(5 Y R6/6)	外面:橙(7.5YR7/6) 内面:橙(7.5YR7/6)	外面:にぶい黄橙(10Y R6/3) 内面:灰黄(2.5Y6/2)	外面:褐灰(10YR4/1) 内面:黄灰(2.5Y5/1)
(戦・中・観) 干弱	中:石英・長石書, 雲 母?ごく少	網:石英·長石少, 黑 色石粒少	中~良:石英·長石少	中:石英・長石普,赤 色粒 (ごく少量)	中:石奏·長石中	中:石英•長石	中:石英·長石普,赤 色粒少	中:石英·長石書, 赤 色粒ごく少	網~中:石英・長石少, 赤色粒ごく少	中:石英・長石誉	中:石英·長石普, 赤 色粒少	中:石英·長石普, 赤 色粒少	中: 石英·長石普, 赤 色粒少	中:石英·長石普, 赤 色粒少
口縁(퉭·底)径	刷: 25.6	瞬: 20.2	展:19.4	不明	篇:20.4	篇:20.2	胴: 26.0	開: 26.0	刷: 23.4	厕: 28.8	刷:24.0	刷:25.2	刷:21.6	刷: 20.2
遺構名・出土位置	B区周津状連構	25トレンチ斜面部面層(暗灰色シルト)	35トレンチ拡張区塊石下溝状遺構埋土	A区周谍内臣	25トレンチ南拡張区第2黄褐色混砂粘質土	A区中央断割	DK11TrWW	A区周谍内A	B区周諱状遺構	A区·D区間畦畔	C区落ち込み01	C区墳丘上面X層	A区墳丘上表土及びカク乱層	C区II·II層
	36	36	36	36	36	36	36	36	36	36	36	36	37	37
権図	225	226	227	228	229	230	231	232	233	234	235	236	237	238

雄山 4 号墳形象埴輪観察表

_				,								,				,			_
看考	下半の端部を突出させる						背中に戦を組を用いて背負う, 衣服に武装の表現はない, 腰組あり	両手を上げた状況, 残存する背部に は表現無, 衣服の裾部のみ残存	側顧部に逆し字形の突帯	3cm大の粘土塊に5mm前後の粘土板 を張り付けて成形	V字状に粘土紐を貼り付ける		手網表現あり	降泥と鐘輪か		盾ないし蓋形埴輪の一部、鋸歯文を 平行へう描きで描く	盾ないし蓋形ハニワの一部か, ヘラ 描き平行沈線	1条の沈線 (ヘラ描き)	
残存率	口縁部小骸片	口鞣部小截片	口縁部小破片	口鞣部小酸片	口縁部小破片	口縁部小破片	2/8	8/2	額小破片	腕部小破片	小破片	下颚小破片	タテ髪小破片	小破片	小破片	小截片	小破片	小破片	台都~笠都小 裁片
焼成	やや軟	やや軟	♦	やや軟	やや軟	やや軟	やや軟	やや軟	*	やや軟	やや軟	やや軟	*	*	*	*	*	*	*
内 画 筆 縣	指押さえ、ヨコハケ	指押さえ、ヨコナデ	格押さえ	指押さえ、ヨコナデ	ヨコハケ (9条/四),指押さえ	指押さえ		タテナデ, 不定方向のナデ, 指押さえ			ヨコナデ後指押さえ			指押さえ、ハケ目?	不明				
外面調整	タテハケ (8~9条/cm), ヨコ ナデ, 指押さえ	タテハケ(10条/四),指押さ え,ヨコナデ	タテハケ (9条/㎝)	タテハケ, 指押さえ, ヨコナ デ	タテハケ, 指押さえ, ナデ	タテハケ (9条/cm), 指押さえ, ヨコナデ		左上がりナデ,不定方向のナ デ,指押さえ		ナチ	タテハケ後V字状突帯貼付			不明	平行沈線 (ヘラ描き),内側の ものと組合わさり鋸歯文をなす				
残存長,幅							35×17.4×15.8	27.8×20.3	8.5×7.6	3.8×4.3		4.7×7.8	10.6×9.9	10.1×6.1	5.1×3.3	5.9×4.7	5.2×5.1	3.4×4.9	4.8×10.1
色調	外面:橙(5 Y R 7/8) 内面:橙(5 Y R 7/8)	外面:橙(5 Y R6/8) 内面:橙(5 Y R6/8)	外面: 橙(5 Y R6/6) 内面: 橙(5 Y R6/6)	外面:橙(5 Y R 7/8) 内面:橙(5 Y R 7/8)	外面:橙(5 Y R 7/8) 内面:橙(5 Y R 6/6)	外面:橙(5 Y R 7/8) 内面:橙(5 Y R 6/6)	外面: にぶい黄橙(10Y R6/3)~ 橙(10Y R6/8) 内面: にぶい黄橙(10Y R6/3)~ 橙(10Y R6/8)	外面:にぶい黄橙(10Y R7/3) 内面:にぶい黄橙(10Y R7/3)	外面:橙(7.5YR7/6) 内面:橙(7.5YR7/6)	外面:橙(5 Y R 7/8) 内面:橙(5 Y R 7/8)	外面:橙(7.5YR7/6) 内面:橙(7.5YR7/6)	外面:浅黄橙(7.5YR8/6) 内面:橙(7.5YR7/6)	外面:橙(7.5YR7/6) 内面:橙(7.5YR7/6)	外面:橙(7.5Y R 7/6) 内面:黄橙(7.5Y R 7/8)	外面:橙(5 Y R 7/8) 内面:橙(7.5 Y R 7/6)	外面:橙(5YR7/8) 内面:橙(7.5YR7/6)	外面:橙(7.5YR7/6) 内面:橙(7.5YR7/6)	外面:橙(7.5YR8/8) 内面:橙(7.5YR8/8)	外面:橙(7.5YR7/6) 内面:橙(5YR6/6)
胎士 (粗・中・細)	中:石英·長石普,赤 色粒少	中:石英·長石普,赤 色粒少	中:石英·長石普,赤 色粒少	中:石英·長石普,赤 色粒少	中:石英·長石普, 赤 色粒少	中:石英·長石普,赤 色粒少	中: 石 英·長石 書, 赤 色粒少	中:石英·長石普, 赤 色粒少	中:石英·長石普,赤 色粒少	中:石英・長石書,赤色粒ごく少	中:石英·長石書, 赤 色粒少	中:石英·長石普, 赤 色粒少	中:石英·長石書, 赤 色粒少	中:石英·長石書,赤 色粒少	中:石英·長石普,赤 色粒少	中:石英·長石普, 赤 色粒少	中:石英·長石書, 赤 色粒少	中:石英·長石書,赤 色粒少	中:石英·長石普, 赤 色粒少
種類·残存部位	朝顏形埴輪·花弁部	朝顏形埴輪·花弁部	朝顏形埴輪·花弁部	朝顏形埴輪·花弁部	朝顏形埴輪·花弁部	朝顏形埴輪·花弁部	人物埴輪·폙部	人物埴輪·胴部(背面)	人物埴輪·鎖	人物埴輪·上腕部	人物埴輪・衣服の裾部	馬形埴輪·馬下頸	馬形埴輪・タテ髪	馬形埴輪·鐘(or 杏葉)	器財形埴輪 (盾 or 蓋)	器財形埴輪 (盾 or 蓋)	器財形埴輪 (盾 or 蓋)	器財形埴輪 (隋 or 蓋)	器財形埴輪(菱形埴輪)
遺構名・出土位置	C区10Tr北周溝	C区10Tr北周溝	C区10Tr北周溝	ZI2	C区4·7号間堆積土	C 区第1 連構面ペース土	A区周谍内墳丘斜面盛土流入土中	4・7 号間堆積土	A区周律内A	A区周漆	C区精査中IV層+第1遺構面ペース土 D区4Tr 壁面精査中	25トレンチ表土層 I 層	25トレンチ落ち込み12層(最下層地山下直上) 2 T r 墳丘断割墳丘断割中	A区周溝内A 25トレンチ弥生包含層	25トレンチ落ち込み7層(黄灰色土層)	25トレンチ S X 01石組付近	25トレンチ南拡張区SX01黒褐色砂質土層	25トレンチ斜面部1層 (2層~一部ラミナ上砂質)	4 Tr W層
図版	38	38	88	38	38	38	39	39.	41	41	41	42	42	42	43	43	43	43	43
革図	239	240	241	242	243	244	245	246	247	248	249	250	251	252	253	254	255	256	257

真群名。	出土位置		路士(粗·中·鑑)	1	残存長, 幅	外面調整	五 画 置 勝	焼 成	残存率	衛子孝
25トレンチ淡灰茶色砂質土層(地山直上)	(干夏	器財形埴輪 (菱形埴輪)	中:石英·長石普,赤 色粒少	外面:橙(5 Y R 6/6) 内面:橙(5 Y R 6/6)	4.8×6.5			*	台部~笠部小 破片	
		不明形象埴輪	中:石英·長石普, 赤 色粒少	外面:橙(5 Y R 7/6) 内面:橙(7.5 Y R 7/6)	4.8×6.9	タテハケ (10条/四)	ナデ、指押さえ	獲	小破片	
C区 4・7 号間堆積土第 1 遺構面ペース土	ィース土	不明形象埴輪	中:石英·長石普, 赤 色粒少	外面:橙(5 Y R 7/6) 内面:橙(5 Y R 7/6)	5.3×9.8	菱形状斜格子(ヘラ描き沈線), 平行沈線(ヘラ描き),沈線(ヘ ラ描き)	指押さえ	やや軟	小截片	
C区4・7号間堆積土第1递構面ベース土	ペース士	不明形象埴輪	中:石英·長石普, 赤 色粒少	外面:橙(5YR6/6) 内面:橙(5YR6/6)	3.8×4.6	斜格子 (ヘラ描き沈線), 沈線	指押さえ	神中中	小破片	
35トレンチ南拡張区第2層黄灰色混砂シルト	色混砂シルト	不明形象埴輪	中:石英·長石普,赤 色粒少	外面:橙(7.5YR7/6) 内面:浅黄橙(7.5YR8/6)				軟	小破片	湾曲する外面に突帯あり
A区周溝中央畦より西		不明形象埴輪	中~粗:石英·長石多, 赤色粒少	外面:橙(7.5 Y R 8/8) 内面:にぶい褐(7.5 Y R 5/3)	4.3×4.8			やや軟断面 サンドイッ チ状	小破片	突帯状の粘土紐貼り付け
25トレンチ集石部分		不明形象埴輪	中:石英·長石普, 赤 色粒少	外面:橙(7.5Y R6/6) 内面:橙(7.5Y R6/6)	9 ×3.2			*	小破片	
25トレンチ拡張区機乱部分		不明形象埴輪	中:石英·長石普,赤 色粒少	外面:橙(5YR7/6) 内面:橙(5YR7/6)	9 × 3. 1			¥	小破片	
		不明形象埴輪	中:石英·長石普,赤 色粒少	外面:橙(7.5YR7/6) 内面:橙(7.5YR7/6)	6.2×7.7			*	小破片	
		不明形象埴輪	中:石英·長石普,赤 色粒少	外面:橙(7.5YR7/6) 内面:橙(7.5YR7/6)	6 ×7.3	指揮さえ、ナデ		神合命	小破片	粘土塊に厚さ 1 cm~0.5cmの粘土板 を貼り付ける
		不明形象埴輪	中:石英·長石普,赤 色粒少	外面:黄橙(7.5Y R8/8) 内面:黄橙(7.5Y R8/8)	2.8×2.3			¥	小破片	
A区周溝中央畦より西		不明形象埴輪	中:石英·長石普,赤 色粒少	外面:橙(5YR7/8) 内面:橙(7.5YR8/6)	7.3×10.2	タテハケ?,指押さえ	指押さえ	やや軟	小截片	動物(馬)の脚部か
		不明形象埴輪	中:石英·長石普,赤 色粒少	外面:橙(5YR7/8) 内面:橙(7.5YR7/8)	4.2×7	不明,指押さえ	不明、指押さえ	*	小破片	馬形埴輪脚部か

雄山7号墳形象埴輪観察表

華図	図版	遺構名・出土位置	種類·残存部位	胎士(粗·中·細)	鱼	残存長,幅	外面調整	人 置	一焼 成 一残存率	残存率	備水	
995	123 1	123 10トレンチ西端津状遺構	馬形埴輪・側鎖部	中:石英·長石普,赤 色粒多	外面:浅黄橙(7.5YR8/6) 内面:黄橙(7.5YR7/8)	10.2×10.8	ナデ、指押さえ	指押さえ、ナデ	**		目は穿孔,耳は中空	
966	123 1	996 123 10トレンチ西端津状連構	馬形埴輪・上顎	中:石英·長石普, 赤 色粒少	外面:黄橙(7.5Y R8/8) 内面:黄橙(7.5Y R8/8)	5.6×11.8	ナデ、指押さえ	ナデ,指押さえ	奏を		馬貝の麦現無し (剥落核不明),口先から1cm人った頂部から鼻孔が2孔。 ゆかれる,空洞ではなく粘土板をはさみみ込む,窒洞ではなく粘土板をはさみ込む,鐘板の表現無し	
66	123 1	997 123 10トレンチ西端溝状連構	馬形埴輪·耳	中:石英·長石普,赤 色粒少	外面:橙(7.5 Y R7/6) 内面:橙(7.5 Y R7/6)	3.3×1.9			*			
866	123 1	123 10トレンチ西藩溝状遺構	馬形埴輪・タテ髪	中:石英·長石普,赤 色粒多	外面:黄橙(7.5YR8/8) 内面:橙(5YR7/8)	14×17.6	ナデ、指押さえ	指押さえ、ナデ	**		手綱表現なし	
666	122	999 122 10トレンチ西端漆状選棒	馬形埴輪・喉元から胸 部	馬形埴輪・喉元から胸 中:石英・長石書,赤 部	外面:橙(5YR7/8) 内面:橙(7.5YR7/6)	11.5×18.8	強いナデ,板ナデ	指押さえ、ナデ	本な会		接合痕跡	
1000	122	1000 122 C区10トレ北周津	馬形埴輪·脚部	中:石英·長石普, 赤 色粒少	外面:橙(7.5YR7/6) 内面:橙(7.5YR7/6)		不明	指押さえ	やや軟		馬形埴輪	
1001	122	1001 122 10トレンチ西端液状帯機	医形植物· 菌类	中:石英·長石書,赤	外面: 橙(7.5 Y R 7/6)		カルンケ 内質のと抜曲とい	ひかこケ 内部のお抜きない ホームロール 引起のり方きない	*****		田形植物	

写 真 図 版



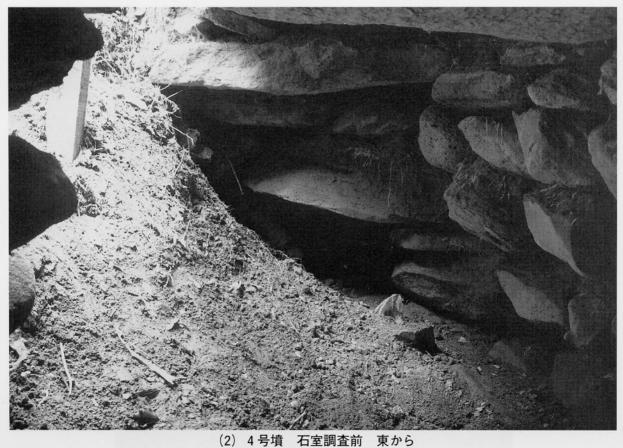
(1) 古墳群遠景 南から

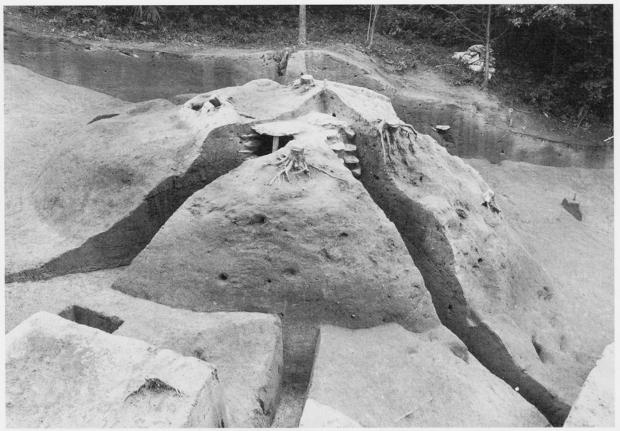


(2) 古墳群遠景 東から



(1) 4・7号墳 調査前近景 東から





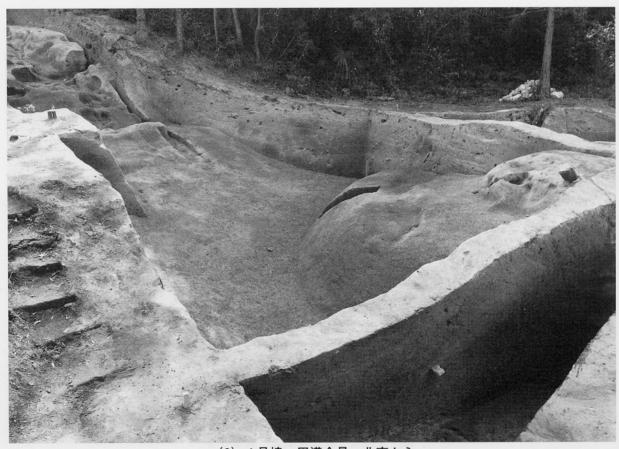
(1) 4号墳 墳丘全景1 北東から



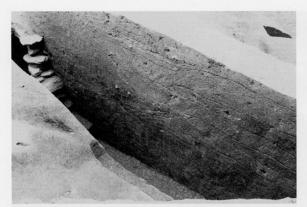
(2) 4号墳 墳丘全景 2 北東から



(1) 4号墳 墳丘全景及び墓道 北西から



(2) 4号墳 周溝全景 北東から



(1) 4号墳 A-O間墳丘断割1 南西から



(2) 4号墳 A-O間墳丘断割2



(3) 4号墳 A-O間墓壙断面 西から



(4) 4号墳 B-O間墳丘断割1 東から



(5) 4号墳 B一〇間墳丘断割2 東から



(6) 4号墳 B一O間墓壙断面 北東から



(7) 4号墳 A'-O間墳丘断割1 東から (8) 4号墳 A'-O間墳丘断割2 東から





(1) 4号墳 玄室内面(玄門部寄り) 南東から



(2) 4号墳 玄室床面(奥壁寄り) 北西から



(1) 4号墳 石室1 (玄門部全景) 南東から

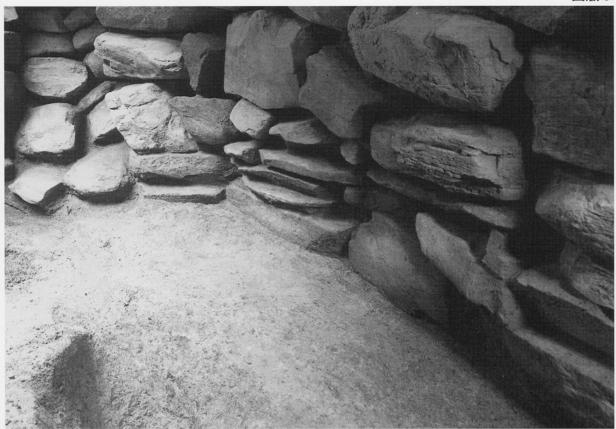




(1) 4号墳 石室3(袖石) 南東から

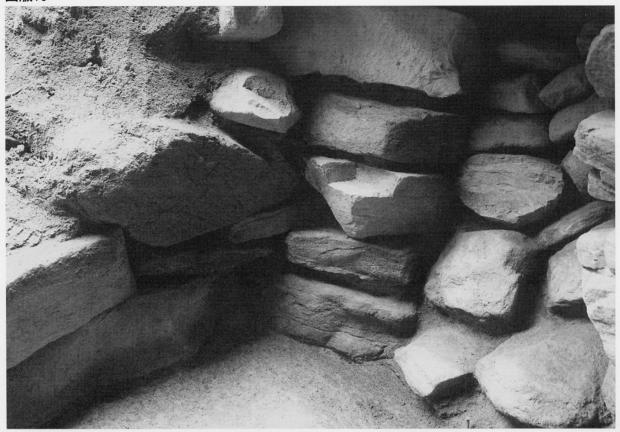


(2) 4号墳 石室4(前壁) 南東から



石室 5 (右袖部と右側壁基底石) 南から (1) 4号墳





(1) 4号墳 石室7 (左袖部と左側壁基底石) 東から



(2) 4号墳 石室8(左側壁基底石と奥壁) 北西から



(1) 4号墳 石室9 (奥壁と左側壁の隅角) 北から



(2) 4号墳 石室10 (奥壁と左側壁の隅角上部) 北から



(1) 4号墳 石室11 (奥壁と右側壁) 北西から



(2) 4号墳 石室12 (奥壁と左側壁の隅角下部) 西から



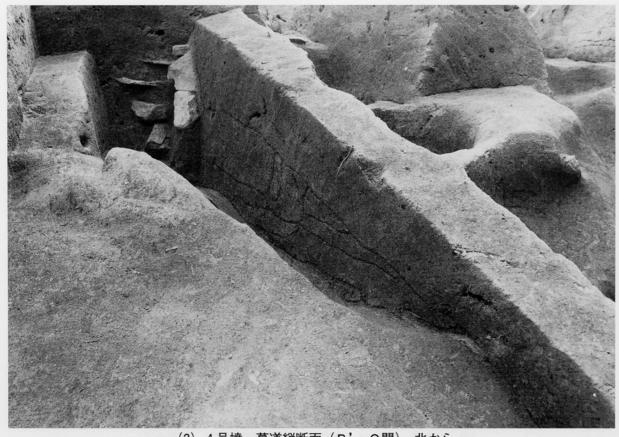
(1) 4号墳 石室13(玄門部寄り天井石見上げ) 南東から



(2) 4号墳 石室14 (奥壁寄り天井石見上げ) 北西から



(1) 4号墳 墓道断面図(E-E'間) 北東から



(2) 4号墳 墓道縦断面(B'-O間) 北から



(1) 4号墳 閉塞石・墓道全景 北西から



(2) 4号墳 閉塞石 北西から



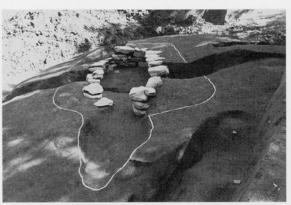
(3) 4号墳 開口部・墓道全景 北西から



(4) 4号墳 天井石俯瞰 西から



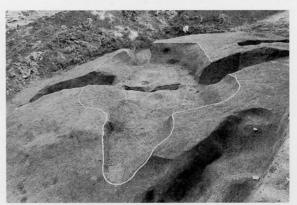
(5) 4号墳 石室下部・墓壙全景1 北東から



(6) 4号墳 石室下部・墓壙全景2 北西から



(7) 4号墳 墓壙完掘全景1 北東から



(8) 4号墳 墓壙完掘全景2 北西から

図版16



(1) 4号墳 周溝遺物出土状況1 北東から



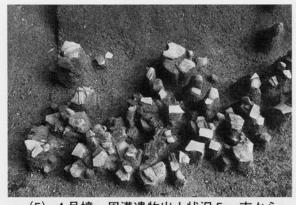
(2) 4号墳 周溝遺物出土状況2 北東から



(3) 4号墳 周溝遺物出土状況3 西から



(4) 4号墳 周溝遺物出土状況 4 北から



(5) 4号墳 周溝遺物出土状況 5 南から



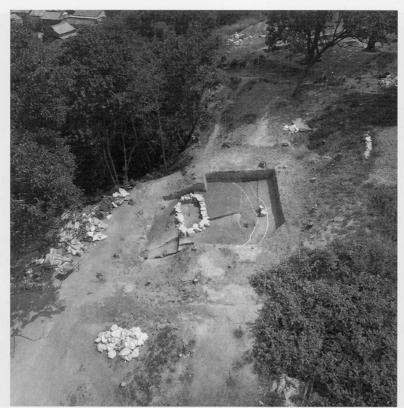
(6) 4号墳 周溝遺物出土状況6 南東から



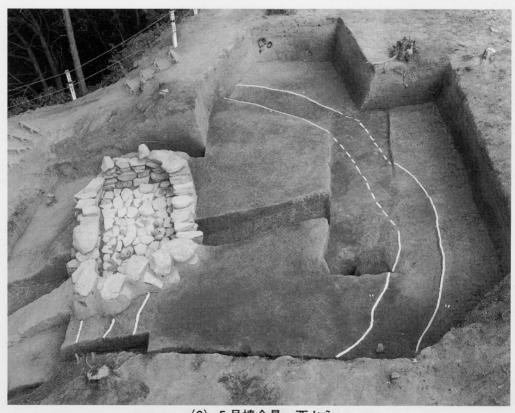
(7) 4号墳 人物埴輪(245)出土状況 南西から



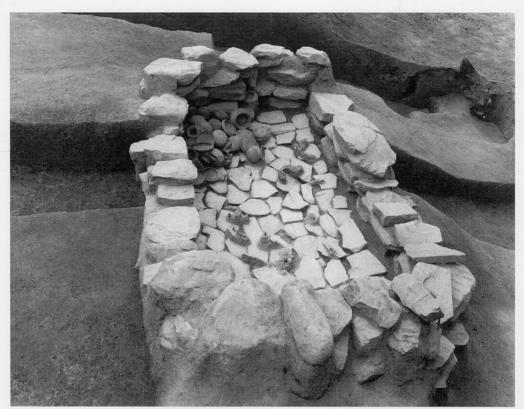
(8) 4号墳 周溝(D-D'間)断面 南西から



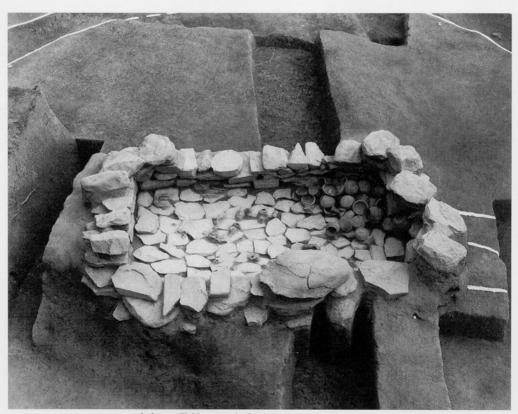
(1) 5号墳全景 西から



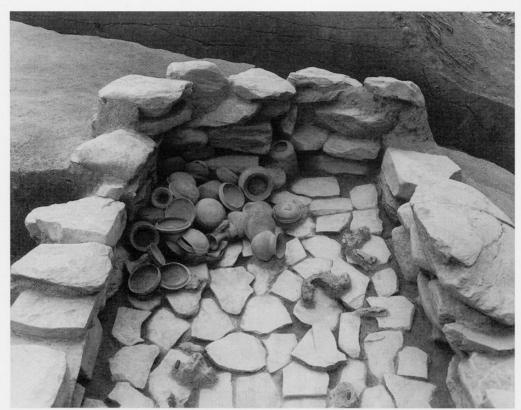
(2) 5号墳全景 西から



(1) 5号墳 石室内遺物出土状況 東から



(2) 5号墳 石室内遺物出土状況 北から



(1) 5号墳 石室内遺物出土状況 東から



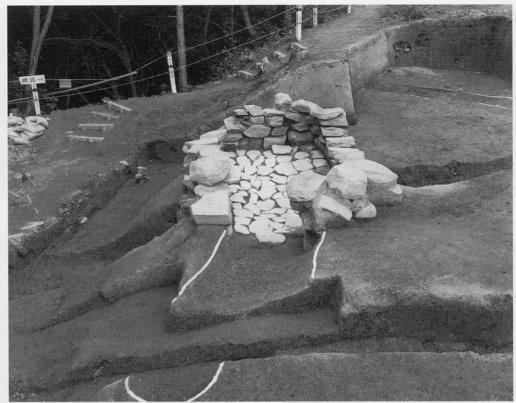
(2) 5号墳 石室内遺物出土状況 南東から



(1) 5号墳 石室内遺物出土状況 東から



(2) 5号墳 石室内遺物出土状況 北西から



(1) 5号墳 石室完掘状況 西から



(2) 5号墳 石室完掘状況 東から